

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（176）

県道鹿児島蒲生線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

かわ かみ じょう あと
川上城跡

（鹿児島市川上町）

2013 年 2 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



川上城跡全景

序 文

本報告書は、県道鹿児島蒲生線川上工区の道路拡幅工事に伴って、平成23年度に鹿児島市川上町に所在する川上城跡で行われた発掘調査の記録です。

川上城は、今から約650年前に築城されたと古い記録にはありますが、今回の調査で検出された遺構や出土した遺物は、城が機能していた時代のものより以前のものがほとんどでした。

古い時代のものでは黒曜石片や縄文式土器片、土師器などの遺物や建物跡と思われる遺構です。

中でも、竪穴建物跡や大型の掘立柱建物跡、方形土坑などは川上城が築城される以前にも、その地に人が住んでいたことを示すものです。

また、城が機能していた時代の遺物としては刀子や古銭、中国産の越州窯系青磁、現在の山口県で作られたと考えられている緑釉陶器などが出土しました。

特に、越州窯系青磁や緑釉陶器は県内でも出土例の少ない遺物であり、どのようなルートを経て川上城まで持ち込まれたかを解明することは今後の課題と言えるでしょう。

これらのことから、川上地区には築城前から人が住んでいたことや、陶磁器などの広域な流通ネットワークの中に入っていたことが伺い知れます。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財行政に対する理解と御協力をいただくとともに、普及・啓発の一助となれば幸いです。

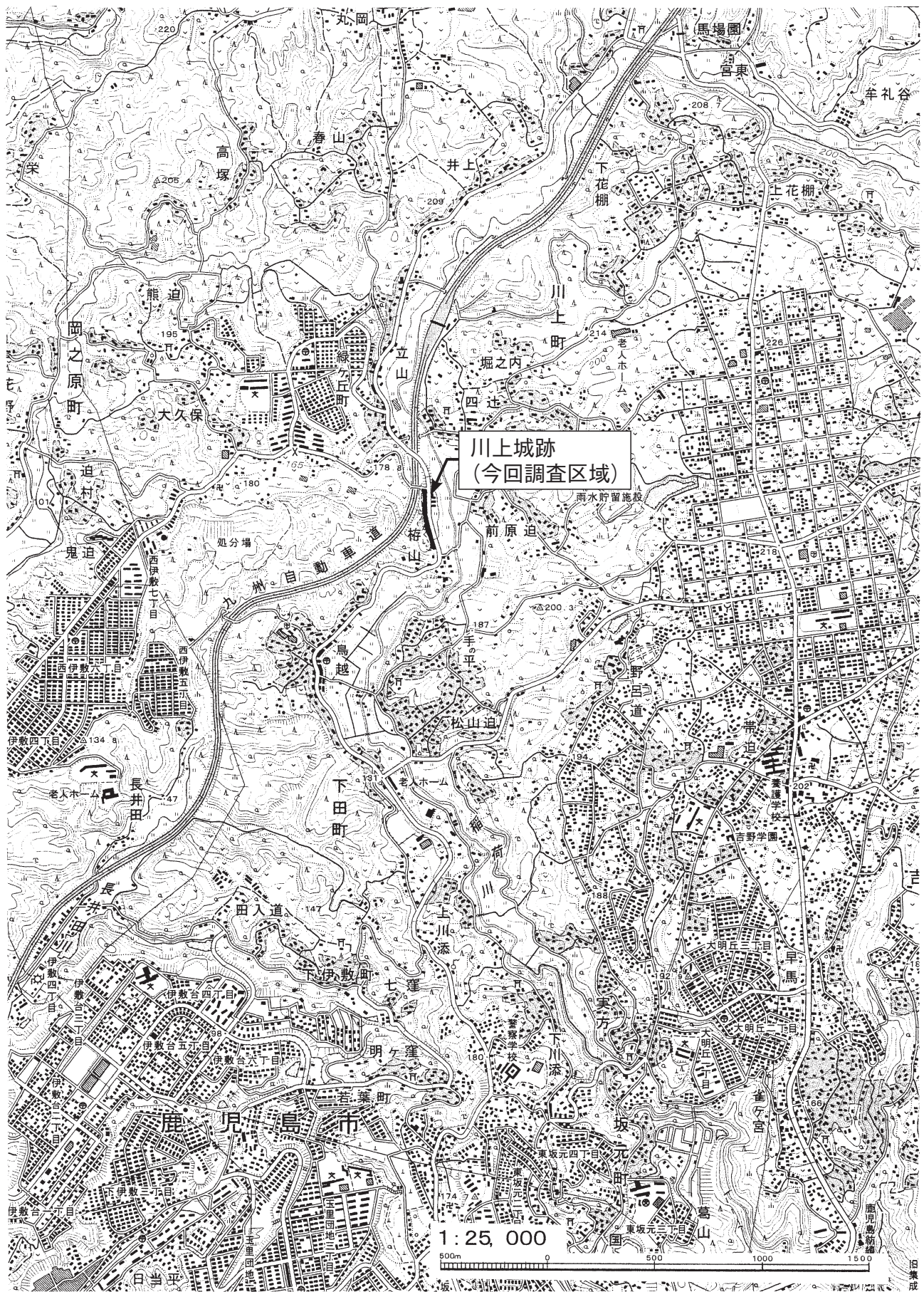
最後に、調査にあたり多大な御協力をいただいた鹿児島県土木部道路建設課、鹿児島島地域振興局土木建築課、鹿児島市教育委員会、他関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された皆さん、そして発掘調査に御理解をいただいた地域の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成25年 2 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 寺 田 仁 志

報 告 書 抄 録

ふりがな	かわかみじょう あと							
書 名	川上城跡							
副 書 名	県道鹿児島蒲生線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	176							
編著者名	吉元輝幸 有馬孝一							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2013年2月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かわかみじょうあと 川上城 跡	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 かわかみちょう 川上町 あざか くりやま 字加栗山	0046	1- 1	31° 65′ 11″	130° 55′ 23″	試掘 20110614 本調査 20111107 ～ 20120209 立会調査 20120217 20120222 ～ 20120224 20120315 ～ 20120316 20120321 ～ 20120322	1,600	県道鹿児島蒲生線整備事業に伴う記録保存調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
川上城跡	散 布 地 散 布 地 散 布 地 集 落 遺 跡 散 布 地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古 代 中世以降	掘立柱建物跡3棟 方形土坑9基 炉跡2基 土坑14基 礫集積3基 溝6条 畝状遺構6条 ピット群 带状硬化面 (古道)		轟A式土器 入来Ⅱ式土器 成川土器様式 土師器（甕・坏・椀・鉢【墨書土器：吉主・主・木・小・末・竿・下田など】） 須恵器（甕・椀） 越州窯系青磁 緑釉陶器・軽石製品 陶器（肥前系・薩摩焼） 磁器（青磁・白磁・青花・染付）・瓦質土器（摺鉢・湯釜）・鉄製品（刀子・雁股鋏）・銭貨（洪武通寶・寛永通寶）・鉄滓			古代の堅穴建物は県内でも検出例が少ない。
遺跡の概要	今回発掘を行った川上城跡の範囲は、城が機能する以前(古代)が中心の集落遺跡・生産遺跡である。掘立柱建物跡3棟と方形土坑9基、畠の可能性のある畝状遺構や炉跡、土坑、礫集積などが検出された。また、平安時代前半（9世紀中頃）と考えられる土師器（墨書土器・ヘラ書土器含む）、須恵器、越州窯系青磁、緑釉陶器、軽石製品などが出土した。 中でも、古代の越州窯系青磁、緑釉陶器は県内でも出土例が少ない。本遺跡から出土した畝状遺構や掘立柱建物、焼土などの遺構は、古代の川上地区に住んでいた人々の生活や生産、そして交易の様子を窺い知ることができる貴重な資料である。							



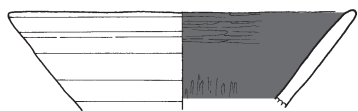
遺跡位置図

例 言

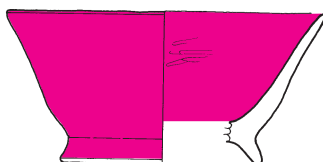
- 1 本書は、県道鹿児島蒲生線川上工区整備事業に伴う川上城跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿児島市川上町3517番地ほか（字加栗山）に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島地域振興局建設部土木建築課（事業主体）から依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査事業は、平成23年度に実施し、整理・報告書作成事業は平成24年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号であり、本文、挿図、表、図版の遺物番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた遺跡記号は「川上」である。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
- 10 発掘調査における遺構配置図等の図面作成の一部は、新和技術コンサルタントに委託した。
- 11 発掘調査における写真撮影は、調査担当者が行い、空中写真撮影は有限会社ふじたに委託した。
- 12 遺構図、遺物分布図の作成及びトレースは、吉元・有馬が整理作業員の協力を得て行った。
- 13 出土遺物の実測・トレースは、吉元・有馬が整理作業員の協力を得て行った。
- 14 出土遺物の写真撮影は、吉岡が行った。
- 15 本報告書に係る自然科学分析は株式会社加速器研究所に委託した。
- 16 本書の編集は、有馬が担当し、執筆の分担は次のとおりである。
 - 第1・2章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・吉元輝幸
 - 第3章
 - 第1節・第2節・・・・・・・・・・・・・・・・吉元輝幸
 - 第3節（1）（2）・・・・・・・・・・有馬孝一・吉元輝幸
 - 第3節（3）・・・・・・・・・・有馬孝一
 - 第3節（4）・・・・・・・・・・有馬孝一・吉元輝幸
 - 第4章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・株式会社 加速器分析研究所
 - 第5章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・有馬孝一・吉元輝幸
- 17 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

凡 例

- 1 土器の法量の計測にあたっては、口縁部の残存状況の良好なものについて図面上で反転復元を行った。それについては観察表中に（ ）内に記入した。
- 2 黒色土器、赤色土器、スス付着のある土器については、次のように網掛けを入れた。



黒色土器



赤色土器



スス付着土器

- 3 土器の調整痕は次のように表現した。

ナデ



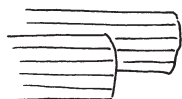
工具ナデ



ヘラケズリ



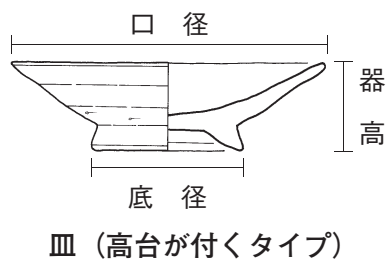
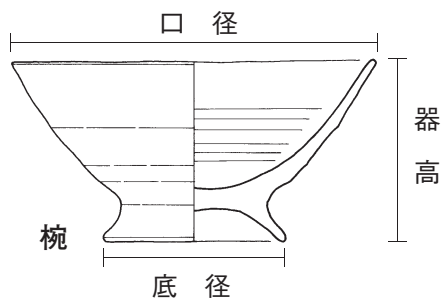
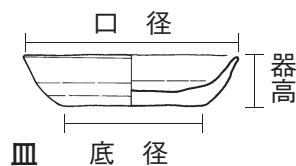
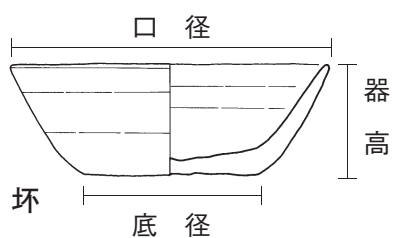
ハケメ



ミガキ



- 4 土師器の法量は以下のように計測した。



目 次

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯.....	1
第2節 事前調査.....	1
第3節 本調査	1
第4節 工事立会調査	1
第5節 整理・報告書作成	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 調査の方法	8
第2節 基本層序	10
第3節 古代の調査	13
1 調査の概要	13
2 出土遺物の分類方法	13
3 遺構	19
4 遺物	57
第4章 自然科学分析	97
第5章 総括	101

挿図目次

第1図	周辺遺跡地図……………	6	第41図	遺物出土状況図（1）……………	54
第2図	川上城跡調査範囲……………	9	第42図	遺物出土状況図（2）……………	55
第3図	土層断面（1）……………	11	第43図	遺物出土状況図（3）……………	56
第4図	土層断面（2）……………	12	第44図	土師器坏Ⅰ類……………	58
第5図	Ⅳ層上面遺構配置図（1）……………	14	第45図	土師器坏Ⅱ類……………	59
第6図	Ⅳ層上面遺構配置図（2）……………	15	第46図	土師器坏Ⅲ類（1）……………	60
第7図	Ⅳ層上面遺構配置図（3）……………	16	第47図	土師器坏Ⅲ類（2）……………	61
第8図	Ⅲb層上面遺構配置図（1）……………	16	第48図	土師器坏Ⅳ類……………	62
第9図	Ⅲb層上面遺構配置図（2）……………	17	第49図	土師器碗Ⅰ類……………	62
第10図	Ⅲb層上面遺構配置図（3）……………	18	第50図	土師器碗Ⅱ類（1）……………	64
第11図	掘立柱建物跡1～3……………	20	第51図	土師器碗Ⅱ類（2）……………	65
第12図	掘立柱建物跡2出土遺物……………	21	第52図	土師器碗Ⅲ、Ⅳ類……………	66
第13図	方形土坑1完掘状況……………	22	第53図	土師器口縁部……………	67
第14図	方形土坑1遺物出土状況・出土遺物……………	23	第54図	土師器皿Ⅰ、Ⅱ類……………	68
第15図	方形土坑1出土遺物……………	24	第55図	黒色土器……………	69
第16図	方形土坑2・出土遺物……………	25	第56図	赤色土器……………	70
第17図	方形土坑3完掘状況……………	26	第57図	墨書土器（1）……………	71
第18図	方形土坑4・出土遺物……………	27	第58図	墨書土器（2）……………	72
第19図	方形土坑5完掘状況……………	28	第59図	刻書土器・ヘラ書き土器……………	73
第20図	方形土坑5出土遺物……………	29	第60図	土師甕（1）……………	74
第21図	方形土坑6……………	30	第61図	土師甕（2）……………	75
第22図	方形土坑6出土遺物……………	31	第62図	須恵器・その他の遺物（古代）……………	76
第23図	方形土坑7・出土遺物……………	32	第63図	甌・台付鉢・その他……………	77
第24図	方形土坑8……………	33	第64図	その他の遺物（1）……………	79
第25図	方形土坑8出土遺物（1）……………	34	第65図	その他の遺物（2）……………	80
第26図	方形土坑8出土遺物（2）……………	35	第66図	その他の遺物（3）……………	81
第27図	方形土坑9・出土遺物（1）……………	36	第67図	その他の遺物（4）……………	82
第28図	方形土坑9出土遺物（2）……………	37	第68図	石製品（1）……………	83
第29図	方形土坑9出土遺物（3）……………	38	第69図	石製品（2）……………	84
第30図	土坑1, 2・出土遺物……………	39	第70図	石製品（3）……………	85
第31図	土坑3……………	41	第71図	製鉄関連遺物……………	86
第32図	土坑4～7・土坑7出土遺物……………	42	第72図	その他の遺物（鉄製品）……………	87
第33図	土坑8～11……………	43			
第34図	土坑12～14・12, 13出土遺物……………	44			
第35図	ピット内出土遺物……………	45			
第36図	礫集積1・出土遺物……………	46			
第37図	礫集積2・出土遺物……………	47			
第38図	礫集積3・出土遺物……………	48			
第39図	炉跡1, 2・畝状遺構……………	49			
第40図	溝状遺構1～6・道跡……………	50			

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表……………	7	第11表	古代出土遺物観察表（3）……………	90
第2表	川上城跡基本層序……………	10	第12表	古代出土遺物観察表（4）……………	91
第3表	古代遺構内出土遺物観察表（1）……………	51	第13表	古代出土遺物観察表（5）……………	92
第4表	古代遺構内出土遺物観察表（2）……………	52	第14表	古代出土遺物観察表（6）……………	93
第5表	古代遺構内出土遺物観察表（3）……………	53	第15表	古代出土遺物観察表（7）……………	94
第6表	古代遺構内出土遺物観察表（4）……………	54	第16表	その他出土遺物観察表……………	95
第7表	古代遺構内出土石製品観察表……………	54	第17表	その他（陶磁器）観察表（1）……………	95
第8表	古代遺構内出土 製鉄関連遺物観察表……………	54	第18表	その他（陶磁器）観察表（2）……………	96
第9表	古代出土遺物観察表（1）……………	88	第19表	その他（石製品）観察表……………	96
第10表	古代出土遺物観察表（2）……………	89	第20表	その他（鉄製品）観察表……………	96

図 版 目 次

図版1	川上城跡全景……………	103	図版10	古代の遺構（9）……………	112
図版2	古代の遺構（1）……………	104	図版11	古代の遺構（10）・調査風景・ 遺跡見学会……………	113
図版3	古代の調査・古代の遺構（2）……………	105	図版12	古代の遺物（1）……………	114
図版4	古代の遺構（3）……………	106	図版13	古代の遺物（2）……………	115
図版5	古代の遺構（4）……………	107	図版14	古代の遺物（3）……………	116
図版6	古代の遺構（5）……………	108	図版15	古代の遺物（4）……………	117
図版7	古代の遺構（6）……………	109	図版16	古代の遺物（5）……………	118
図版8	古代の遺構（7）……………	110	図版17	その他の遺物（1）……………	119
図版9	古代の遺構（8）……………	111	図版18	その他の遺物（2）……………	120

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（鹿児島地域振興局 建設部土木建設課・以下道路建設課）は、鹿児島蒲生線整備事業を計画し、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は、事業地が周知の遺跡である川上城跡の範囲内にあることを確認した。この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについて、道路建設課・文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため、事業着手前に試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、文化財課及び埋文センターが担当することとし、平成23年6月14日に実施された。その結果、遺構・遺物の存在が確認された。

そこで、再度三者で協議を行い、川上城跡について本調査を実施することとなった。調査は埋文センターが担当し、平成23年11月7日～平成24年2月9日（実働45日間）にかけて実施した。

ただし、民有地への取り付け道路部分については、鹿児島市と合同で調査を行うこととした。

なお、整理・報告書作成作業については平成24年度に実施した。

第2節 事前調査

1 試掘調査

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 鹿児島地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課 課長 前原 浩一
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課 課長補佐 平嶺 浩 主任文化財主事兼 埋蔵文化財係長 前迫 亮一
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課 文化財主事 川口 雅之

鹿児島県立埋蔵文化財センター

主任文化財主事兼第一調査係長

兼南の縄文調査室長補佐 東 和幸

文化財研究員 岩永 勇亮

調査協力者 鹿児島市教育委員会文化課

指導主事 野邊 盛雅

第3節 本調査

本遺跡の本調査を、平成23年11月7日～平成24年2月9日の45日間にわたり実施した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 鹿児島地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 寺田 仁志
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 田中 明成 次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文 調査第一課長 堂込 秀人 主任文化財主事兼第一調査係長 兼南の縄文調査室長補佐 東 和幸
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 上床 真 文化財主事 吉元 輝幸
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 総務係長 大園 祥子

第4節 工事立会調査

本遺跡の工事立会調査を、平成24年2月17日～3月26日の期間に計9日間にわたり実施した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 鹿児島地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 寺田 仁志
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 田中 明成 次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文 調査第一課長 堂込 秀人

主任文化財主事兼第一調査係長
 兼南の縄文調査室長補佐 東 和幸
 調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 文化財主事 上床 真
 文化財主事 吉元 輝幸
 事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 総務係長 大園 祥子
 調査協力者 鹿児島市教育委員会文化課
 指導主事 野邊 盛雅
 主事 赤井 文人
 埋蔵文化財発掘調査専門員 長濱 武史
 埋蔵文化財発掘調査専門員 安栖 祐樹

調査の経過（日誌抄より）

H23.10.24・10.27

事前確認及び事前打ち合わせ

H23.11.1・11.2・11.4

プレハブ設置（日建リース工業）。

（株）インタケ（工事受注業者）によるA・B－1～3区表土除去・一部の擁壁除去の立会。

H23.11.7～11.11

調査開始。

ベルトコンベア・レンタカーの搬入。

A・B－1～9区掘り下げ。

（株）インタケ（工事受注業者）によるA・B－3～11区表土除去・一部の擁壁除去の立会。

H23.11.14～11.18

A・B－1～11区掘り下げ。

土坑・溝状遺構検出・掘り下げ・実測。

A・B－1～6区でピット検出。

（株）インタケ（工事受注業者）によるA・B－11～16区表土除去・一部の擁壁除去の立会。

寺田所長現場開始あいさつ（15日）。

堂込課長現地指導（18日）。

所内安全パトロール（18日・大園係長・永濱文化財主事）。

H23.11.21～11.25

土坑・畝状遺構掘り下げ・実測・写真撮影。

A・B－1～11区掘り下げ。

A・B－1～5区ピット掘り上げ。

A・B－1～3区壁面精査・土層断面実測。

H23.11.28

A・B－7～11区掘り下げ。ピット検出。古銭・青磁稜花皿を検出。

H23.12.5～12.9

A・B－7～13区掘り下げ。溝状遺構掘り下げ・実測・写真撮影。

A・B－1～3区遺構配置図作成（1/20）。一部の遺構の半裁断ち割り。

井ノ上次長現地指導（5日）。

H23.12.19～12.22

A・B－7～16区掘り下げ。

A・B－1～3区・13～16区コンタ図作成。

A・B－1～3区の一部の遺構の半裁断ち割り。

数カ所に下層確認トレンチ設定。重機で掘り下げを行う。B－3区でアカホヤ層直下で遺構・遺物確認のため、一部拡張して調査を行うが、広がり確認されず。他のトレンチではアカホヤ層以下では遺構・遺物は確認されず。

H23.12.26～12.27

A・B－1～3区検出の土坑3基の掘り下げ・実測・写真撮影。

A地区（A・B－1～3区）の調査終了。

H24.1.5・1.6

実測委託業務開始（新和技術コンサルタント）

A・B－3～5区遺構精査・遺構配置図作成。

A－13・14区溝状遺構掘り下げ。

A・B－7～16区掘り下げ。

H24.1.10～1.13

A・B－3～11区遺構（ピット・土坑）掘り下げ。

A・B－13・14区下層トレンチ設定・掘り下げを行う。下層からの遺構・遺物なし。

所内安全パトロール（11日・富田課長・光永文化財主事）。

H24.1.16～1.20

A・B－7～16区掘り下げ。

A・B－3～11区遺構（ピット・土坑）掘り下げ。

A・B－3～5区で壁立建物検出。

堂込課長現地指導（17日）。

地元向け現地説明会（地域振興局主体）開催。参加者30名（18日・13:10～14:00）。

川上小学校6年生見学会（地域振興局主体）開催。参加者90名（3学級）。（20日・14:00～17:00）。

H24.1.23～1.27

A・B－9～12区掘り下げ。方形土坑・ピット等の遺構を検出・掘り下げ・写真撮影・実測。

作業員勤務終了（27日）。

H24.2.1～2.9

A・B－9～12区遺構精査。

土坑・方形土坑・ピット等の検出・掘り下げ・写真撮影・実測。

民有地への新規取り付け道路部分（B－2・3区）の立会調査。ピット10基、土坑1基を検出。調査終了（8日）。

全面調査終了（9日）。

工事立会調査

報告書作成検討委員会

平成24年10月15日

H24.2.17

寺田所長ほか10名

民有地への取り付け道路部分（A・B－5・6区）の立会調査。ピット10基検出。調査終了。

H24.2.22～2.24

民有地への新規取り付け道路部分（B－9～11区）の立会調査。ピット40基，方形土坑1基，溝状遺構，畝状遺構を検出。調査終了。

H24.3.15～3.16

民有地への取り付け道路部分（A・B－8・9区）の立会調査。ピット1基，土坑2基を検出。調査終了。

H24.3.21～3.22・3.26

民有地への新規取り付け道路部分（B－13・14区）の立会調査。野邊盛雅氏・赤井文人氏・長濱武史氏・安栖祐樹氏（鹿児島市教育委員会）と合同で調査を行う。

なお，調査中に課長・係長の指導，係長の支援を受けた。

第5節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成24年1月5日～7月30日にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

出土遺物の水洗い，注記，遺構内遺物と包含層遺物の仕分け，遺物の実測・拓本，図面のトレース・レイアウトや原稿執筆等の編集作業を行った。整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおり。

作成体制（平成24年度）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
	鹿児島地域振興局建設部土木建築課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長 寺田 仁志
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	次長兼総務課長 新小田 穰
	次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文
	調査第一課長 堂込 秀人
	第二調査係長 大久保浩二
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	文化財主事 吉元 輝幸
	文化財主事 有馬 孝一
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	主幹兼総務係長 大園 祥子
	主査 下堂蘭晴美
報告書作成指導委員会	平成24年10月9日
	井ノ上次長ほか7名

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡が所在する鹿児島市は、北は姶良市と薩摩川内市、西は日置市・南さつま市・南九州市、南は指宿市、東は錦江湾（鹿児島湾）を隔てた桜島が垂水市と接している。県庁所在地である本市は、南九州の拠点都市（政治・経済・文化等の中心地）であり、本県の人口の約3分の1に相当する約60万人が居住している。（平成24年4月現在）

次に、鹿児島市の市制の概要について簡略に述べる。鹿児島市は、明治22（1889）年4月1日に日本で最初に市制施行した31市の一つで、福岡市（約148万人）、北九州市（約98万人）、熊本市（約73万人）に次ぐ九州第4位の人口（約60万人）を抱えた都市である（人口はいずれも平成24年4月現在）。

平成23（2011）年3月12日には九州新幹線が全線開業し、北部九州や関西方面とも短時間で結ばれた。それに伴い、鹿児島中央駅周辺ではホテルやマンション等の大型の建物が建ち、観光・経済面において今後のさらなる発展が期待される。

市街地は、鹿児島湾に流入している甲突川など7つの中小河川により形成された平野部にあり、その周辺は海拔約100～300mの丘陵地帯（シラス台地）となっている。本遺跡の所在する川上地域も、シラス台地により形成された丘陵地帯に位置する。

川上地域は1889（明治22）年4月1日までは、川上村と呼ばれていたが、町村制施行によって、鹿児島郡吉野村、坂元村、下田村、岡之原村と合併して吉野村となった。その後、1934（昭和9）年8月1日に鹿児島市へ編入された。

川上地域は、九州縦貫自動車道の吉田ICへ向かう県道鹿児島蒲生線及び九州縦貫自動車道が南北に貫き、本地域における主要交通路となっている。

川上城跡は、市街地中心部から北西部へ約7kmの内陸部の鹿児島市川上町字加栗山に所在する。

本遺跡付近には、北側から南側へと蛇行しながら流れる精木川（あべのきがわ・下流で稲荷川と合流）を境として、東側は吉野台地、西側は岡之原・緑ヶ丘等の台地が広がる。これらの台地は、河川の浸食作用によって大小の開折谷が形成されており、その地形は複雑である。

その複雑な地形を利用して築城されたのが中世の川上城である。本丸の部分は九州縦貫自動車道により分断されているものの、現在でも自然の要害である急峻な崖や空堀、土塁などが残っている。

平地が少なく、複雑で急峻な崖が多い地形のため、人口の多くが川上小学校付近のわずかに開けた河岸段丘、

そして吉野台地、緑ヶ丘団地、伊敷団地等に集中している。山城としての川上城跡は、岡之原の台地の縁辺部が南東方向へと突き出す部分に所在し、精木川の右岸に位置する。また、川上城跡の地形は、精木川から段丘状になっており、今回調査した部分はその2段目ないしは3段目ほどの県道沿いのやや平坦な部分にあたる。標高は約150mである。

川上地区における遺跡発掘調査は、鹿児島県教育委員会が行った九州縦貫自動車道建設に伴う昭和50・51（1975・76）年の加栗山遺跡・加治屋園遺跡での発掘調査、平成5（1993）年の鹿児島市教育委員会による川上城跡の発掘調査が行われている。なお、鹿児島市教育委員会が行った川上城跡発掘調査は川上城の「三の丸」にあたる部分であり、今回行った調査位置とは異なる。

今回の調査区は、以前調査された加栗山遺跡と重なる地点ではあるが、県道沿いの狭い部分（県道の拡幅部分）のみである。

本遺跡で見られた地質の特徴として、アカホヤ火山灰層以下の堆積状況が良好でないことが挙げられる。様々な要因が考えられるが、本遺跡の地形が西から東に向かって傾斜しているため、流失してしまったか、中世に城の曲輪を作るために造成が行われた可能性が高い（成尾英仁氏の御教示による。）

第2節 歴史的環境

川上城跡周辺には、多くの遺跡、文化財が存在する。それらは、川上地区の歴史を知る上で1つの手がかりとなる。また、数は少ないものの、川上城に関する文献資料も存在する。

本稿では、川上地区周辺の遺跡の報告書及び、川上城に関する文献資料をもとに、本遺跡周辺の歴史的環境について時代順に述べる。

1 旧石器時代

九州縦貫自動車道建設に伴う加栗山遺跡と加治屋園遺跡（現九州縦貫自動車道鹿児島料金所）の発掘調査は、県単位で行った最初の大規模調査であった。

加栗山遺跡は、旧石器時代後期の細石刃と石鏃を含め約7万点もの石器と集落跡が見つかった遺跡である。このことから、加栗山遺跡は細石器文化の遺物量の多さと縄文早期前半の集落形態が目される遺跡である。石器の出土量の多さから、当時は石器生産拠点であったと考えられている。

一方、加治屋園遺跡は、加栗山遺跡とほぼ同時代の遺跡であり、薩摩火山灰層の下から出土した旧石器時代終末期から縄文時代草創期の細石刃、細石刃核を主体とし、

削器、搔器なども出土し、総数は約一万点に及ぶ。細石刃に至っては、これまでとは異なった技法（扁平な板状の凝灰岩質頁岩を数個に分割してそのまま細石刃を剥ぎ取る特徴的な石器製作技術）で製作されたものが発見された。この技法は後に「加治屋園技法」と名付けられることになる。それらの細石刃に伴い、土器片が114点出土したことも注目される遺跡である。

土器はそれまで縄文時代に入ってからのものであったことから、これら2つの遺跡は旧石器時代から縄文時代への移行期はいつ頃なのかという問題を提起した遺跡となった。

なお、本地域ではシラスが厚く堆積するため、25,000年前よりも古い遺跡・遺物は物理的に調査が不可能であることもあって未発見である。

今回の発掘調査においては、Ⅳ層上面で検出された黒曜石の中に石核など旧石器時代のもと考えられる遺物が出土している。これらは、流れ込みであると考えられる。

2 縄文時代

草創期については、加治屋園遺跡で出土している土器が注目される。多くは無紋の土器であるが、三点はS字状の粘土紐が取り付けられた「粘土紐貼り付け文土器」と呼称される土器である。

早期では、加栗山遺跡で早期前半の竪穴住居が17基、連穴土坑26基、土坑48基、集石16基が検出された。これらの成果から加栗山遺跡は、上野原遺跡（霧島市）、前原遺跡（鹿児島市）、定塚遺跡（曾於市）などととも南部九州を代表する縄文時代早期前半の集落遺跡として位置づけられることになった。

加栗山遺跡から出土した土器は、縄文早期前半の代表的な土器であり、「加栗山式土器」として設定されている。同遺跡からは、吉田式土器・石坂式土器・前平式土器も出土している。前期では、加栗山遺跡でアカホヤ火山灰上層部から曾畑式土器、加治屋園遺跡から轟式土器が発見されている。中期は、加治屋園遺跡で条痕文土器・大平式土器・並木式土器・岩崎下層式土器が出土している。後期は、加治屋園遺跡から市来式系統の土器・西平式系統の土器が発見されている。晩期については、加治屋園遺跡で黒川式土器が出土している。

3 弥生時代

弥生時代の遺跡は、本地域にいくつか存在しているが、実際に調査された遺跡はほとんどない。本遺跡からは、入来Ⅱ式土器の破片が出土しているため、周辺には当該時期の遺跡が存在する可能性がある。

4 古墳時代

加栗山遺跡からは、古代・中世の包含層中に混在したかたちで、甕・壺・高坏の破片が出土している。なお、本遺跡においても同様の出土状況が見られた。

5 古代

古代では牧小墓遺跡（6）で発見された須恵器製の蔵骨器や、墓下遺跡（16）で発見された丸軋などがある。

加栗山遺跡・加治屋園遺跡では、土師器（甕・坏）・須恵器（壺・瓶）などが出土している。

6 中世以降

この時期になると、文献にも遺跡周辺の地名である川上（河上）及び下田などが登場する。応永11（1404）年の『島津元久宛行状（旧記雑録）』に「鹿児島郡河上村」が、正平13（1358）年の『島津氏久安堵状（山田文書）』には鹿児島郡内「上伊敷・下田両村」がみえる。これが川上・下田の文献の上での初見である。

また、同時代史料ではないが、『鹿児島縣地誌備考』（明治30【1897】年までに成立）などには、天文4（1535）年に「島津勝久が川上城を攻撃したが落城させられなかった」という記述がみられる。川上城跡に関する記録としてはこれが唯一のものである。中世の発掘調査の事例として、加栗山遺跡と川上城跡が挙げられる。

加栗山遺跡では、遺構としては掘立柱建物・土塁・柵列・炉跡・井戸などが、遺物としては青磁・白磁・青花・瓦質土器などが発見されている。

平成5（1993）年に鹿児島市教育委員会が行った川上城跡の発掘調査では、ピット列等の遺構及び青磁・白磁・青花・播鉢などの遺物が発見されている。

なお、この2カ所の遺跡は、いずれも川上城跡の範囲内におさまるもので、前者が本丸、後者が三の丸と推定されている。

7 近世・近代

近世以降の周辺文化財として、川上小学校近くに所在する寛保元（1741）年銘の田の神（県指定文化財）が地元でよく知られている。その他に、元禄4（1691）年に磯別邸の泉水として使用されるために作られた取水口が後に、享保7（1722）年に島津齊彬が集成館事業のために改修したとされる「関吉の疎水溝」がある。

近世以降の遺跡・遺構の発見例は多くないが、川上城跡で発見された礎石建物跡・古石塔などは、近世以降のものであり当該時期の様相を探るうえでの史料になる。



第1図 周辺遺跡地図

第1表 周辺遺跡一覧表（14が川上城跡）

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	中迫	鹿児島市岡之原町丸岡中迫	台地	古墳～歴史	成川式・土師器	県埋文報（40）
2	北伏野	鹿児島市岡之原町丸岡北伏野	台地	古墳	土器片	
3	三重石塔	鹿児島市吉田町宮之浦宮西	低地	近世	層塔（乙亥13年と判読）	（町）昭和46.8.15町指定文化財
4	宮之浦八幡神社跡	鹿児島市吉田町宮之浦宮西	丘陵	中世（室町）	門神2基・灯籠・社殿	「嘉吉3年」の記載あり
5	宮後	鹿児島市吉田町宮之浦宮後	河岸段丘	縄文晩期		昭和43～44年・46年分布調査
6	牧古墓	鹿児島市吉田町宮之浦牟礼谷の牧	山地	平安	蔵骨器（須恵器）・土師坏	「鹿児島考古学会紀要」
7	木ノ迫	鹿児島市川上町下花棚木ノ迫	段丘	縄文～中世	縄文土器・土師器・須恵器・青磁・染付・削器・石斧	県埋文報（14）、消滅
8	西ノ前	鹿児島市川上町下花棚西ノ前	台地	弥生～古墳	成川式土器	
9	北ノ前	鹿児島市川上町下花棚北ノ前	台地	弥生～古墳	成川式土器	
10	尾立	鹿児島市川上町上花棚尾立	台地	古墳	土器片	
11	拾間原	鹿児島市川上町川上拾間原	台地	古墳～歴史	成川式・土師器	県埋文報（40）
12	加治屋園	鹿児島市川上町加治屋園	台地	旧石器、縄文（早・中）	細石核・細石刃・塞ノ神式・並木式・阿高式・轟式・岩崎式・西平式	県埋文報（14）市埋文報
13	加栗山	鹿児島市川上町加栗山	台地	旧石器、縄文（草～前）、中世	細石核・細石刃・石坂式・吉田式・前平式・曾畑式・土師器・青磁・白磁・染付・湯釜・石臼・住居跡	県埋文報（16）市埋文報（18）
14	川上城跡	鹿児島市川上町加栗山	丘陵	中世	柱列・堀跡，土師器	市埋文報（18）本報告書
15	横枕	鹿児島市川上町野呂迫横枕	台地	古墳～歴史	成川式・土師器	県埋文報（40）
16	墓下	鹿児島市川上	台地	古墳～古代	土師器，鉄滓	
17	中尾瀬	鹿児島市吉野町帯迫中尾瀬	台地	縄文，古墳	成川式・黒曜石剥片・チャート剥片	
18	百人掘	鹿児島市吉野町百人堀	台地	古墳		

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

今回発掘調査を行った川上城跡は、楯山の舌状地の末端部分に位置する。遺跡の東側は県道鹿児島蒲生線が通り、西側は九州縦貫自動車道が通る。

調査区の設定は、遺跡全体をカバーできるように世界測地系($X = -149391.016$, $Y = -42457.823$)と坑A・B-10・11($Y = -149480.930$, $Y = -42453.899$)を結んだ線及び、その延長線を中心に設定した。

具体的には、北側から南側に向かって1, 2, 3…、東から西へA, B…と調査区割を設定した。

発掘調査は平成23年11月7日から平成24年2月9日までの作業員実働45日間で実施した。なお、民家への進入口の調査については、本調査終了後、平成24年3月26日までの期間に延べ9回、埋文センター職員で調査を実施し、一部鹿児島市教委の協力を得た。調査対象面積は約1,600㎡である。

調査の方法は重機(バックホー)によってⅡ層までの表土を除去した後、ジョレンやねじり鎌などを使用して人力での掘り下げを行った。その後、手堀りによって層の堆積状況を確認しながらⅢ層～Ⅳ層(アカホヤ火山灰層)の上面において、遺構の精査を実施した。

なお、縄文早期、旧石器時代の遺構・遺物の包含層確認のために調査区内に4カ所のトレンチを設定し、シラス上面(深さ約3m程度)まで重機を使用して掘り下げた。

しかし、4カ所のトレンチのいずれからも縄文早期、旧石器時代の遺構や遺物は確認できなかった。

層序については第2節で詳細に述べるが、堆積層は安定している部分がある一方、民家への進入口や駐車場などがあった場所は、掘削により破壊されていた。また、調査区は民家への進入口や駐車場などにより分断されていた。

しかし、それ以外の部分については、遺物包含層(Ⅲa層、Ⅲb層)は、良好な状態で堆積されている場所もあれば、層が乱れている箇所もあった。

Ⅲ層が良好な堆積状態で残存している場合の遺物取上は、細かいものや遺構に関係していない場合については、グリッドごとに一括で取りあげた。

一方、遺構内から出土した遺物、もしくは遺構に関連していると考えられる遺物については遺構ごとに一括、または実測を行い、出土位置を記録した後に取り上げを行った。

それ以外の一般遺物については、平板測量により出土位置を記録するとともに、レベル計測も行い、標高も併せて記録した後、遺物番号を付けて取り上げた。

2 遺構の認定と検出方法

本遺跡において、主な遺構はⅢb層上面及びⅣ層(アカホヤ層)上面で検出した。

検出した遺構については、遺構の種類に関わらず、検出した順に遺構番号を付与し、遺構種類の略号と組み合わせたものを遺構の名称として用いた。また、調査の過程、もしくは整理作業の段階で近代の遺構であると判断したものについては欠番とした。

遺構は概ね1.5m四方以上のものを方形竪穴建物、竪穴状遺構と認定した。1.5m四方に満たないものについては土坑とした。なお、Ⅲa層より上面で検出した遺構については、新しいものと判断し、写真撮影による記録のみに留めた。

遺構の調査は、検出状況の写真撮影・実測を実施した後、土坑については半裁、方形竪穴建物・竪穴状遺構については埋土観察用のベルトを十字に設定し、4分の1区画ずつ掘り下げた。遺構の性格や状況に応じて遺物出土状況の記録・取り上げ、土層堆積状況の記録を行った。

遺構の認定については形状や埋土の状況、床面の状態、遺物の出土状況等を総合的に判断して行った。

3 整理作業の方法

遺物の水洗いは、平成23年度中に大半を実施し、残りを平成24年度に実施した。水洗い作業の方法は、土器や陶磁器類、礫、マイクロコア等の石器及び石製品についてはブラシを用いた。鉄器については鉄器処理室において錆落としを行った。

注記は、包含層、表土から出土した遺物について、注記記号「川上」を頭に、続けて「区」、「層」の順番で記入した。なお、土器片の爪先大の小破片や摩滅の著しいもの、そして明らかに現代に近いものであろうと考えられるものについては注記を省略した。

遺物の接合は、土器類と陶磁器類について行った。まず、出土区や色調を元に、土器類と陶磁器類の抽出・分類をした。その後、同一グリッド、同一遺構内での接合を行い、序々に接合範囲を広げていった。

文様や胎土が特徴的なものについては、適宜抽出して接合を行った。



第2図 川上城跡調査範囲（アミカケの部分）

第2節 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。各層は、表土から順に喜界カルデラの火山堆積物、桜島の火山堆積物、シラス等が堆積している。

しかし、堆積状況が良好な場所と、造成もしくは背後の楡山からの崩落土と思われる軽石混じりの土の堆積が見られ、一部で攪乱された状態が見られた。

第2表 川上城跡基本層序

層	色 調	備 考	厚さ (cm)	時 代
I a	黒褐色土	表土もしくは客土	30	
I b	黄色小軽石混黒色土	旧表土①	40	
I c	暗褐色砂質土	旧表土② 近代土坑、溝の埋土	20	近代
II	灰黄褐色土	中世～近世の遺物包含層	20	中世～近世
III a	黄褐色土のブロックを含む褐色土	古代～中世の造成土、もしくは崩落による堆積土	5	古代～中世
III b	暗褐色土	古代の包含層	5	古代
IV	黄褐色砂質土	アカホヤ火山灰層 (上部に黄色小軽石が堆積。サツマ火山灰層のものか)	45	
V	乳褐色砂質土	鉄分を含む。水成堆積の可能性あり	30	
VI	黒色砂質土		30	
VII	黄褐色パミス土	サツマ火山灰層	30～50	

I層については、a・b・cの三枚に分層し、いずれも基本的には表土、もしくは盛り土によるものと判断した。しかし、I c層と同じ土がIII a層上面で検出した溝状遺構及び方形土坑などの埋土としても確認された。

II層は、中世から近世にかけての遺物が出土する層である。主として近世の遺物が出土した。近世以降に造成が行われた可能性がある。

III層は今回の調査でもっとも遺物が出土した層であることから、調査の核とも位置づけられる層である。

土色からIII a層とIII b層に分けられる。III a層は、黄褐色土のブロックを含む褐色の層である。この層は、土が非常にしまっており、人為的に固められたものであると考えられることや、III a層上部で遺構が確認されたことなどから、造成土の可能性が高い。

III b層は、黒褐色を呈する層で古代の遺物包含層である。今回の発掘調査において最も多く遺物が出土した層である。

IV層はアカホヤ火山灰層であるが、上部には黄色で小型の軽石の混入があり、この軽石はサツマ火山灰に由来するものであることが判明した。(成尾英仁氏のご教示による。)

アカホヤ火山灰層は約7500年前、サツマ火山灰層は約11500年前と推定されることから、両者の上下関係は逆になっていることになる。

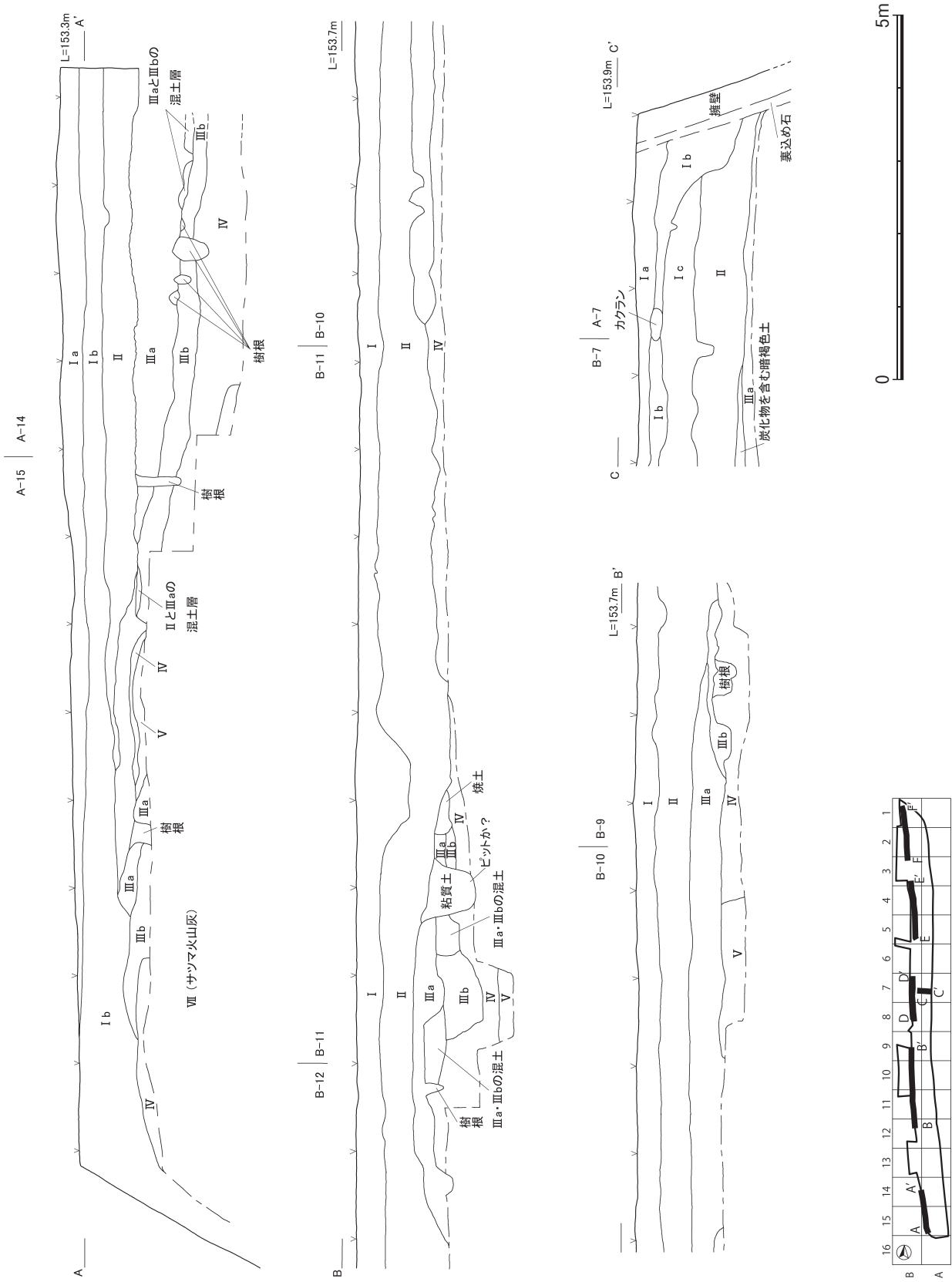
これについては、アカホヤ火山灰層が堆積した後に、上部の段丘からサツマ火山灰層の土が崩落し、堆積したもの、もしくは古代にサツマ火山灰層の土を用いて造成が行われた可能性が考えられる。

なお、古代の遺構(土坑、方形土坑、ピット、掘立柱建物跡)については、その多くがIV層上面で検出された。

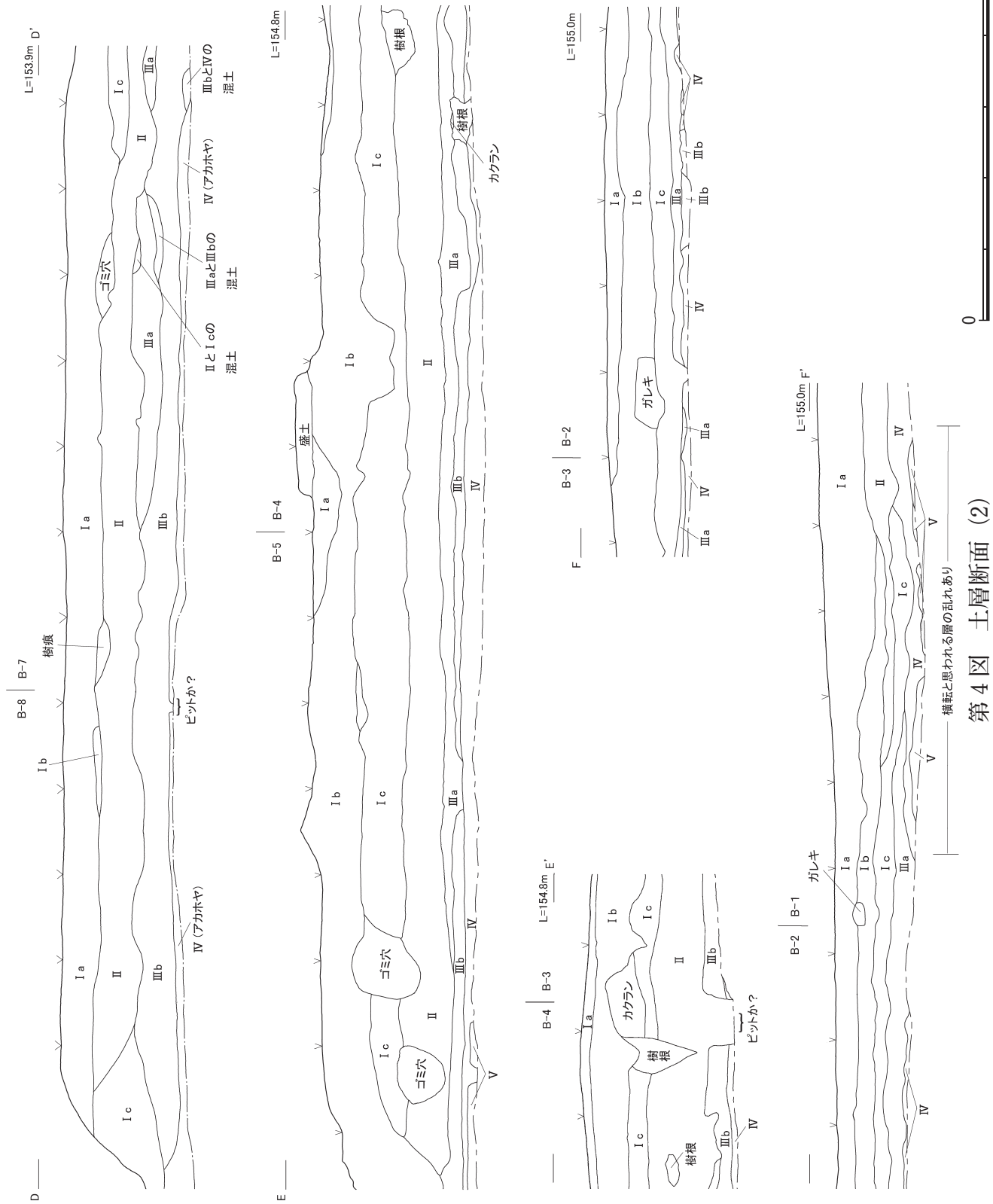
V層以下については、確認トレンチを設定して二次シラスまで掘り下げを行い、旧石器時代までの遺物、遺構を調査した。

しかし、V層上面(アカホヤ直下)で1点の遺物がみられた他には、遺構や遺物を確認することはできなかった。

また、VI層上面は、地形の傾斜が強く、サツマ火山灰層のブロックの流入も見られることから、安定した堆積状況は確認できなかった。



第3図 土層断面 (1)



第 4 図 土層断面 (2)

第3節 古代の調査

1 調査の概要

調査は全時代を通じて、10m四方のグリッドを基本に、調査区全体にグリッドを設定して発掘調査を行った。調査区は県道と中世の山城である川上城跡を背後にもつ住宅地の間で行われた道路拡幅工事部分である。後背地からの土砂崩落のため、層堆積は不安定で発掘調査時は遺構把握、出土遺物の層認定に非常に苦慮した。また、多数のピットが検出されたため、掘立柱建物跡の認定作業も困難で、整理作業段階で図上での復元も試みた。遺構の時期認定は、出土遺物を中心に記録層位、埋土を検討して認定を行った。

遺物総数は約15,000点で、遺構内出土遺物は一部を番号を付けて取り上げを実施し、それ以外は原則として一括して取り上げた。

一般遺物については平板測量により位置、レベルで標高を計測し記録した後、取り上げた。

出土した遺物の中で、遺構に関係がなく親指頭よりも小さい小片については一括遺物として取り上げた。

2 出土遺物の分類方法

遺物の分類は、土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品、墨書土器に分けた。さらに土師器については、椀、坏、高坏、高台付皿、甕、黒色土器、赤色土器に、須恵器については、蓋、椀、坏、皿、甕、鉢、壺に、墨書土器については、墨書、へら書き、刻書に分けた。器種毎の分類は、次のようにした。

土師器については、高台を持たないものを坏、高台を持つものを椀とした。皿は、高台を持つものについては、高台を除いた器高が3cm以下、それ以外のものも器高が3cm以下のものを皿として扱った。

坏、碗、皿いずれも器形の特徴から、坏は4種類、碗は4種類、皿は2種類に分類した。

なお、体部から口縁部分にかけてのみ残存していた破片については、残存している口縁部から口径を算出し、図面上で復元を行った。

坏の分類

- 坏Ⅰ類** 底径が大きめで、口径との比が少ないもの。体部が直線的な立ち上がりを見せる。箱形に近い器形。
- 坏Ⅱ類** Ⅰ類と比較して、底径が小さめで、口径との比が大きいもの。体部はⅠ類同様の直線的な立ち上がりを見せる。
- 坏Ⅲ類** 坏Ⅱ類と同様、底径と口径の比が大きい物。体部は曲線的な立ち上がりを見せる。口縁部が広がるものもある。

坏Ⅳ類 器形はⅢ類と同様であるが、底部に高台のような部分が残る、もしくはナデ消しているもの。

椀の分類

- 椀Ⅰ類** 直線的に真下に降りる高台を持つもの。
- 椀Ⅱ類** 外側に向かって外反する短い高台を持つもの。
- 椀Ⅲ類** 高さが1.5cm以上の高い高台を持つもの。
- 椀Ⅳ類** いわゆる「充実高台」を持つもの。

皿の分類

- 皿Ⅰ類** 高台を持つもの。
- 皿Ⅱ類** 高台を持たないもの。

黒色土器の分類

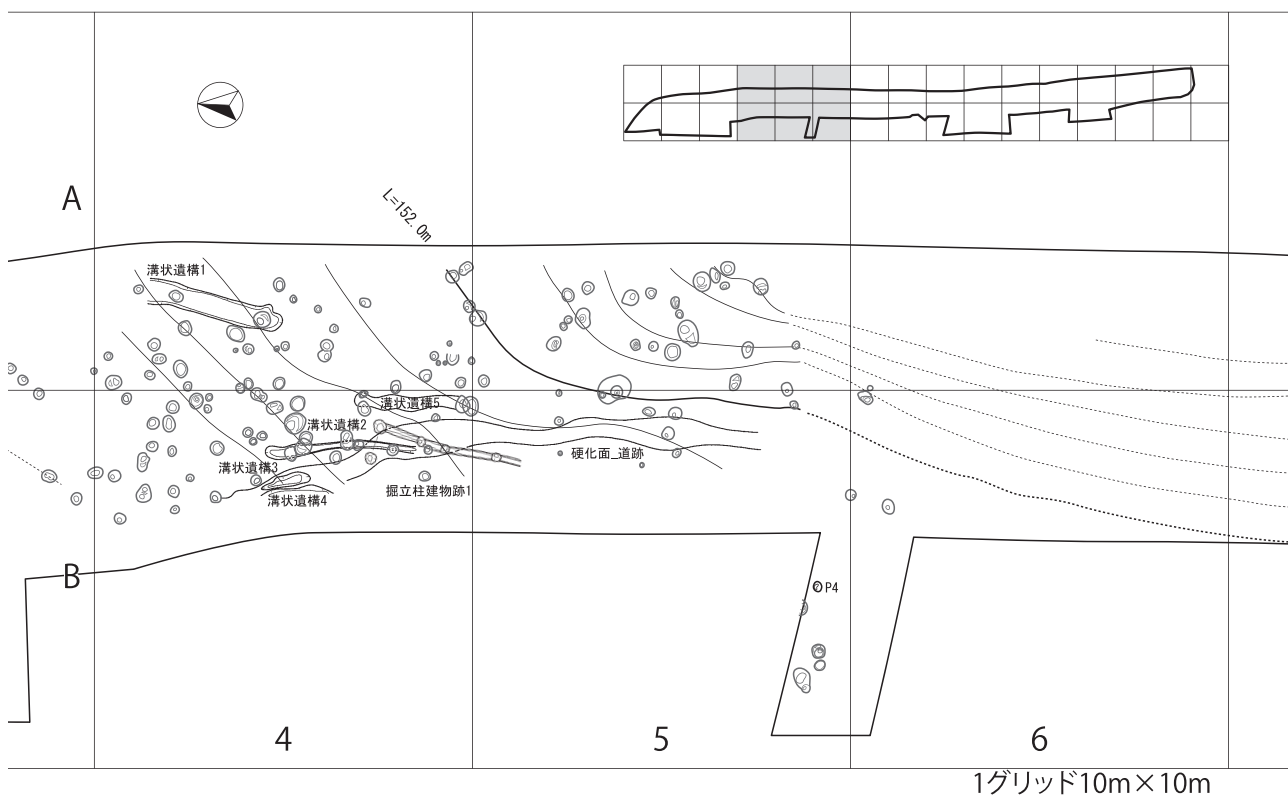
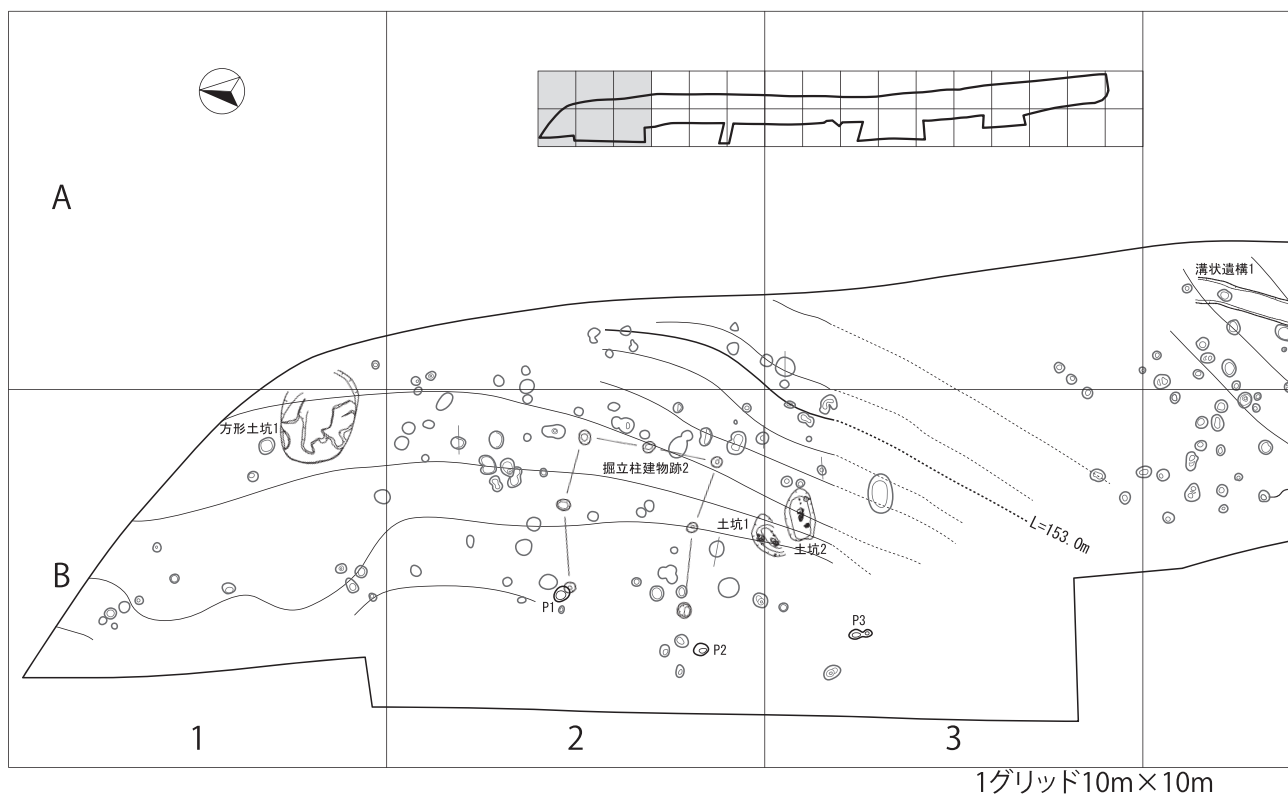
内面のみを黒く燻された内黒土器。いわゆる黒色土器A類

赤色土器の分類

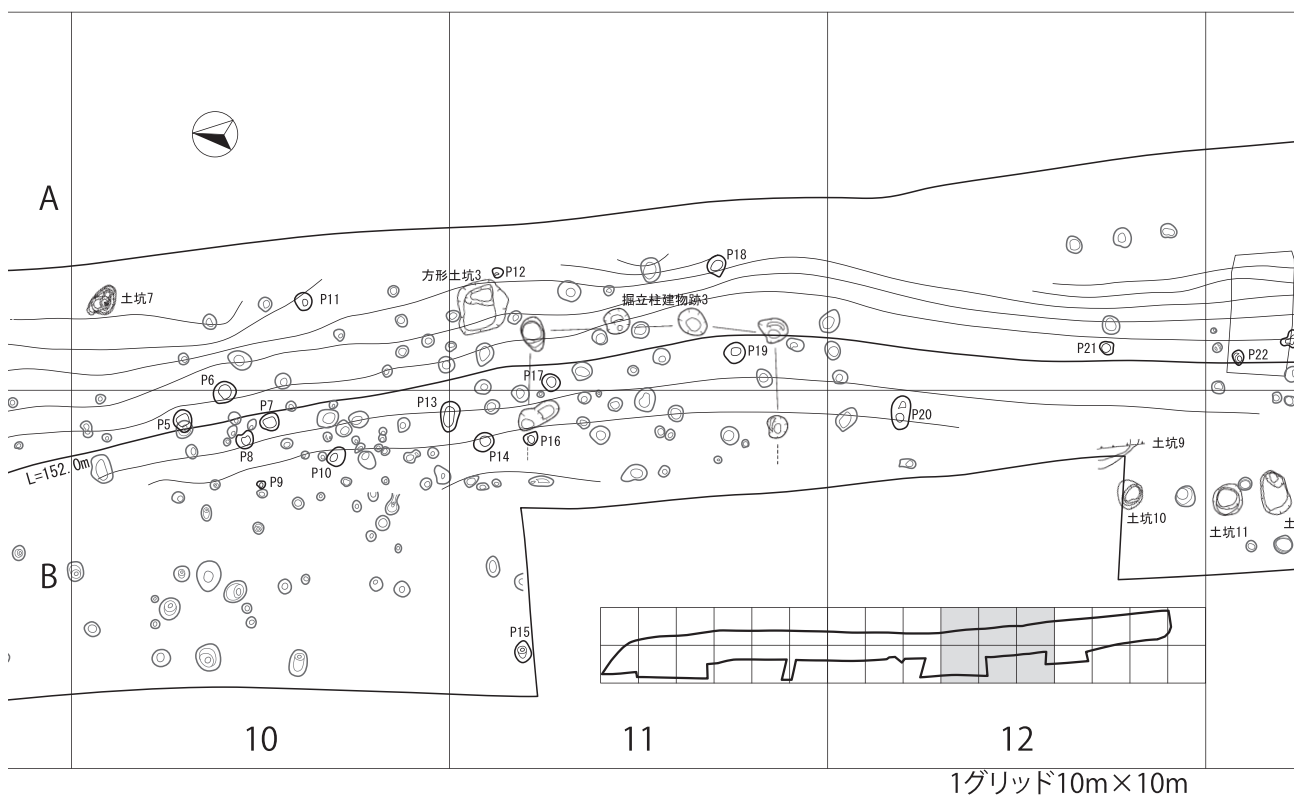
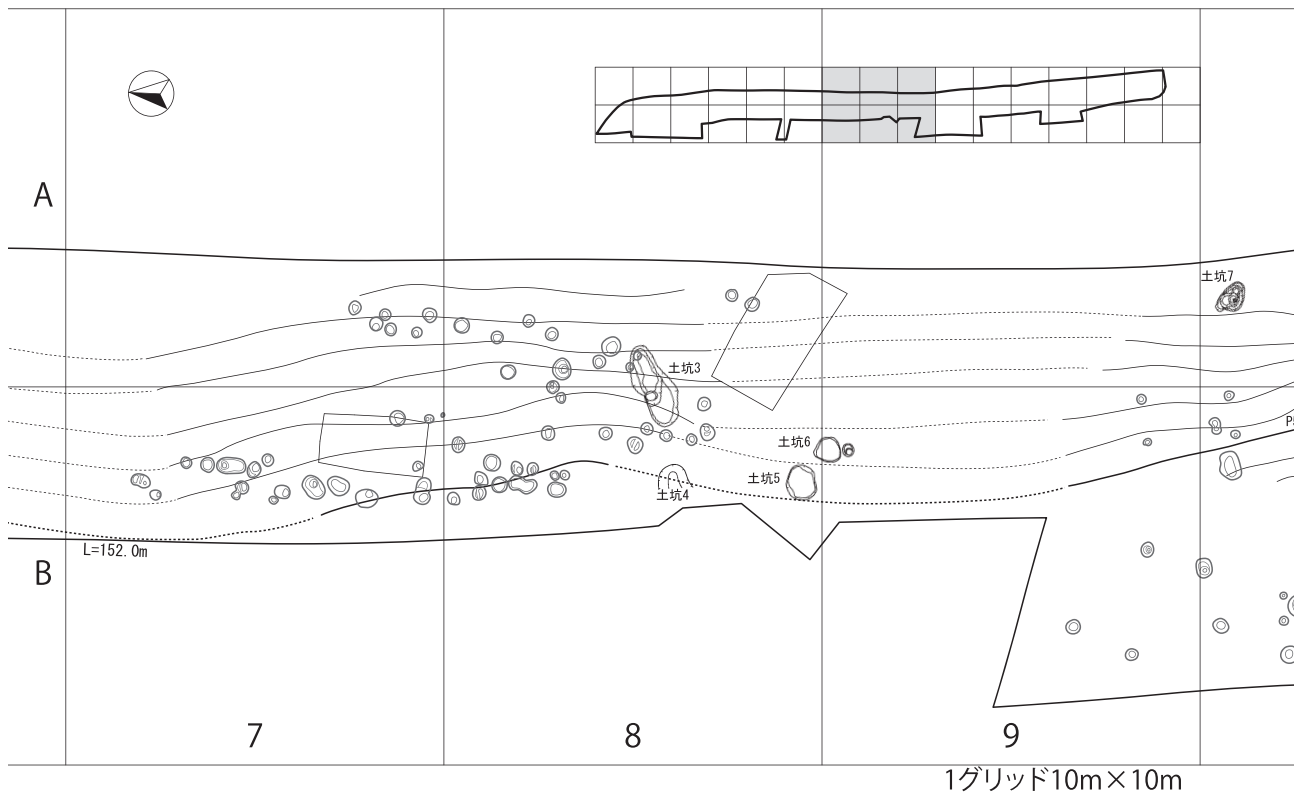
- 赤色顔料を施された面から2類に分類した。
- 赤色土器A類** 内面にのみ施されたもの。
- 赤色土器B類** 内外面とも施されたもの。

甕の分類

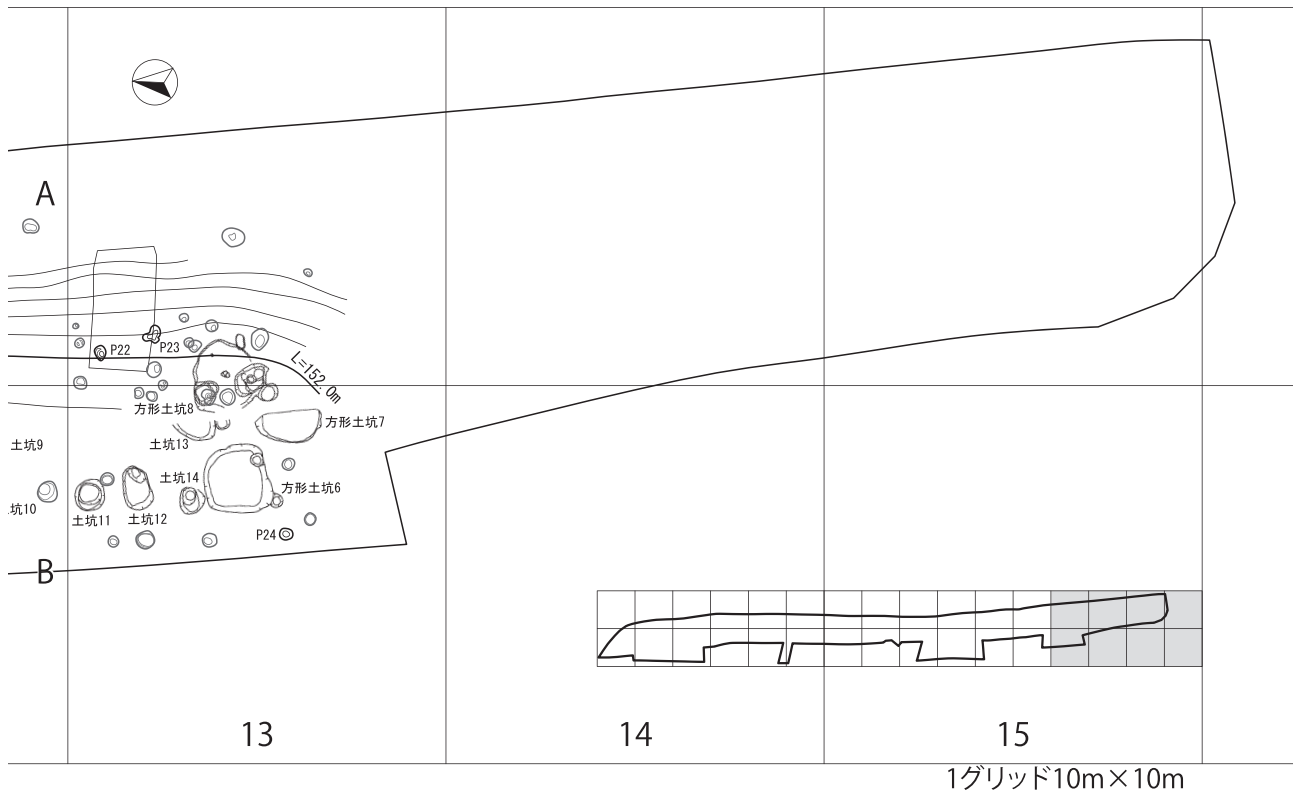
- 口縁部の器形と技法を指標にして分類した。
- 甕Ⅰ類** 口縁部が外反し、胴部が張り胴部内面のケズリ調整が弱い。
- 甕Ⅱ類** 口縁部が外反し、胴部の張りは小さく垂下する。胴部内面ケズリにより器壁が薄く、口縁部内面の稜線が明瞭に形成される。
- 甕Ⅲ類** 口縁部が短く外反の度合いも小さい。胴部器壁が厚い。



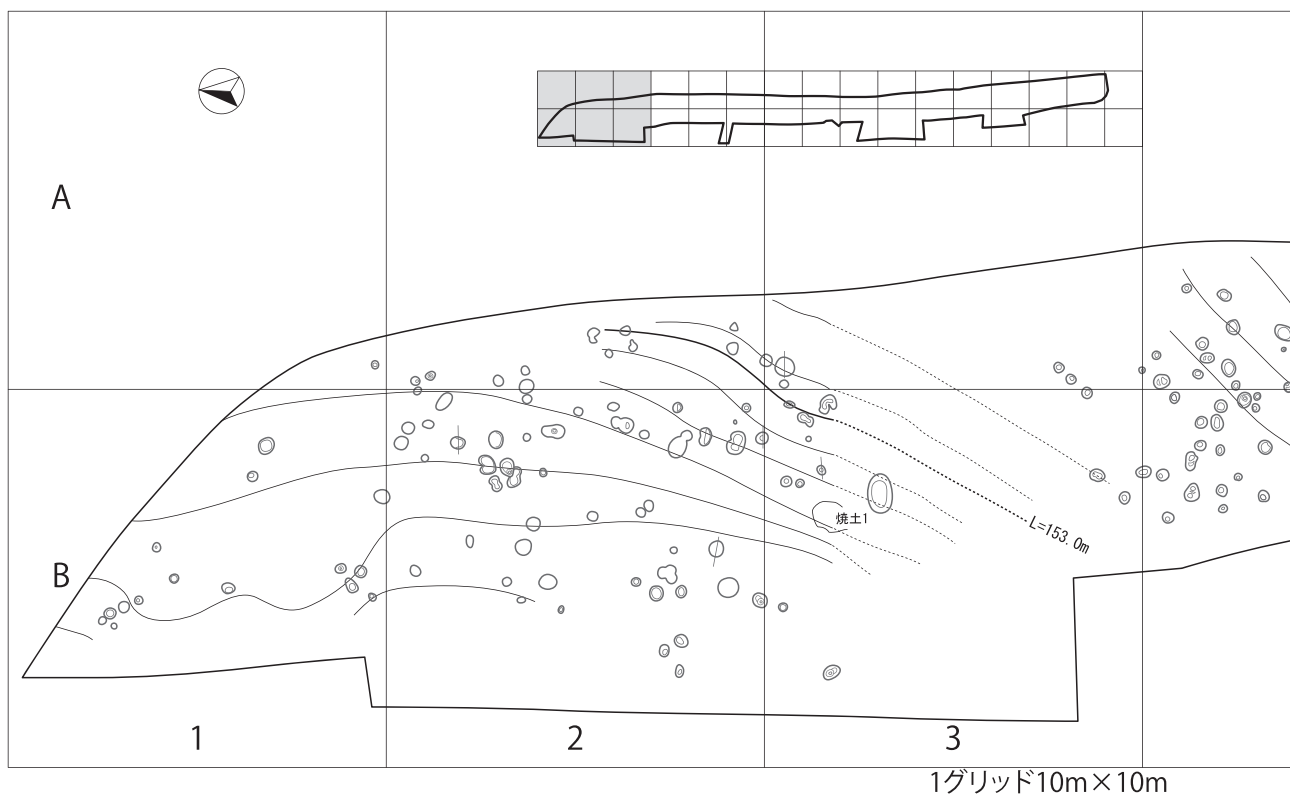
第5図 IV層上面遺構配置図(1)



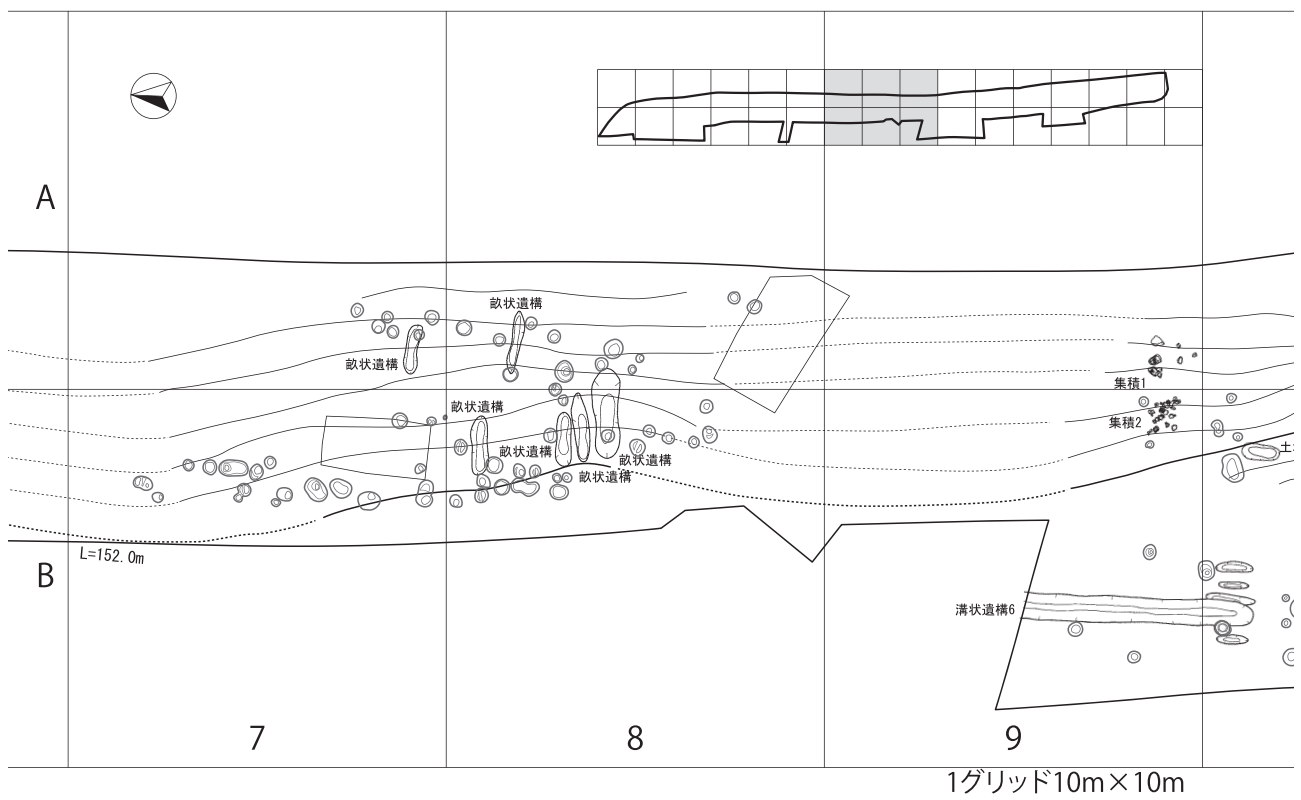
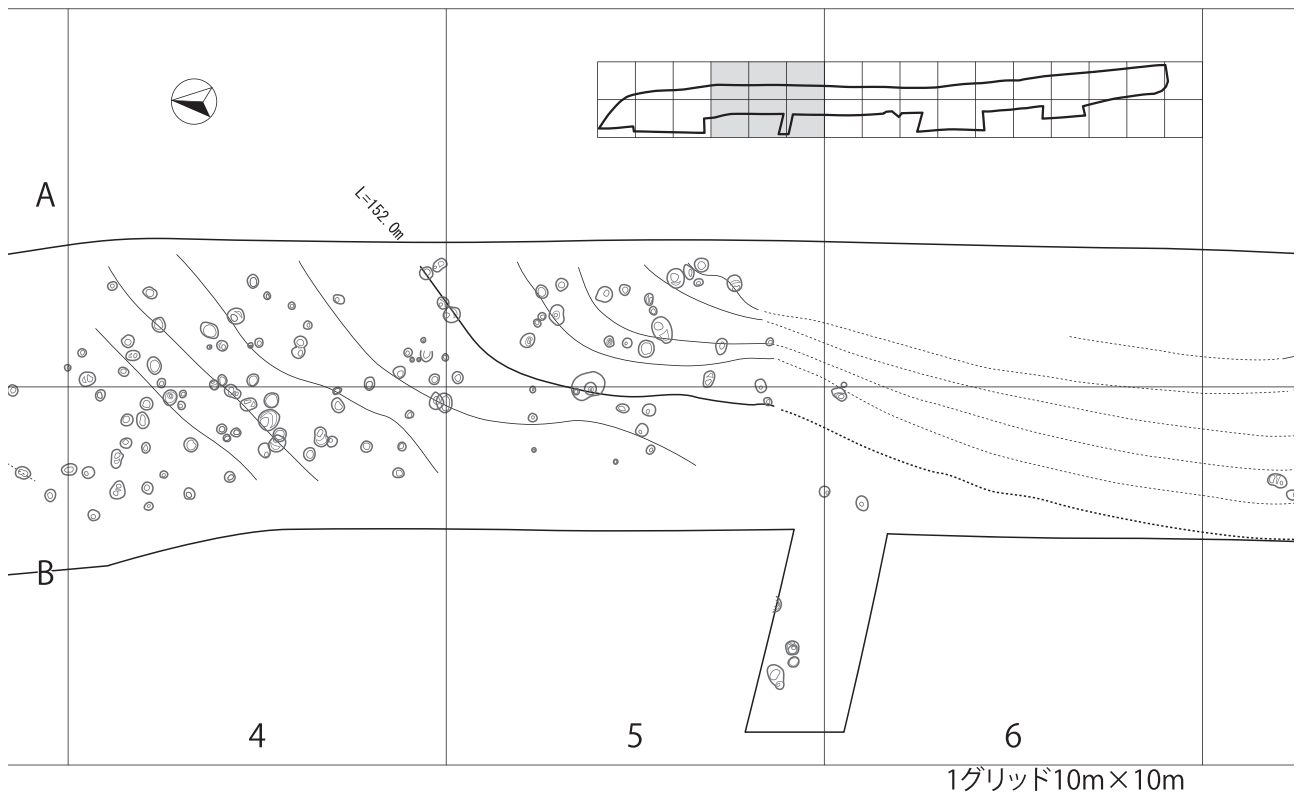
第 6 図 IV層上面遺構配置図（2）



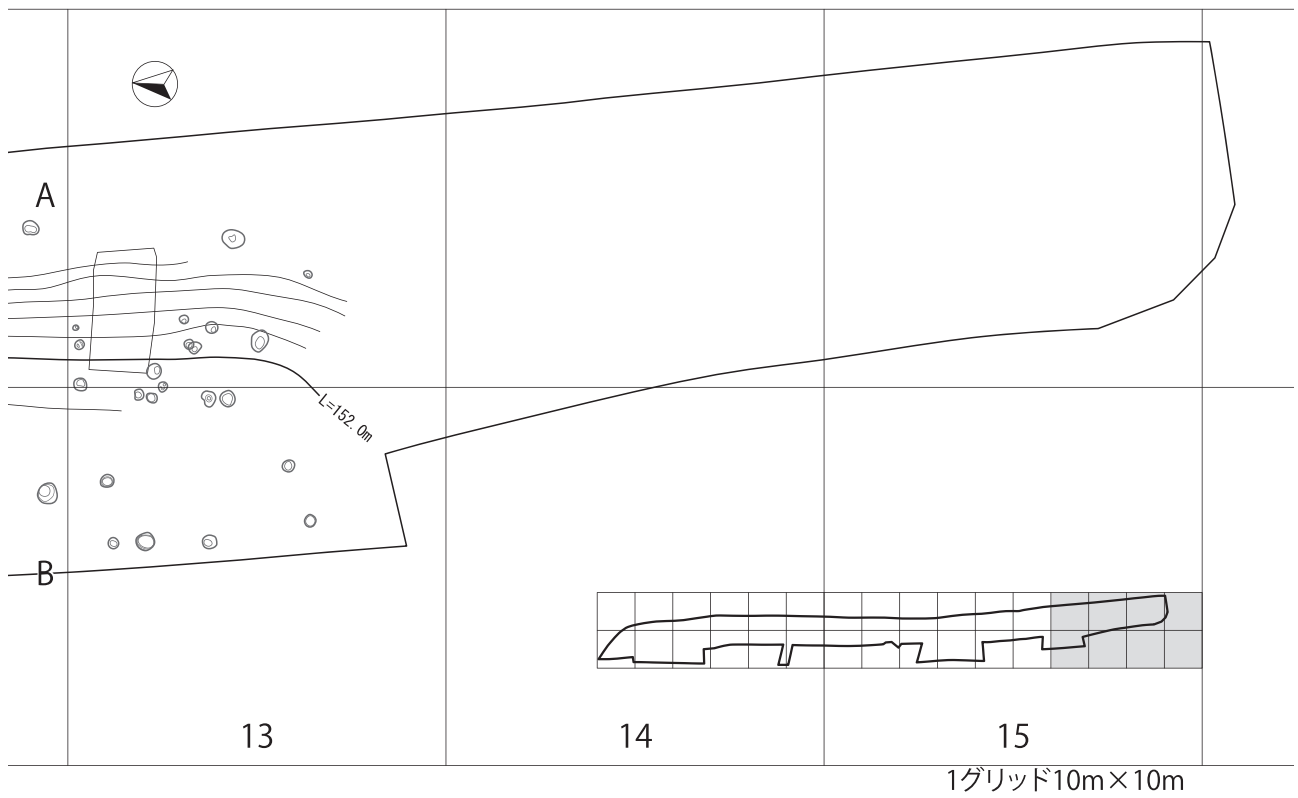
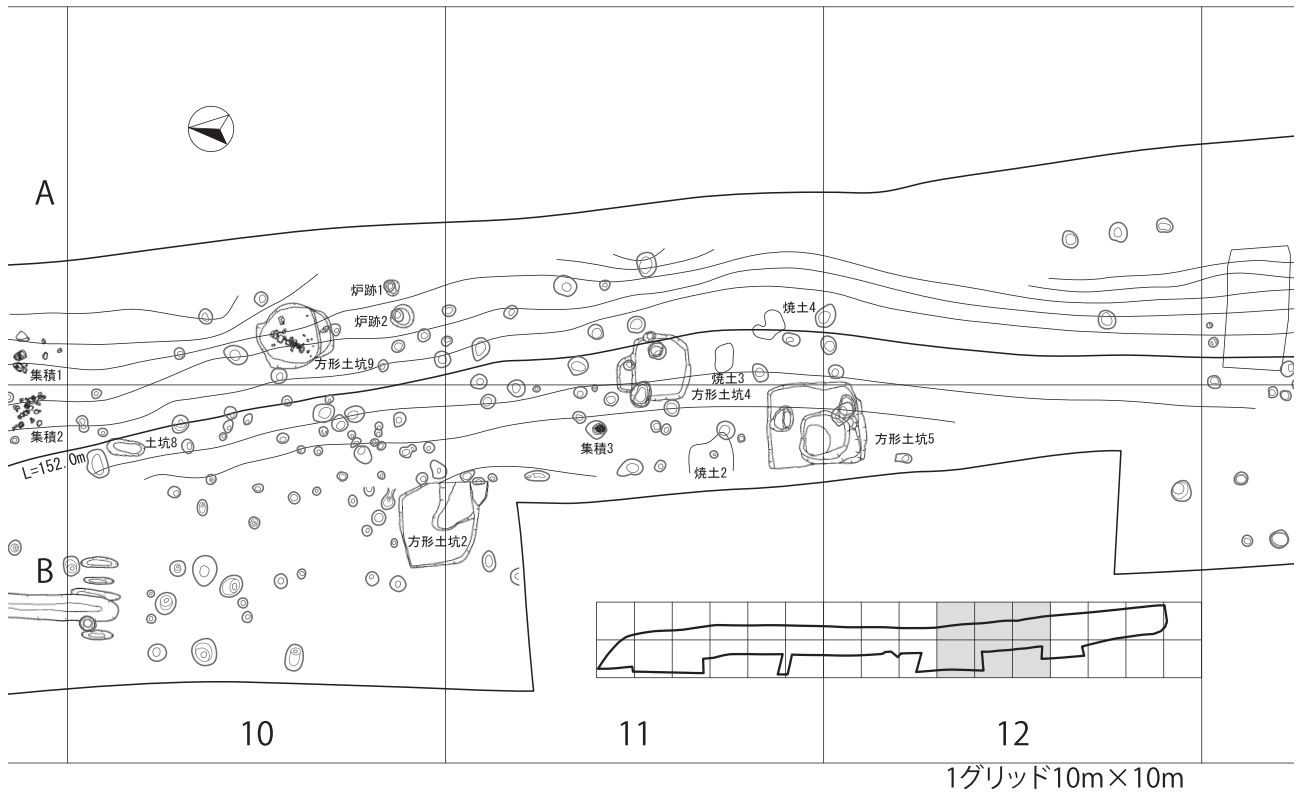
第7図 IV層上面遺構配置図(3)



第8図 Ⅲb層上面遺構配置図(1)



第9図 III b層上面遺構配置図（2）



第10図 Ⅲ b 層上面遺構配置図 (3)

3 遺構

古代の遺構は、掘立柱建物跡3棟、方形土坑9基、炉跡2基、土坑14基、礫集積3基、溝6条、畝状遺構6条が検出された。ピットは多数検出されたが、掲載遺物のあるもののみ遺構配置図で平面形を図示するに留めた。

掘立柱建物跡（第11・12図）

掘立柱建物跡は、3棟が検出された。調査区内からは多数のピットが検出されているが、3棟以外に建物に復元できるピット列は確認できなかった。

掘立柱建物跡1（第11図）

掘立柱建物跡1はB-4・5区にかけて検出された。明確に建物としてのピット配置を確認することは出来ない。建物東側を構成すると思われるピットは溝状の掘り込みでつながっており壁立であった可能性が伺える。この北側終端に直交するように西側にピット1基が確認できることから調査区西側へ居を構える建物跡と想定した。規格は3間+ α ×数間と考えられる。ピットの深さは20cm～70cmと幅がある。溝の深さ10cmほどである。

掘立柱建物跡2（第11図）

B-2区で検出された。規格が2間×2間の建物で梁行約3.6m、桁行約4mの規模をもち、床面積14.4㎡となる。柱穴は径30cm前後のものが大半を占め、西側梁行の中間柱がない。間口を広くとるものか、建物自体西へ広がるものと想定される。

掘立柱建物跡3（第11図）

A・B-11区・IV層上面で検出された。規格が1間×3間の建物で桁行約2.5m、梁行約6.6mの規模をもち、床面積16.5㎡となる。柱穴は径80cm前後のものが多く、他のピットと比較しても、がっしりした印象を受ける。ピット配列は西側の中間ピットが確認されていないこと、ピット規模から、調査区西側へ広がっていると考えられる。

出土遺物（第12図）

ピット内からは土師器片等267点が出土し、内24点を図化した。ピット1の1～3は土師器坏Ⅱ類で、1は底部に円盤状粘土に体部を貼付整形した痕跡が明瞭に残る。2、3は体部の立ち上がりが緩やかである。4は土師器碗で底部内面にV字状のへう書きがみられるが判読は不能である。5は、黒色土器A類の碗で脚部、体部ともに欠損しているが、体部は曲線的に立ちあがるものと思われる。6は、底部がやや丸底を呈する黒色土器A類の坏である。7は、内外面ともに、一部赤色顔料とミガキ痕が残存する。赤色土器B類の碗である。8は体部が曲線的に立ちあがり口縁部でやや外反する土師器坏若し

くは碗の体部である。復元口径は11.8cmである。9は、内部をミガキにより丁寧に仕上げた土師器皿である。復元口径は12cmである。

10～17はピット3から出土した。10～13は土師器坏底部で、体部の立ち上がりが緩やかである。11、12は体部下位にケズリ痕が残される。13は体部が斜めに立ちあがる土師器坏若しくは碗の体部である。復元口径12cmである。14は土師器碗で脚部は外開きし、体部は欠損するもののやや曲線的に見える。底径は7.7cmである。15は土師器の小壺と思われる。口縁部は頸部から短く外反し、体部は厚みがある。復元口径12cmである。

16は、土師甕で口縁部は短く、口縁部内面の稜線はケズリによりしっかりと形成されている。17は須恵器大甕の胴部片である。

18～21はピット4から出土した。18は土師器坏Ⅱ類で復元底径6cmである。体部は斜めに直線的に立ちあがる。19は土師器坏若しくは碗の胴部片で墨書で「木」の文字が記される。20、21は土師甕口縁部で20は口縁部がかなり外反する。21は口唇部に平坦面を形成し、ともに口縁部内面の稜線はケズリにより明瞭に形成される。22～24はピット5から出土した。22は土師器碗で体部は斜めに立ちあがる。23は、土師器坏若しくは碗の口縁から体部片で復元口径14.6cmである。体部は斜めに直線的に立ちあがる。24は黒色土器A類の碗で高台はやや外開きする。

方形土坑（第13図～第29図）

平面形状が長方形、方形を呈し規模が概ね1.5mを超えるもので古代の遺物が出土しているものを方形土坑とし記載した。土坑は一部を除き、A・B-10～13区に集中するように検出されている。

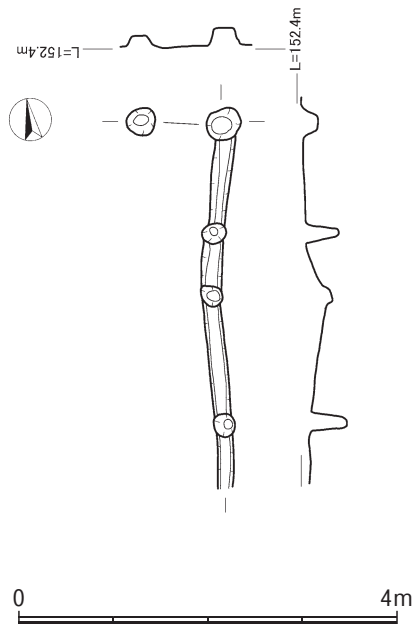
方形土坑1（第13図）

A・B-1区・IV層上面で検出された。断面形状から平面形は方形を呈するものと考えられる。長軸266cm、短軸198cm、深さ85cmの規模を呈するが、遺構北西側が樹痕で破壊されているためである。ほぼ完形に復元できる須恵器の甕が出土している。

出土遺物（第14・15図）

遺構内からは土師器片等15点が出土し、内3点を図化した。25は土師甕で、復元口径26.5cmで口縁部は薄めで、胴部の張りも小さい、胴部外面に棒状工具による縦位の調整痕が明瞭に残る。胴部内面は斜位のケズリにより整形されているが口縁部内面の稜線を形成してはいない。26は須恵器壺の胴部と思われる。肩部に縦位のタタキ目がわずかに残り胴部外面下位にはケズリ痕が残る。27は須恵器甕で口縁から底部まで残存する。口縁部は短く外反し口縁部に平坦面を形成する。口径29.2cm、器

掘立柱建物跡 1



高43.7cmで胴部が大きく張る。

方形土坑 2 (第16図)

B-10・11区・Ⅲb層上面で検出された。長軸216cm, 短軸205cmの方形を呈し、深さ平均15cmと浅い。遺構南西側に深さ10cm程の掘り込みがみられる。東側一部は本線調査時に削平してしまっている。

出土遺物 (第16図)

遺構内からは墨書の確認できる土師器坏が1点出土した。28は土師器坏Ⅳ類で底部が円盤状の高台を有する。体部は曲線的に立ちあがり口縁部でわずかに外反する。口径11.4cm, 底径4.5cm, 器高約5cmである。また胴部外面には正位に「幸」の墨書が確認できる。

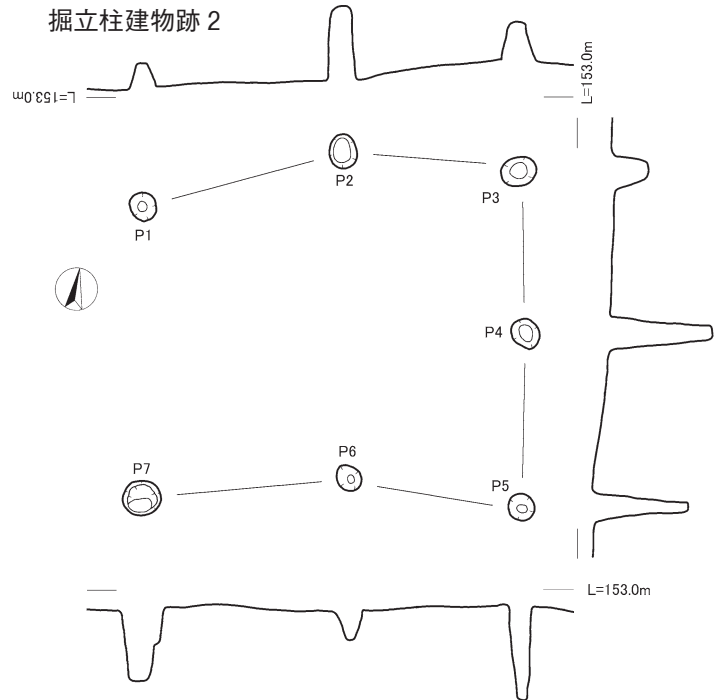
方形土坑 3 (第17図)

A-11区・Ⅳ層上面で検出された。長軸160cm, 短軸137cmの略方形を呈し、深さ26cmと浅い。壁面の立ち上がりも緩やかで底面も平坦ではなく、他の方形土坑とは異なっている。

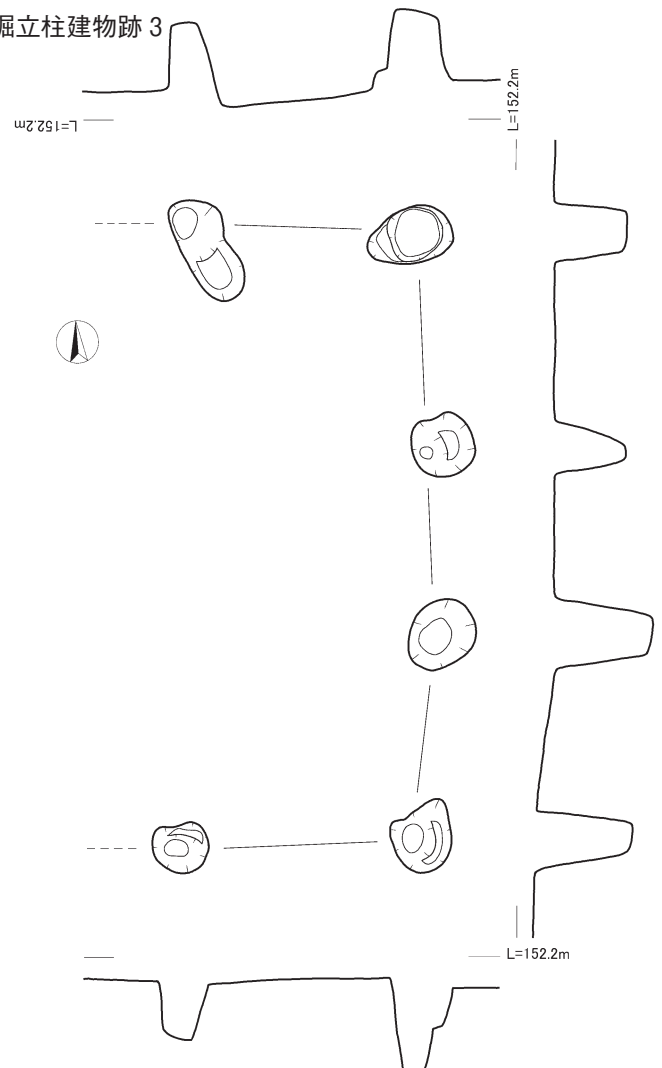
方形土坑 4 (第18図)

B-11・12区・Ⅲb層上面で検出された。長軸193cm, 短軸182cmの略方形を呈し、深さは27cmと浅い。北側に幅90cm, 奥行40cmほどの張り出しがある。ピットらしき掘り込みも3カ所みられるが、深さが床面とほぼ同様に非常に浅い。

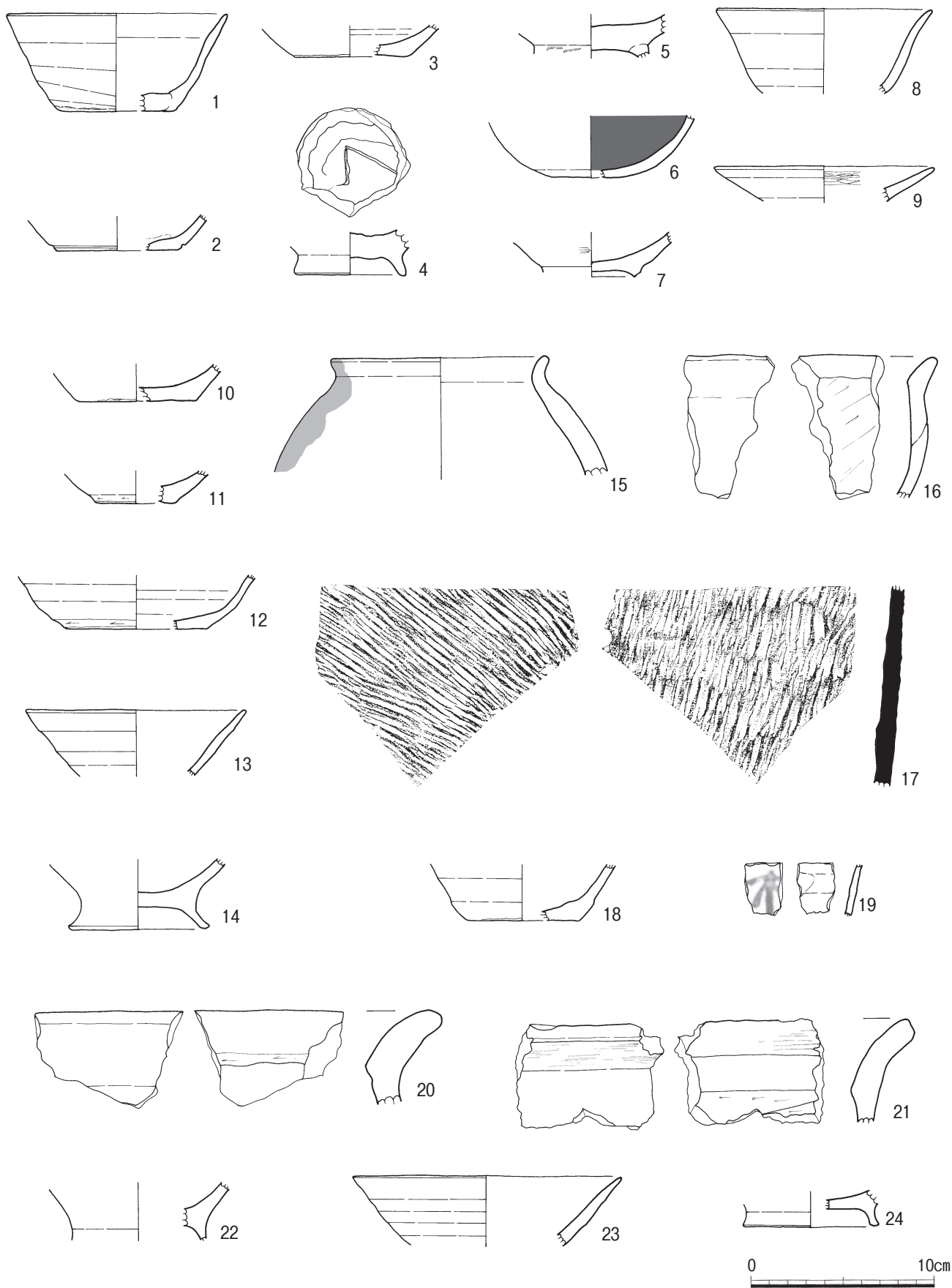
掘立柱建物跡 2



掘立柱建物跡 3



第11図 掘立柱建物跡 1～3



第12図 掘立柱建物跡 2 出土遺物

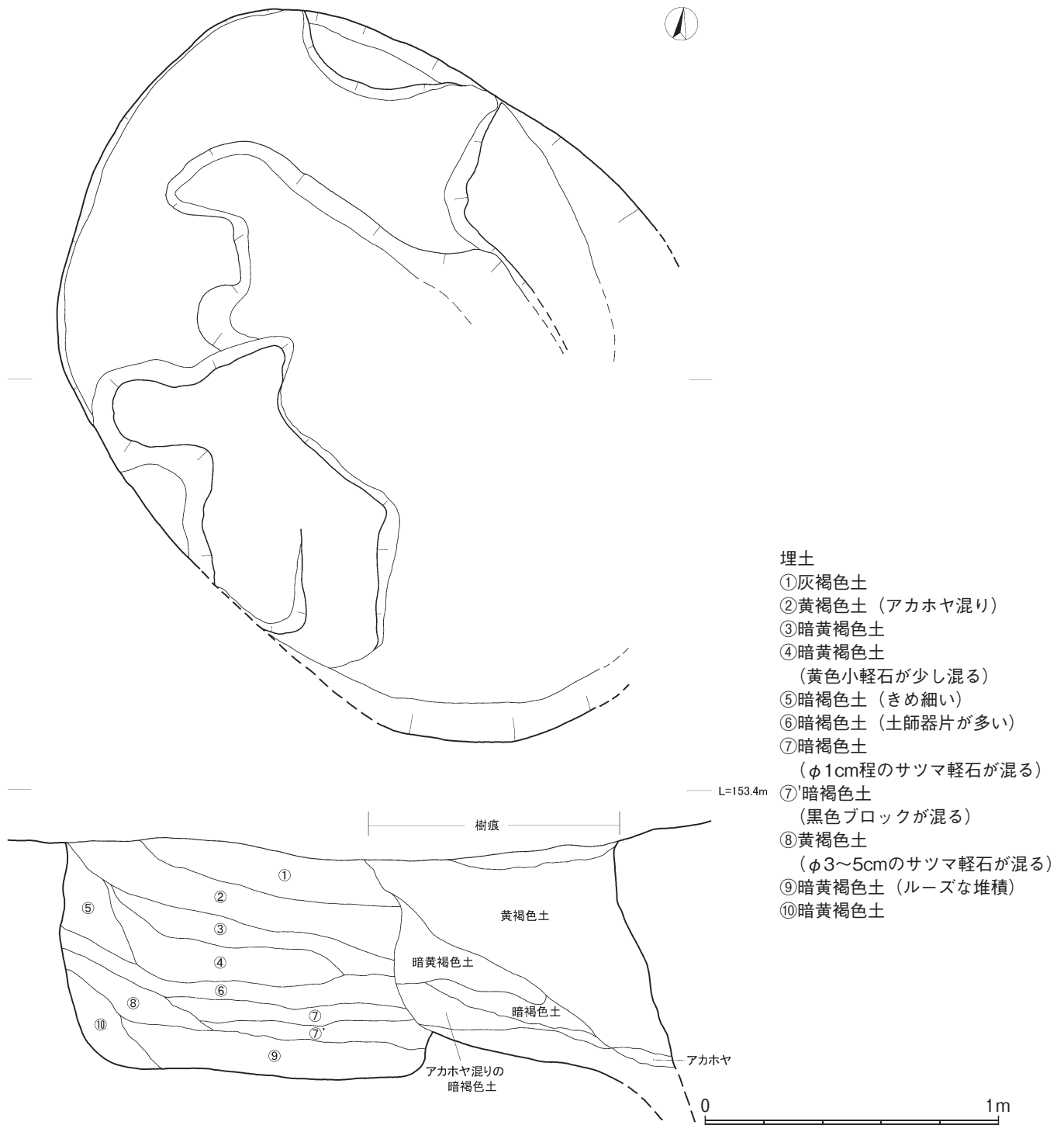
出土遺物（第18図）

遺構内からは土師器片等109点が出土、内3点を図化した。29は土師器碗で脚部が外開きし、体部は斜めに直線的に立ちあがる。外面には脚部上位から体部中位にかけてケズリ痕が明瞭に残る。その他は丁寧な回転ナデで調整をされており、何らかの理由でナデの跡ケズリ調整を施したと思われる。30は土師器坏底部片で、復元底径

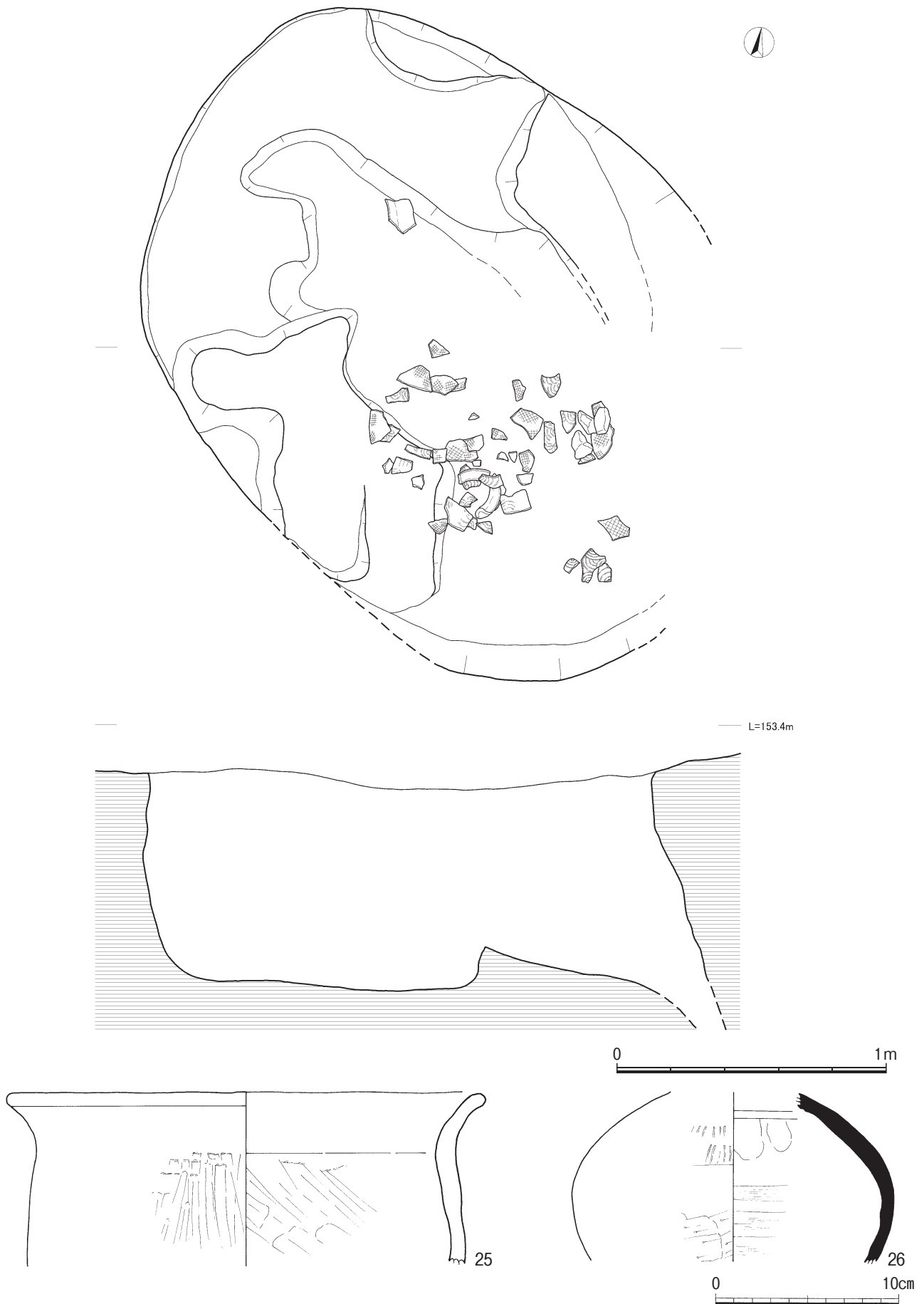
8 cmである。31は須恵器甕の胴部片である。

方形土坑 5（第19図）

B-11・12区・Ⅲb層上面で検出された。長軸259cm、短軸214cmのほぼ方形を呈し、深さは平均25cm程度で、遺構内南西部に140cm四方の方形で深さ約90cm程の掘り込みがみられる。掘り込み内底部には炭化物の層が確認



第13図 方形土坑 1 完掘状況



第14図 方形土坑1 遺物出土状況・出土遺物

できた。この掘り込みの壁面等は焼成を受けておらず、どのような過程で炭化物が堆積したかは不明である。また、遺構北側には掘立柱建物跡3のP6があり方形土坑によって切られていることから、当該方形土坑が掘立柱建物跡3より後に構築されたことがわかる。

出土遺物（第20図）

遺構内からは土師器片等319点が出土し、内24点を図化した。32～33、37～43は土師器坏で体部が斜めに直線的に立ちあがるⅡ類である。32は体部外面下位のケズリ痕を指頭により消している。33は体部に木の墨書が記される。37～43は坏底部片で、39のみ復元底部径5cmと小ぶりで体部がやや曲線的に立ちあがる。その他は斜めにほぼ直線的に立ちあがると思われる。34～36は土師器坏若しくは碗の口縁部片である。44、45は土師器碗の底部片で、44は底部内面に布目痕が残存する。45の脚部は取り付け部から剥がれ落ちている。46は黒色土器A類碗

で脚部は外開きし脚部径8.2cmである。47は焼塩壺口縁部片で、口縁部断面は三角形を呈し、内面に布目圧痕が確認できる。48～50は墨書土器片であり、いずれも判読不能であった。51、52は土師甕である。51は口縁部がやや外反し胴部は張らない。胴部内面の横位のケズリで口縁部内面の稜線が明瞭である。52は口縁部が大きく外反する。口縁部内面には刷毛目痕が残り、胴部内面はケズリの後、指頭によるナデを施し整形している。口縁屈曲の稜線はほとんどみられない。53は須恵器の坏で内外面に火襴痕がみられる。体部は斜めに直線的に立ちあがる。口径16.8cm、底径8.8cm、器高6.5cmである。54は須恵器甕胴部片である。55は、羽口である。黒変し先端部は溶融してガラス質となっている。口径は約2cmである。



第15図 方形土坑1出土遺物

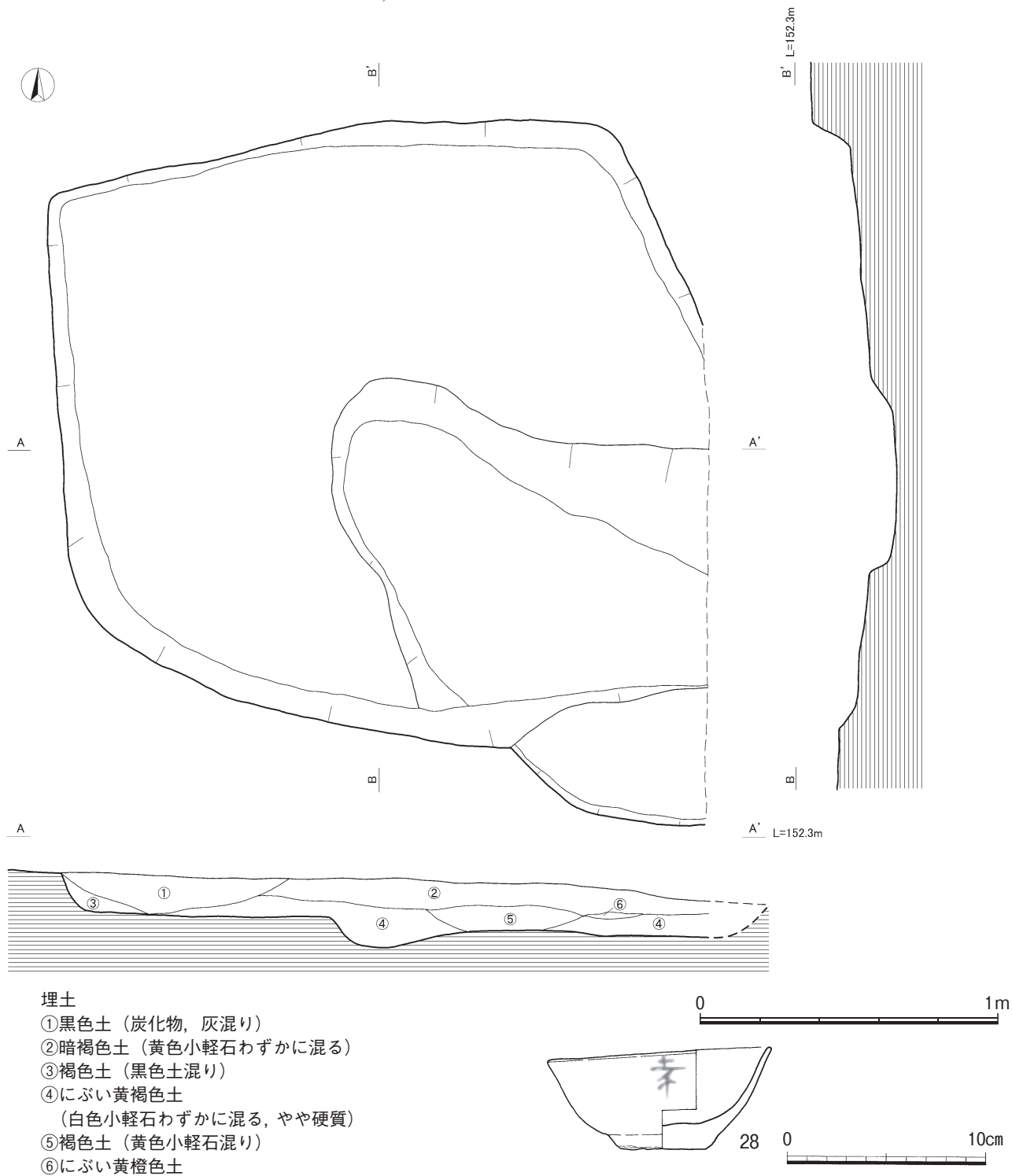
方形土坑 6（第21図）

B-13区・IV層上面で検出された。攪乱により正確な上面観は捉えられないものの、長軸178cm、短軸170cm、のほぼ方形を呈し、深さは約60cmでやや深めである。壁面の立ち上がりはほぼ垂直に立ちあがっており、しっかりした造りである。

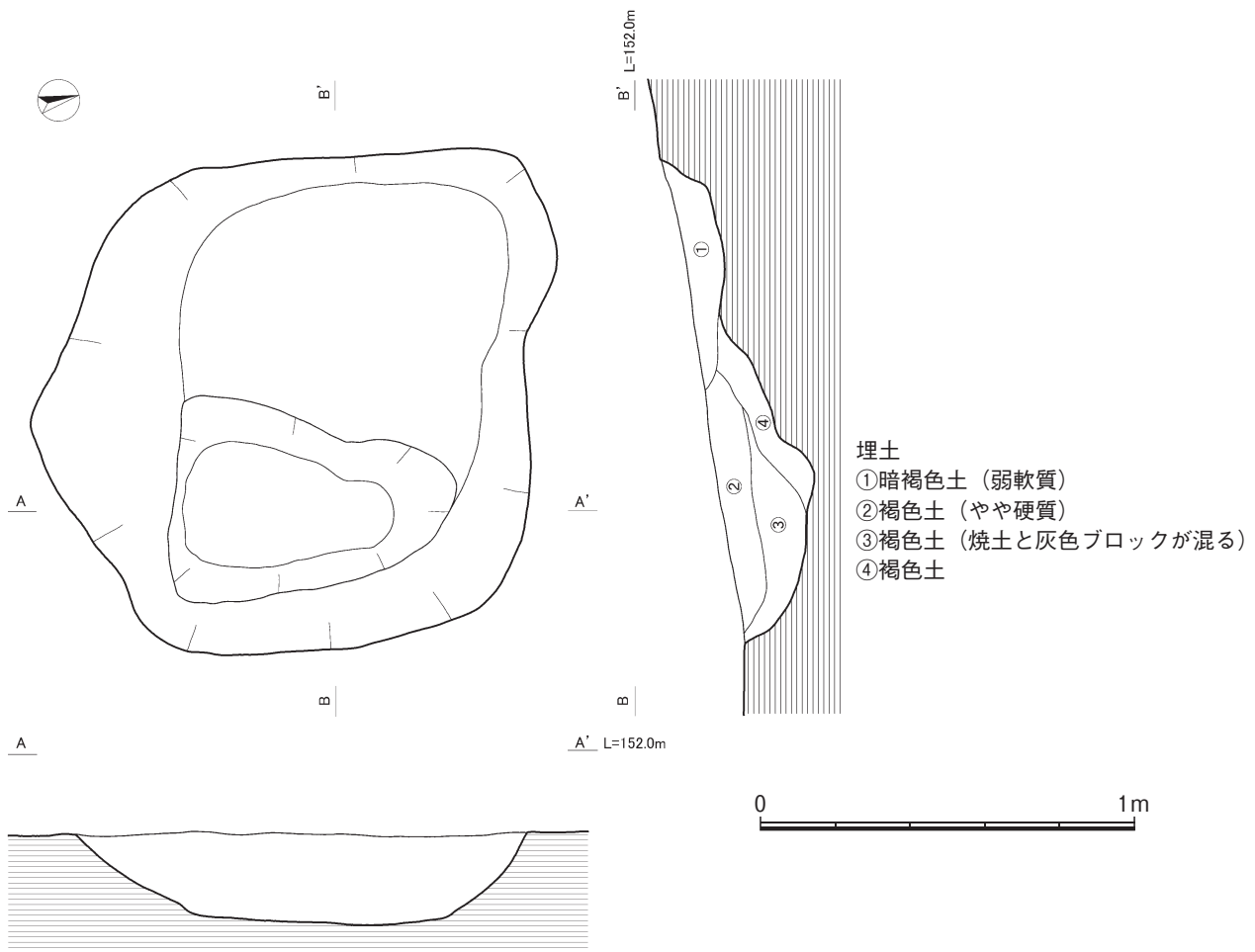
出土遺物（第22図）

遺構内からは土師器片等274点が出土し、内27点を

図化した。56～64は土師器坏の底部片である。底径5～7cmで体部は斜めに直線的に立ちあがる。65～69は土師器碗である。65は復元口縁径15cmで脚部を欠損している。体部はやや曲線的である。66～69はほぼ脚から底部のみの破片で体部の形状はわからない。66、67は脚部が外開きし高さ1cm程である。68、69は断面三角形の脚部をもち高台高は4mm程度しかない。70～75は土師器坏若しくは碗



第16図 方形土坑 2 ・ 出土遺物



第17図 方形土坑 3 完掘状況

の口縁部である。70～74は体部が斜めに直線的に立ちあがる。75は体部が外反する。76, 77は黒色土器A類の坏である。底径は6cm～7cmである。78, 79は赤色土器の坏もしくは碗である。ともに内面外面赤色のB類である。78は体部外面下位には彩色が施されていない。80は土師器の蓋である。つまみ部は欠損する。端部は断面三角形を呈する。81は土師甕口縁部である。口縁端部は外反し体部はほとんど張らないものと思われる。口縁部内面の稜線は横位の体部ケズリによって明瞭に形成される。82は須恵器甕胴部片である。

方形土坑 7（第23図）

B-13区・IV層上面で検出された。当初、後述する方形土坑 8 の延長と捉えていたが、配置図を作成すると場所が異なり別の遺構であったことが確認された。遺構は東半分を本線工事で削平され失っている。平面形は残存部分で長軸176cm、短軸（82cm）の長方形を呈する。深さは31cmである。

出土遺物（第23図）

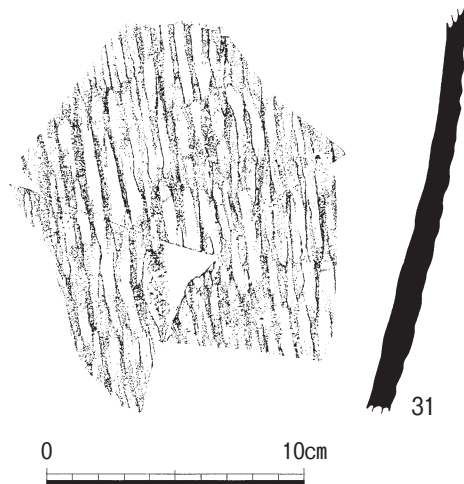
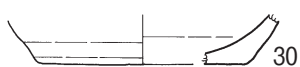
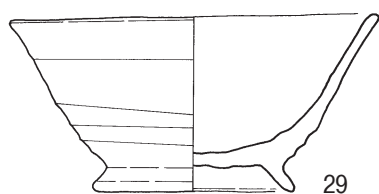
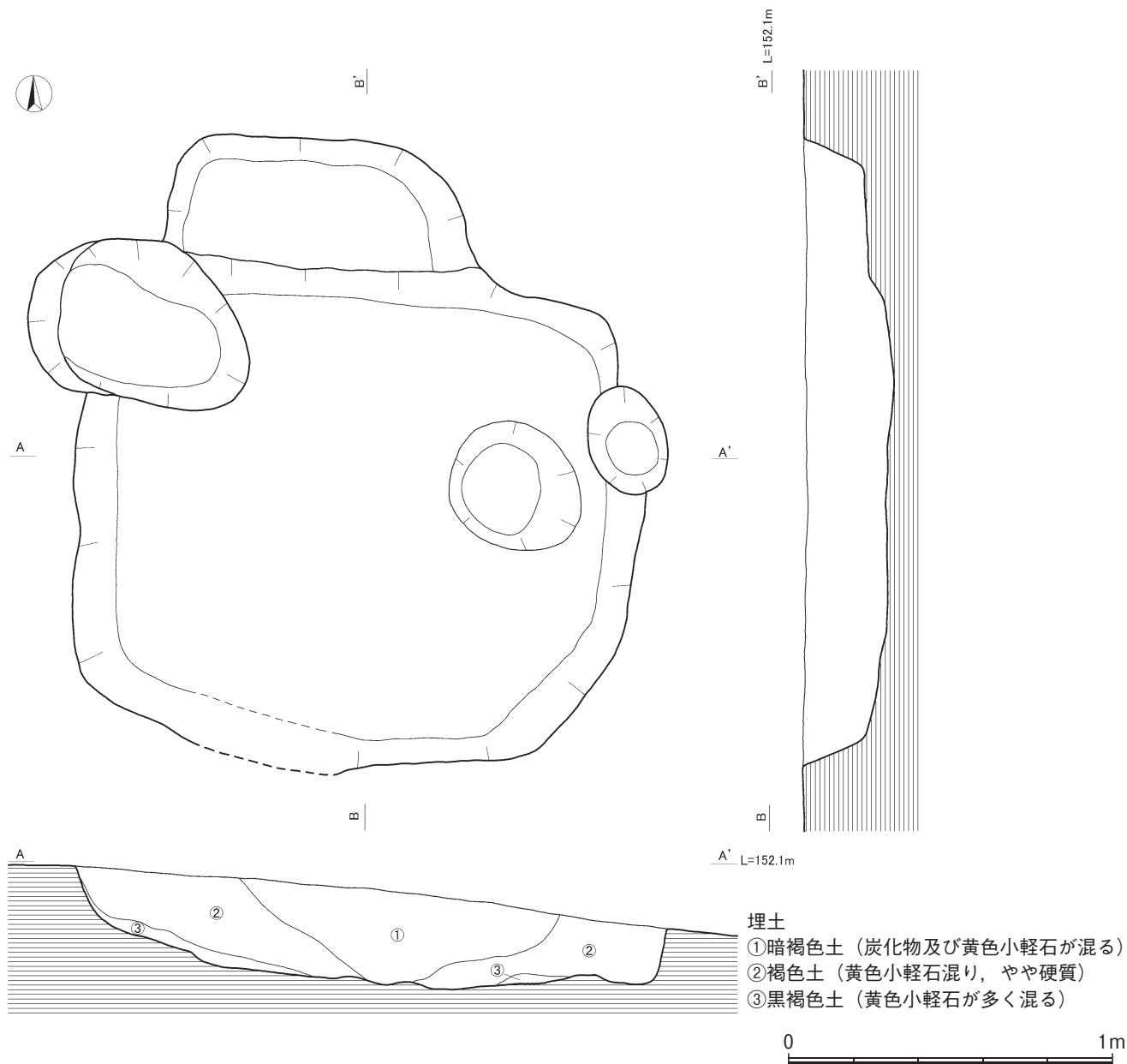
遺構内からは土師器片等13点が出土し、内10点を図化した。83～86は土師器の坏である。体部は斜めに直線的

に立ちあがる。87～89は土師器碗である。87は脚がほぼ直立するように取り付けられる。高台高約1cmである。88は脚が外開きする。高台高1.5cmである。89は断面三角形の高台を有し、端部にやや平坦面を形成する。90, 91は土師器の坏もしくは碗の口縁部片である。体部は斜めに直線的に立ちあがる。91は体部外面に墨書がみられるが判読はできない。92は越州窯青磁の皿である。全面に釉が施される。9C後半から10C前半頃のものと思われる。

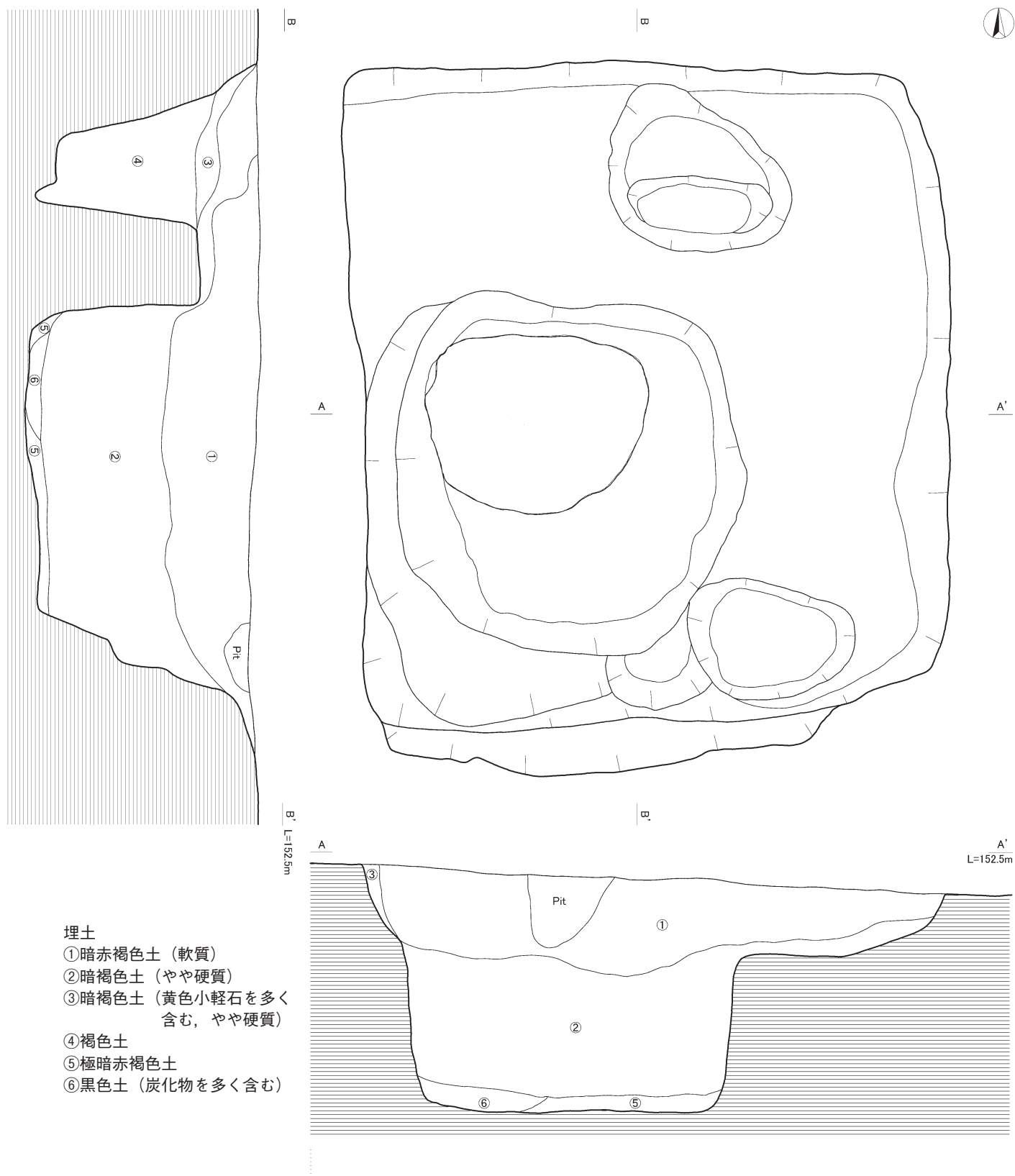
方形土坑 8（第24図）

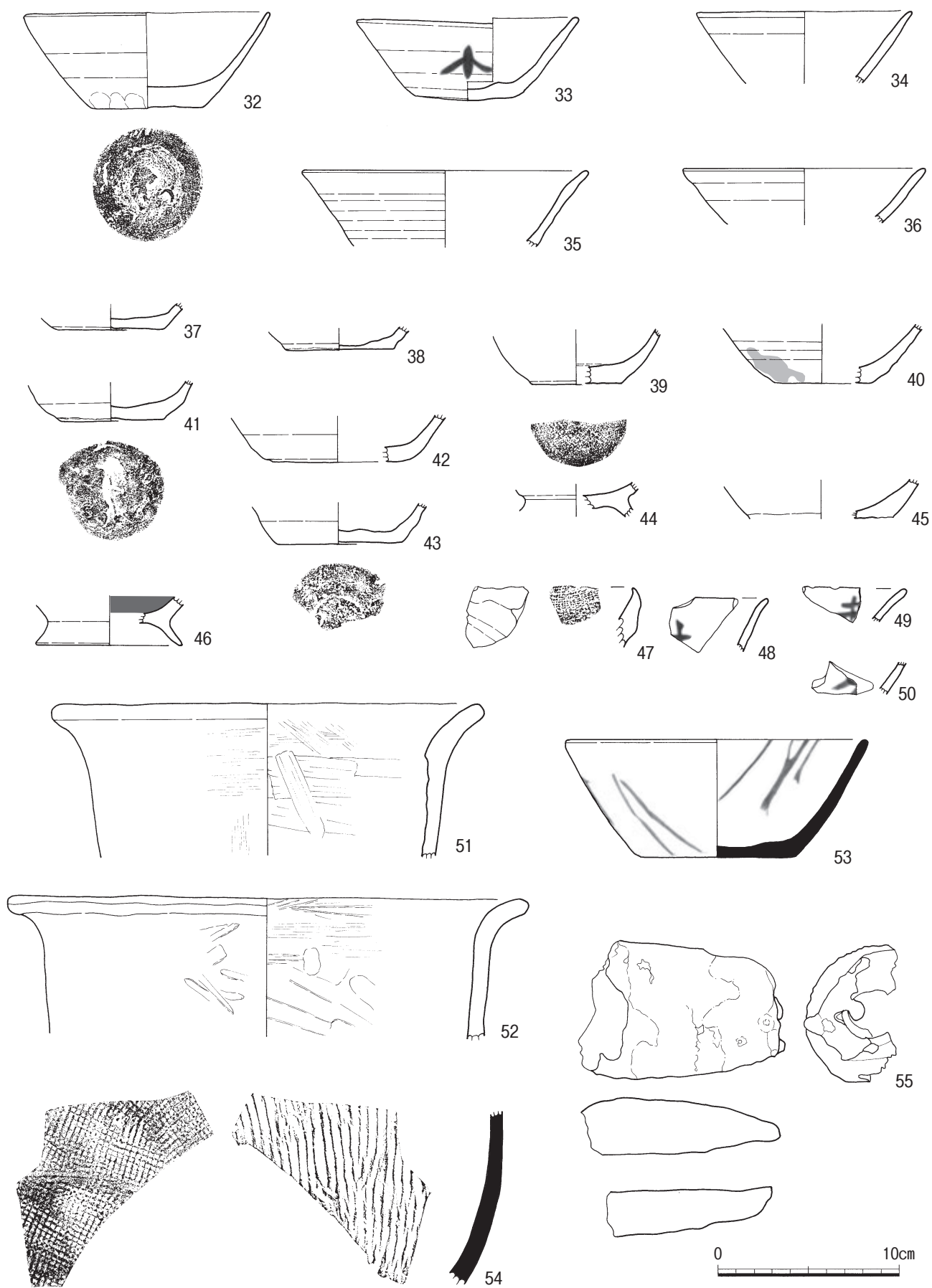
A・B-13区・IV層上面で検出された。攪乱のため正確な平面形は捉えることは出来ないが、およそ長軸193cm、短軸158cmの略長方形を呈していると考えられる。深さは29cmで壁面は鋭角に立ちあがる。

遺構中央部、埋土上位に赤褐色の焼土が確認できる。焼土は方形遺構が廃棄された後、形成されたものと考えられる。また、遺構内、遺構壁面に絡んだ土坑がみられたが、埋土からの前後関係はつかめなかった。方形土坑に付随する土坑であるかも判然としない。



第18図 方形土坑4・出土遺物



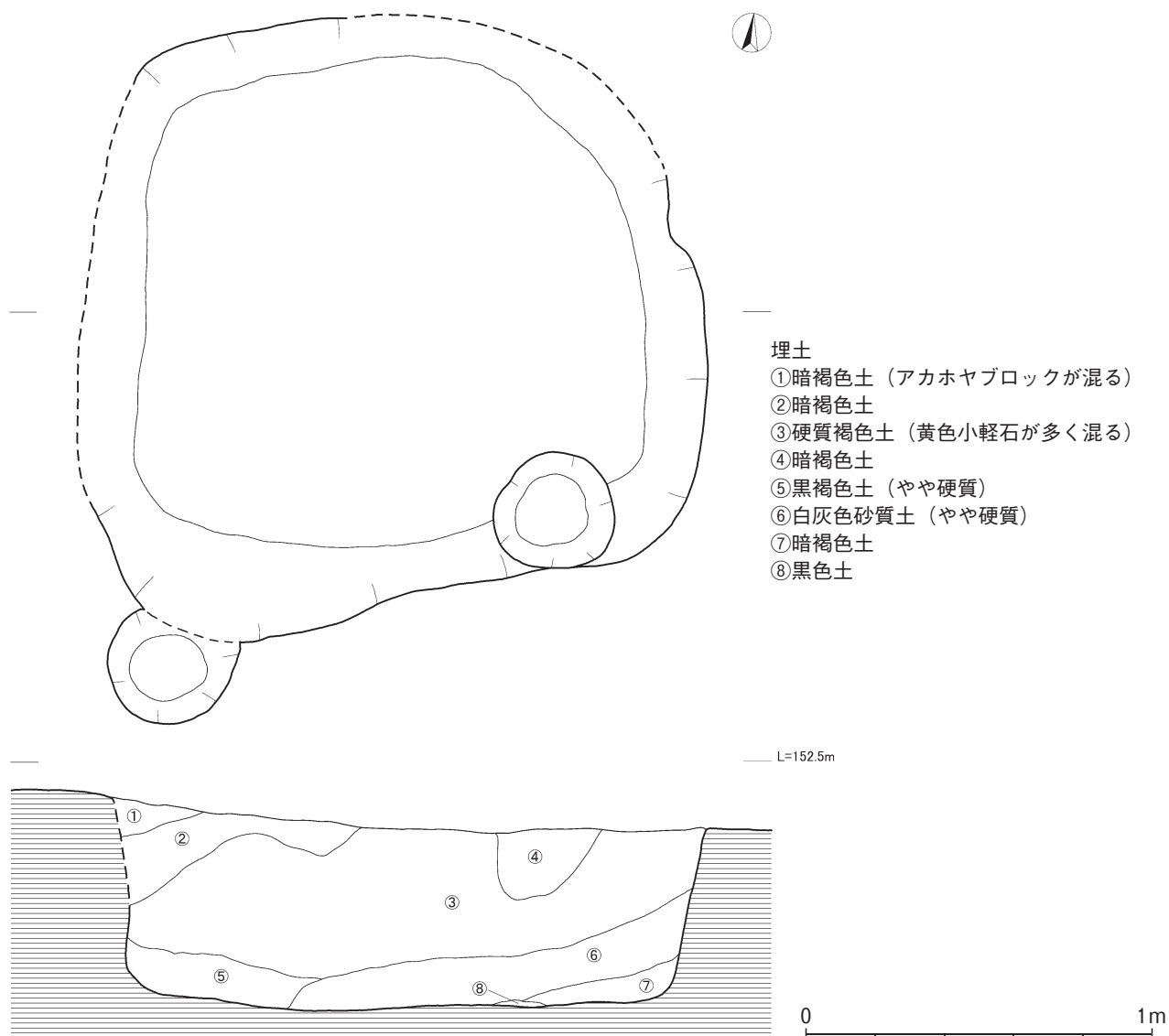


第20図 方形土坑 5 出土遺物

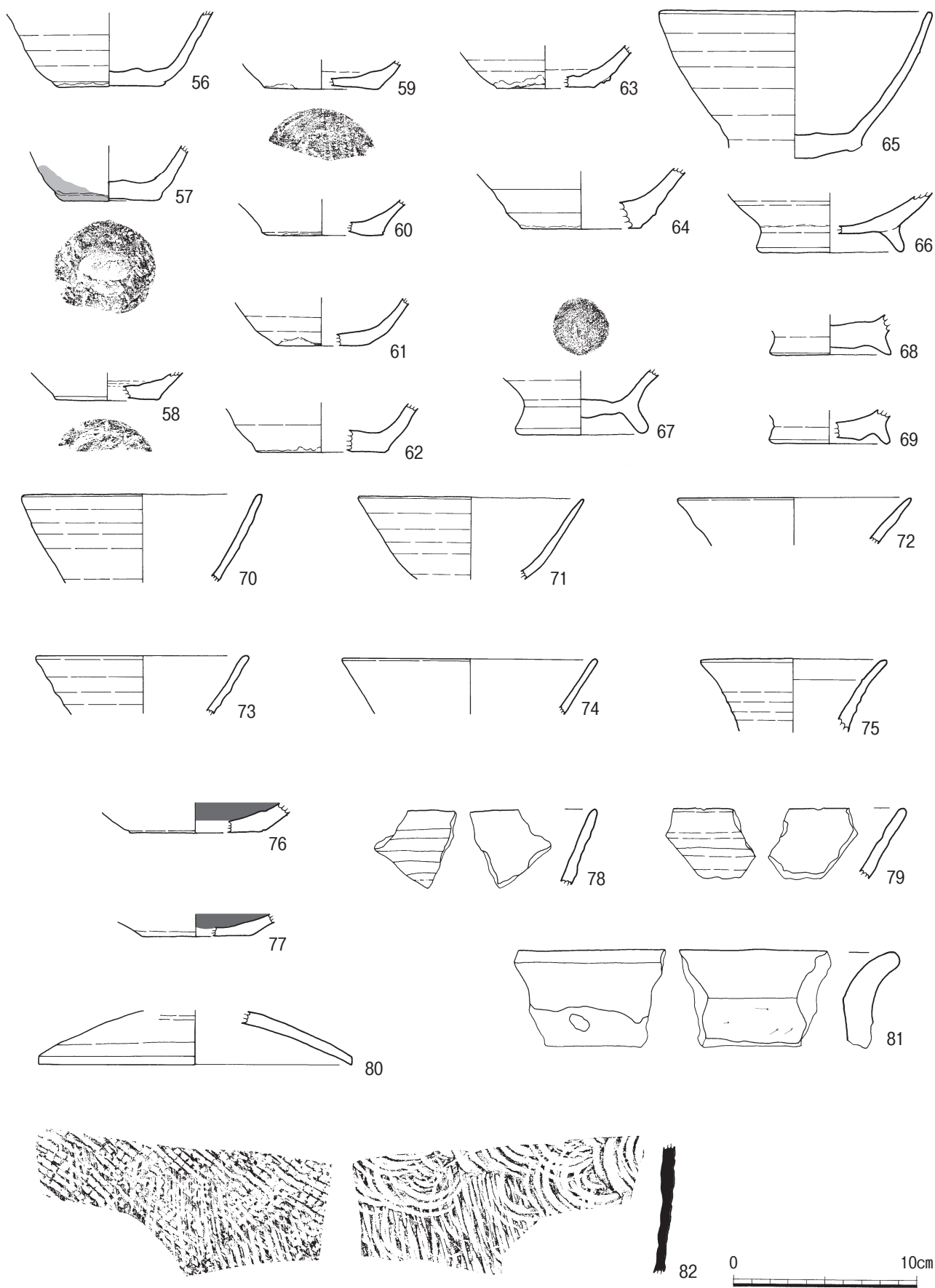
出土遺物（第25・26図）

遺構内からは土師器片等311点が出土し、内24点を図化した。93～104が方形土坑内出土遺物で、105～116が方形土坑内の土坑からの出土遺物である。93は土師器の坏で体部が斜めに直線的に立ちあがるⅡ類である。94は土師器の碗で脚が外開きする。95は黒色土器A類の碗で、脚部は断面三角形を呈する。横方向のミガキ痕がわずかに見える。96、97は赤色土器B類である。96は外開きする高い脚部をもつ坏と思われる。坏部内面は摩滅が激しい。97は坏もしくは碗の口縁部片である。体部は斜めに直線的に立ちあがる。98～101は土師甕である。98～100は口縁部が大きく外反する。98は体部のケズリ痕はナデにより調整され口縁部内面の稜線は明瞭でない。胴部器壁が薄い。99、100は体部ケズリ調整により、口縁部内面の稜線が明瞭に形成される。

100は体部がほとんど張らない。101は口縁部の外反が小さく、体部ケズリもみられない上に器壁が厚く体部も張らない。102、103は土師器の鉢である。102の口縁は外反すると思われる。体部はやや曲線的に立ちあがる。103は体部が斜めに直線的に立ちあがり、バケツ形を呈する。外面底部付近にはケズリ痕が残る。105～110は土師器の坏で、体部が斜めに直線的に立ちあがるⅡ類である。111は土師器碗の底部片である。脚部、体部ともに欠損しており詳細は不明であるが脚部は外開きすると思われる。112～114は土師器の坏もしくは碗の口縁部片である。体部は斜めに直線的に立ちあがるタイプである。115は黒色土器A類の坏もしくは碗の口縁部片である。内面には横方向のミガキがみられる。116は赤色土器A類の坏もしくは皿と思われる。



第21図 方形土坑 6



第22図 方形土坑 6 出土遺物

方形土坑 9（第27図）

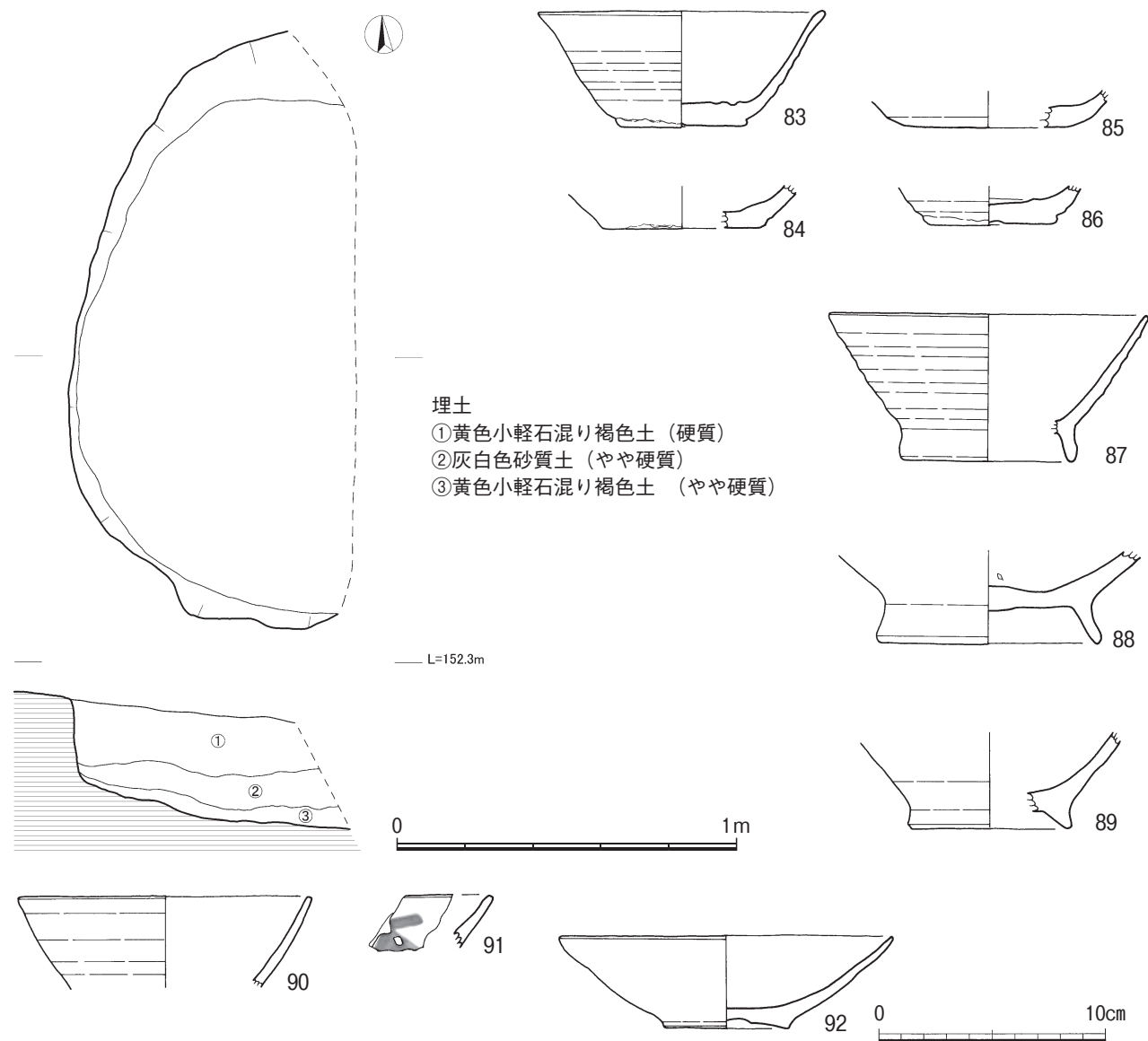
A-10区・Ⅲb層上面で検出された。遺構平面形は長軸200cm，短軸170cmの略長方形を呈しており，深さは35cmで，壁面は鋭角に立ちあがる。

遺構中央部，埋土上位には赤褐色の焼土が確認でき，さらに赤橙色に焼けた礫が集中する。

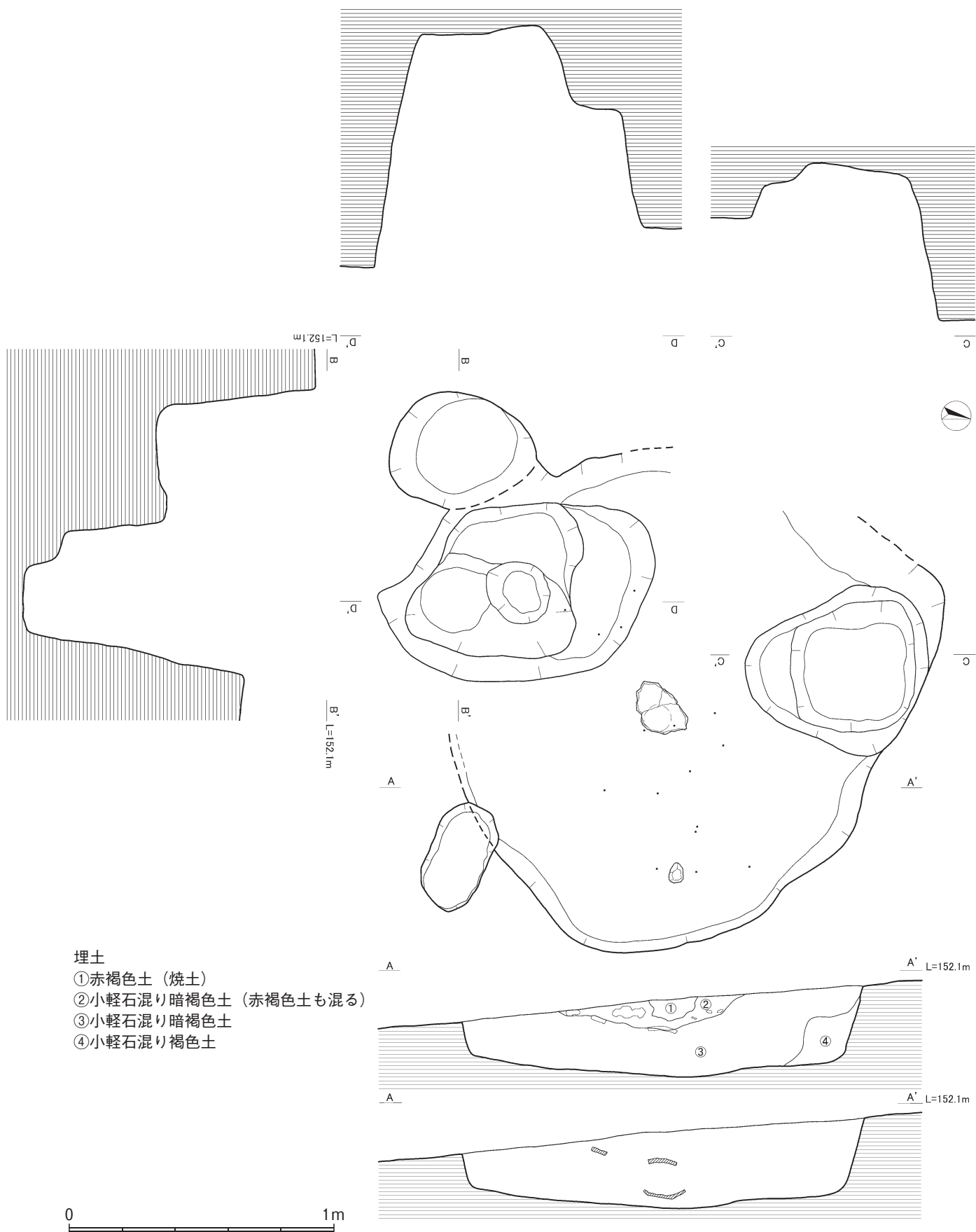
出土遺物（第27図～第29図）

遺構内からは土師器片等53点が出土し，内33点を図化した。117～126は土師器の坏である。117～123は体部が斜めに直線的に立ちあがるⅡ類である。124～126は底部片でやはり体部は斜めに直線的に立ちあがるものと思われる。127～134は土師器の碗である。脚部は外開きする。130は底部器壁が非常に薄い。131の脚部は外開きした上にやや外反する。また体部の傾きが緩やかであるため皿の可能性も残る。127，128，132，133は底部内面に

布目痕が残存する。134は円盤状高台で坏か碗かはっきりしないが，ここでは碗として捉えた。135～140は土師器坏もしくは碗の口縁部片である。いずれも体部は斜めに直線的に立ちあがっている。141は赤色土器A類で，脚端部を平坦に仕上げた低い高台の付く碗もしくは皿である。体部内面は放射状にミガキ痕が残る。142は黒色土器A類の口縁部で，口縁端部がわずかに外反する。内面は横方向のミガキ痕を残す。143は土師器坏もしくは碗の口縁部片で体部に「下田」の墨書が記されている。144は土師器の鉢で体部は斜めに直線的に立ちあがり口縁端部でわずかに外反する。体部に正位で「末」の墨書が記される。底部に内面から打ち欠き穴を穿っている。145，146は土師甕である。145は口縁部が緩やかに外反し，胴部の張りは小さい。胴部内面は横方向のケズリが施され口縁部内面の稜が明瞭に形成される。胴部外面には上



第23図 方形土坑 7・出土遺物



位には縦方向, 下位には主に横方向の刷毛目が残される。146は口縁部が欠損するが, 大きく外反する口縁と思われる。胴部は大きく張り, 胴部内面の縦方向のケズリ調整により口縁部内面の稜が明瞭に形成される。147, 148は須恵器の甕である。147は口縁部で頸部に向かってすぼまる。148は胴部片である。149は越州窯青磁の碗である。体部下位から底部には釉が施されず, 見込み部には重ね焼きによる釉剥がれの跡が残る。

土坑 (第30図～第34図)

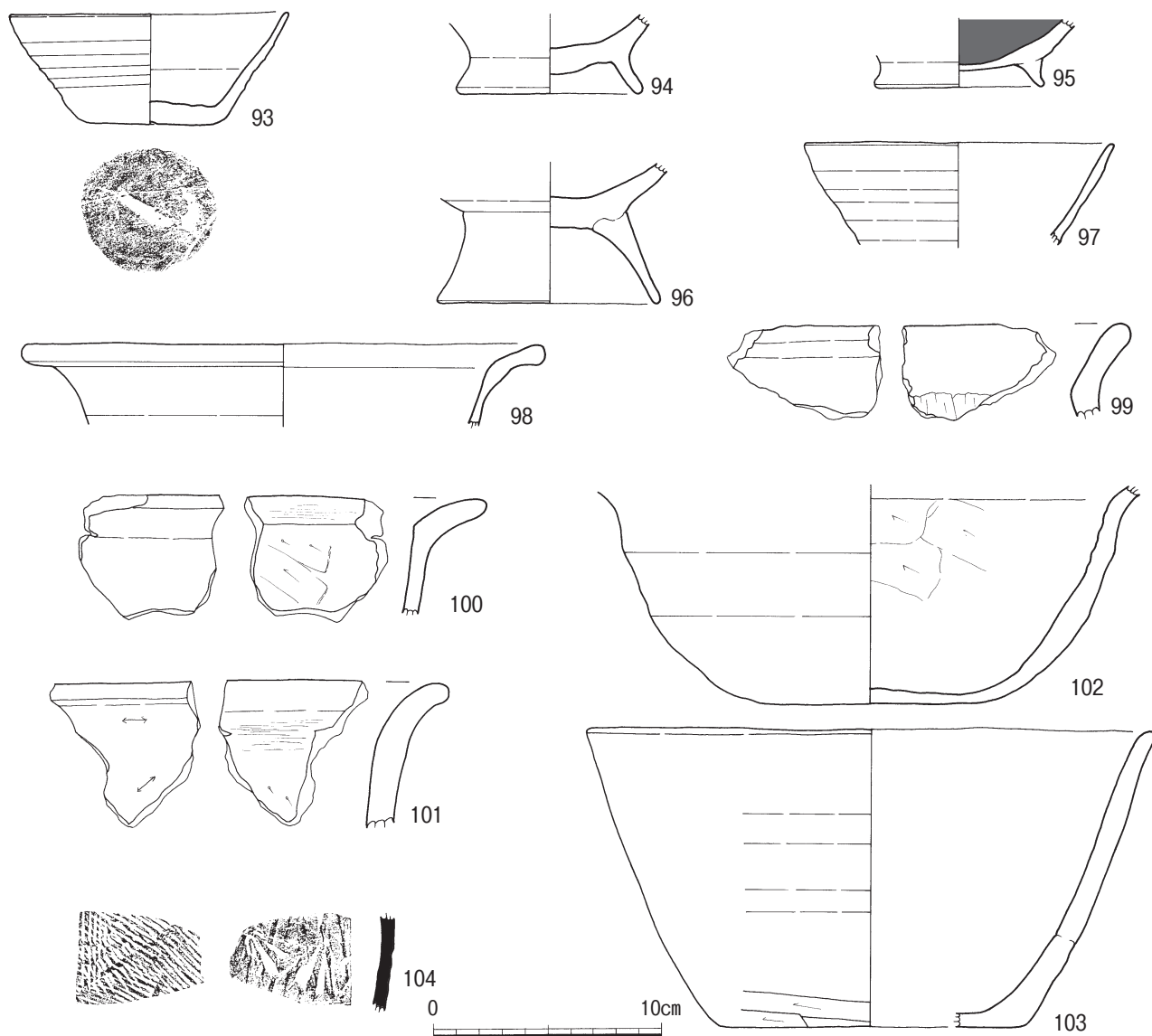
土坑は, IV層, IIIb層にかけて14基が検出された。土坑8を除きIV層上面で検出されている。またB-12・13区に集中し検出されている。

土坑 1 (第30図)

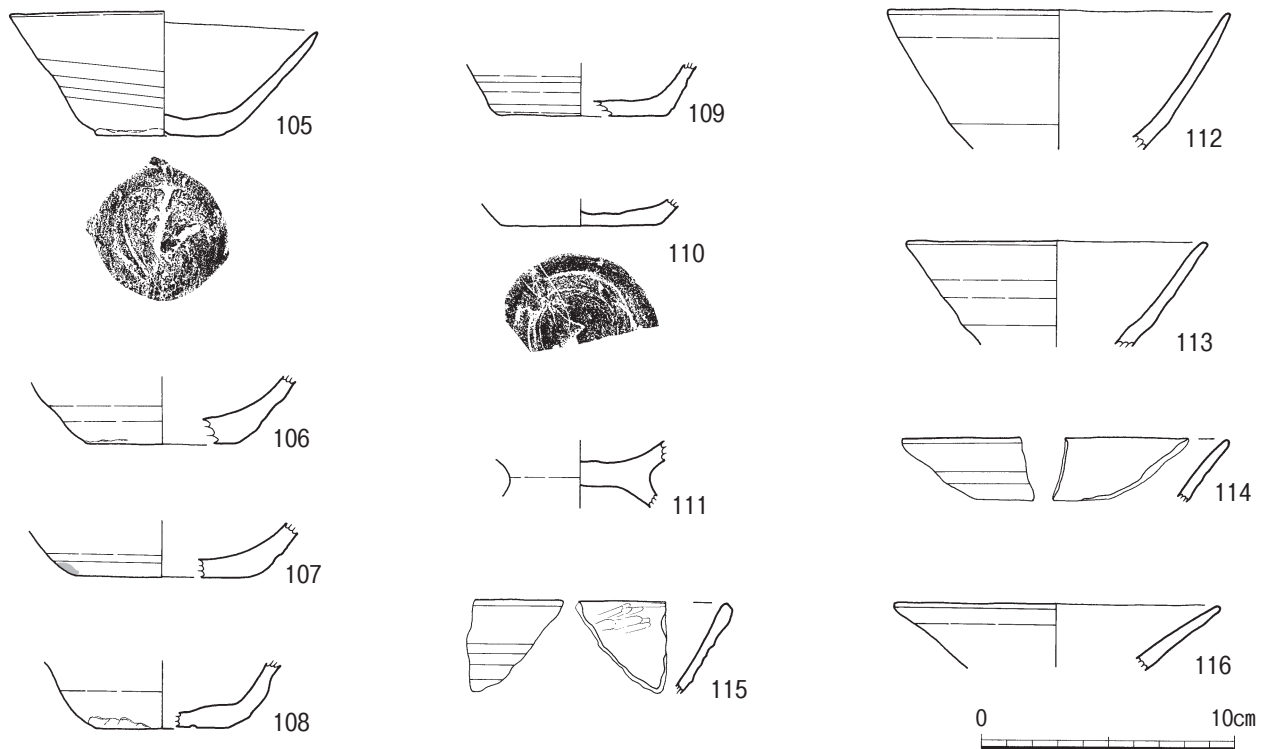
B-2・3区・IV層上面で検出された。平面形は長軸112cm, 短軸66cmの楕円形を呈し, 深さは約26cm, 壁面はやや緩やかに立ちあがる。検出面では焼土が確認できたが, 遺構埋土内への影響はみられない。ただし遺構床面より数cm上で炭化物や炭化物塊が確認された。また20cm程度の軽石が数点出土している。

出土遺物 (第30図)

遺構内からは土師器片等10点が出土し, 内3点を図化した。150は土師器坏若しくは碗の口縁部片で口縁付近がやや外反する。復元口径13cmである。151は土師甕で口縁部が大きく外反し, 胴部の張りは小さい, 胴部内面の斜位のケズリにより口縁部と胴部の境界は, はっきりするが, 稜線を形成するまでには至っていない。152は須恵器甕胴部と思われ, やや肩部寄りで内面に波状のタタキ痕が残る。外面は格子目タタキを消すように刷毛状



第25図 方形土坑 8 出土遺物(1)



第26図 方形土坑 8 出土遺物 (2)

工具で調整を行っている。

土坑 2 (第30図)

B-3区・IV層上面で検出された。平面形は長軸138cm, 短軸77cmの楕円形を呈し, 深さは30cmほどで壁面は緩やかな傾斜で立ちあがる。遺構内は焼土と, 炭化物混じりの埋土で充たされ, 土坑1同様に15~20cm程度の軽石が出土した。

出土遺物 (第30図)

遺構内からは土師器片等14点が出土し, 内3点を図化した。153, 154は土師器の椀で, 153の高台は外開きするがやや低く, 体部は曲線的に立ちあがる。復元口径15.4cm, 脚部径7.8cm, 器高6cmである。154は復元脚部径7cmである。脚部端部に平坦面を有する。155は須恵器甕の胴部片である。

土坑 3 (第31図)

A・B-8区・IV層上面で検出された。平面形は長軸225cm, 短軸89cmの長楕円形を呈する。底面に段差が存在し, 楕円形の土坑が2基重なった状態と思われるが, 切り合い関係については確認できなかった。浅い方で深さ25cm, 深い方で深さ50cmである。遺構底面に深さ10cmほどのピットがみられるが, 土坑との前後関係については確認できなかった。

土坑 4 (第32図)

B-8区・IV層上面で検出された。遺構は調査区外へ伸びると思われ, 長軸方向60cm, 短軸70cmが確認された。平面形は楕円形を呈すると思われ, 深さ25cmで壁面の立ち上がりは緩やかである。

土坑 5 (第32図)

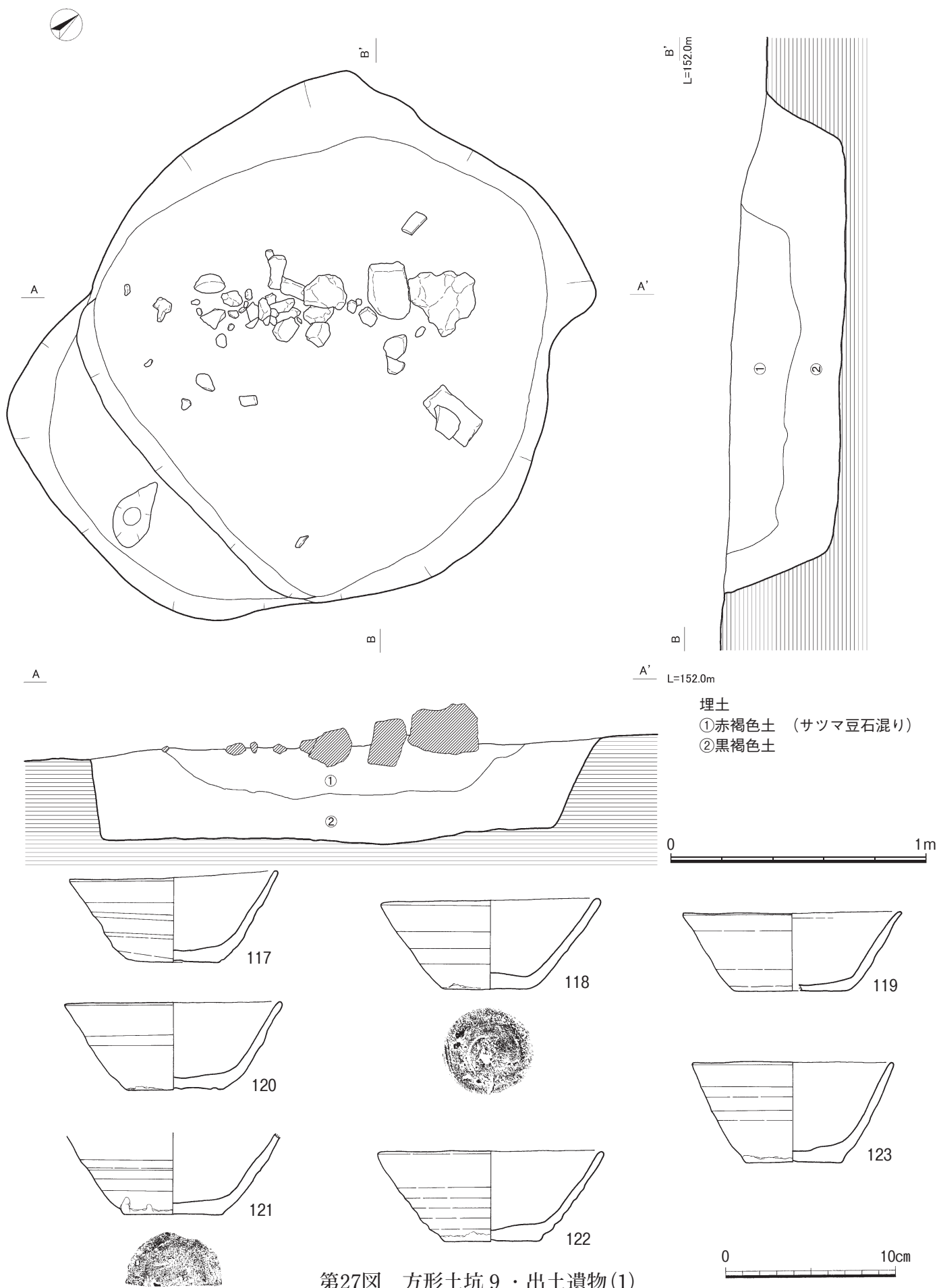
B-8区・IV層上面で検出された。平面形は長軸93cm, 短軸78cmの略円形で, 深さ11cmである。埋土にはわずかに炭化物が混じる。

土坑 6 (第32図)

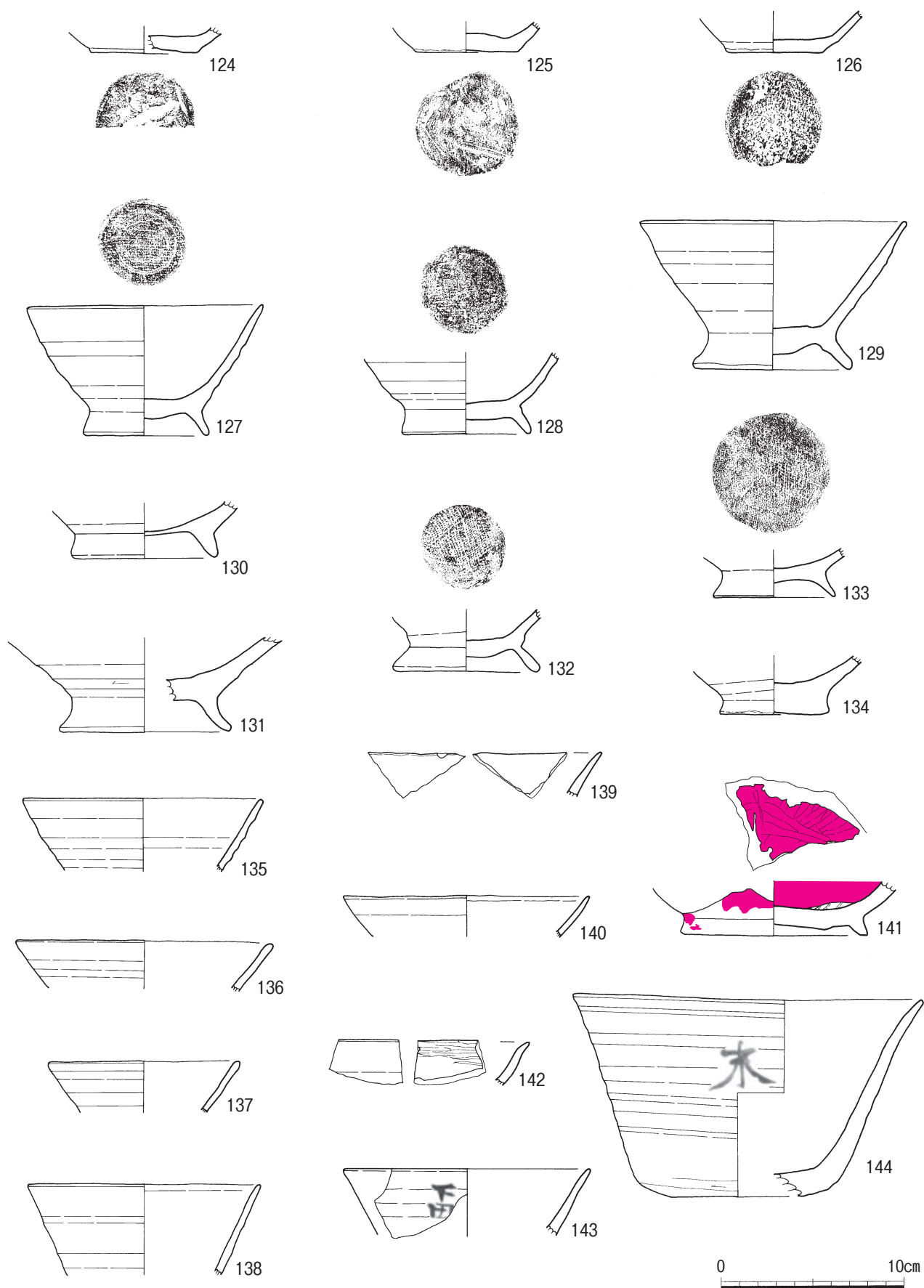
B-8・9区・IV層上面で検出された。土坑5と隣接する。平面形は長軸70cm, 短軸65cmの略円形を呈し, 深さは10cm程である。隣接しているピットについては建物を構成する配置等がみられない。

土坑 7 (第32図)

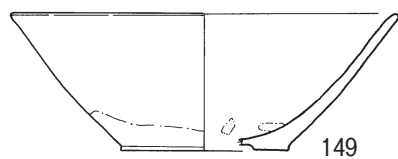
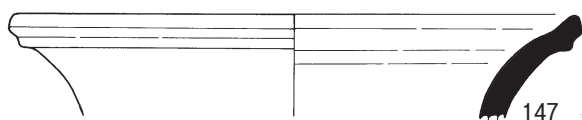
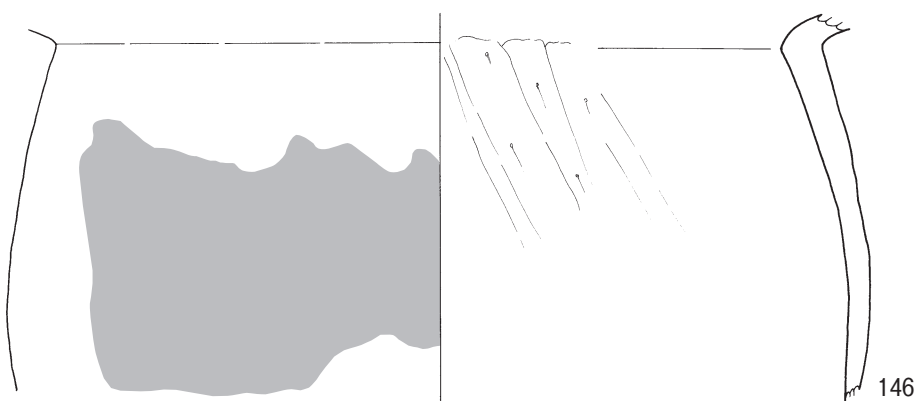
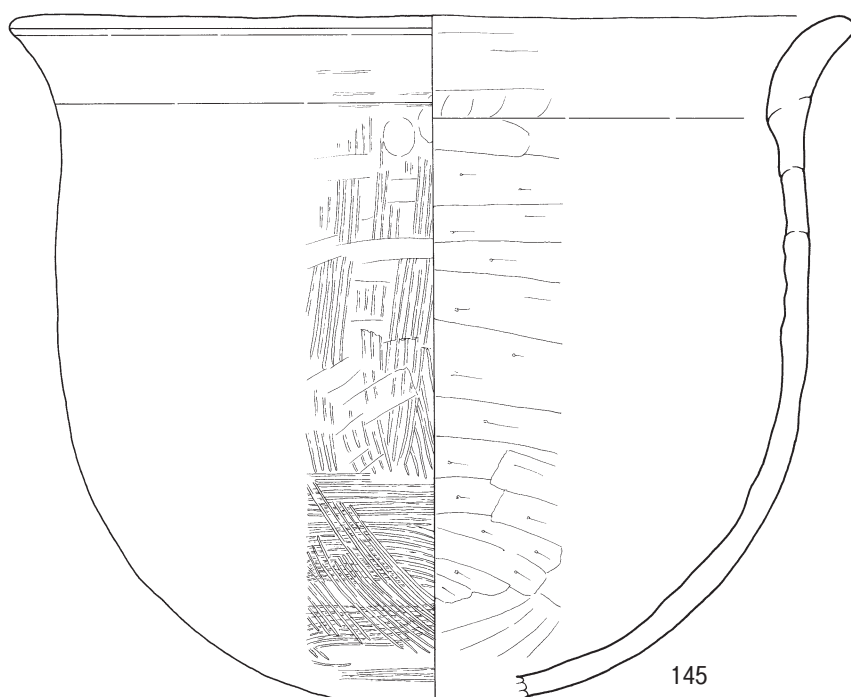
A-10区・IV層上面で検出された。平面形は95cm, 短軸60cmの略楕円形を呈し, 深さ69cm程である。遺構底面に段を有し, ピットの切り合いとも考えられるが, 土坑として取り扱う。埋土中から緑釉陶器皿が出土している。



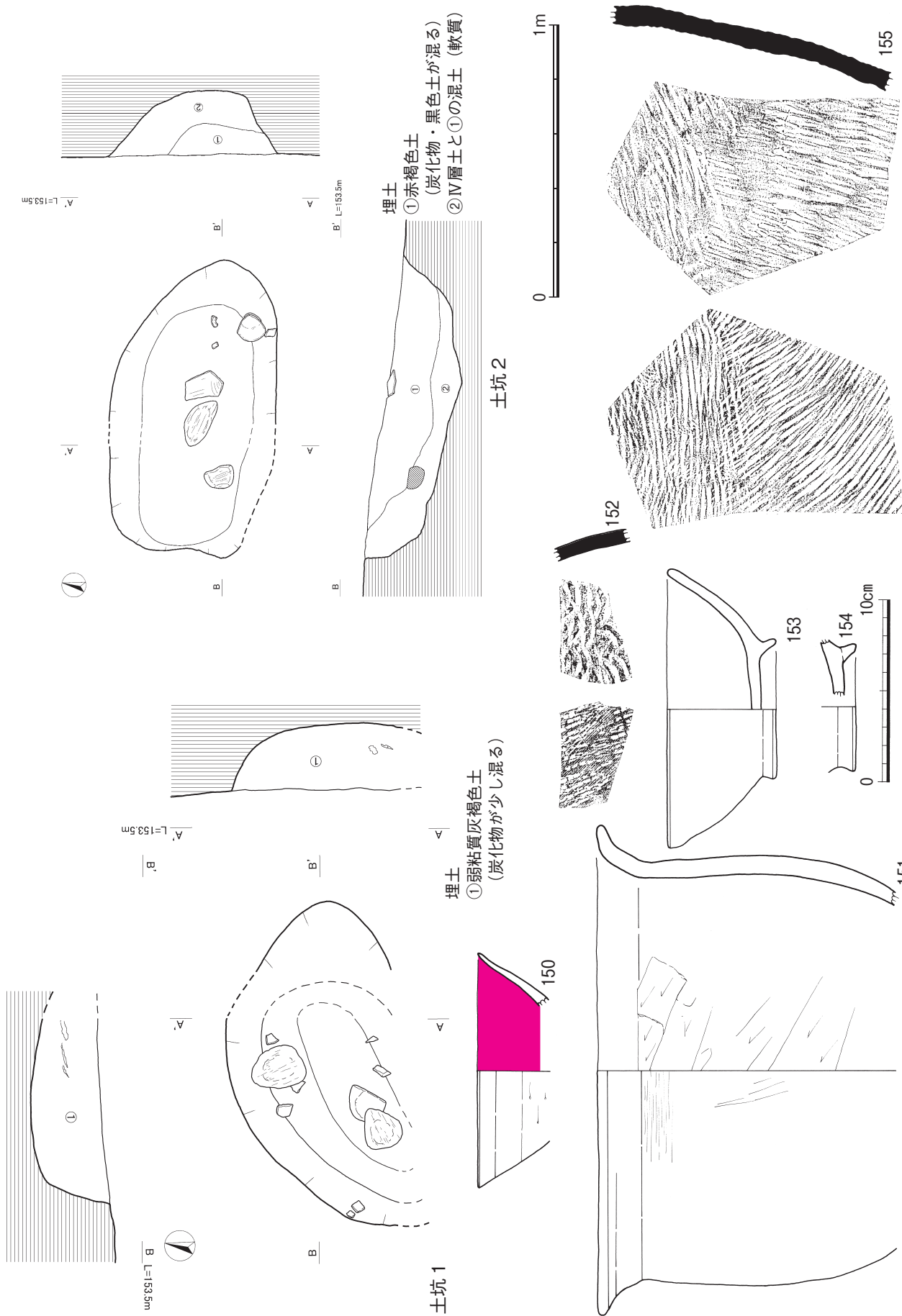
第27図 方形土坑 9 ・ 出土遺物 (1)



第28図 方形土坑 9 出土遺物(2)



第29図 方形土坑 9 出土遺物 (3)



第30図 土坑 1, 2・出土遺物

出土遺物（第32図）

遺構内からは緑釉陶器が1点出土した。156は緑釉陶器の皿で胎土まで鱗状に剥がれ残存状況は極めて悪いが、一部に剥落を免れた緑釉が残存する。

土坑8（第33図）

B-10区・Ⅲb層上面で検出された。平面形は長軸100cm、短軸40cmの長楕円形を呈し、深さは10cm程で壁面の立ち上がりは緩やかである。

土坑9（第33図）

B-12区・Ⅳ層上面で検出された。主体部は掘削により残存していない。長軸100cm、短軸50cmであるが平面形は不明である。深さも10cm程で壁面の立ち上がりは緩やかである。

土坑10（第33図）

B-12区・Ⅳ層上面で検出された。平面形は長軸75cm、短軸66cmの略円形を呈し、深さは36cm程で壁面は鋭角に立ちあがる。遺構西側に若干の段を有する。

土坑11（第33図）

B-13区・Ⅳ層上面で検出された。平面形は直径約80cmの円形を呈し、深さは50cm程で壁面は鋭角に立ちあがる。土坑10同様に遺構西側に若干の段を有する。

土坑12（第34図）

B-13区・Ⅳ層上面で検出された。平面形は長軸118cm、短軸69cmの略楕円形を呈し、深さ約8cmで壁面は緩やかに立ちあがる。遺構内東側に深さ13cmの凹みがみられる。

出土遺物（第34図）

遺構内からは土師器片等7点が出土し、内2点を図化した。157は土師器坏底部で体部は斜めに直線的に立ちあがる。158は土師器坏若しくは碗の口縁部片で直線的な立ち上がりのものである。

土坑13（第34図）

B-13区・Ⅳ層上面で検出された。主体部は掘削により残存していない。長軸70cm、短軸35cmであるが平面形は不明である。深さは9cm程で壁面の立ち上がりはほとんど同えない。

出土遺物（第34図）

遺構内からは土師器片2点が出土した。159は土師器坏の底部片である。復元底部径9cmである。

土坑14（第34図）

B-13区・Ⅳ層上面で検出された。平面形は直径70cm

の略円形を呈し、深さ93cmで壁面は鋭角に立ちあがる。ピット状を呈するが、規模が大きいこと、周囲に規則的に配置されたピットがみられないことから、土坑として取り扱った。

ピット内出土遺物（第35図）

遺跡内全域から多数のピットが検出された。規則的に配列した建物状を示さないものについては、基本的にグレーで表示を行った。遺構内遺物を掲載したものについては遺構配置図に遺構番号を付し、平面図のみを掲載した。

160～169は土師器の坏である。165、169を除き体部は斜めに直線的に立ちあがるB類である。165、169は体部がやや曲線的に立ちあがる。165は体部に墨書がみられるが判読不能である。170～174は土師器碗である。脚は外開きしている。170、171は断面三角形の脚部を呈し高台高は0.5cm～0.8cmと低い。172、173は高台高1.2cm～1.5cmと高めである。172～174の内部底面には布目痕が残っている。175、176は土師器坏もしくは碗の口縁部片である。175は復元口径12.8cm、176は復元口径10cmである。177～179は墨書土器片である。土師器坏もしくは碗に記されている。177は大振りの筆致であるが判読はできない。178は体部正位に「下田」と記される。179は墨書痕跡がかるうじて見える程度で判読は出来ない。180～182は黒色土器A類と思われる。180は碗と思われ、脚はやや外開きし、端部を平坦に仕上げる。内面は放射状のミガキ痕が観察できる。181は体部が斜めに直線的に立ち上がり、口縁部で直立するように屈曲する。内外面ともに丁寧な横方向のミガキ調整を行っている。182は口縁部がやや外反する。182同様内外面ともに丁寧な横方向のミガキ調整で器面が光沢を持っている。183、184は須恵器である。183は壺の底部である。復元底径7cmである。184は甕の頸部から肩部片である。肩部には縦位のタタキ目に残り緑色の自然釉がかかる。

礫集積（第36図～第38図）

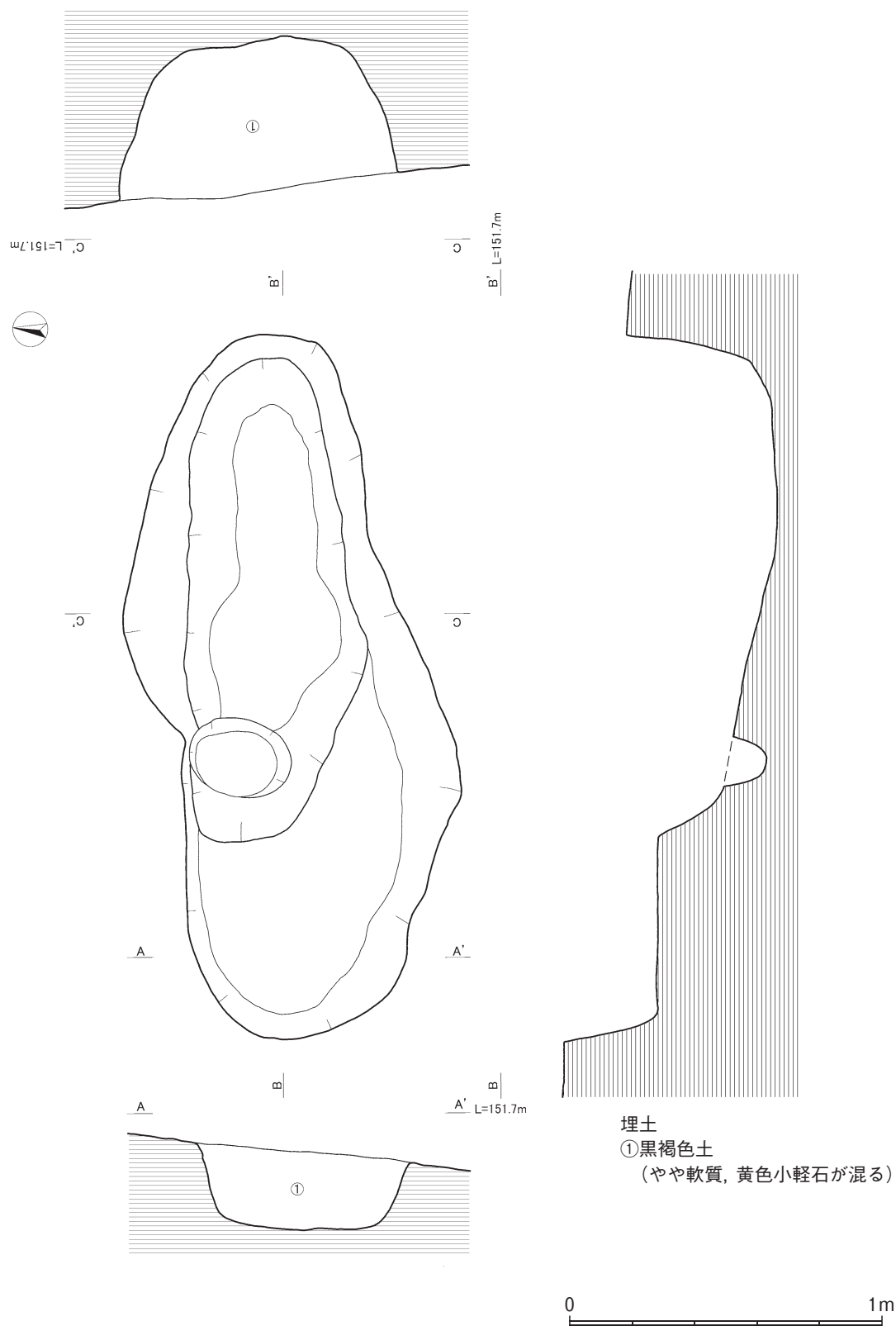
遺跡内から3基の礫集積が検出された。いずれもⅢb層上面で検出されている。

礫集積1（第36図）

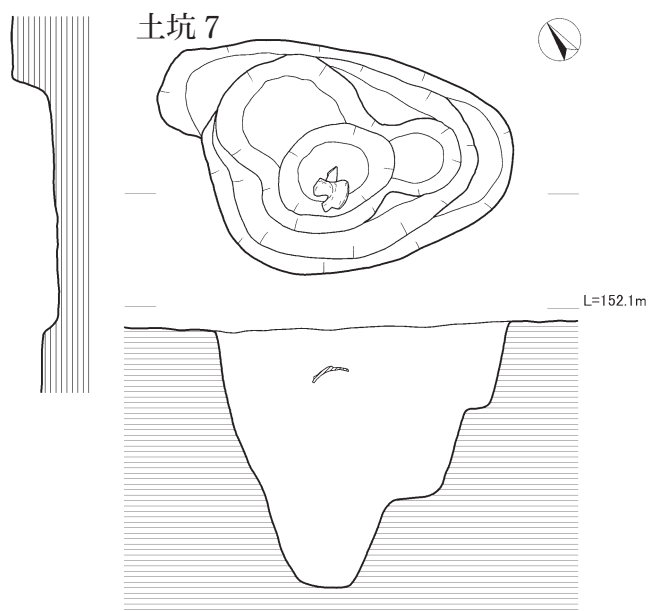
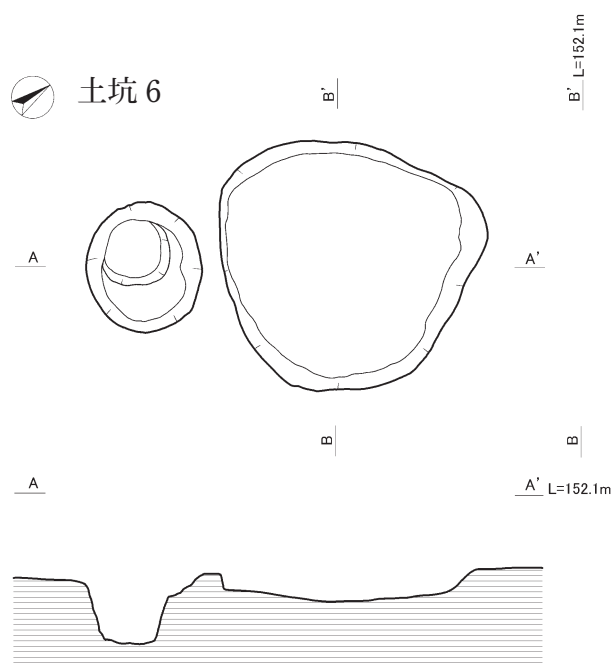
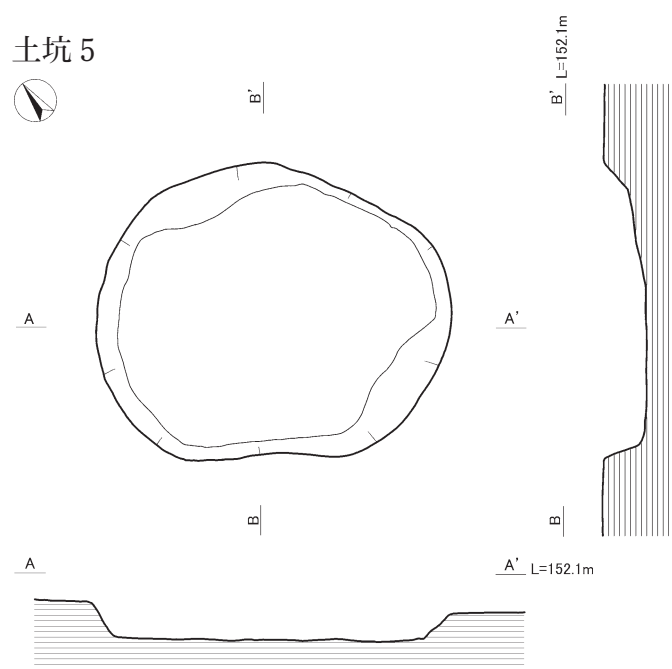
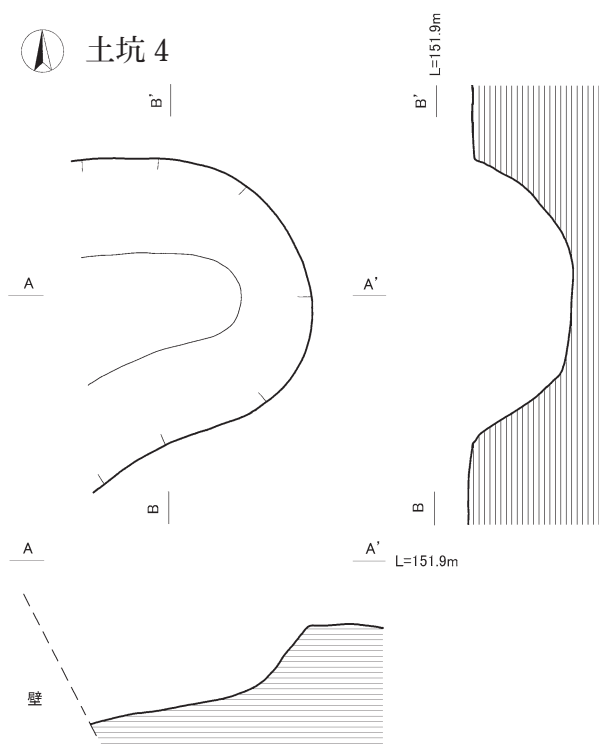
A-9区・Ⅲb層上面で検出した。礫は長軸126cm、短軸107cmの範囲に散在している。大型の軽石が目立ち、焼成を受けているのか、やや赤色化している。周辺から鉄滓が2点出土している。地表面には焼成の痕跡は観察できなかった。

出土遺物（第36図）

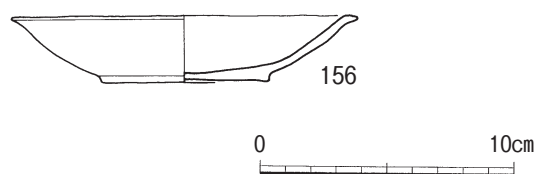
遺構内からは鉄滓等8点を出土したが、内1点を図化した。185は軽石で棒状に整形していると思われる。一



第31図 土坑 3



0 1m



第32図 土坑 4 ～ 7 ・ 土坑 7 出土遺物

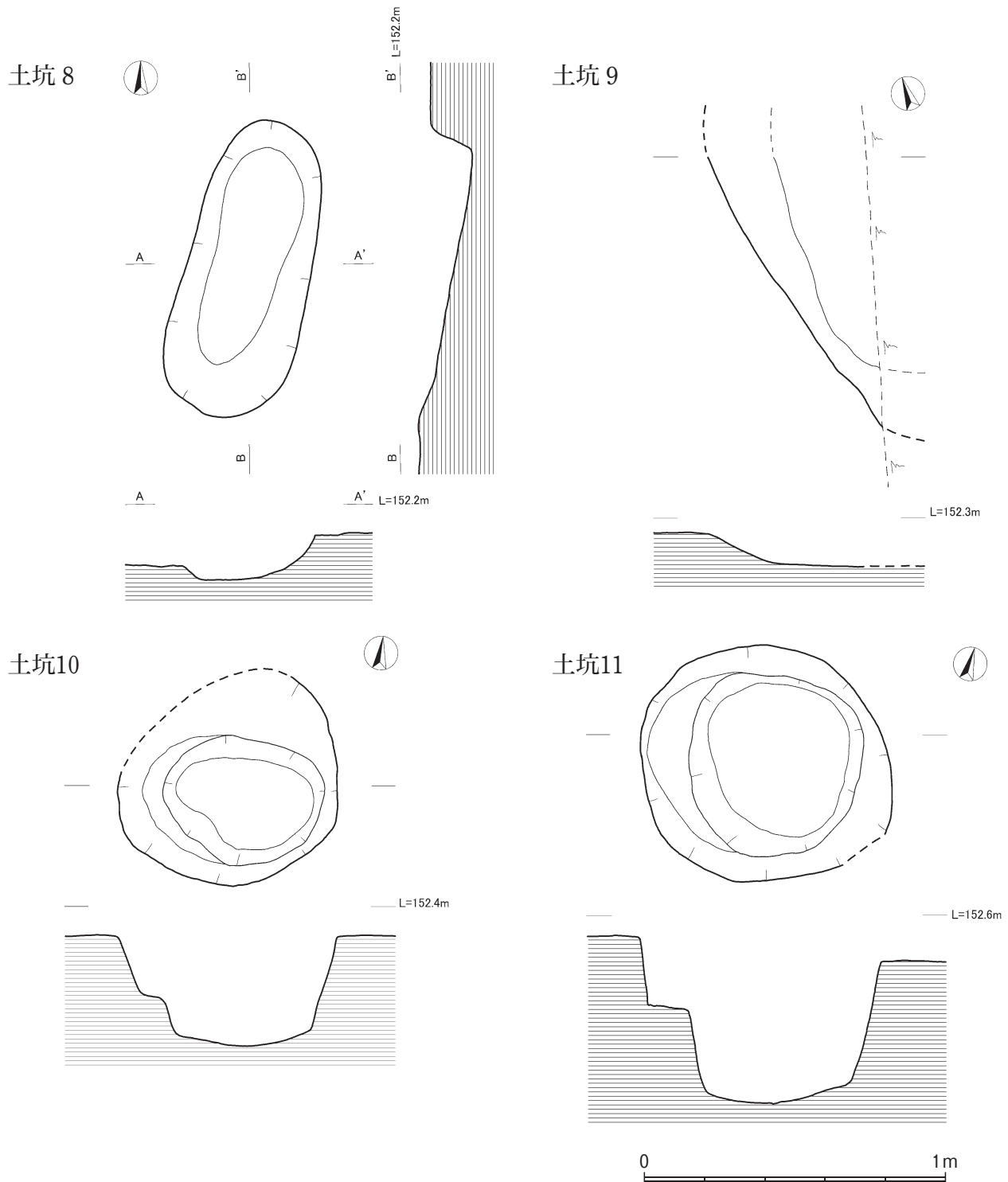
部には赤変が認められ被熱の影響が考えられる。

礫集積 2 (第37図)

B-9区・Ⅲb層上面で検出した。礫は長軸121cm、短軸87cmの範囲に集中している。20cm程の大型の軽石、礫が多い。礫はいずれも礫集積1同様に赤色化している。また、礫に混じり土師器片が出土している。

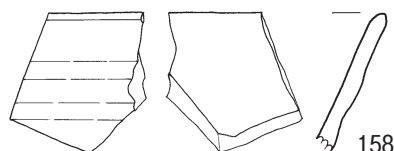
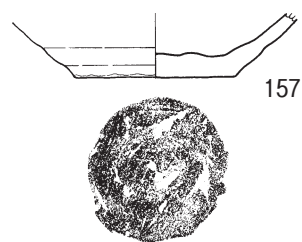
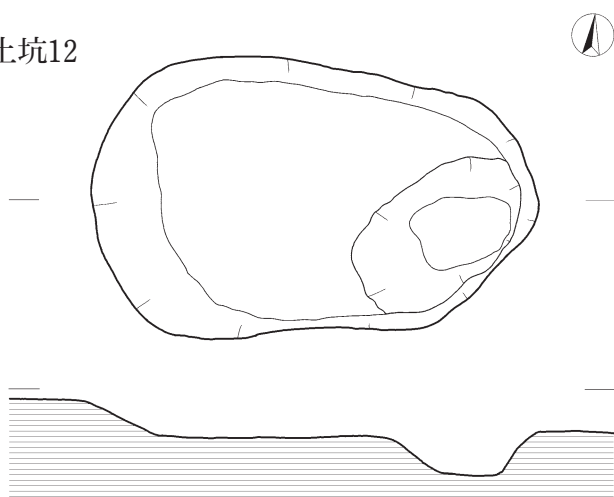
出土遺物 (第37図)

遺構内からは土師器片等27点が出土し、内4点を図化した。186~188は土師器坏で体部は斜めに直線的に立ちあがる。底部外面には回転ヘラ切り痕が明瞭に残る。189は、土師甕で口縁部の外反が大きく、胴部が大きく張る。口縁部内面の稜線は体部縦方向のケズリにより明瞭に形成される。

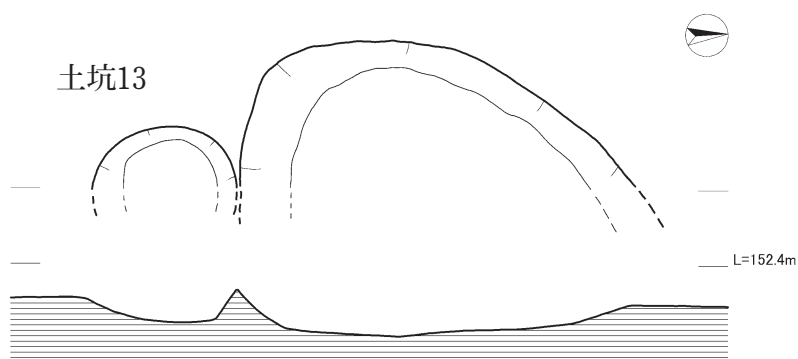


第33図 土坑 8 ~ 11

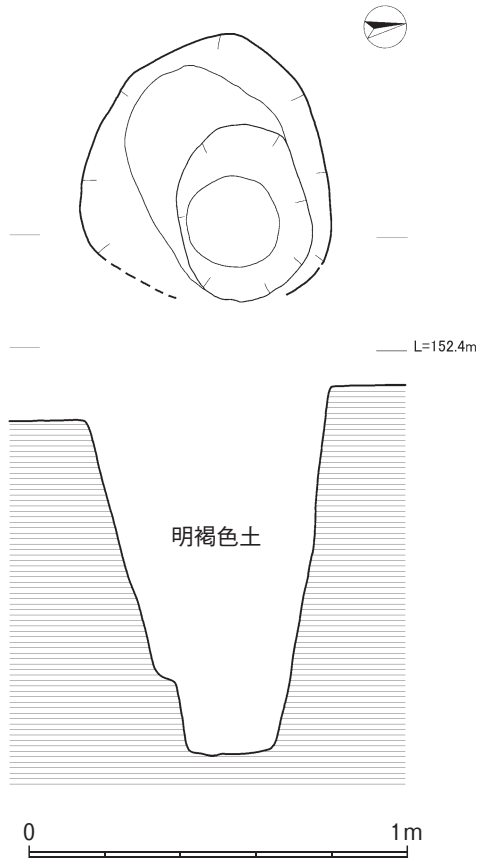
土坑12



土坑13



土坑14



礫集積 3 (第38図)

B-11区・Ⅲb層上面で検出した。平面形が長軸73cm, 短軸57cmの楕円形で、深さ20cm程の土坑内に円礫を中心として、鉄滓等が集中する。土坑内埋土には炭化物が多く含まれる。

出土遺物 (第38図)

遺構内からは土師器片等71点が出土し、その内2点の鉄滓を図化した。190, 191ともに楕円形滓, 190はやや小ぶりである。191には、長さ2cm, 幅1cmほどの製鉄の際に使用された炭の痕跡も残る。

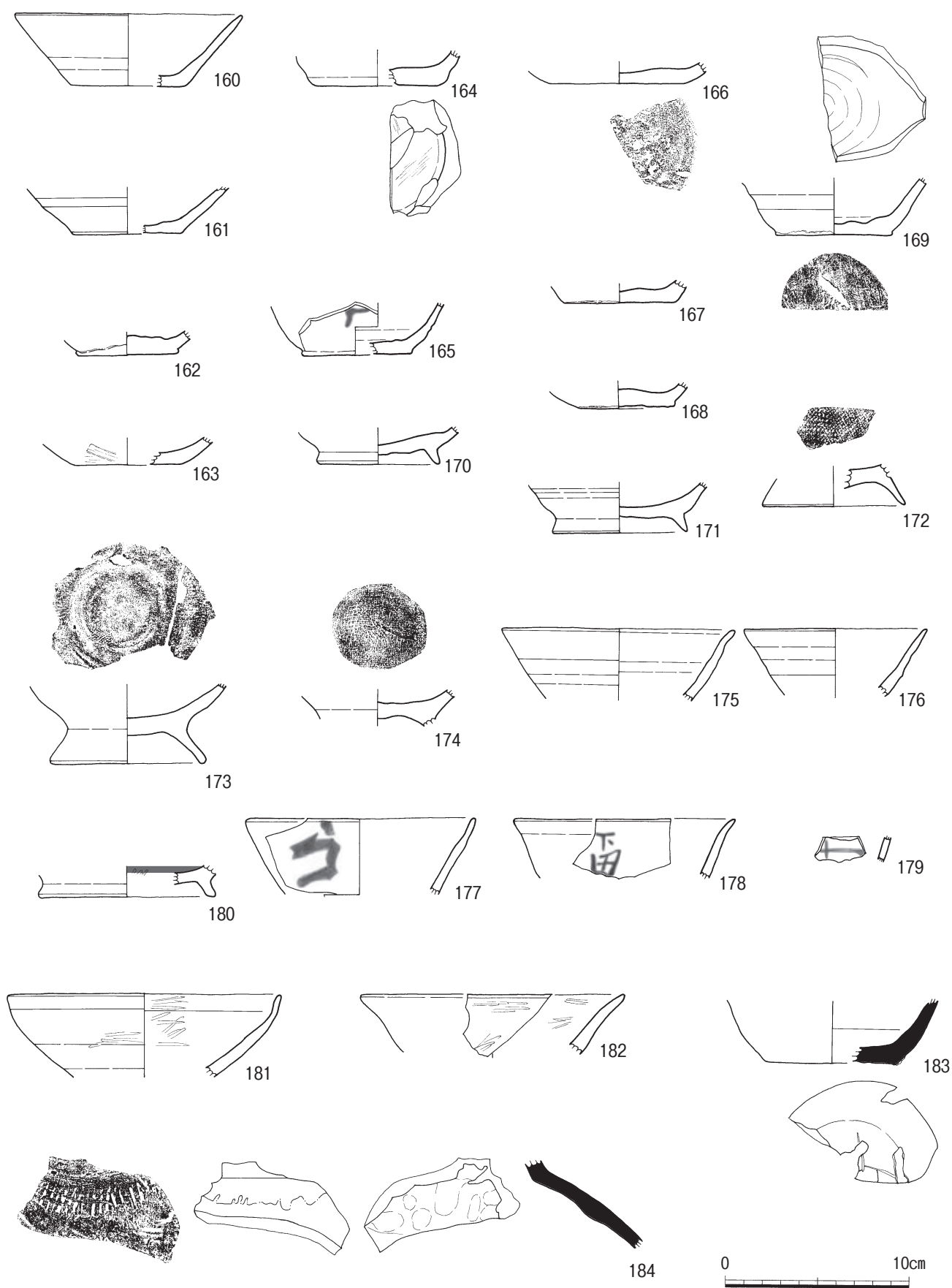
炉跡 (第39図)

地表面が焼けた痕跡4カ所、掘り込みを持つもの2カ所の6カ所が検出された。地表面の痕跡は焼土1～4として遺構配置図に平面図のみを掲載した。

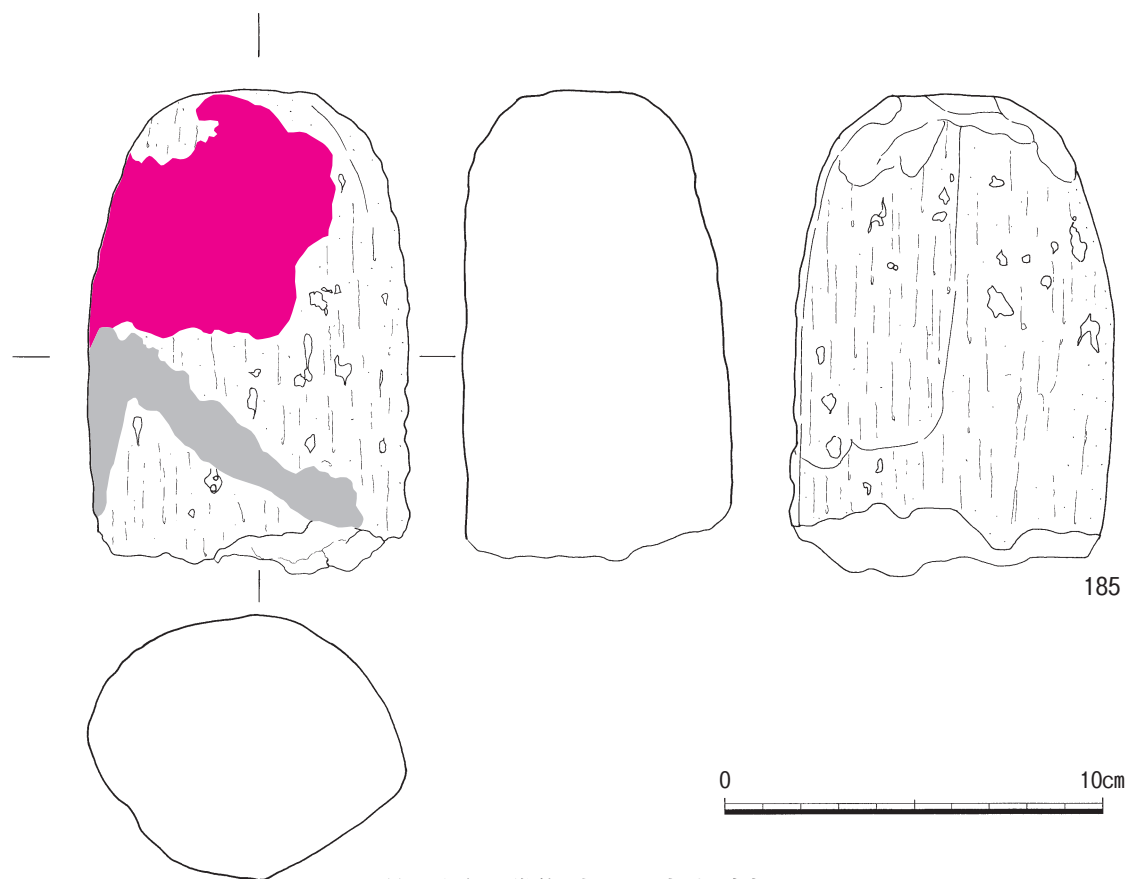
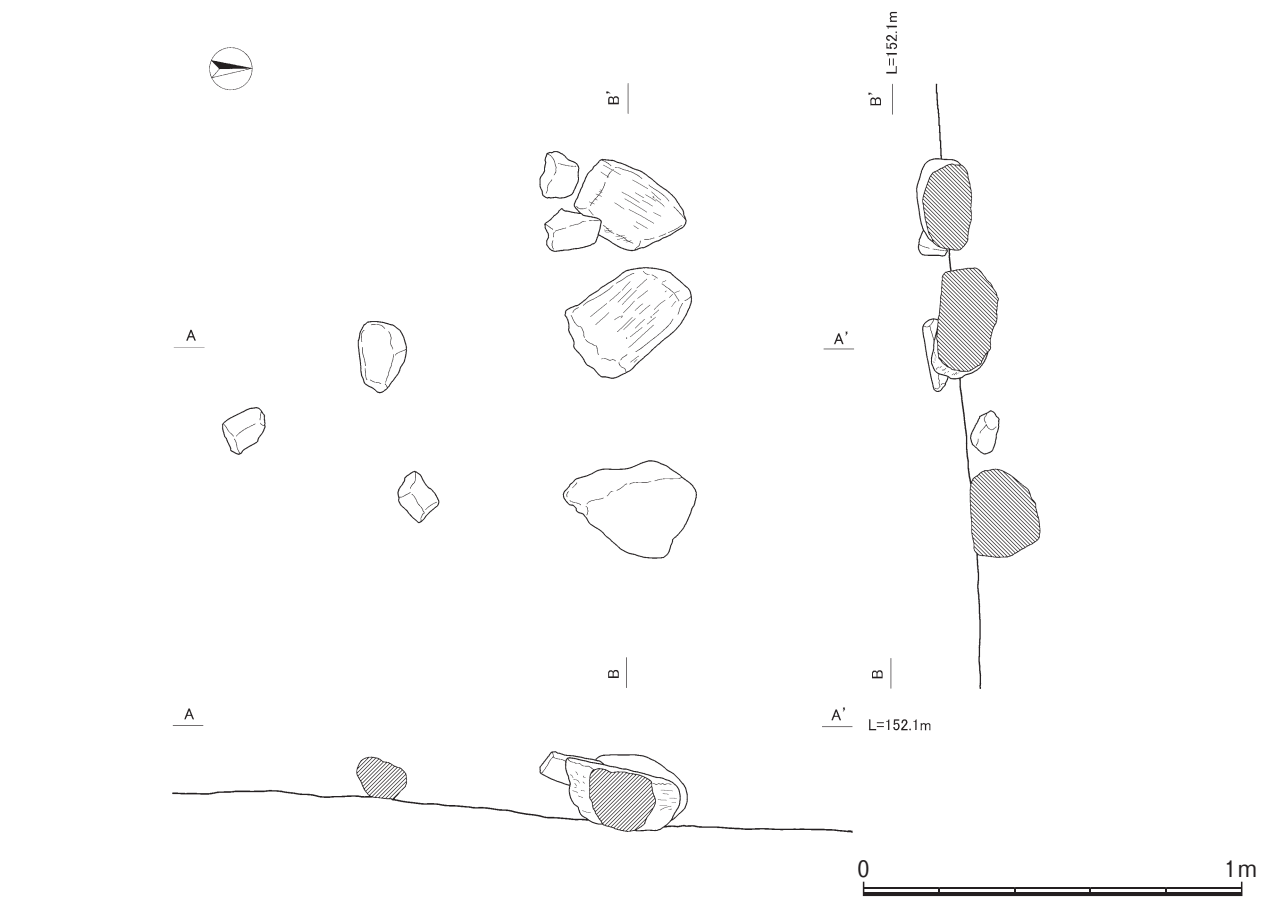
炉跡 1 (第39図)

A-10区・Ⅲb層上面で検出された。平面形は長軸42cm, 短軸37cmの略楕円形で、深さ7cmで底面は平坦である。埋土は赤褐色でしまりがある。

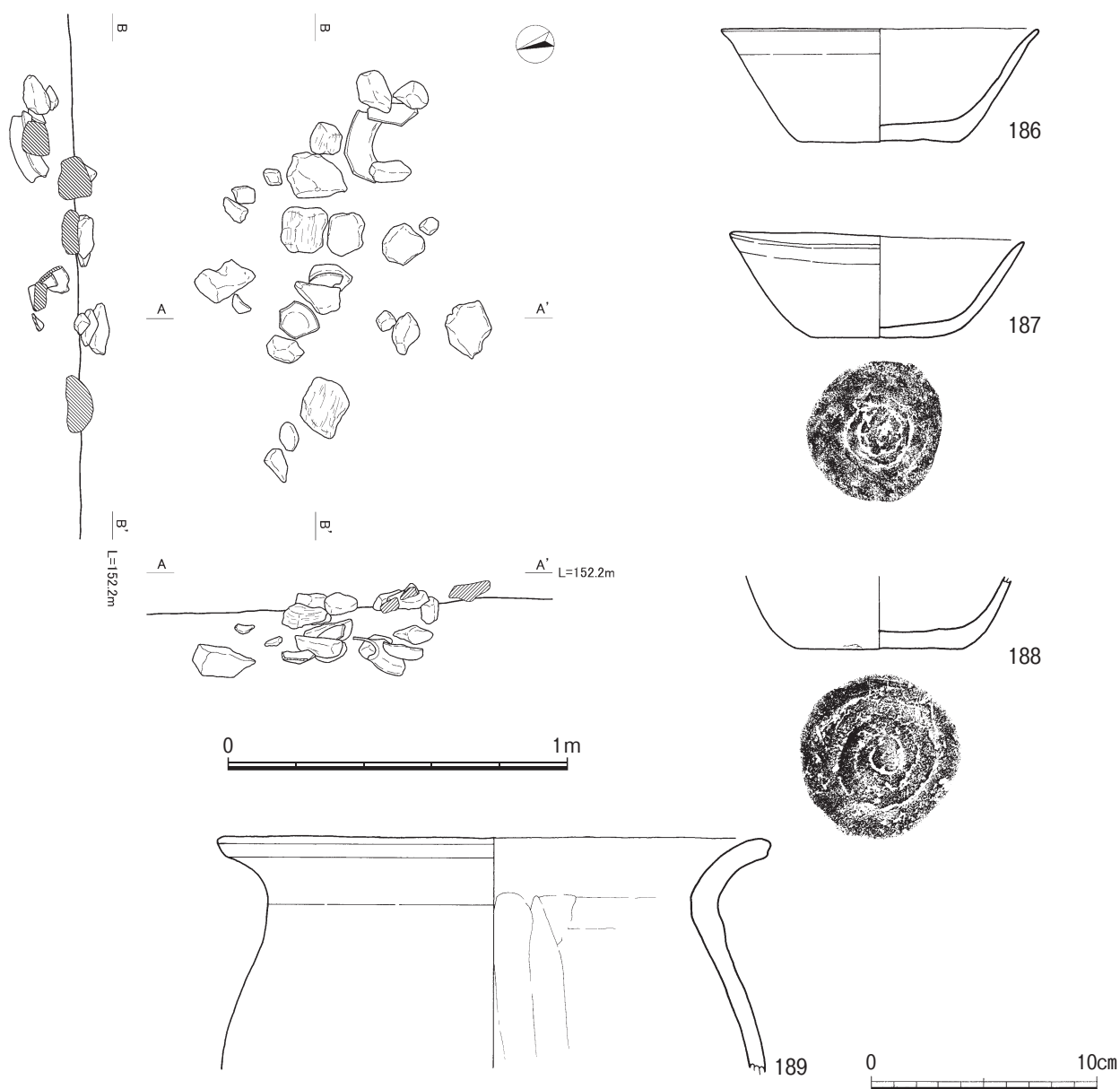
第34図 土坑12～14・12, 13出土遺物



第35図 ピット内出土遺物



第36図 磔集積1・出土遺物



第37図 礫集積2・出土遺物

炉跡2（第39図）

A-10区・Ⅲb層上面で検出された。平面形は長軸62cm，短軸61cmの円形を呈する。深さ13cmで底面は平坦である。埋土は赤褐色でしまりがある。炉跡1・2は隣接している。

畝状遺構（第39図）

B-7・8区・Ⅲb層上面で，長さ1m40cm～2m40cm，幅20cm～60cm東西方向に並行した溝状遺構が検出された。深さは12cmである。約6m×4mの範囲に6条確認でき，畝の畝跡の可能性も考えられるが，散発的な検出であるため畝状遺構として取り扱った。

溝状遺構（第40図）

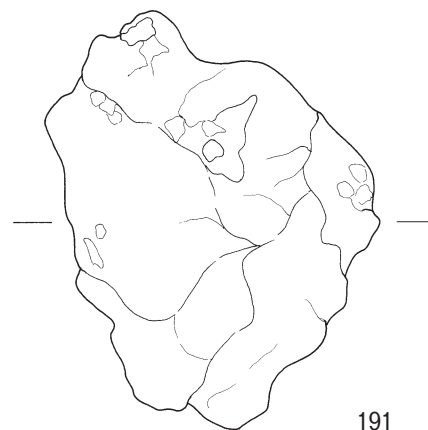
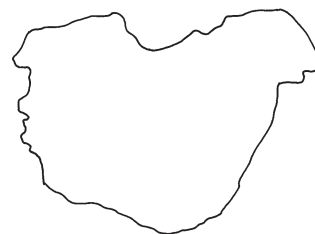
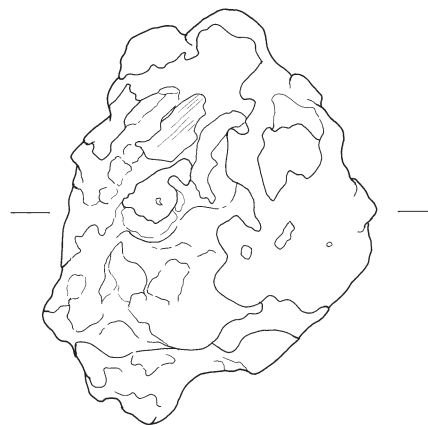
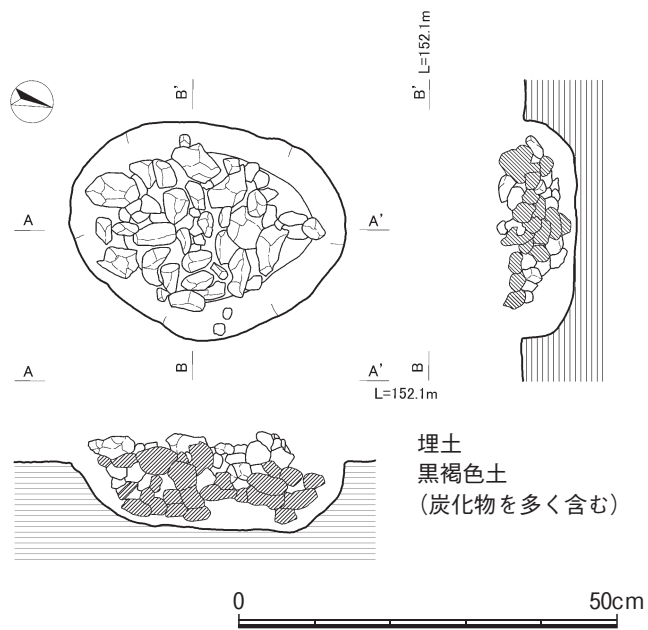
A・B-4・5区・Ⅳ層上面で5条，B-9・10区・Ⅲb層で1条検出された。遺構全体が確認できたものはなく，一部が検出されたのみである。

溝状遺構1（第40図）

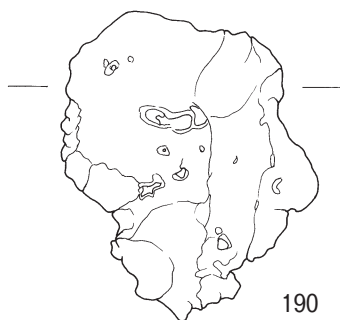
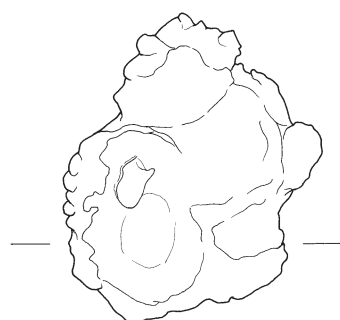
A-4区・Ⅳ層上面で検出された。長さ約3m60cm，幅60cm，深さ8cmが残存する。

溝状遺構2（第40図）

B-4区・Ⅳ層上面で検出された。長さ約4m，幅約20cm，深さ8cmが残存する。道跡を切っている。



191



190



第38図 礫集積3・出土遺物

溝状遺構 3 (第40図)

B-4区・IV層上面で検出された。長さ約1 m30cm, 幅約30cm, 深さ3 cmと残存状況は極めて悪い。溝状遺構2同様, 道跡を切っている。

溝状遺構 4 (第40図)

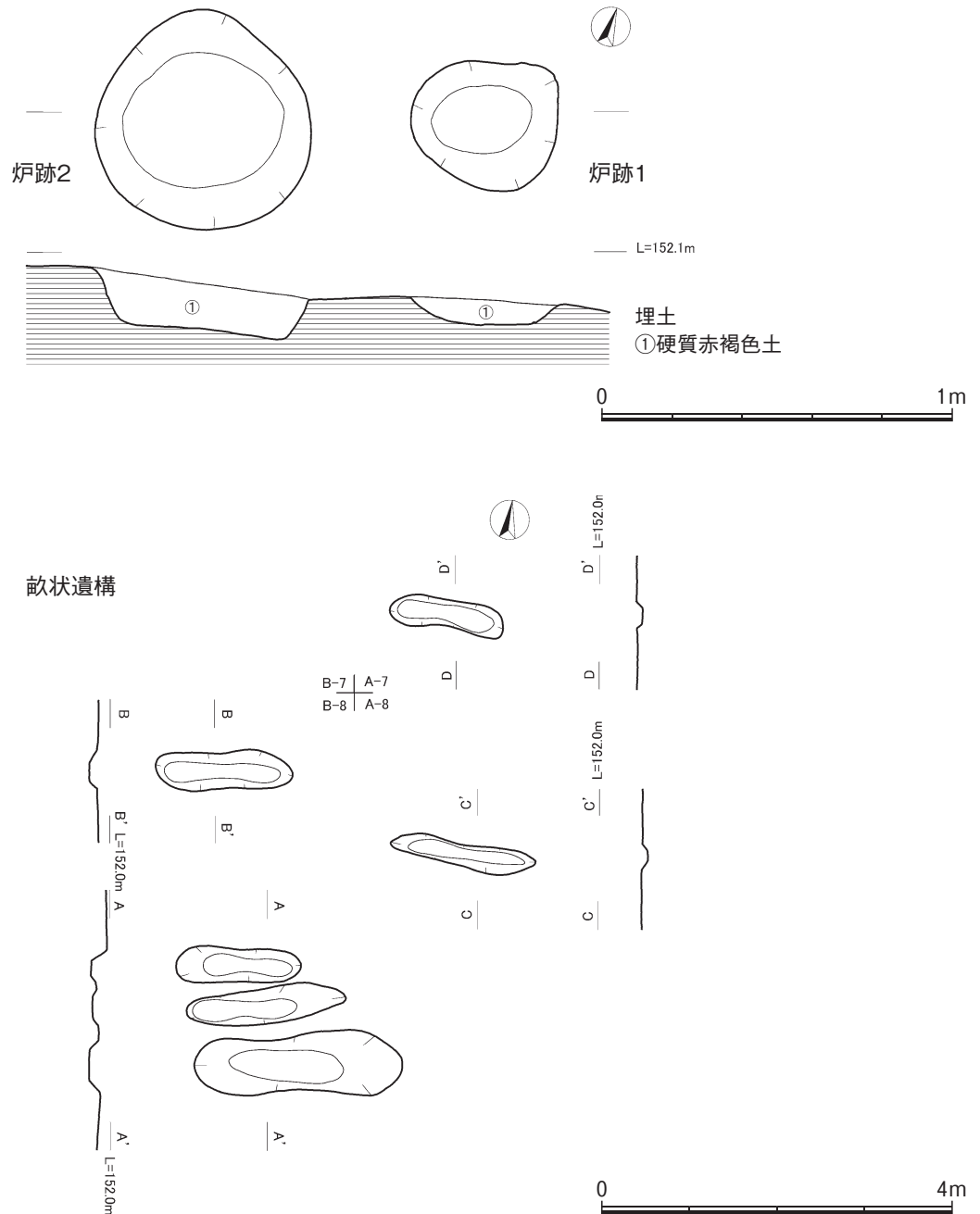
B-4区・IV層上面で検出された。調査区際での検出のため確認できた長さは1 m90cm, 幅は不明である。深さは8 cmで, 道を切っている。

溝状遺構 5 (第40図)

B-4区・IV層上面で検出された。長さ2 m80cm, 幅約40cmである。

溝状遺構 6 (第40図)

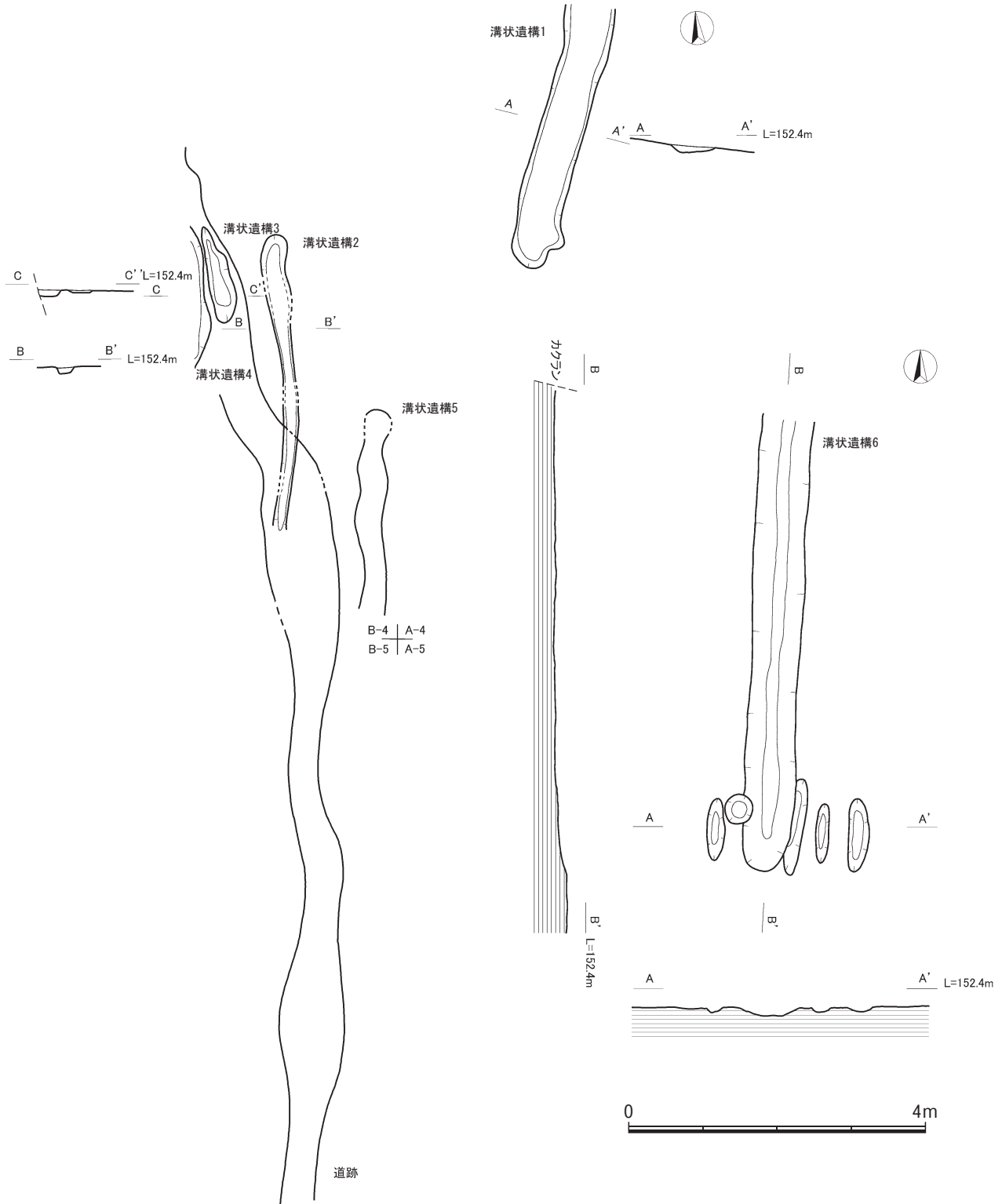
B-9・10区・IIIb層上面で検出された。長さ約6 m, 幅70cm, 深さ約5 cmが残存する。遺構北側は調査範囲外となるため未調査であるが, 遺構は延びるものと考えられる。



第39図 炉跡1, 2・畝状遺構

道跡（第40図）

B-4・5区・IV層上面で検出された。長さ14m、幅40～90cmほどが確認できた。道跡は、溝状遺構、壁立建物跡より前のものであることが、切り合い関係から確認できる。



第40図 溝状遺構1～6・道跡

第3表 古代遺構内出土遺物観察表(1)

挿図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第12図	1	IV	-	坏	口縁部~底部	土師器	坏Ⅱ	(11.9	6.6	5.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面へう切り静止ナデ、歪んでいる
	2	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.4	(1.9	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	砂粒、白色粒が混る	堅緻	見込み静止ナデ、回転へう切り後静止ナデ
	3	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	(6.0	(1.7	横ナデ	横ナデ	浅黄色	2.5Y 7/3	精緻	堅緻	底部外面へう切り後ナデ
	4	IV	-	椀	脚部	土師器	-	-	6	(2.4	不明	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻(やや砂粒を含む)	良好	刻書
	5	IV	-	椀	脚部	土師器	黒色A	-	-	(2.3	ミガキ?	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	堅緻	内黒、外面に脚部接合時の爪跡あり
	6	IV	-	坏	底部	土師器	黒色A	-	6	(3.4	ミガキ後ナデ?	ナデ	にぶい赤褐色	5YR 5/4	精緻、白色粒少し混る	良好	内黒、底部外面へう切り?後ナデ
	7	IV	-	椀	脚部	土師器	赤色土群	-	(5.0	(2.5	横ナデ後ミガキ?	横ナデ後ミガキ	にぶい橙色	7.5YR 7/4	精緻	堅緻	器表面のミガキは剥落している。おそらく両赤
	8	IV	-	坏Or精	口縁部	土師器	-	(11.8	-	(4.6	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	-
	9	IV	-	坏OrⅢ	口縁部	土師器	-	(12	-	(1.9	ミガキ	横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	-
	10	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.6	(2.0	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面へう切り後ナデ
	11	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	4.4	(1.7	横ナデ	ケズリ後横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	堅緻	底部外面へう切り後ナデ
	12	IV	-	坏	胴部~底部	土師器	坏Ⅱ	-	7.6	(2.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	堅緻	見込み静止ナデ、底部付近にケズリ痕が残る
	13	IV	-	坏Or精	口縁部	土師器	坏Or精Ⅱ	(12	(6.2	(3.6	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	堅緻	-
	14	IV	-	椀	脚部	土師器	椀Ⅲ	-	7.6	(3.8	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻(赤色粒わずかに含む)	堅緻	器面剥落がひどい。見込み静止ナデ
	15	IV	-	土師器	口縁部~胴部	土師器	-	(11.9	-	(6.1	調整不明	スス付着、摩滅がはげしく調整不明	にぶい赤褐色	5YR 5/3	精緻	堅緻	外面の器壁剥落状況から、強い焼熱を受けている
	16	IV	-	土師器	口縁部	土師器	壺Ⅲ	-	-	(7.7	口縁部横ナデ、体部斜位からのケズリ	横ナデ	黒褐色	10YR 3/1	砂粒が混る	良好	-
	17	IV	-	壺?	胴部	須恵器	-	-	-	10.2	平行タタキ(縦位)	平行タタキ(斜位)	灰褐色	7.5YR 4/2	精緻	堅緻	-
	18	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6	(3.1	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 6/4	精緻	堅緻	見込み静止ナデ
	19	IV	-	坏Or精	胴部	土師器	-	-	-	-	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	墨書
	20	IV	-	土師器	口縁部	土師器	壺Ⅱ	-	-	(5.1	ハケ後ナデ、体部は斜位からのケズリ	-	褐色	7.5YR 4/4	砂粒を若干含む	堅緻	-
	21	IV	-	土師器	口縁部	土師器	壺Ⅱ	-	-	(6.0	口縁部横ハケ後横ナデ、体部縦位のケズリ	横ナデ+ナデ	にぶい褐色	7.5YR 5/4	砂粒がわずかに混る	堅緻	-
	22	IV	-	椀	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	7.2	-	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	-
	23	IV	-	坏Or精	口縁部	土師器	-	(14.5	(8.2	(4.8	横ナデ	横ナデ	灰白色	2.5Y 8/1	精緻、白色	良好	-
	24	IV	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	7.4	(2.0	-	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	内黒、底部外面ナデ
第14図	25	IV	-	土師器	口縁部	土師器	壺Ⅰ	(26.4	-	(9.3	口縁付近は横ナデ、体部は斜位のケズリ	口縁付近は横ナデ、体部はケズリ後ナデ	にぶい赤褐色	2.5YR 5/4	砂粒が混る	良好	-
	26	IV	-	壺	胴部	須恵器	-	-	(17.6	9.4	横ナデ、胴部付近に指頭圧痕	下位ケズリ、上位平行タタキ(縦位)後横ナデ	灰色	5Y 4/1	精緻	堅緻	-
第15図	27	Ⅲ	-	壺	完形品	土師器	-	29.2	-	43.7	タタキ、工具ナデ	タタキ、ナデ	-	-	-	-	-
第16図	28	IV	-	坏	完形品	土師器	坏Ⅳ	11.4	4.4	5.1	横ナデ、見込みに指頭圧痕	横ナデ、底部直上のみケズリ後横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	良好	墨書、底部外面へう切り後ナデ
第18図	29	IV	-	椀	完形品	土師器	椀Ⅱ	14.4	(7.8	6.8	横ナデ	横ナデ、脚部直上を回転ケズリ	浅黄橙色	7.5YR 8/3	精緻	良好	見込み静止ナデ
	30	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	8.2	(2.0	横ナデ?	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	底部外面回転へう切り後ナデ
	31	IV	-	壺?	胴部	須恵器	-	-	-	-	平行タタキ	格子タタキ	灰黄褐色	10YR 5/2	精緻	堅緻	-
第20図	32	Ⅲ	b	坏	口縁部~底部	土師器	坏Ⅱ	(13.6	6	5.2	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	底部外面ナデ、回転へう切り、見込み回転ナデ
	33	Ⅲ	b	坏	完形品	土師器	坏Ⅱ	12.3	5.5	4.5	横ナデ	横ナデ、ケズリ	橙色	5YR 7/8	砂粒が少し混る	良好	墨書、底部外面は未調整、見込みは静止ナデ
	34	Ⅲ	b	坏	口縁部	土師器	-	(12	-	(3.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/3	赤色粒が少し混る	良好	-
	35	Ⅲ	b	坏Or精	口縁部	土師器	-	(15.8	(10.0	(4.2	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 7/4	精緻	堅緻	-
	36	Ⅲ	b	坏Or精	口縁部~胴部	土師器	-	(13.4	-	(3.1	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻(白色粒をわずかに含む)	良好	-
	37	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.8	(1.4	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻(赤色粒がわずかに混る)	堅緻	底部外面へう切り後ナデ
	38	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6	(1.2	不明	横ナデ	橙色	5YR 6/6	砂粒が少し混る	良好	底部外面静止ナデ、見込み静止ナデ
	39	Ⅲ	b	坏	胴部~底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.2	(3.0	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	良好	底部外面静止ナデ
	40	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.4	(3.3	横ナデ	横ナデ、ケズリ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	良好	底部外面ナデ、見込み静止ナデ
	41	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6	(2.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	良好	底部外面ナデ、見込みナデ
	42	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	8.2	(2.5	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	堅緻	底部外面へう切り後ナデ
	43	Ⅲ	b	坏	胴部~底部	土師器	坏Ⅱ	-	7	(2.3	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	底部外面回転へう切り
	44	Ⅲ	b	椀	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	5.8	-	布目痕、横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	底部内面布目痕
	45	Ⅲ	b	椀	底部	土師器	-	-	(8.0	(2.3	横ナデ	横ナデ	橙色	2.5YR 6/6	精緻(白色粒が混る)	堅緻	見込み静止ナデ
	46	Ⅲ	b	椀	脚部	土師器	黒色A	-	(8.2	(2.7	丁寧なミガキ	横ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻	良好	内黒
	47	Ⅲ	b	壺	口唇部	土師器	-	-	-	(3.3	布目痕	ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	-
	48	-	-	坏Or精	口縁部	土師器	-	-	-	(3.0	横ナデ	横ナデ	明赤褐色	5YR 5/6	精緻(赤色、白色粒子を含む)	堅緻	-
	49	Ⅲ	b	坏Or精	口縁部	土師器	-	-	-	(1.9	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	墨書
	50	Ⅲ	b	坏Or精	胴部	土師器	-	-	-	-	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書
	51	Ⅲ	b	土師器	口縁部~胴部	土師器	壺Ⅱ	(24	-	(8.4	口縁は横ハケ後ナデ、体部は横方向ケズリ	口縁は横ナデ、体部は縦ハケ後丁寧なナデ	橙色	5YR 6/6	φ1mm程の小粒がわずかに混る	堅緻	-
	52	Ⅲ	b	壺	口縁部~胴部	土師器	壺Ⅲ	(28.8	-	(7.8	横ナデ、口縁近くは横ナデ	ヘラによる横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	-
	53	Ⅲ	b	坏	口縁部~底部	須恵器	-	(16.7	9	6.5	横ナデ	横ナデ	灰オリーブ色	5Y 6/2	精緻(白色粒が目立つ)	堅緻	底部外面へう切り後 静止ナデ、火だすきあり
	54	Ⅲ	b	壺?	胴部	須恵器	-	-	-	-	平行タタキ	格子タタキ	灰色	7.5Y 5/1	精緻	堅緻	-
	55	Ⅲ	b	羽口	先端	竈	-	-	最大径7.6	最大長11.0	-	-	-	-	φ1mm程の梗が混る	普通	先端部は溶融し、ガラス質化している
第22図	56	IV	-	坏	胴部~底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.4	(4.0	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面へう切り
	57	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.4	(3.0	横ナデ	横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	底部外面へう切り後ナデ
	58	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.6	(1.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻(砂粒をわずかに含む)	堅緻	-

※(書きの数字は口径、底径の復元径、器高の残在高

第4表 古代遺構内出土遺物観察表（2）

挿図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第22図	59	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.4	(1.6	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後静止ナデ
	60	IV	-	坏or輪	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.6	(1.9	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	底部外面へラ切り
	61	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.2	(2.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面へラ切り
	62	IV	-	坏or坪	底部	土師器	坏Ⅱ	-	7.2	(2.7	横ナデ	横ナデ	橙色（一部に赤色顔料及びススの付着あり）	7.5YR 7/6	精緻	良好	-
	63	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.2	(2.3	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	-
	64	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.4	(3.0	横ナデ	底部直上を回転ケズリ、 体部は横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻（赤色粒が混る）	堅緻	-
	65	IV	-	椀	口縁部～胴部	土師器	-	(15	-	(8.0	横ナデ	横ナデ	明黄橙色	10YR 7/6	精緻	良好	-
	66	IV	-	椀	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	8.1	(3.2	丁寧なナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	白色粒が少し混る	良好	-
	67	IV	-	椀	脚部	土師器	坏Ⅱ	-	7.2	(3.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	見込みに布目痕がかすかに残る
	68	IV	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.6	(2.2	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	-
	69	IV	-	坏or輪	脚付底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.6	(1.9	横ナデ	横ナデ	黒褐色（スス付着）	10YR 3/1	精緻	良好	-
	70	IV	-	椀	口縁部～胴部	土師器	-	(13	-	(4.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 7/8	精緻	良好	-
	71	IV	-	椀	口縁部	土師器	-	(12.4	-	(4.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	-
	72	IV	-	坏or輪	口縁部	土師器	-	(12.6	-	(2.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	73	IV	-	坏or輪	口縁部	土師器	-	(11.6	-	(3.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/1	精緻	良好	口クロ使用
	74	IV	-	坏or輪	口縁部	土師器	-	(14	-	(3.0	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	良好	-
	75	IV	-	壺	口縁部～胴部	土師器	-	(10.2	-	(3.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	良好	-
	76	IV	-	坏	底部	土師器	黒色A	-	7.2	(1.6	ミガキ?	横ナデ後ナデ	にぶい橙色	5YR 6/4	精緻	良好	内黒
	77	IV	-	坏or皿	底部	土師器	黒色A	-	(6.0	(1.2	ミガキ?	丁寧なナデ	褐色	5YR 5/1	精緻	良好	内黒、底部外面へラ切り後丁寧なナデ
	78	IV	-	坏or輪	口縁部	土師器	赤色土師	-	-	(4.2	横ナデ	横ナデ	明赤褐色	2.5YR 5/6	精緻	良好	-
	79	IV	-	坏or輪	口縁部～胴部	土師器	赤色土師	-	-	(3.8	横ナデ	横ナデ	両面朱（赤色）	10R 4/6	精緻	良好	両赤
	80	IV	-	蓋	-	土師器	-	-	(17.1	(3.0	横ナデ、中心付近は静止ナデ	工具ナデ後横ナデ、一部 回転ケズリ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	堅緻	-
	81	IV	-	壺	口縁部	土師器	壺Ⅱ	-	-	(5.3	横ナデ、体部は横位の ケズリ	横ナデ	明赤褐色	5YR 5/6	砂粒が混る	良好	-
	82	IV	-	壺	胴部	須恵器	-	-	-	-	平行タタキ、同心円タ タキ	格子タタキ	にぶい黄色	2.5Y 6/3	精緻	堅緻	-
第23図	83	IV	-	椀	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(12.6	5.4	5.1	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	普通	底部外面へラ切り後横ナデで調整
	84	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	7.2	(1.9	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	堅緻	底部外面へラ切り後ナデ
	85	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	3.8	(1.6	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	堅緻	底部外面へラ切り後ナデ
	86	IV	-	-	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.8	(1.6	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/3	精緻	良好	底部外面へラ切り
	87	IV	-	椀	口縁部～底部	土師器	椀Ⅰ	(14.2	6.8	6.5	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	良好	-
	88	IV	-	-	脚部	土師器	椀Ⅲ	-	10	(4.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	少々粗い	普通	もみ痕
	89	IV	-	-	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	7.2	(4.3	横ナデ	横ナデ	明赤褐色	5YR 5/8	精緻	良好	-
	90	IV	-	坏or輪	口縁部	土師器	-	(13	-	(4.0	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 7/4	精緻	堅緻	-
	91	IV	-	-	口縁部	土師器	-	-	-	(2.3	横ナデ	横ナデ	黄橙色	7.5YR 8/8	精緻	良好	墨書
	92	IV	-	坏or皿	口縁部～底部	陶磁器	-	(14.8	(5.4	4.1	-	-	釉：灰オリーブ色	7.5Y 5/2	精緻	堅緻	越州窯青磁、全面施釉、内面見込みに剥がれなし、 焼成時一番上に置かれたか？
第25図	93	IV	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	12.4	5.4	5	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	堅緻	底部外面へラ切り後静止ナデ
	94	IV	-	椀	脚部～胴部	土師器	椀Ⅱ	-	8.2	(3.5	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	-
	95	IV	-	椀	脚部	土師器	赤色A黒ミ	-	7.2	(2.9	ナデ後ミガキ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 6/3	精緻（赤色粒わずかに 混る）	良好	内黒
	96	IV	-	椀?	脚部	土師器	赤色土師	-	9.8	(5.8	横ナデ	横ナデ	橙色	2.5YR 7/6	精緻	良好	-
	97	IV	-	椀	口縁部～胴部	土師器	赤色土師	(13.6	-	(4.5	横ナデ	横ナデ	橙色、赤色顔料が見られ る（ベンガラ）	7.5YR 7/6	精緻	良好	-
	98	IV	-	土師器	口縁部	土師器	-	(22.8	-	(3.5	口縁部は横ナデ、体部 は横方向のケズリ	横ナデ	黒褐色	10YR 3/2	砂粒を含む	良好	-
	99	IV	-	土師器	口唇部	土師器	壺Ⅱ	-	-	(4.3	横ナデ、体部は縦方向 のケズリ	横ナデ	にぶい褐色	7.5YR 5/4	砂粒を含む	堅緻	-
	100	IV	-	壺	口縁部	土師器	壺Ⅱ	-	-	(5	横ナデ、体部は斜位の ケズリ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	砂粒を含む	良好	-
	101	IV	-	壺	口縁部	土師器	壺Ⅲ	-	-	(6.2	横ナデ、斜位のケズリ 後ナデ	ナデ	橙色	5YR 6/6	砂粒を含む	良好	-
	102	IV	-	鉢	胴部～底部	土師器	-	-	胴径 21.4	(9.6	口縁は横ナデ、体部は ケズリ後ナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	5YR 5/3	砂粒、小礫が混る	良好	底部外面は丁寧なナデ
	103	IV	-	鉢	口縁部～底部	土師器	-	(25.0	(13.6	13	ケズリ後横ナデ	-	黄橙色	10YR 8/6	精緻（赤色粒がわずかに 混る）	良好	-
	104	IV	-	壺?	胴部	須恵器	-	-	-	-	車輪文タタキ	格子タタキ?	内面：浅黄橙色、 外面：明黄褐色	10YR 8/4、 10YR 6/6	精緻	堅緻	-
第26図	105	IV	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	12.4	5.2	4.9	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	底部外面へラ切り後静止ナデ
	106	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.8	(2.6	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	107	IV	-	-	底部	土師器	坏Ⅱ	-	(7.0	(2.2	横ナデ	横ナデ、下部にへラケズ リ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	スス付着
	108	IV	-	-	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.4	(2.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面へラ切り
	109	IV	-	-	底部	土師器	坏Ⅱ	-	7	(2.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	110	IV	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.4	(1.1	-	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 6/3	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	111	IV	-	椀	脚部	土師器	-	-	(6.1	(2.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻（赤色粒がわずかに 残る）	良好	-
	112	IV	-	椀	口縁部～胴部	土師器	-	(13.6	-	(5.5	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	-
	113	IV	-	椀?	口縁部	土師器	-	(12	-	(4.2	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	5YR 6/4	精緻	良好	-
	114	IV	-	-	口縁部	土師器	-	-	-	(2.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	115	IV	-	-	口縁部	土師器	黒色A	-	-	(3.6	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 5/4	精緻	良好	スス付着
	116	IV	-	皿	口縁部	土師器	赤色土師	(13.0	-	(2.7	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	良好	-

第5表 古代遺構内出土遺物観察表(3)

挿図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第27図	117	Ⅲ	b	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	12.5	5	5.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/3	精緻(赤色粒がわずかに混る)	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	118	Ⅲ	b	碗	完形品	土師器	坏Ⅱ	12.8	5	5.3	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	119	Ⅲ	b	碗	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(13.0)	6.5	4.6	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 7/6	やや粗い赤色粒(6.1mm粒)が混る	良好	底部外面へラ切り後丁寧ナデ
	120	Ⅲ	b	坏	完形品	土師器	坏Ⅱ	12.8	5.6	5.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻(赤色粒がわずかに混る)	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	121	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.8	(4.8)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻(赤色粒がわずかに混る)	堅緻	底部外面へラ切り後ナデ
	122	Ⅲ	b	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(13.2)	5.5	5.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	123	Ⅲ	b	碗	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(11.9)	5.8	5.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ
第28図	124	Ⅲ	b	碗	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.8	(1.4)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/2	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	125	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.7	(1.7)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	堅緻	底部外面へラ切り後ナデ
	126	Ⅲ	b	碗	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.1	(2.3)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/2	精緻	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後静止ナデ
	127	Ⅲ	b	碗	完形品	土師器	坏Ⅱ	12.9	6.5	7.1	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻(赤色粒がわずかに混る)	良好	見込み布目痕
	128	Ⅲ	b	碗	脚部	土師器	坏Ⅱ	-	7.2	(4.4)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	堅緻	見込み布目痕後ナデ
	129	Ⅲ	b	碗	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(14.6)	8.8	8	横ナデ	横ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	底部外面へラ切り、見込み静止ナデ
	130	Ⅲ	b	碗	脚部	土師器	坏Ⅱ	(10.1)	8	(3.0)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	堅緻	見込み静止ナデ
	131	Ⅲ	b	-	脚部	土師器	坏Ⅲ	-	(9.2)	(5.1)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻(石灰、赤色粒が混る)	堅緻	-
	132	Ⅲ	b	碗?	脚部	土師器	坏Ⅱ	-	8	(3.4)	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	堅緻	見込み布目痕
	133	Ⅲ	b	碗	脚部	土師器	坏Ⅱ	-	5.6	(2.1)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	堅緻	見込み布目痕
	134	Ⅲ	b	碗	底部	土師器	坏Ⅳ	-	6	(3.2)	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻(赤色粒わずかに混る)	良好	底部外面へラ切り後静止ナデ
	135	Ⅲ	b	碗	口縁部～胴部	土師器	-	(13.2)	-	(4.0)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	136	Ⅲ	b	碗or坏	口縁部	土師器	-	(14)	-	(2.6)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	良好	-
	137	Ⅲ	b	碗or坏	口縁部	土師器	-	(10.4)	-	(2.8)	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	堅緻	-
	138	Ⅲ	b	碗?	口縁部～胴部	土師器	-	(12.8)	-	(4.9)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	堅緻	-
	139	Ⅲ	b	碗or坏	口縁部～胴部	土師器	-	-	-	(2.4)	横ナデ	横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	堅緻	-
	140	Ⅲ	b	碗or坏	口縁部	土師器	-	(13.4)	-	(2.3)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	良好	-
	141	Ⅲ	b	碗	脚部	土師器	赤色土師	-	10.2	(3.0)	横ナデ後ミガキ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	堅緻	おそらく両赤、見込みミガキ
	142	Ⅲ	b	碗or坏	口縁部～胴部	土師器	黒色A	-	-	(2.4)	へらミガキ	回転ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	良好	内黒
	143	Ⅲ	b	碗or坏	口縁部～胴部	土師器	-	(13.5)	(9.7)	(3.6)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	墨書「下田」
	144	Ⅲ	b	鉢	完形品	土師器	-	19.3	10.5	11	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	堅緻	墨書、底部外面へラ切り後のちナデ
第29図	145	Ⅲ	-	甕	口縁部～底部	土師器	甕Ⅱ	33.4	-	(28.0)	ケズリ、ナデ、指ナデ	ハケメ、ナデ、指ナデ	にぶい褐色	7.5YR 5/4	砂粒が多く混る	良好	-
	146	Ⅲ	b	甕	頸部～胴部	土師器	甕Ⅱ	-	-	(15.3)	左斜め上方向へのへラケズリ	横ナデ	褐色	10YR 4/4	小石を含む	良好	頸部径30.4cm
	147	Ⅲ	b	甕or甕	口縁部	須恵器	-	(22.6)	-	(4.1)	横ナデ	横ナデ	灰色	5Y 6/1	精緻	堅緻	-
	148	Ⅲ	b	甕or甕	胴部	須恵器	-	-	-	-	平行タタキ	斜格子タタキ	明褐色	7.5YR 5/6	精緻	堅緻	-
	149	Ⅲ	b	碗	口縁部～底部	陶磁器	-	(15.4)	6.6	5.4	-	-	釉：黄褐色、地：にぶい黄褐色	2.5Y 5/4, 10YR 7/4	精緻	堅緻	-
第30図	150	Ⅲ	b	-	口縁部	土師器	-	(12.9)	-	(4.0)	ミガキ	横ナデ、下位にケズリ残る	にぶい黄橙色	10YR 6/3	精緻	良好	内赤、内面磨かれているが、剥落して素地が露出する部分が多い
	151	Ⅳ	-	土師器	口縁部～胴部	土師器	甕Ⅱ	(27)	-	(16.4)	口縁横ナデ、胴部ケズリ(斜位)	口縁横ナデ、胴部ナデ	赤褐色	5YR 4/6	砂粒がかなり混る	良好	-
	152	Ⅲ	b	甕	胴部	須恵器	-	-	-	-	同心円タタキ	格子タタキ後ハケ	黒色	10Y 2/1	精緻、少し砂粒が混る	堅緻	-
	153	Ⅲ	b	碗	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	15.3	7.6	6	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻(白色粒をわずかに含む)	良好	見込みから一部胴部にかけて静止ナデ、底部外面へラ切り後高台貼り付け時の回転ナデ(横ナデ)
	154	Ⅲ	b	碗	脚部	土師器	坏Ⅱ	-	7	(1.9)	-	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 6/3	精緻(赤色粒混る)	良好	見込み静止ナデ
第32図	155	Ⅲ	b	甕?	胴部	須恵器	-	-	-	-	横ナデ後平行タタキ一部ナデ	平行タタキ一部格子タタキ	内面：灰褐色、外面：にぶい赤褐色	5YR 4/2, 5YR 5/4	精緻	堅緻	-
	156	Ⅳ	-	皿	口縁部～底部	陶磁器	-	(13.6)	6.4	2.6	口縁部に線釉が一部残存	表面剥落が著しく不明	淡黄色	2.5Y 8/4	精緻	不良	緑釉陶器
第34図	157	Ⅳ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.8	(2.5)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	158	Ⅳ	-	坏or坏	口縁部	土師器	-	-	-	(5.5)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	堅緻	-
	159	Ⅳ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	8.8	(2.1)	横ナデ	横ナデ	淡黄色	2.5Y 8/3	精緻	堅緻	底部付近ケズリ、底部外面へラ切り後ナデ
第35図	160	Ⅳ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(12.5)	6.4	3.9	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 6/4	精緻	良好	底部外面へラ切り?丁寧ナデ
	161	Ⅳ	-	坏or坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅱ	-	6	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	底部外面はへラ切り後ナデ
	162	Ⅳ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.2	(1.3)	横ナデ(回転ナデ)	横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ+へらナデ?
	163	Ⅳ	-	坏or皿	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.8	(1.5)	ナデ	へらナデ	にぶい橙色	7.5YR 7/4	精緻(赤色粒子をわずかに含む)	堅緻	-
	164	Ⅳ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.8	(2.0)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻(赤色粒がわずかに混る)	良好	刻書、底部外面へラ切り後丁寧ナデ、刻書
	165	Ⅳ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	6	(2.8)	横ナデ	横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ、回転?
	166	Ⅳ	-	坏?	底部	土師器	-	-	7.2	(1.2)	横ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	10YR 6/4	精緻	良好	底部外面回転へラ切り後ナデ
	167	Ⅳ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6	(1.3)	横ナデ	横ナデ、底部付近ケズリ後横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	168	Ⅳ	-	坏?	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.4	(1.3)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻(砂粒が混る)	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	169	Ⅳ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.8	(3.1)	横ナデ	横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻(赤色粒がわずかに混る)	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	170	Ⅳ	-	碗	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.6	(2.0)	横ナデ	横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	表面摩耗
	171	Ⅳ	-	碗	底部	土師器	坏Ⅱ	-	7	(2.6)	ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/6	白色粒が混る、軽石	良好	-
	172	Ⅳ	-	碗	脚部	土師器	坏Ⅱ	-	7.8	(2.2)	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	堅緻	見込み布目痕
	173	Ⅳ	-	碗	脚部～底部	土師器	坏Ⅲ	-	8.2	(4.3)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	見込み布目痕後ナデ
	174	Ⅳ	-	碗	脚部	土師器	-	-	6.2	(2.0)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	堅緻	見込み布目痕

第6表 古代遺構内出土遺物観察表（4）

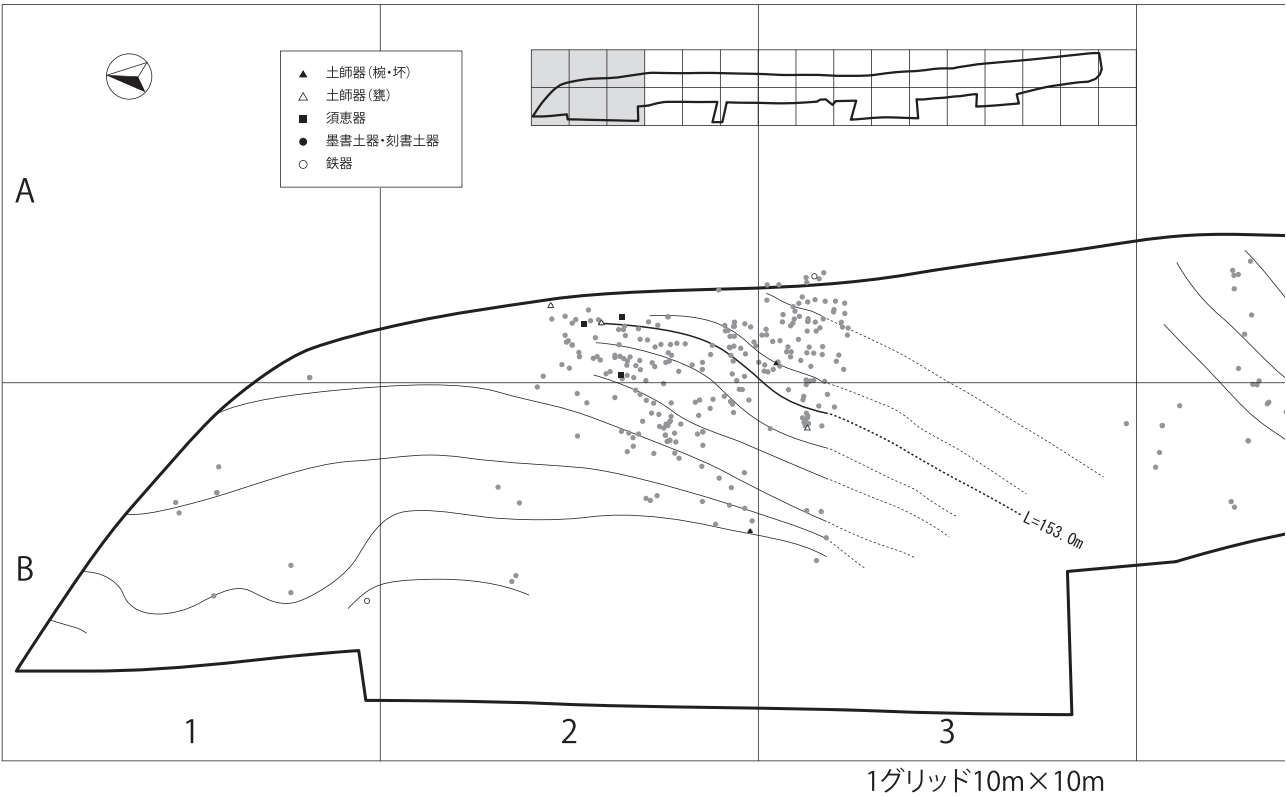
挿図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第35図	175	IV	-	杯or瓶	口縁部	土師器	-	(12.6	-	(3.9	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 7/4	精緻	良好	内黒あり
	176	IV	-	杯	口縁部	土師器	-	(10	-	(3.7	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	5YR 6/4	精緻	堅緻	-
	177	IV	-	杯or瓶	口縁部	土師器	-	(12.4	-	(4.1	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻(細砂粒をわずかに含む)	堅緻	墨書
	178	IV	-	杯or瓶	口縁部	土師器	-	(12	-	(3.2	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	墨書「下田」
	179	IV	-	杯or瓶	胴部	土師器	-	-	-	1.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	墨書
	180	IV	-	碗	脚部~底部	土師器	黒色A	-	9.4	(2.1	ミガキ(放射状)	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻(赤色粒がわずかに混る)	良好	内黒
	181	IV	-	碗	口縁部~胴部	土師器	黒色A	(15	-	(4.5	ミガキ	口縁部付近横ナデ、胴部ケズリ後ミガキ	浅黄橙色	10YR 1.7/1.10YR 8/4	精緻	良好	内黒
	182	IV	-	杯or瓶	口縁部	土師器	黒色A	(14.4	-	(3.2	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	7.5YR 5/4	精緻	堅緻	内黒
	183	IV	-	壺	底部	須恵器	-	-	6.8	(3.5	横ナデ	ナデ	灰色	N4	精緻	堅緻	-
	184	IV	-	壺	肩部	須恵器	-	-	-	-	指押さえ	タタキ、ナデ	緑灰色を基調に、肩部下位に暗青リブ色の自然粒がかかる	10YR 6/1	精緻(石英、長石がわずかに混る)	堅緻	-
第37図	186	Ⅲ	b	碗	口縁部~底部	土師器	坏Ⅱ	(14	7.1	5	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	187	Ⅲ	b	杯	完形品	土師器	坏Ⅱ	13.1	6	4.7	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	188	Ⅲ	b	杯	底部	土師器	坏Ⅱ	-	7.2	(3.1	横ナデ	横ナデ+ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	189	Ⅲ	b	甕	口縁部	土師器	甕Ⅰ	(24.4	胴径22.6	(10.3	縦方向にヘラケズリ	口縁部横ナデ、胴部へラによる縦方向のナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	内面外面ともに黒色のスス付着

第7表 古代遺構内出土石製品観察表

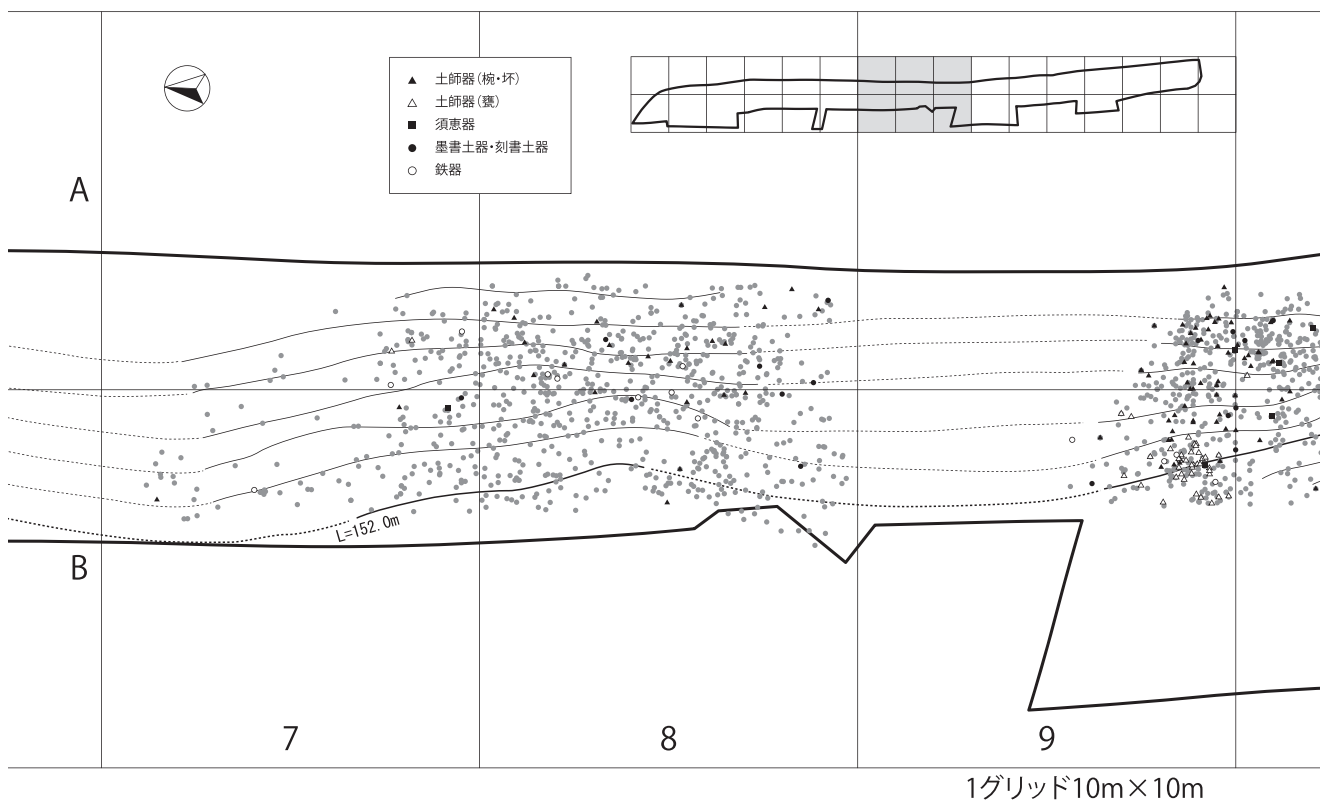
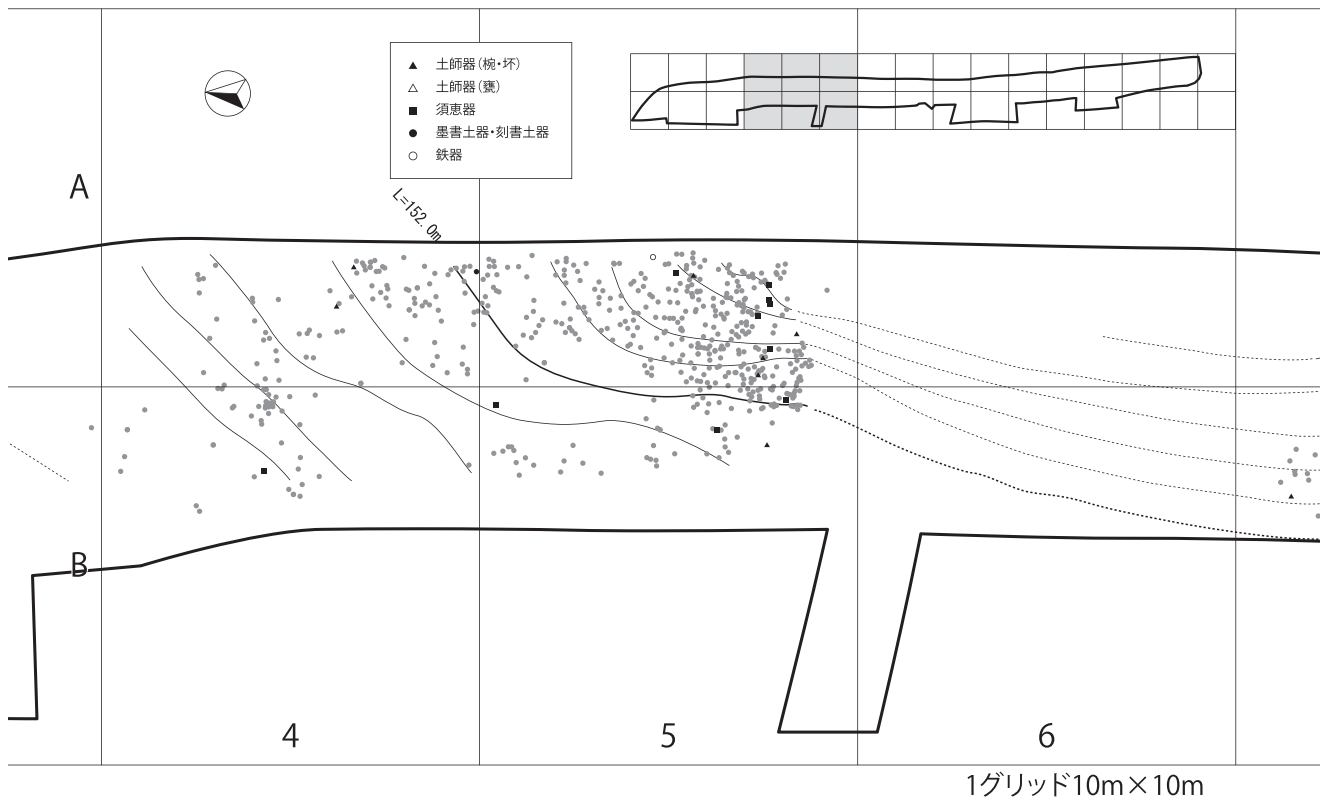
挿図番号	掲載番号	出土層		石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
		L1	L2							
第36図	185	-	-	軽石	支脚?	12.7	8.5	7	300	焼け赤変あり

第8表 古代遺構内出土製鉄関連遺物観察表

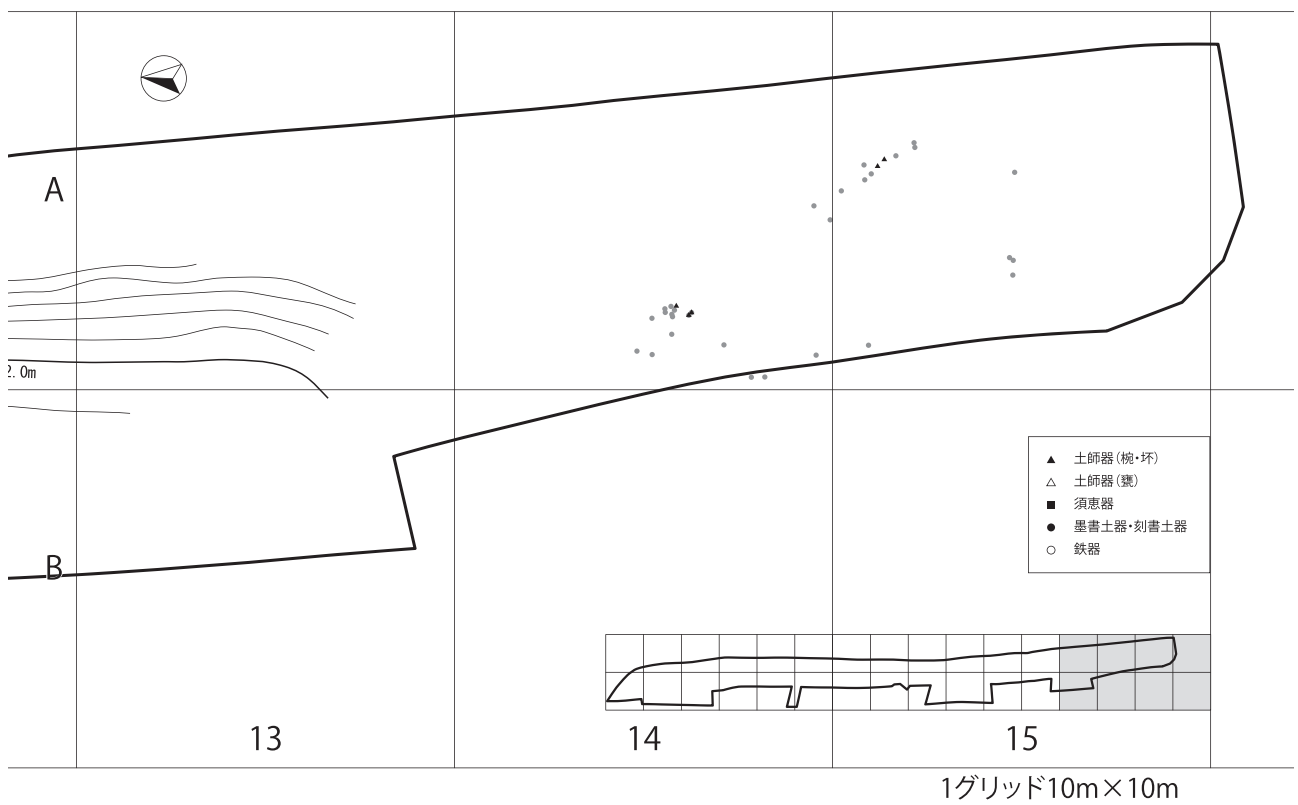
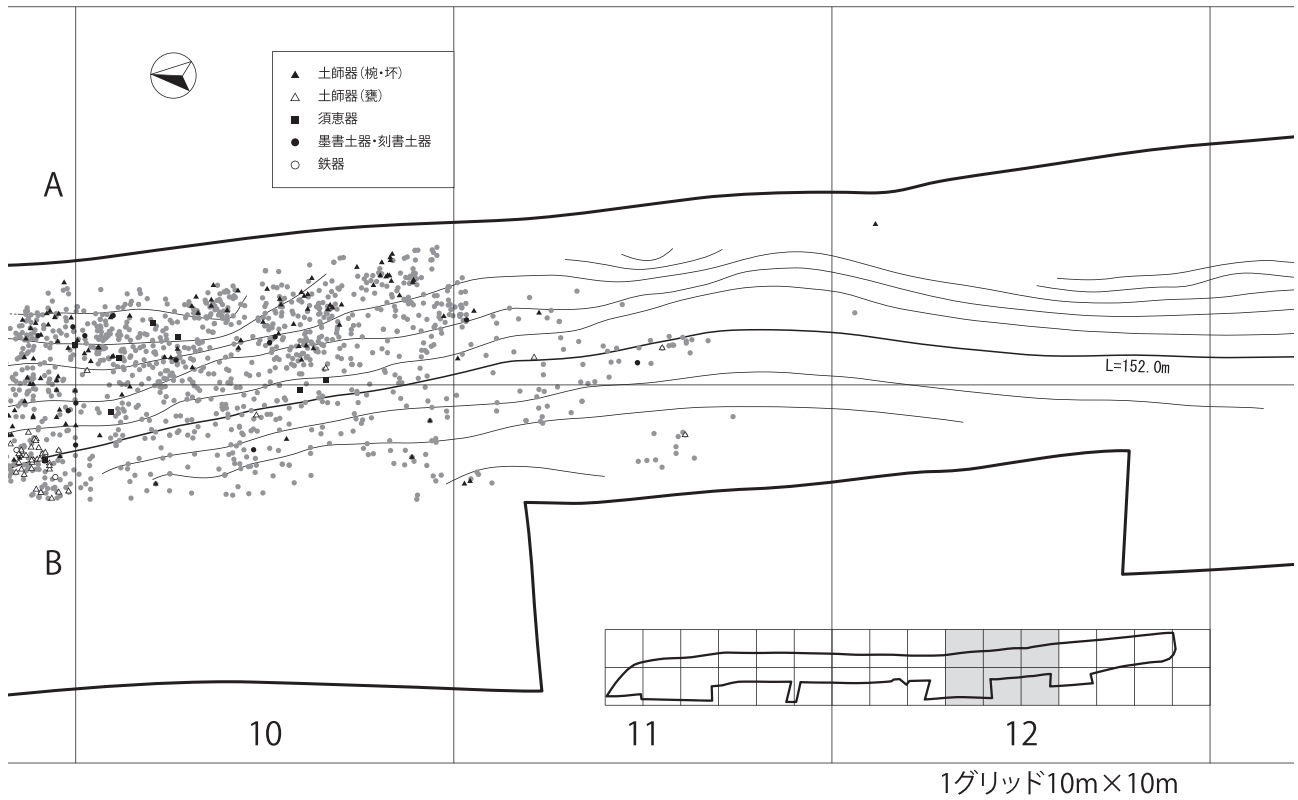
挿図番号	掲載番号	出土層		種別	器種	法量(cm)			重さ(g)	備考
		L1	L2			最大長	最大幅	最大厚		
第38図	190	-	-	鉄製品	埴型鉄滓	8.2	6.4	2.7	850	-
	191	-	-	鉄製品	埴型鉄滓	11	8.8	5.8	380	小割り炭の跡あり(長さ2cm厚さ1cm程度)



第41図 遺物出土状況図（1）



第42図 遺物出土状況図 (2)



第43図 遺物出土状況図 (3)

4 遺物

土師器坏Ⅰ類（第44図）

192～216は坏Ⅰ類に分類した土師器である。いずれも内外面胴部にはロクロによる回転ナデ調整痕、底部には回転ヘラ切り、もしくはヘラ起こし痕が見られる。192は内面に一部朱色顔料の塗布が見られる。外面には一部ススの付着が見られる。193は回転ナデ調整に加えて一部に指で凹凸をナデ消した痕が見られる。194は、胎土に小石が含まれ、ロクロの回転方向が分かる。195は丁寧な回転ナデ調整が施されている。196は口縁部が外側に向かって若干開く器形である。197は胴部から口縁部にかけて外反する。内外面の口縁部付近に一部赤色顔料の塗布が見られる。

198は内面に細かい回転ナデ調整跡が見られる。199は底部にヘラによる粗いナデ調整跡が見られる。200は内外面に丁寧な回転ナデ調整、底部にも丁寧なナデ調整が施される。201は胎土にやや小粒の小石を含み、全体的に歪んだ形状を呈する。202は外面にススの付着が見られる。また、細い工具で削って入れた沈線が見られる。203は胎土に小石を多く含む。そのため、表面も丁寧な回転ナデが施されているにもかかわらず粗い。外面には、回転ナデの後にヘラでのナデ調整痕が見られる。204は胴部から口縁部にかけて薄くなり、若干外側に向かって開く。205は内面の一部に赤色顔料の塗布が見られる。外面底部付近には、ヘラ調整痕が見られる。206は底部に何も調整が施されていない。207は内面全体及び外面の一部にススの付着が見られる。灯明皿として転用した可能性も考えられる。208は全体的に丁寧な回転ナデ調整が見られる。209は内面底部に指押し調整痕が見られる。210は外面底部付近に縦方向へのナデ調整痕が見られる。211は全体的に法量が小振りである。212は胎土に小石が多く混じり、表面が粗い。胴部にわずかに赤色顔料の塗布が見られる。213は内外面とも丁寧な回転ナデで調整されており、胎土も精緻である。214は内面にもみ痕と思われる痕が残る。215は外面底部付近をヘラで調整している。内面底部には、指で押したと思われる痕が残る。216は外面底部付近にヘラ切りの際にはみ出した粘土をナデ付けた痕が見られる。

土師器坏Ⅱ類（第45図）

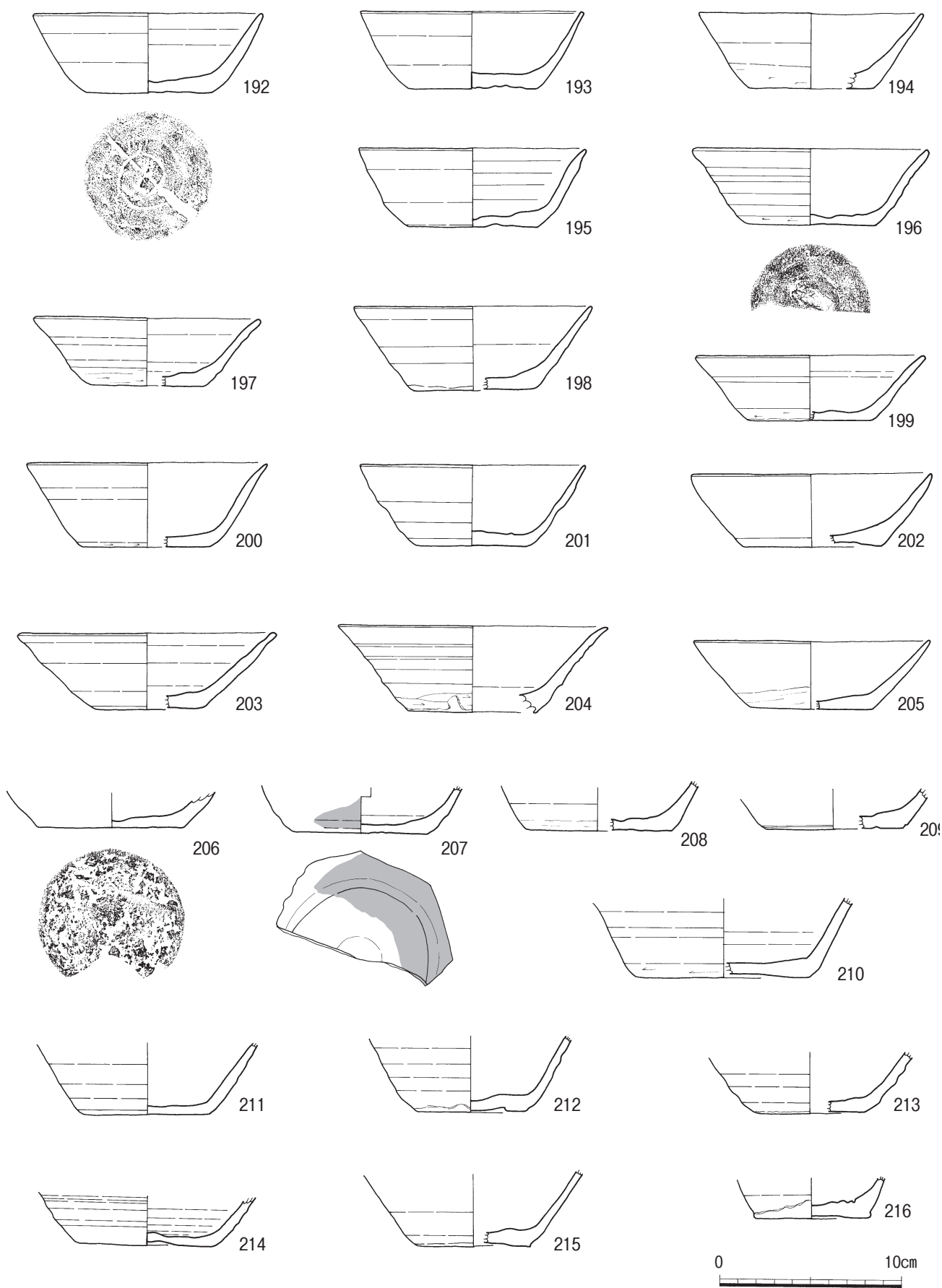
坏Ⅱ類は、30点を図化した。すべて内面、外面ともロクロによる回転ナデ調整が施され、底部は回転ヘラ切り底もしくはヘラ起こし底である。

217はほぼ完形で出土した。全体が被熱により赤褐色を呈し、内面、外面の回転ナデ調整痕が剥離している。胎土に砂粒を多く含む、底部はヘラ切りの際にナデ調整が施される。外面底部付近に一部ヘラ削り痕も見られる。218は内面・外面とも丁寧な回転ナデ調整、見込み部分に

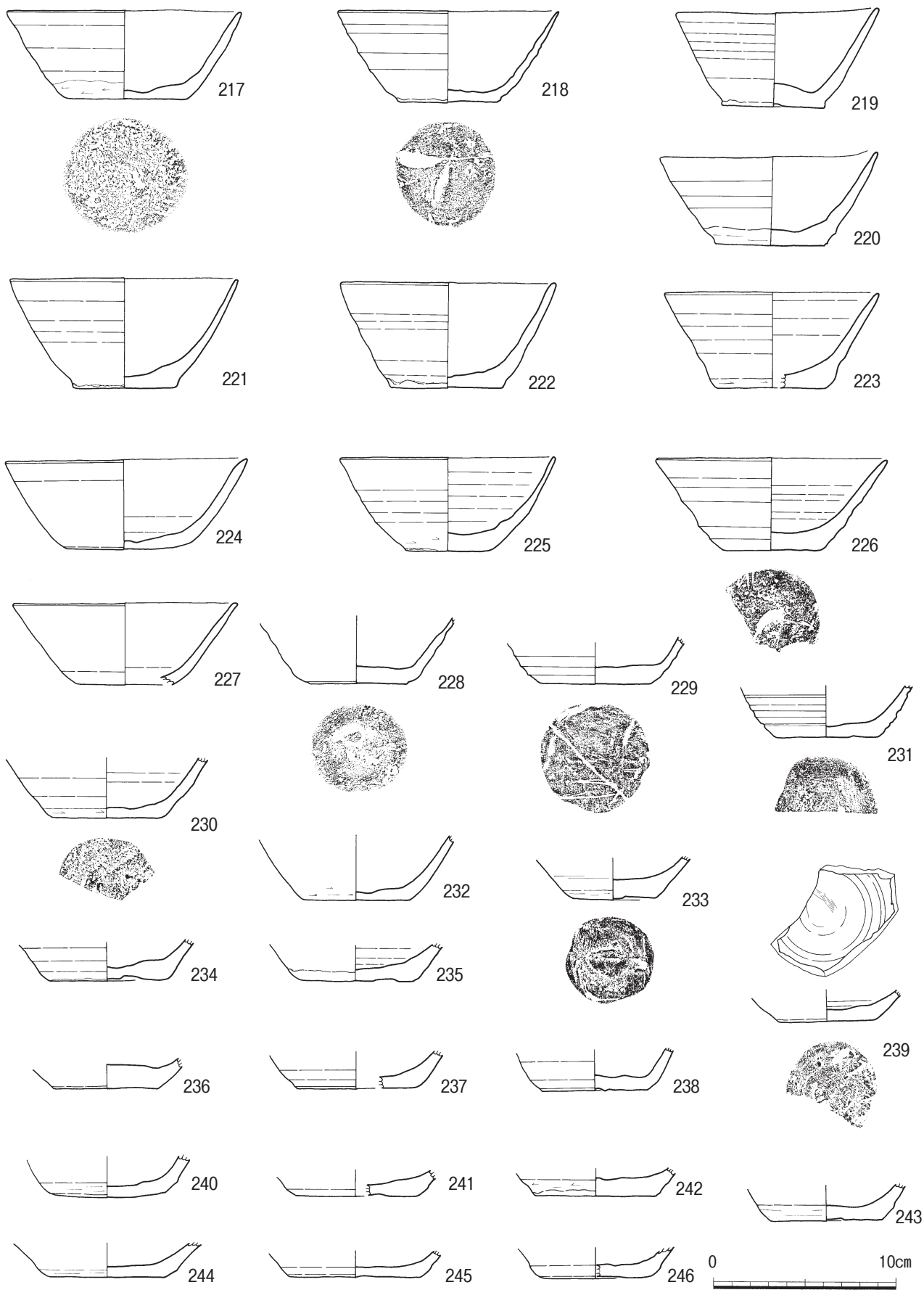
は静止ナデ調整が施される。底部にはヘラ痕が調整されずにそのまま残る。219は全体的に器形が歪んでいる。底部から口縁部に向かっての立ち上がりが急であり、底部にはナデ調整が施される。220は外面底部付近に荒いケズリ痕が見られる。底部にもヘラナデ調整が施されるが、ヘラ起こしの際についたヘラ痕は明瞭に残る。221は内面・外面とも丁寧な回転ナデ調整が施されるが、底部には何の調整も施されていない。内面底部付近にはもみ痕が残る。222は胎土に砂粒を多く含む。内面・外面とも丁寧な回転ナデ調整が施され、底部にもヘラナデ調整が施される。223は外面底部付近にケズリ痕が残るが、回転ナデにより丁寧に仕上げられている。底部にもナデ調整が施される。224は底部が回転ヘラ切りした後、ナデ調整が施される。見込み部分には静止ナデ調整痕が見られる。また、外面胴部から口縁部の一部に赤色顔料の塗布が見られる。225はほぼ完形で出土した。胎土に砂粒を多く含む。底部はヘラ切りした後、ナデ調整が施される。226は内面、外面とも強い横ナデ調整が施される。外面底部付近にはヘラ切りの際に外にはみ出した粘土をナデつけた痕が見られる。227は胎土に小石を含む。内面には回転ナデ調整の際、胎土に含まれた小石が動いて横線が付く。228は内面底部に静止ナデが施され、平らである。229は内面底部に指によるナデ調整痕が残る。230は外面底部付近にヘラケズリ痕が残る。231は外面に回転ナデ調整の際に、工具によって沈線が付けられる。232は胎土に砂粒を多く含む、粗い。233は内面底部が平らではなく凹凸が見られる。234は胎土に赤色の砂粒を含む。235は見込み部分にも回転ナデ調整が施される。236は底部に厚みがあり、237は外面に一部ススの付着が見られる。238は立ち上がりが急であり、全体的に器形がやや歪んでいる。239は底部の調整が粗い。240は外面底部付近のケズリ痕をナデ消した痕が見られる。241は底部の調整が粗くヘラ痕が残る。242は底部の径が大きめで直線的な立ち上がりである。243は底部にヘラ痕が残る。244は底部に丁寧なナデ調整が施される。245は内面底部にナデ調整が施され、平らであるが薄い。246は胎土に小石を多く含む粗い。内面にはもみ痕が残る。

土師器坏Ⅲ類（第46・47図）

坏Ⅲ類は37点を図化した。すべて内面、外面ともロクロによる回転ナデ調整、底部には回転ヘラ切り、もしくはヘラ起こし痕が見られる。247は胴部に工具による調整痕が見られる。248は外面底部付近のケズリ痕にナデ調整が施される。249は外面に一部ススの付着が見られる。250、251は口縁部がわずかに外反する。252は立ち上がりが緩やかで、口縁部にかけて薄くなる。253は底縁が他のものと比較して長い。254は底部が薄く、底には回転ヘラ切り痕が残る。255は底部にわずかに赤色顔



第44図 土師器坏Ⅰ類

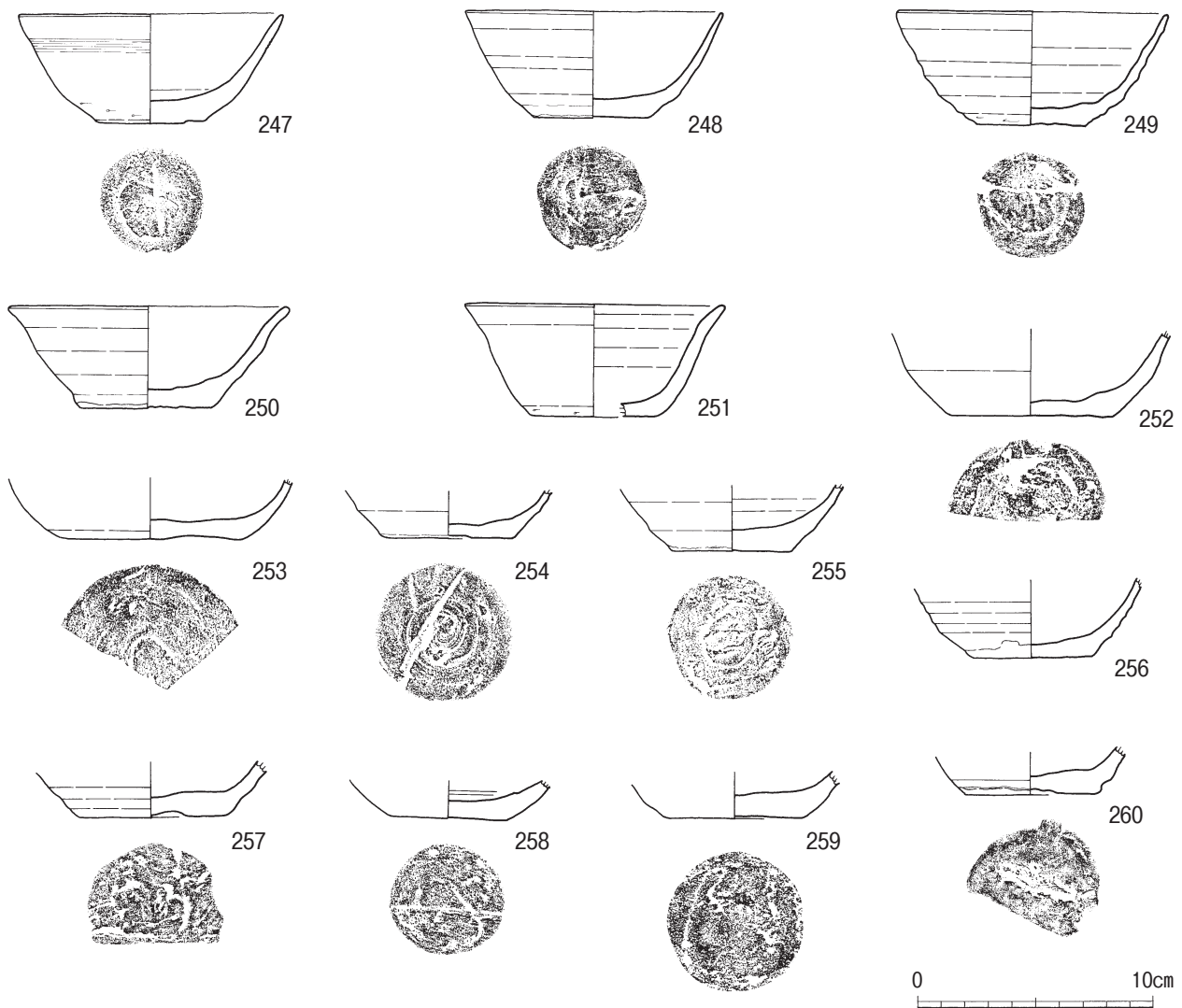


第45図 土師器坏Ⅱ類

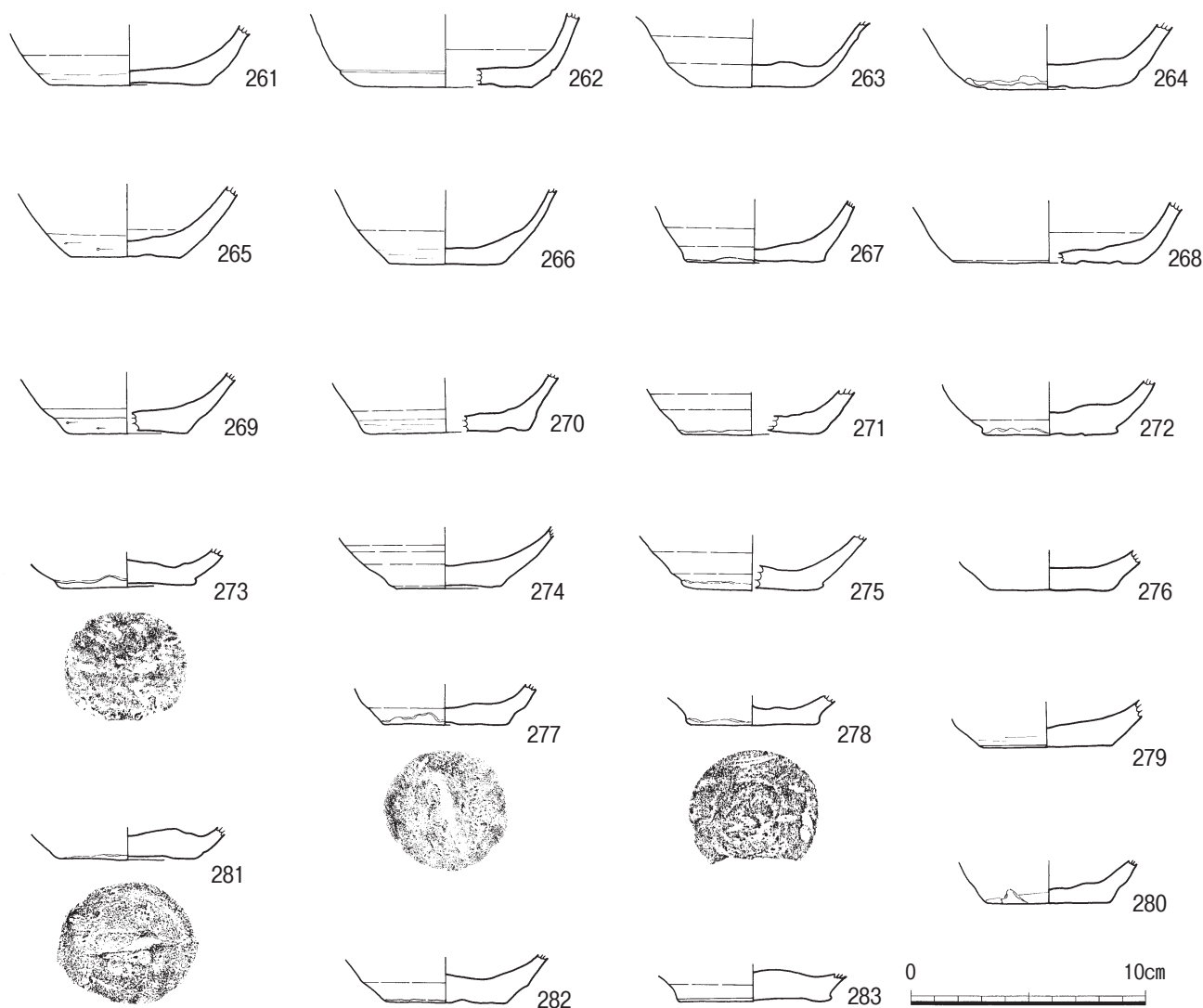
料が残る。256は外面にススの付着が見られる。257は底部に調整が施されておらず、粗い。258は見込み部分にススの付着が見られる。器面が摩滅している。259は底部にナデ調整が施され、ヘラ切り痕が消される。260は底部にヘラ痕が調整されずに残る。外面には、はみ出した粘土をナデ付けた痕が見られる。

261は底部にわずかに赤色顔料の塗布が見られる。262は底部の調整が粗く、はみ出した粘土塊の付着が見られる。263は底部に粗いナデ調整が見られる。264は胎土に砂粒を多く含む。見込み部分に静止ナデ、底部にはナデ調整が施されているものの、取り上げ時についたヘラ痕が残る。265は内面にススの付着が見られる。底部には回転ヘラ切り痕が残る。266は外面にわずかに赤色顔料の塗布が見られる。底部から胴部、内面に至るまで丁寧な回転ナデ調整が施される。267は外面底部付近にはみ出した粘土をナデ付けた痕が見られる。268は回転ヘラ切り底であり、その痕が調整されずに残る。269は外面底部付近のヘラケズリによる調整が粗い。270は被熱し

ているためか、内面・外面にススの付着がみられる。底部には静止ナデ調整が施されるが、粗い。271は内面底部が剥離している。胎土に小石を多く含む。272は見込み部分に指で押した痕が残る。底部にははみ出した粘土を整形し、高台のような形状を呈している。273は見込み部分が盛り上がっている。底部にはヘラ痕が調整されずに残る。274は見込み部分に静止ナデ調整が施される。底部は回転ヘラ切り底である。275は底部を調整した時にはみ出した粘土がナデ付けられ、高台のような形状になっている。276は内面底部にうすいススの付着が見られる。277は底部に丁寧なナデ調整が施されるが、ヘラ痕が明瞭に残る。278は底部を高台のような形状に仕上げている。279は外面の底部から胴部に一部赤色顔料の塗布が見られる。280は外面及び内面にうすい赤色顔料の塗布が見られる。281は底部の一部が極端に厚く仕上げられ、厚みが均一ではない。282は内面及び外面の一部にススの付着が見られる。283は見込み部分に指による静止ナデ調整痕が見られる。



第46図 土師器坏Ⅲ類 (1)



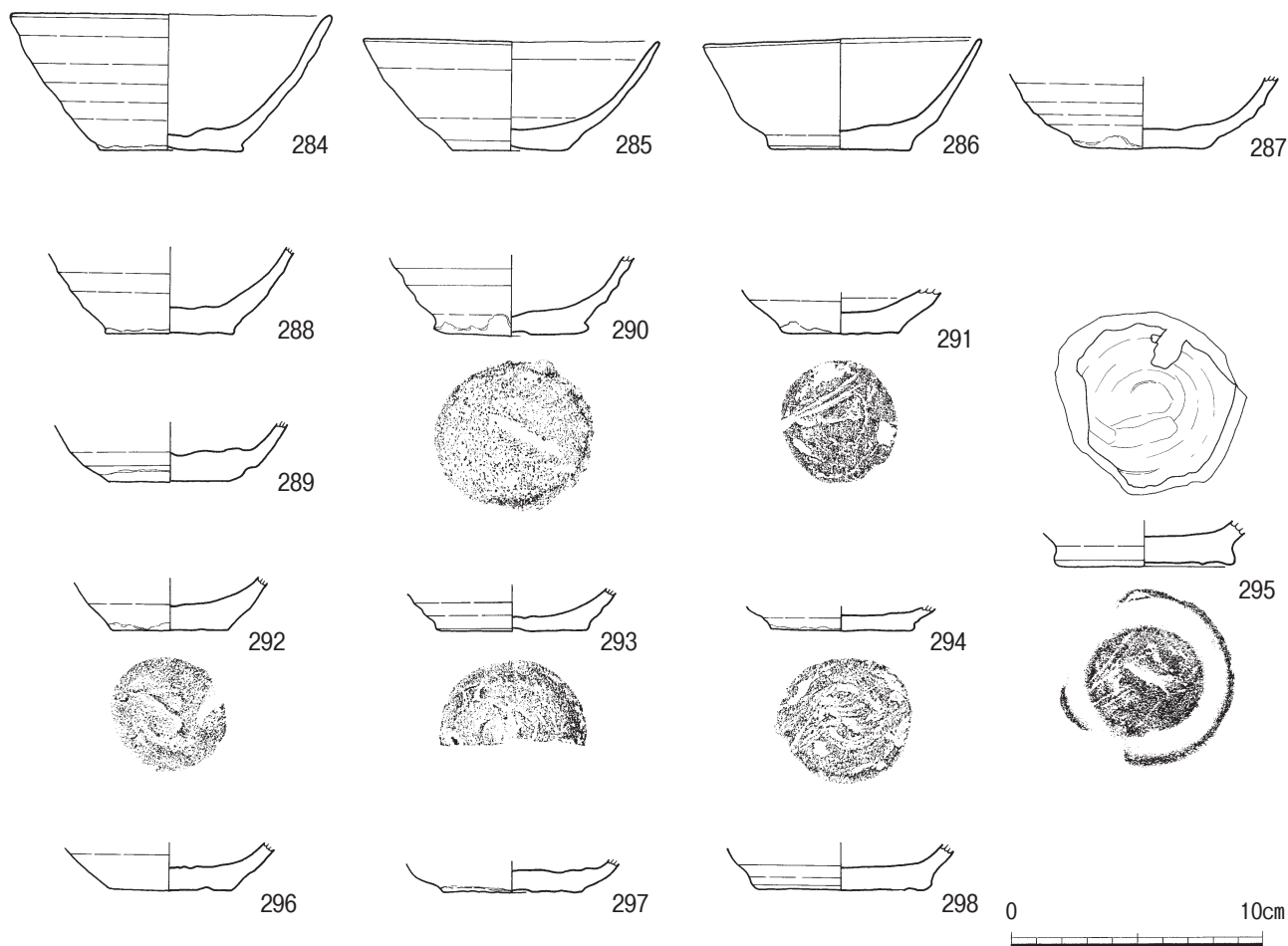
第47図 土師器坏Ⅲ類 (2)

土師器坏Ⅳ類 (第48図)

坏Ⅳ類は15点を図化した。すべて内面外面に回転ナデ調整が施され、底部はヘラ起こしもしくは回転ヘラ切り底となっている。

284は胎土に赤色粒を含む。外面は回転ナデの際に工具で強く押された痕が残る。285は、外面及び内面の一部に赤色顔料の塗布が見られる。285は、ほぼ完形品で出土した。全体的に形がゆがんでいる。286は内面底部に静止ナデ調整が施される。287は内面底部に静止ナデ調整が施される。288は底部に調整が施されてないため粗く、回転ヘラ切りの痕が明瞭に残る。289は底部に回転ナデ調整痕が残るが、内面外面の底部から胴部にかけてはその痕が静止ナデにより調整されている。290は見込み部分及び底にわずかに赤色顔料の付着が見られる。

291は底にわずかにススの付着が見られる。292は内面外面ともに丁寧な回転ナデ調整が施されるが、見込み部分にわずかに指押し調整痕が残る。293は底部が回転ヘラ切り底であるが静止ナデにより調整される。294は底部が回転ヘラ切り底になっておりその上が工具で粗くナデられる。295は底部に厚みがある。見込み部分にヘラを押しつけた痕が残る。296は底に何の調整も施されず、回転ヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。297は底部のはみ出した粘土をそのままナデ付けており、整形が粗い。298は外面に薄く赤色顔料の塗布が見られる。内面は静止ナデ調整が施されている。



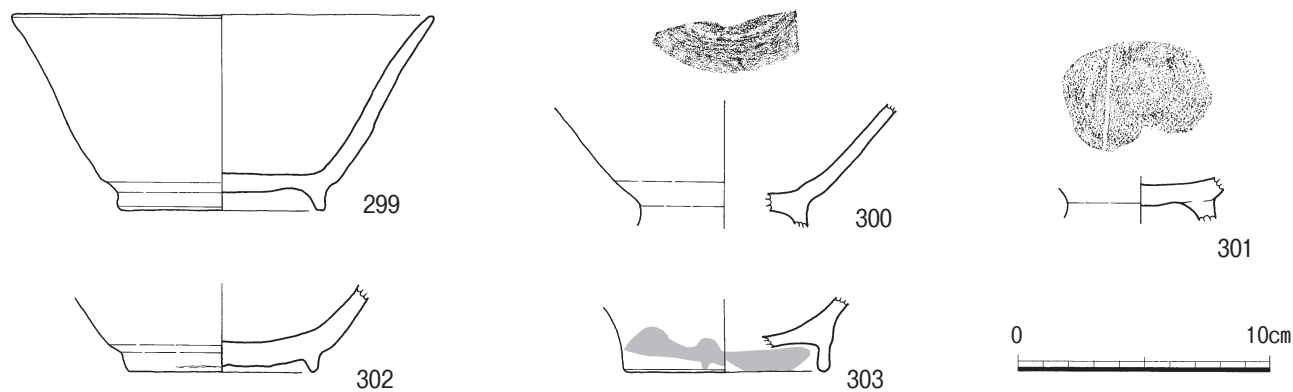
第48図 土師器坏Ⅳ類

土師器碗Ⅰ類（第49図）

碗Ⅰ類は、5点を図化した。299は全体的に薄い朱色を呈し、外面にススの付着が見られる。器形は胴部から口縁部にかけてわずかに外反する。300、301は内面底部に布目痕が見られる。302は布目痕の上に静止ナデによる

調整痕が見られる。

302は胎土に小石を多く含む。内面には静止ナデによる調整痕が見られる。303は外面底部付近にススの付着が見られる。



第49図 土師器碗Ⅰ類

土師器碗Ⅱ類（第50・51図）

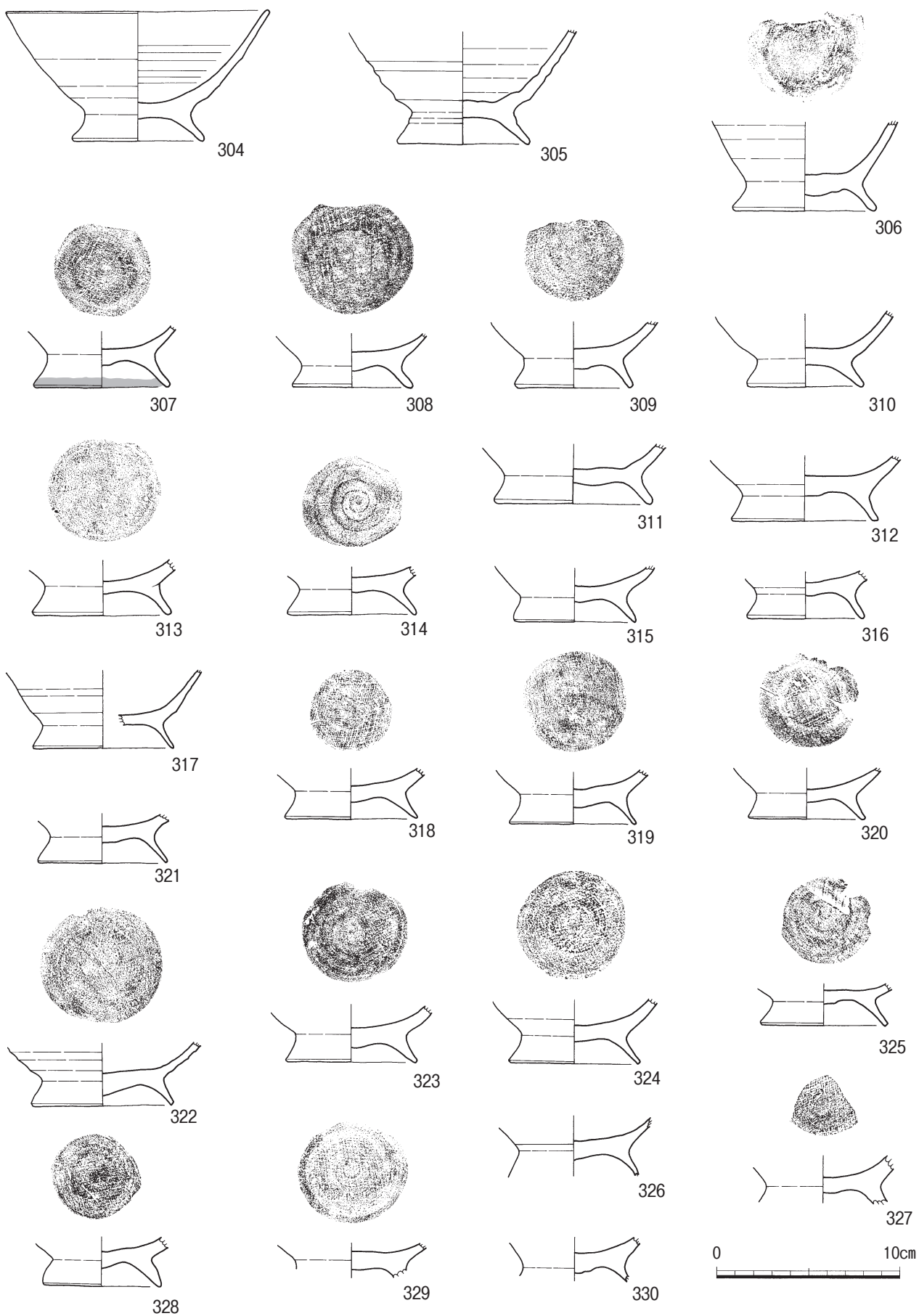
304は外面に薄い赤色顔料の塗布が見られる。内面、外面には紐状の粘土を巻き上げて整形し、ロクロで調整を施した際に生じた横線が多数見られる。305は、高台を後付けした痕が見られる。内外面とも丁寧な回転ナデで仕上げられる。306は胴部の一部にススの付着が見られる。307は内面底部に布目痕の上からヘラによるナデ調整が施される。308は内面底にススの付着が見られる。309は布目痕をヘラでナデ消した痕が見られる。310は内外面に横ナデ調整が見られ、外面底部近くにはヘラによるケズリ痕が見られる。311は内面底にヘラによる回転ナデ調整の際に生じた線が残る。布目痕の上に静止ナデ調整が見られる。312は内面底部に渦巻き状の調整痕が残る。313は内面底部に一部赤色顔料の塗布が見られる。314は見込み部分の布目痕が回転ナデ調整によりわずかに消されている。315は内面にわずかに赤色顔料の塗布が見られる。胎土にわずかに砂粒を含み、高台を付けた痕が残る。316は内面底部に静止ナデ調整が施され、布目痕がわずかに残る。317は外面底部付近に丁寧なヘラケズリ痕が残る。318は見込み部分に布目痕が明瞭に残るが、中心付近はナデ調整が見られる。319も同様に中心付近に静止ナデ調整が見られる。320は胎土に砂粒をわずかに含む。見込みの部分は布目痕の上に静止ナデ調整が施される。321は高台にわずかにススの付着及びヘラケズリによる調整痕が見られる。見込み部分が322と比較して広範囲に静止ナデ調整が施される。323は見込みの部分の布目痕が回転ナデ調整により消される。324は見込みの部分が布目痕の上に静止ナデ調整が施される。325は布目痕が明瞭に残る。326は見込み部分に工具によるナデ調整痕が見られる。327は高台内部にわずかに赤色顔料の塗布が見られる。328、329は見込み部分にわずかに静止ナデ調整痕が残る。330は胎土に砂粒を多く含むため表面がやや粗い。

331は胎土に砂粒をわずかに含む。高台を後から付けた痕跡が明瞭に残る。内面、外面とも丁寧な回転ナデで仕上げられている。332は見込み付近に指による圧痕が見られる。それに加え丁寧な静止ナデが施される。333は外面が粗いヘラケズリ調整が施され、内面は横ナデ調整が施される。334は内面、外面ともに回転ナデによる調整が施される。335は内面、外面とも回転ナデによる調整が施され、その上から所々に指ナデ痕が見られる。見込み部分は静止ナデによる調整痕が見られる。336は内面に赤色顔料の塗布が見られる。内面底は静止ナデ調整が施される。また、外面底の凸部にナデ調整痕が見られる。337は胎土に砂粒をわずかに含む。338は高台が後付けされた痕跡が残る。皿付の部分が鋭利な形状を呈する。内面には布目痕、見込み部分は静止ナデによる調整が施される。339は見込み部分は静止ナデ、外面は横ナ

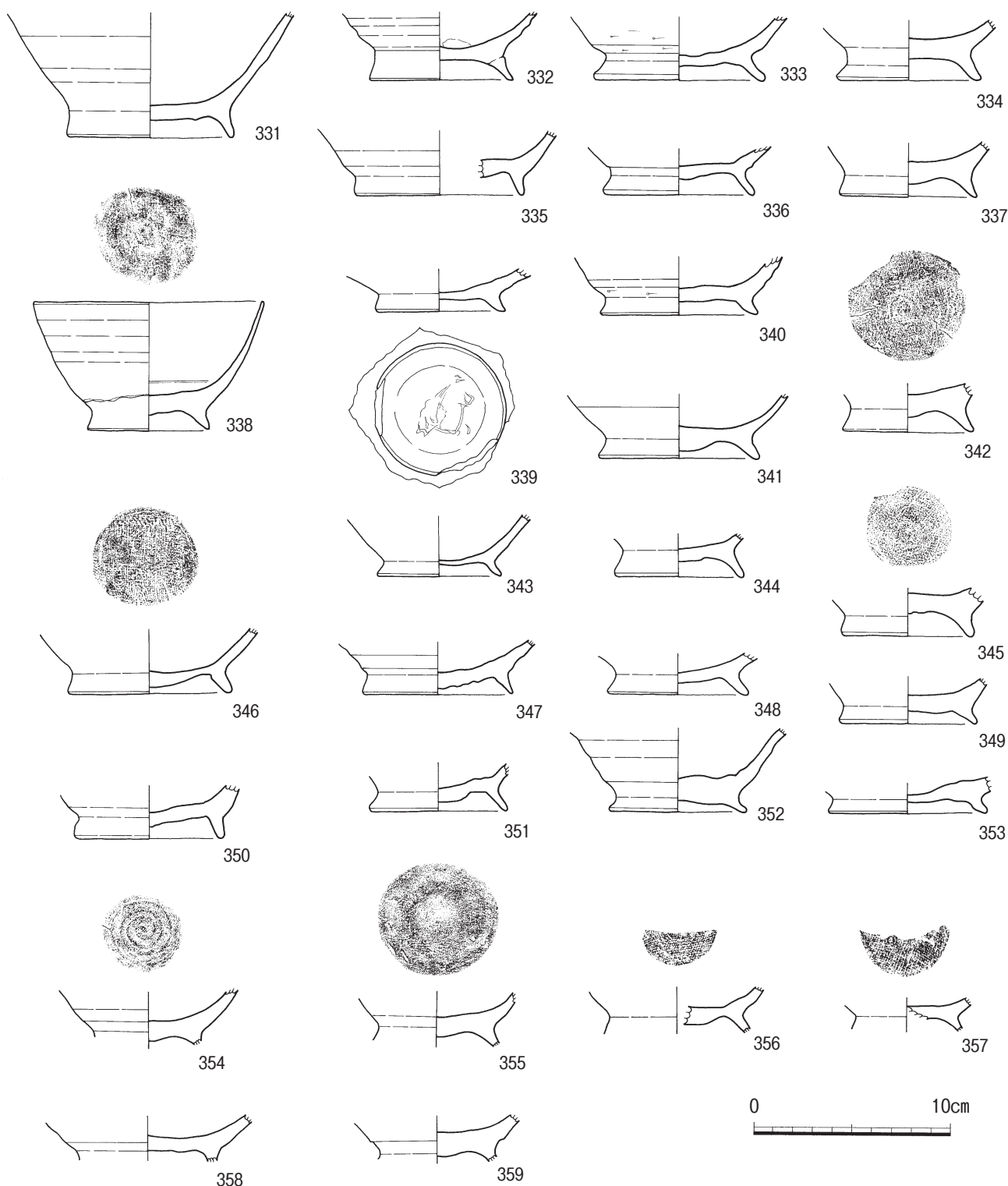
デ調整が施される。色調が橙色である。内面底には静止ナデ調整、底部かヘラ切り後にナデ調整が施される。内面底には文字のような文様も見られ、ヘラ書き文字の可能性もある。

341は胎土に砂粒を多く含む。全体明赤褐色を呈する。

342は内面底に布目痕が見られる。見込み部分には静止ナデが施される。343は全体が赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。外面底部付近にわずかにススの付着が見られる。344は見込み部分に指押し調整が施されている。345は内面底部の布目痕を静止ナデ調整により消されている。346は内面底に布目痕が明瞭に残る。立ち上がりに歪みが見られる。底部は凸状に張り出しており、仕上げも粗い。347は外面にヘラ状の工具で丁寧な回転ナデ調整が施される。内面は粗く調整痕が見られない。使用による摩滅の可能性も考えられる。胎土に砂粒を多く含む。348は底部にヘラ切り痕ナデ消した痕が明瞭に残る。349は内面にススの付着が見られる。350、351は見込み部分に指による圧痕が見られる。352は見込み部分に静止ナデ調整が施され、一部に赤色顔料の塗布が見られる。高台の高さが他の遺物と比較して低い。353は胎土に赤色粒、白色粒を多く含む。内面はにぶい赤褐色を呈し、外面には一部ススの付着が見られる。354は内面に布目痕が見られるが、見込み部分は回転横ナデが施される。355も布目痕が見られるが大部分が静止ナデにより消され、わずかに痕跡が残る。356は内面、外面とも丁寧な回転ナデ調整で仕上げられる。357は見込み部分にわずかにススの付着が見られる。胎土に砂粒をわずかに含む。358は内面にわずかに赤色顔料の塗布が見られる。胎土に小石が混じり、見込み部分には静止ナデ痕が残る。359は見込み部分に粗い静止ナデ調整が施され、その際についたと思われる線状のキズが残る。



第50図 土師器碗Ⅱ類 (1)



第51図 土師器碗Ⅱ類 (2)

土師器碗Ⅲ類 (第52図)

360～363の4点は碗Ⅲ類に属する。360は胎土が粗く砂粒を多く含む。内面胴部は丁寧な回転ナデ調整が施されるが、見込み部分の調整は粗い。361は内面底部に布目痕が見られる。内面、外面とも丁寧な回転ナデにより

仕上げられる。362は底部中心付近の凸部が静止ナデによりつぶされている。胎土に砂粒がわずかに見られる。363は灰白色を呈する。高台を後付けした所に回転ヘラナデが施される。

土師器碗Ⅳ類（第52図）

364～367の4点は碗Ⅳ類に属する。364は底部が回転ヘラ切りの後静止ナデ調整が施される。高台外面に指で押した痕跡が見られる。365は底部にススの付着が見られ、ヘラ起こし痕をナデ消した際についたヘラナデ調整痕が残る。366は胎土が粗く砂粒が混じる。底部はヘラ起こしの際についたヘラ痕がナデ消されている。内面は回転ナデにより調整される。367は底にヘラ起こしの際についたヘラ痕が消されことなく明瞭に残る。一部にススの付着が見られる。

土師器口縁部片（第53図）

368～390は底部が欠損しているため、坏もしくは碗と分類できなかったもので、比較的残存状況の良いものを掲載する。

368, 369は内外面とも丁寧な回転ナデで仕上げられるが、回転ナデ整形をする際についた凹凸のヘラ調整痕が残る。なお、369は胎土が粗く砂粒を含む。370は口縁部の下部がわずかにくびれる。胎土に小石を含み、内面、外面ともに明赤褐色を呈する。371は丁寧な回転ナデで仕上げられる。厚さは薄く、外面に回転成形時についた凹凸が残る。372は焼成時にひずみが生じたのか、厚さが均一ではなく、胴部中央付近に厚みがある。373はロクロでの整形時に胎土に含まれていた小石の移動によってついた横線が残る。374は外面にススの付着が見られる。胎土に砂粒が多く含まれる。375は口縁部付近にススの付着が見られる。376は法量が小型で立ち上がりが急である。377は胎土に小石を多く含み、回転ナデ整形をする際についた凹凸の調整痕が胴部から底部にかけて多く残る。378, 379は丁寧な回転ナデ調整で内外面が仕上げられている。380は胴部に厚みがある。口縁部付近がわずかに外反する。381は胴部にヘラによる調整痕が残る。また全体的に熱の影響を受けてススの付着が見られる。特に内面の口縁部付近にススが濃く付着していることから、灯明皿として転用した可能性もある。

382は口縁部付近に赤色顔料がわずかに残る。383は内面に薄くススの付着が見られる。384は外面に糊痕が残る。385は内外面に薄い赤色顔料の塗布が見られる。386は焼成も良好で丁寧な回転ナデ調整により仕上げられる。底部付近に横ナデ痕が残る。387は口縁部付近がくびれ、外反する。胴部には回転ナデ調整の上に静止ナデ調整が施された痕が残る。388は小型である。胎土に砂粒を多く含むため回転ナデ調整は施されているものの、ざらざらしている。389は内外面に薄い赤色顔料の塗布が見られる。口縁部がわずかに外反する。390は胴部に丸みがなく直線的な立ち上がりである。

土師皿（第54図）

皿は、径を算出できるものの中から12点を図化した。

391～395は皿Ⅰ類に属する。

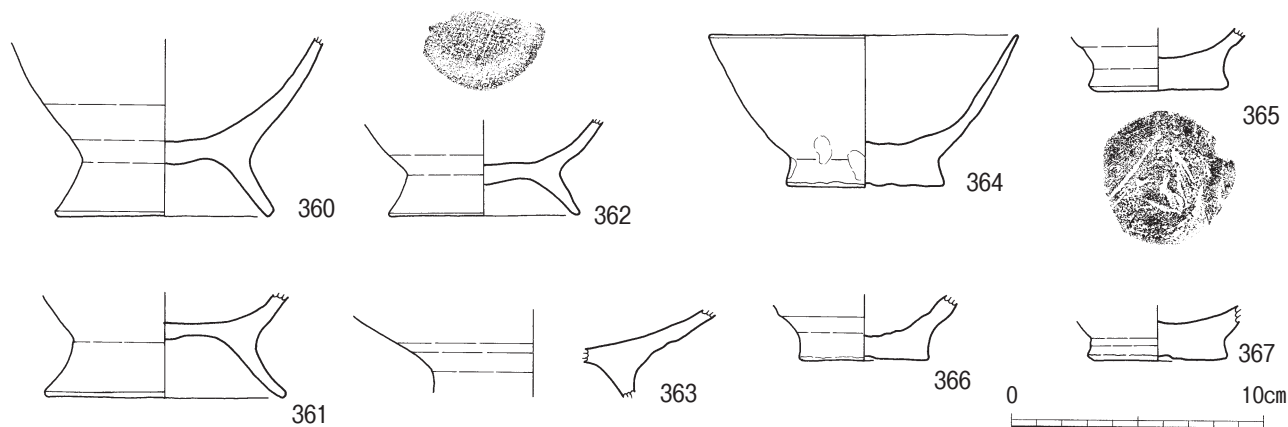
391は回転ヘラ切り底が見られる。392は糸切り底である。395は内面にススの付着が見られる。外面胴部には、一部指ナデ痕が残る。393は胎土に小石を含み、表面に凹凸が見られる。394は底にヘラによる静止ナデ痕が見られる。

396～402は高台を持ち、皿Ⅱ類に属する。396は見込み部分に静止ナデ痕が見られる。外面は黒褐色を呈する。

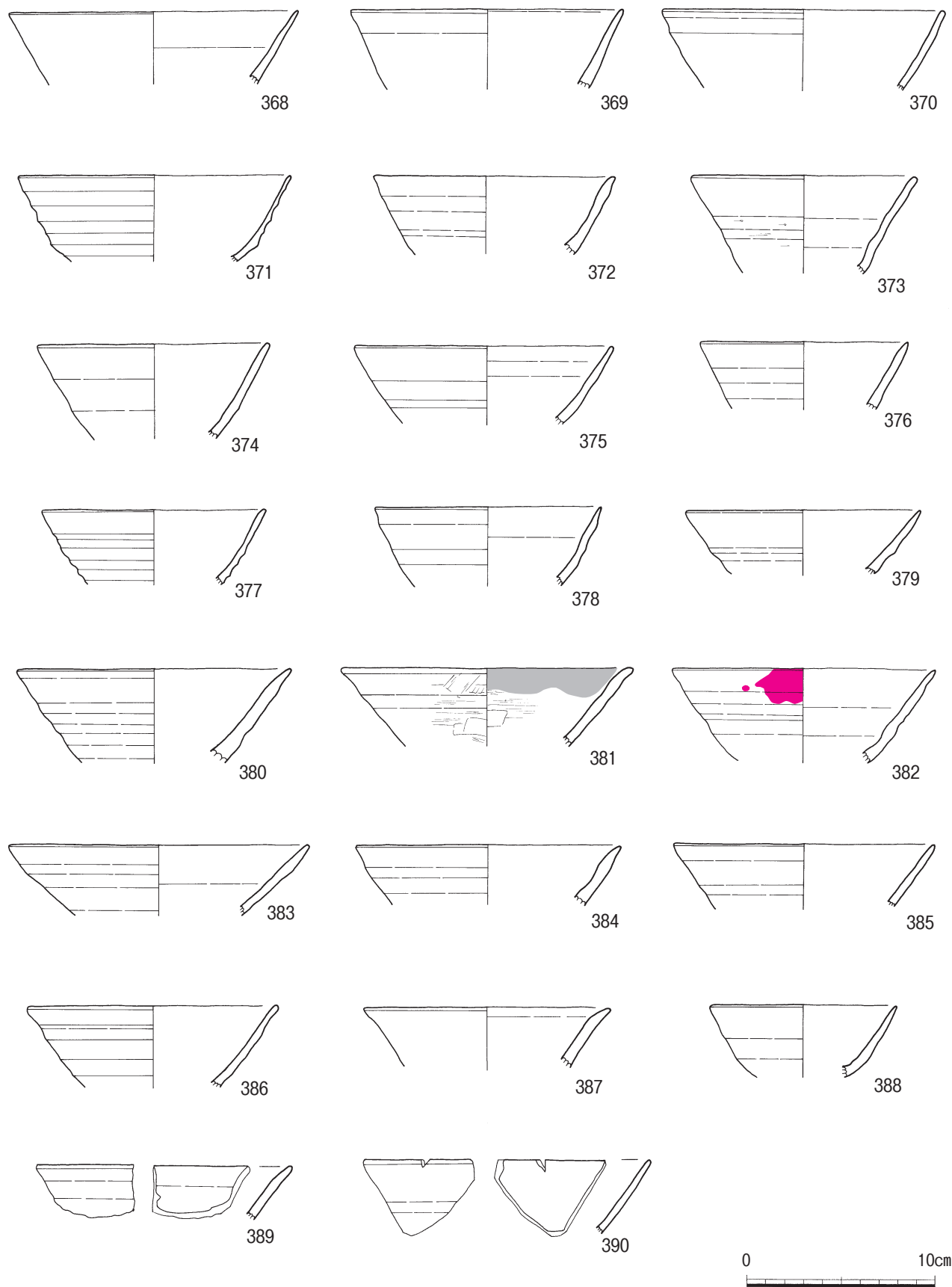
397は内面、外面に帯状にススが付着する。見込み部分には削り痕が残る。398は脚部を後付けした跡が明瞭に残る。399, 400は全体的に赤橙色を呈する。いずれも胎土には小石が多く混じる。また、400は内面中央付近に静止ナデによる調整痕が見られる。401は内面に一部ススの付着が見られる。402は内面底部に不規則な静止ナデによる調整痕が見られる。

黒色土器（第55図）

403～426は黒色土器の坏または碗、鉢の中から残存状況の良好なものを25点図化した。すべて内面のみ黒色であり、黒色土器A類に属する。403～417は器形が碗Ⅱ類に属する。403は胎土にわずかに砂粒が残る。



第52図 土師器碗Ⅲ, Ⅳ類



第53図 土師器口縁部

見込み部分はミガキによる調整痕、高台の付け根部分に指押し調整痕が残る。404は胎土に砂粒を多く含み表面が粗い。外面に一部ススの付着が見られる。405は碗Ⅱ類に属する。内面には斜め方向のミガキが施される。高台部分と胴部の一部にススの付着が見られる。406は、高台を後付けし、継ぎ目を回転ナデにより消した痕が残る。407は内面はミガキ、外面は回転ナデ調整により丁寧に仕上げられる。408は内面はミガキ、外面は回転ナデ調整により丁寧に仕上げられる。409は内面が中央から口縁部に向かって放射状のミガキが施される。410は碗Ⅱ類に属する。大型で内面はミガキ、外面は回転横ナデにより丁寧に仕上げられる。411は高台底も黒色が一部残る。412は胎土に砂粒を多く含む。高台の付け根付近に後付けした時の継ぎ目の粘土をケズリ調整した痕跡が残る。413は内面に見込み部分から口縁部に向かって縦方向にミガキ調整が施される。414は内面が回転ケズリ調整が施される。脚部の貼り付けが甘く、割れが入っている。415は見込み部分中央が大きく凹み、その部分の器壁が薄い。416は内面底部に中心部から放射状に工具によるミガキ痕が残る。417は内面にあらゆる方向への工具によるミガキ痕が残る。418は器から皿Ⅱ類に属する。外面には赤色顔料の塗布、底部にはススの付着がいずれも若干残る。外面はハケ目によると思われる調整痕が観察される。419は見込み部分の表面が著しく欠損している。420は坏Ⅱ類に属する。内面は丁寧なミガキ調整が施される。底はへら起こしの痕をナデ消されている。外面下位にはケズリ痕、胴部にかけて回転横ナデ調

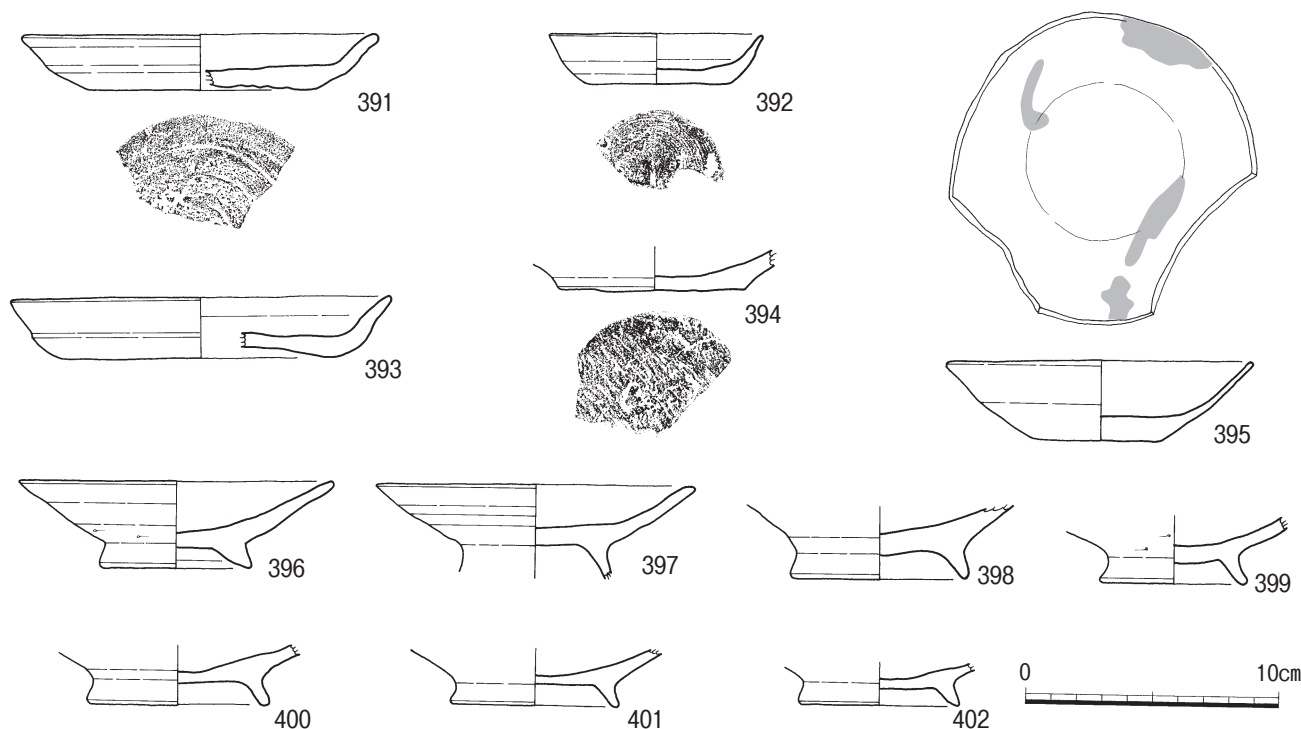
整が施される。421は内面の口縁部付近は横方向、下部は縦方向にミガキが施される。

422は内面が421と同様の調整が施される。器型は口縁部付近の厚みが薄くなり、わずかに外反する。423は内面が横方向にナデられ、その後にミガキで調整される。外面は粗い横ナデで調整される。424は口縁部付近が直線的に立ち上がる。外面はケズリが施され、ミガキにより調整される。425は胎土に砂粒を含む。内面は横方向のミガキ、外面は粗いケズリ調整痕が見られる。426は鉢である。外面には横ナデと一部ケズリ痕が残る。

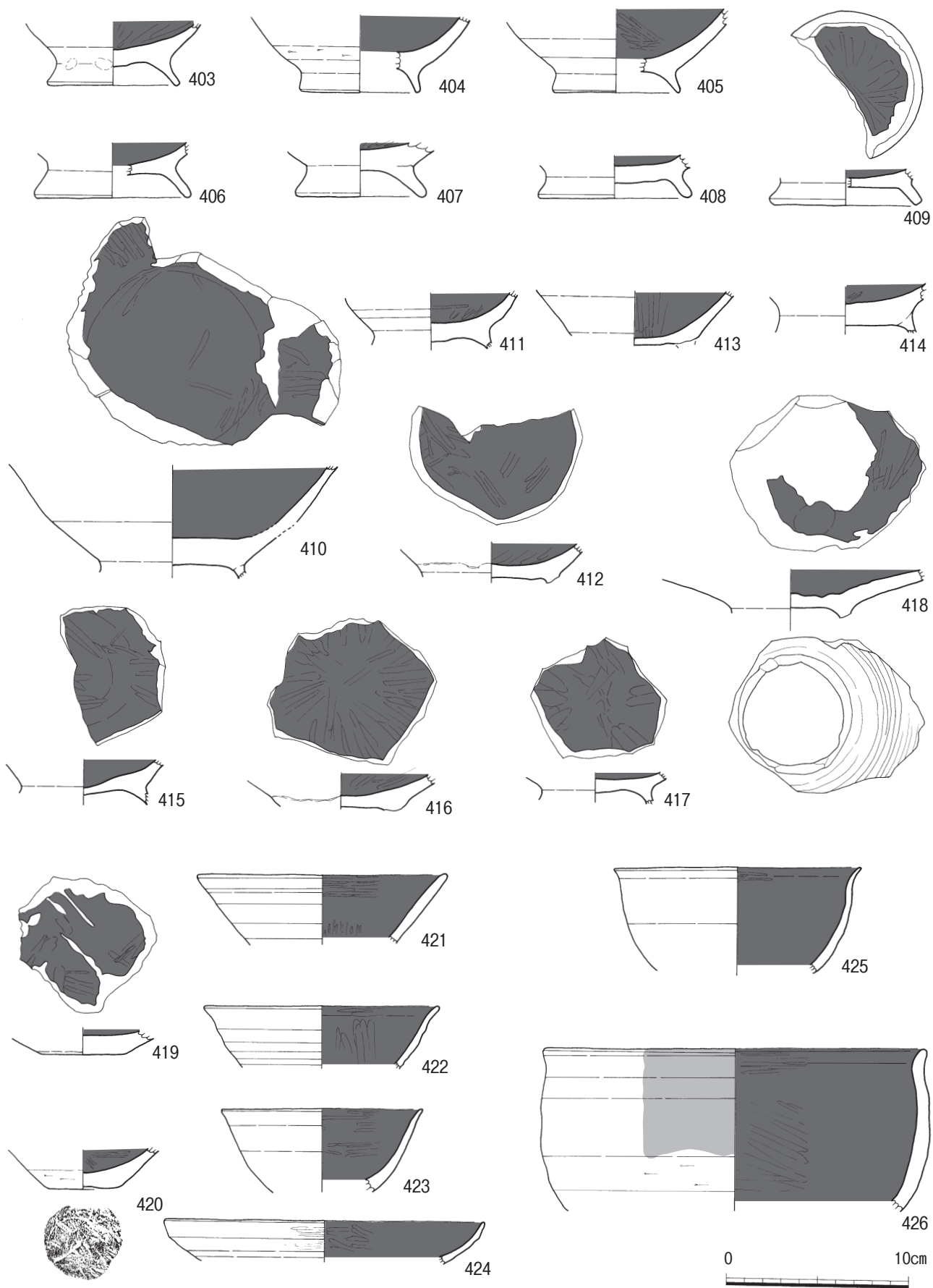
赤色土器（第56図）

427～440は器全体もしくは内面、外面全体に赤色顔料が施されたものである。427～435は高台の形状から碗Ⅱ類に属する。427は外面に回転ナデの後に横方向への静止ナデ、内面はミガキで調整される。428は白色粒の混じった砂粒を胎土に含むため粗い。内面は丁寧なミガキにより調整される。429は底にへら切り痕が残るが丁寧にナデ消されている。内面は丁寧なミガキが施される。430は碗Ⅱ類に属する。外面の高台部分は横ナデ、底部はミガキ、胴部から口縁部にかけてへらナデにより調整される。

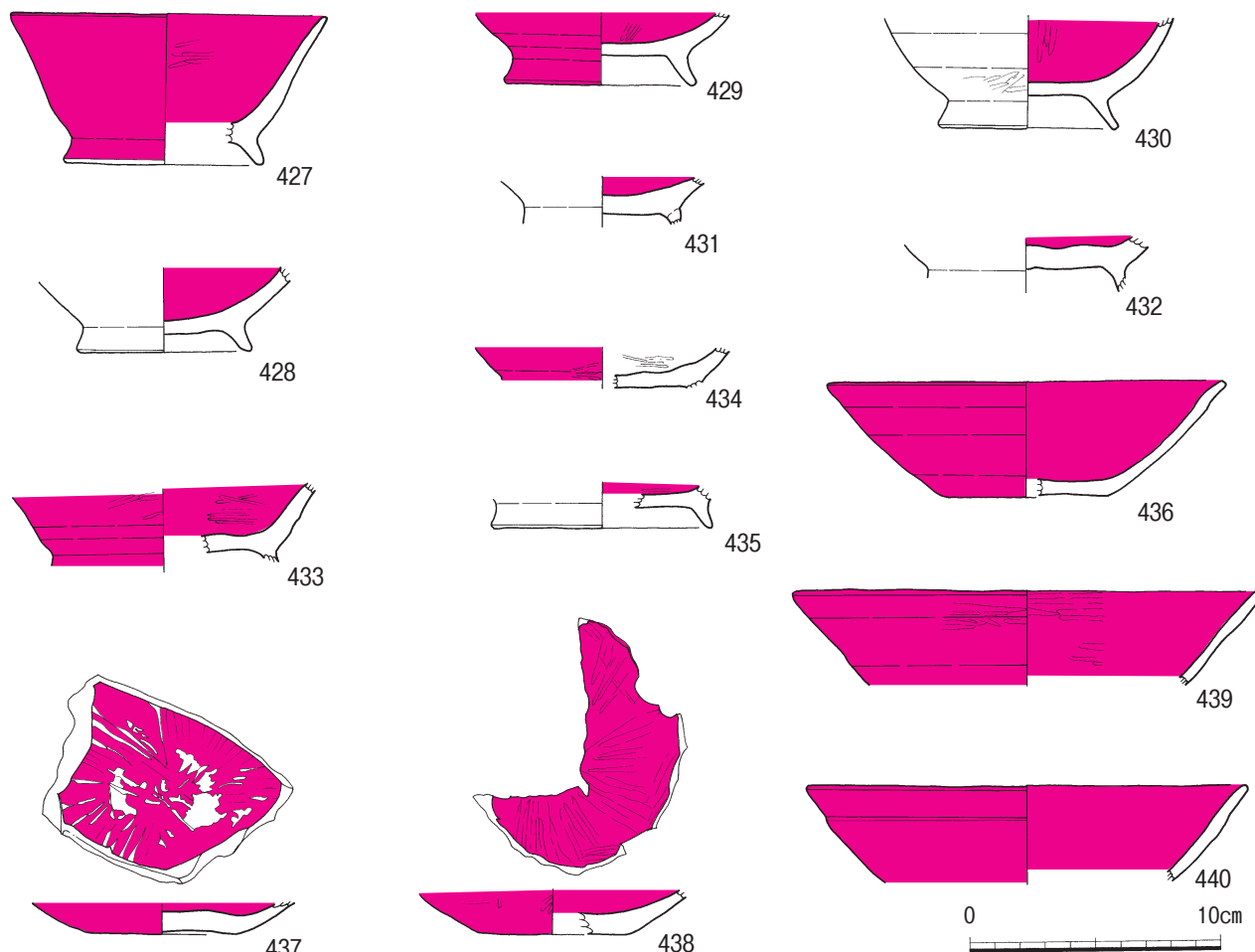
431は胎土に小石を含み粗い。内面に濃い赤色顔料の塗布がみられる。432は底部にススの付着が見られる。内面に赤色顔料が施されるが、剥落が著しい。433は内面外面とも丁寧なへらナデが施され、その後にミガキにより丁寧な調整が施される。434は内面、外面とも丁寧



第54図 土師器皿Ⅰ、Ⅱ類



第55图 黑色土器



第56図 赤色土器

なヘラミガキが施される。底部は回転ナデにより調整される。435は内面のみ赤色顔料が施される。外面は回転ナデ、内面はナデ調整後にミガキにより仕上げられる。436は大型の皿である。内面、外面とも回転ナデ調整痕が明瞭に残る。437、438はいずれも皿Ⅰ類に属する。見込みから口縁部にかけて放射状にミガキが施されるが、いずれも赤色顔料の剥落が著しい。439は内面はヘラミガキ、外面はヘラナデにより調整される。440は赤色顔料の剥落が著しい。内面、外面とも丁寧な回転ナデにより仕上げられる。

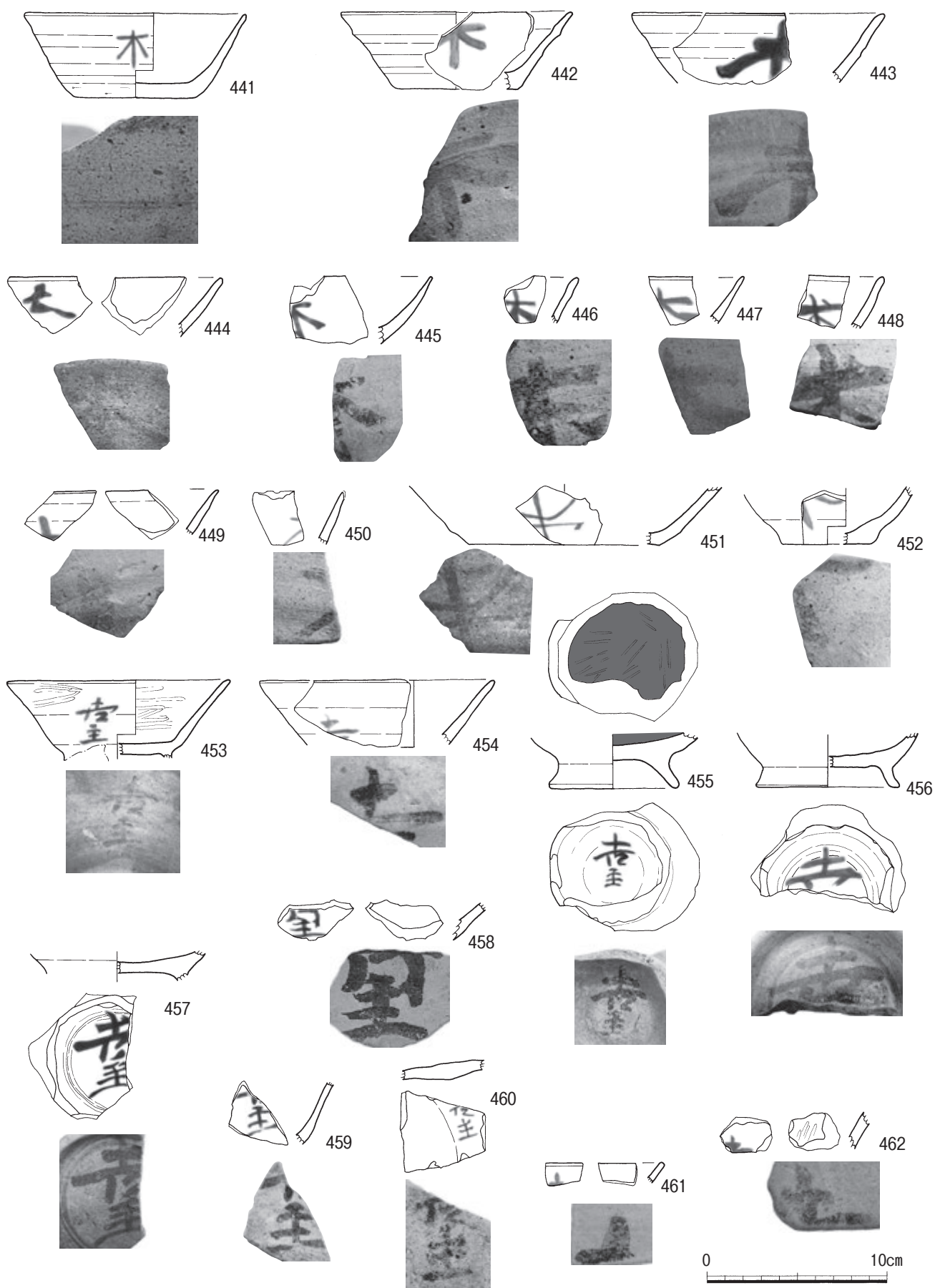
墨書土器（第57・58図）

遺構と関係のないと判断される遺物中に墨書土器が58点出土した。その中で文字の判読できるものについて赤外線写真も掲載する。なお、文字の判読にあたっては、ラサール学園教諭の永山修一氏に御教示をいただいた。

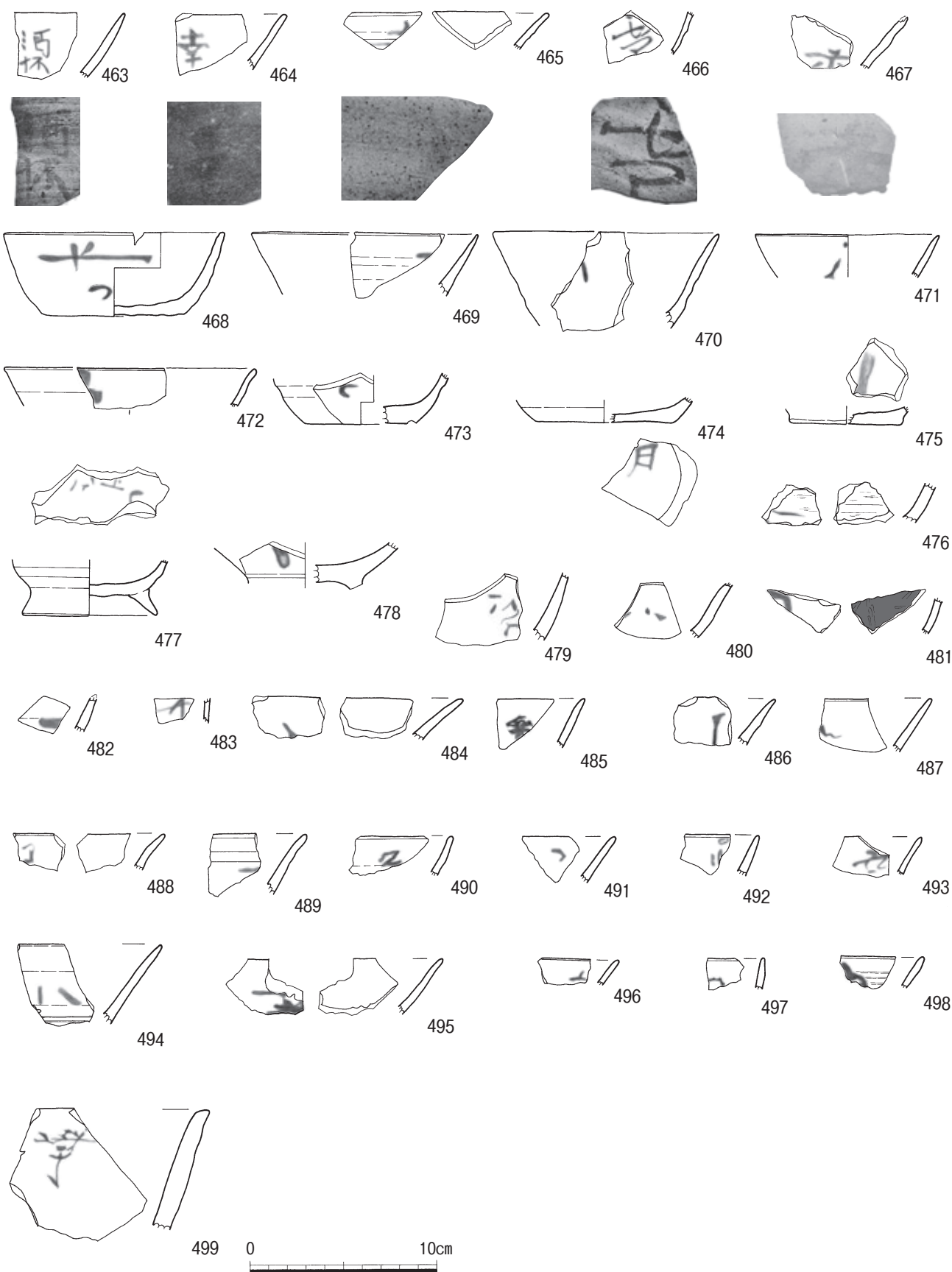
441～452は「木」もしくは「不」と判読できるものである。いずれも、内、外面に丁寧な回転ナデが施される。441、442は坏のⅠ類に分類される。441の底部はヘラこし後に丁寧にナデ調整が施され、ヘラ痕が残っている。

442は口縁部から体部まで残っている。しかし、上部の一部が欠損しているため確定はできないが、書体から「木」か「不」のいずれかの可能性が高い。443は明確に「木」と判読できる。

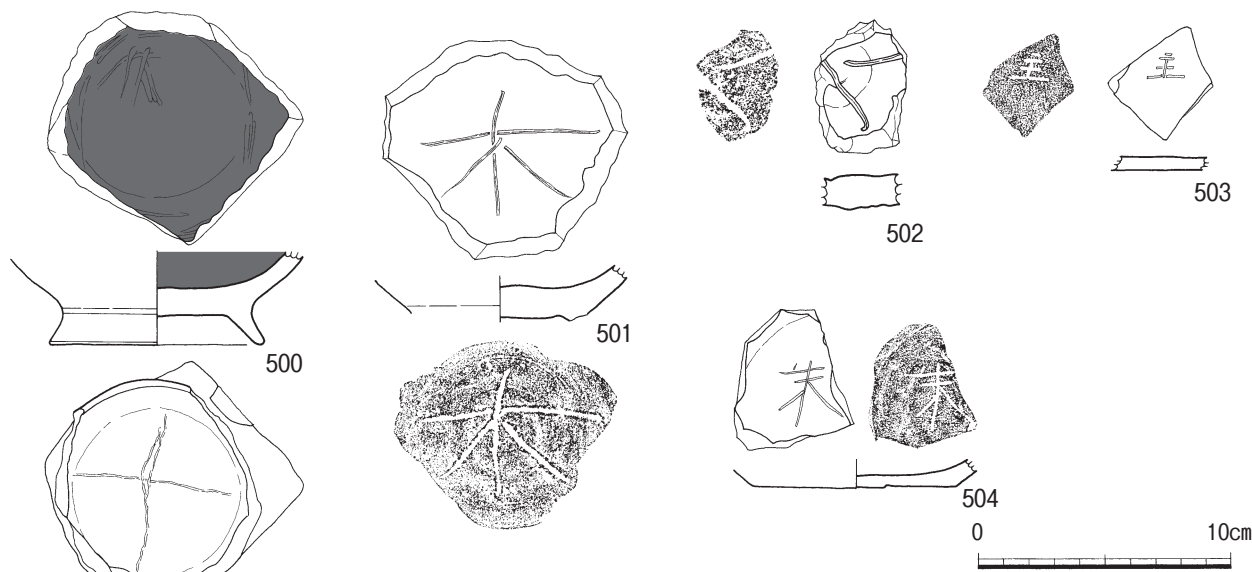
444は墨が明瞭に見えない。445は丁寧な楷書体で書かれているが半分が欠損している。「木」か「不」のいずれかの可能性が高い。446、447、448は墨の残存状況が良好である。449、450、451、452は文字部分の残存部分が少ないが、書体から「木」か「不」の可能性が高い。453～460は「吉主」「きちぬし」と判読できる。坏と碗があり、いずれも底部か胴部に書かれている。453は赤色顔料の塗布が見られる。内外面ともロクロによる回転ナデの後にヘラによるミガキ調整が見られる。454は上部しか残存していないので「吉」だけの可能性もある。455は内黒土師器であり碗Ⅱ類に属する。内面底部には丁寧なヘラ調整が見られる。456及び457は碗Ⅱ類に属し内面に赤色顔料の塗布が見られる。内面には丁寧なヘラミガキが見られる。文字は上部しか残っていないが、残存部分の文字の形が453や455とほぼ同じ形であることから「吉主」の可能性が高いと判断した。



第57図 墨書土器 (1)



第58図 墨書土器 (2)



第59図 刻書土器・ヘラ書き土器

457は明確に文字が判読できる。458は墨がきれいに残っている。459は「主」の部分のみが明瞭に残る。460は皿Ⅰ類に属する。底部に回転ヘラ切り痕が残る。461, 462は「吉」の上部であると考えられる。463は墨の残存状況は良好ではないが、「酒坏」と判読できる。464は「幸」と判読できる。267は断定できないが「吉」もしくは「吉主」の可能性が高い。465は「宅部」の可能性はある。467は「不」の可能性はある。468～499については文字の判読ができなかったため、図面を掲載するだけにとどめた。

刻書土器、ヘラ書き土器（第59図）

本遺跡からは、5点の刻書土器及びヘラ書き文字のある土器が出土した。500は刻書土器、501～504はヘラ書きである。

500は碗Ⅱ類に分類される黒色土器碗である。底部に鋭利なもので削ったと考えられる「十」の文字が見られる。

501と502は「木」と読める。502は下の部分しか残っていないが、はねの部分と筆跡が501と酷似している。504は「末」と判読できる。503は丁寧に書かれており、「主」と読める。

土師甕・鉢（第60・61図）

土師甕は調査区内から胴部小破片等を含め4740点出土し、内15点を図化した。

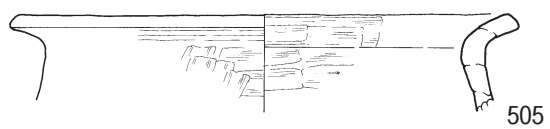
505～519は土師甕である。505, 506は口縁部の外反が強く胴部が張り内面ケズリが弱いⅠ類にあたる。505, 506は胴部内面のケズリはほとんどみられずナデ調整が

確認できる。507～515はⅡ類である。胴部内面のケズリ調整により口縁部内面の稜線が明瞭に確認でき、器壁が薄く、胴部は直線的に垂下する。508, 509は胴部外面に刷毛目痕が明瞭に残される。516～519は口縁部が短く、胴部内面ケズリは施されるものの全体的に器壁が厚い。516, 517は胴部内面の縦位のケズリは認められるものの口縁部内面の稜線を形成はしない緩やかな調整である。519は口縁部内面にのみススが付着している。520は胴部の傾きから鉢と判断した。口縁部は短く外反する。

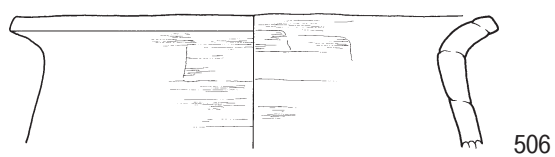
須恵器（第62図）

須恵器は調査区内から558点出土し、内13点を図化した。

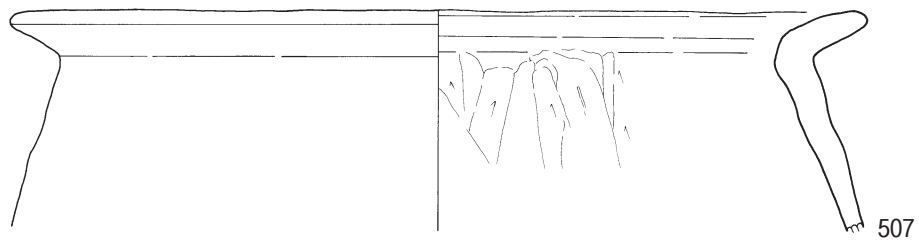
521, 522は須恵器の坏で521は体部が鋭角に立ちあがる。器高は3.2cm, 復元口径24.2cm, 復元底径20cmである。522は体部が斜めに直線的に立ちあがる。復元底径16cmである。523は須恵器碗で外開きの高台が付く。524は円盤状高台の坏もしくは小皿と考えられる。底部には糸切り痕が残る。525, 526は須恵器の坏もしくは碗の口縁部で、体部は斜めに直線的に立ちあがる。527は須恵器の皿で復元口径26.6cm, 復元底径約18cmである。528は須恵器の蓋である。つまみ部は欠損していて形状は不明で、径26cmである。529～531は須恵器・壺の口縁から肩部にかけての破片である。529は口縁部が逆くの字状の受け口状を呈する壺の口縁である。530, 531は口縁部が外反し、肩部に格子目タタキが残る甕の口縁から肩部片で、同一個体の可能性がある。532, 533は須恵器壺の底部片である。532は内面の仕上げが指頭により



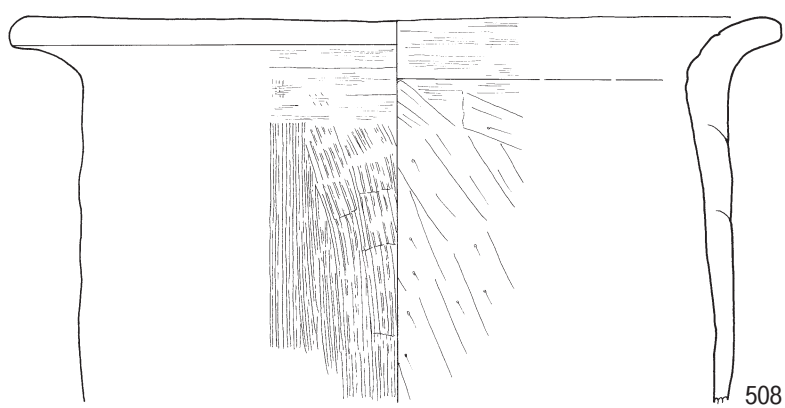
505



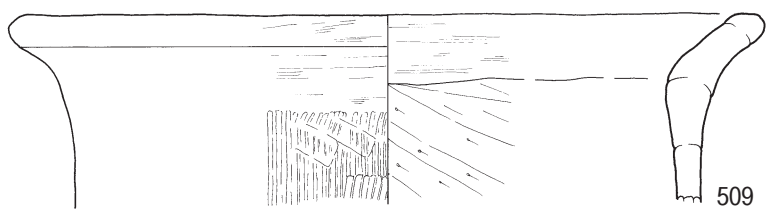
506



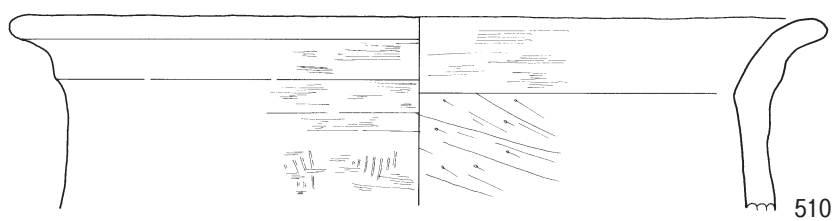
507



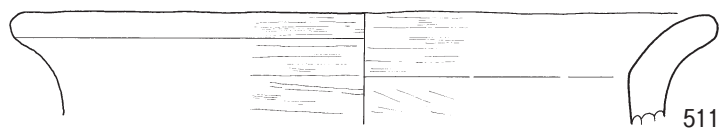
508



509



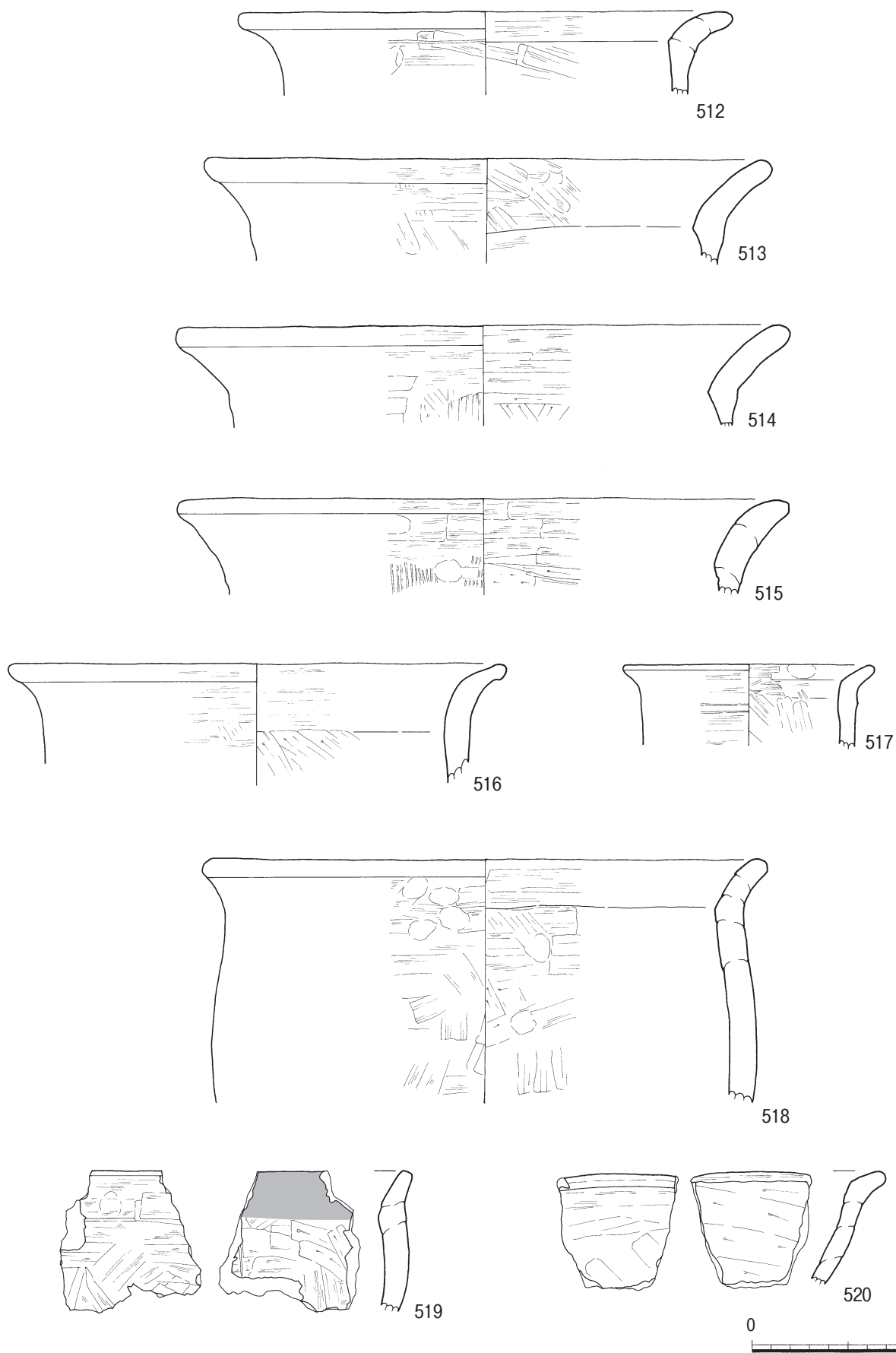
510



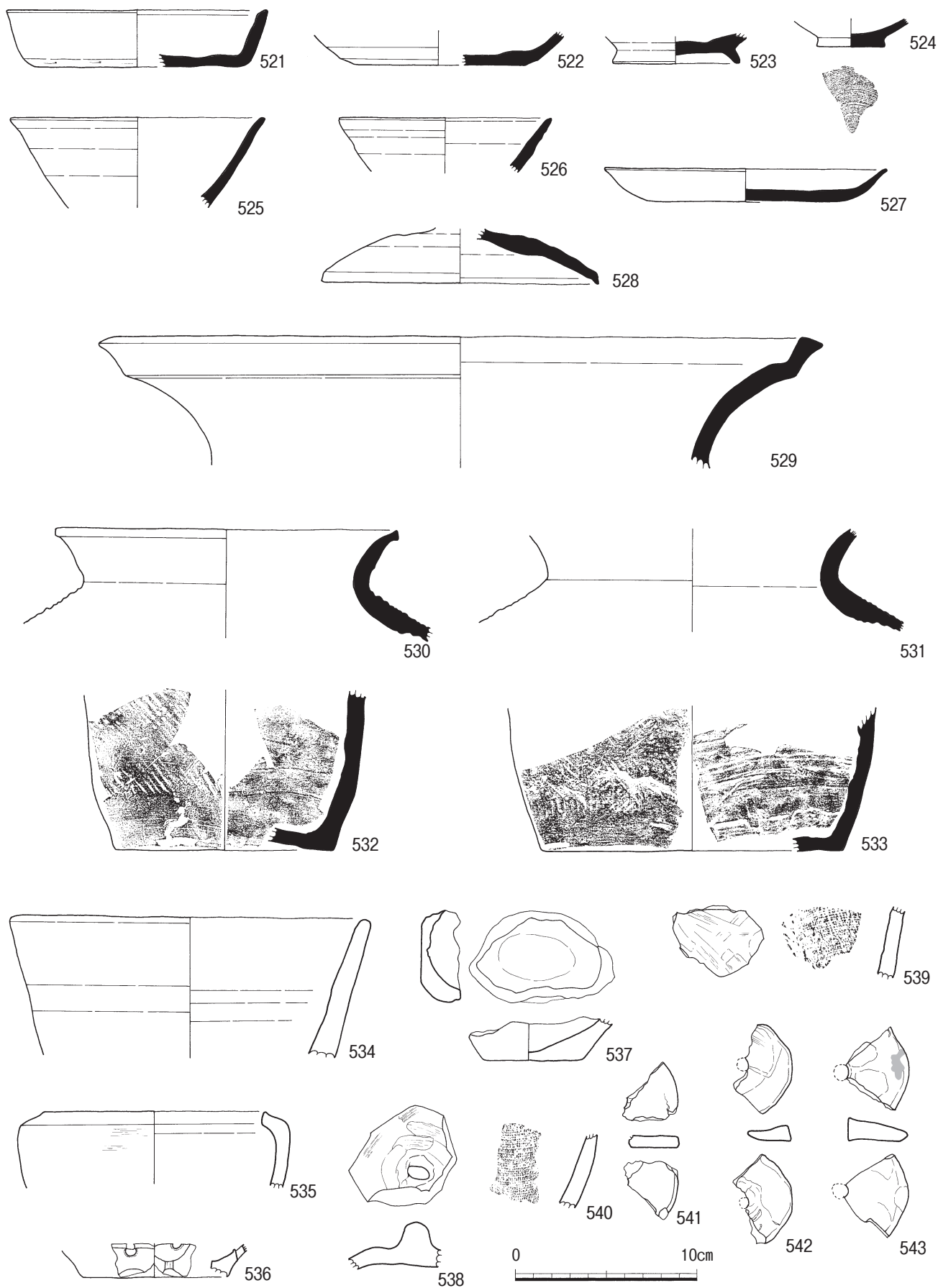
511



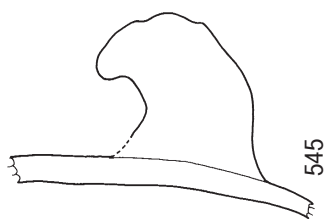
第60図 土師甕 (1)



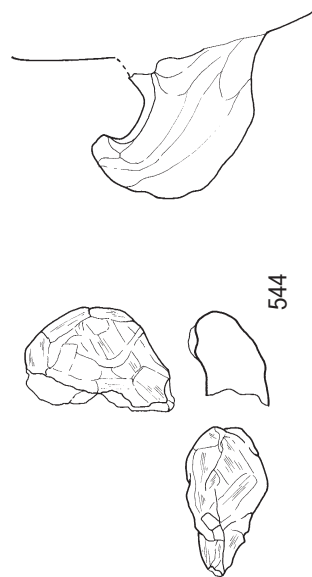
第61図 土師甕 (2)



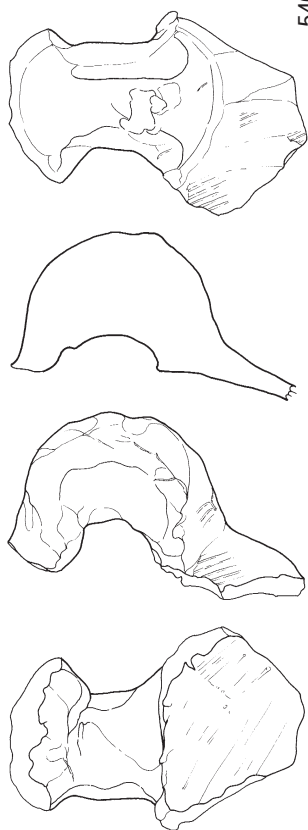
第62図 須恵器・その他の遺物（古代）



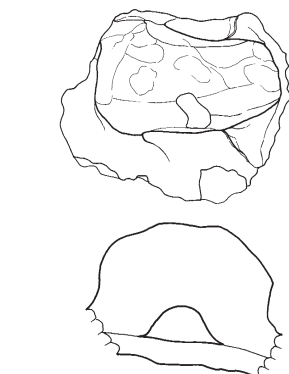
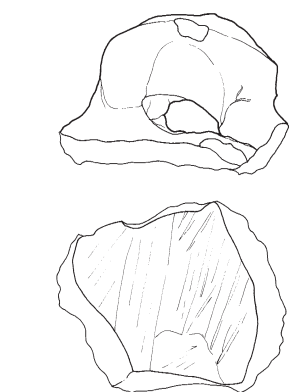
545



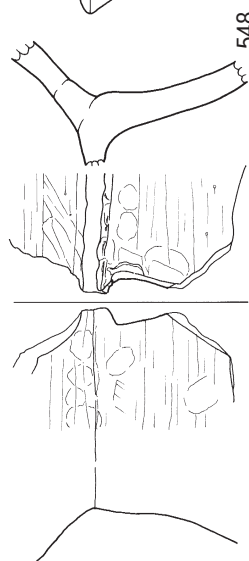
544



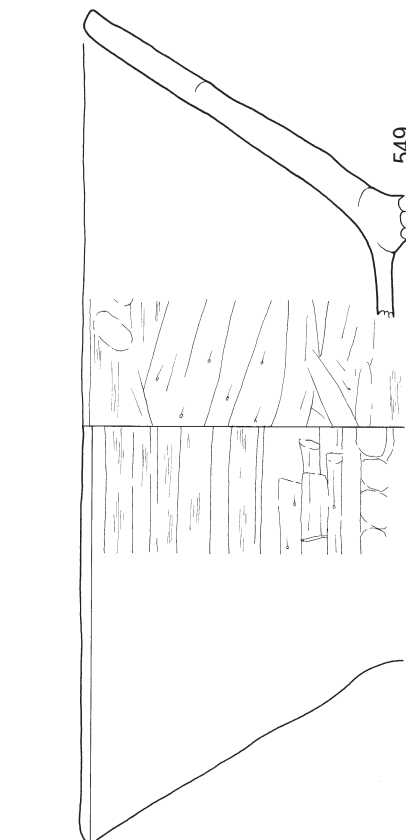
546



547



548



549



551



0

10cm



550

第63図 甌・台付鉢・その他

緻密に行われており、533は内面仕上げが粘土つなぎ痕がわかるほど粗雑な造りとなっている。

その他の遺物（古代）（第62・63図）

古代と思われるもので出土数の少なかったものを一括した。534は土師器の鉢である。口縁が直口するバケツ形を呈すると思われる。535は土師器の小壺と思われる。短く上に突き出た口縁と短い肩部を特徴とする。536は上下の判別も難しいが、図のような復元を試みた。体部に焼成前に穿孔を施していることが確認できる。537は耳皿である。器面の摩滅が著しい。538は中央部に突起状のつまみがあることから土師器の蓋と判断した。欠損しており全体はわからないが、ややカーブをもった蓋であろう。539、540は焼塩壺の胴部片で、内面に布目痕が明瞭に残されている。541～543は土師器底部を転用した紡錘車である。544～547は土師器大型製品に付くと思われる取っ手である。544は先端がやや上方に反り上がる舌状の取っ手である。器壁の状態はわからない。545は胴部径42cmの甑と考えられる。胴部に上方にカーブした太い角状の取っ手が付く。胴部はやや曲線的なフォルムで胴部内面は縦位のケズリ痕がみられる。546、547は545同様、甑と思われる。取っ手は橋状を呈し、胴部は緩やかに曲線を描くと思われる。548、549は高い高台の付く鉢で厚手の器壁である。体部は直線的に広がり、脚は曲線的に広がると思われる。550は壺の底部片である。硬質に焼けているが内面にケズリ痕があることから土師器と思われる。551は土師器壺の底部片で、胴部内面、外面に刷毛目が残る。

その他の遺物（第64図～第72図）

古代を除くその他の少数出土の遺物や時期特定が出来なかったものについて一括した。

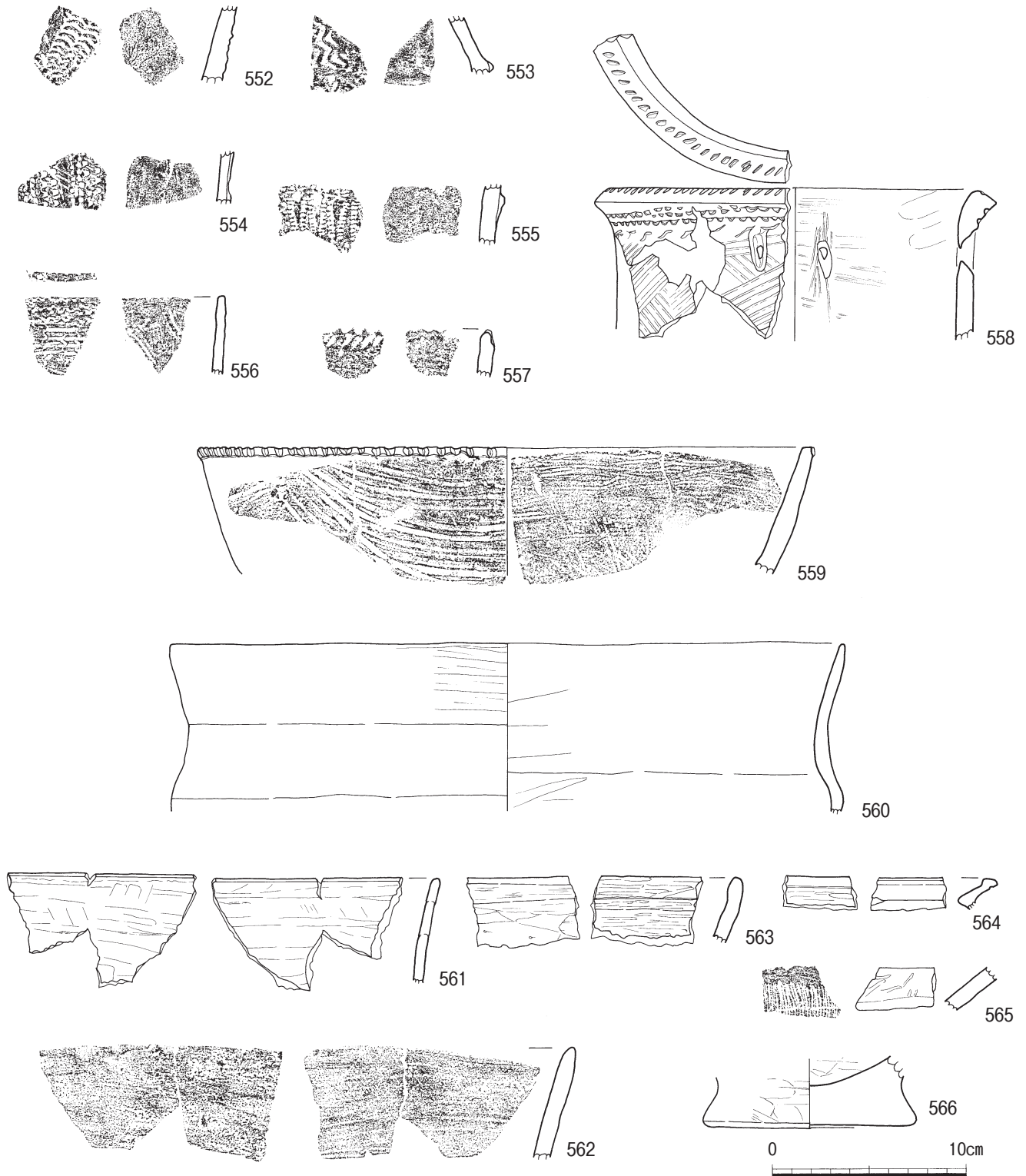
552は押型文土器の胴部片である。文様は山形押型である。553は、胴部屈曲部上位に山形押型文が施文される手向山式土器の胴部片である。554～556は前平式土器である。554、555は口縁部下位にクサビ状突起文が貼付られ、その間には貝殻腹縁刺突文が施される。556は口縁部に横位の貝殻腹縁刺突文が施される。557は口唇部が波状を呈する、岩本タイプである。558は口縁部が外反し、口唇がやや肥厚する石坂式土器である。口唇部に刻み目が施され口唇下位に貝殻腹縁による横位の刺突線が廻る。胴部には貝殻条痕文が羽状に施される。胴部には内外両面から擦り切った穿孔が施されている。補修孔と思われる。559～562は縄文晩期粗製の深鉢で入佐式土器である。559は深鉢の口縁で口唇部外面に刻み目をもつ。口縁部外面には弧状の沈線が施される。560～562は口縁部片で、器面はヘラ状工具で仕上げられる。口縁はやや外傾し緩やかには立ちあがる。560は短い肩部をも

つ。563は口縁部をやや肥厚させ、内面は入念なミガキ調整を行っている。564は口縁部のみであるが、強く外反した短い口縁部、入念なミガキ調整から黒川式土器浅鉢と考えられる。565は底部に蔑目圧痕を残す浅鉢である。内面は入念なミガキが施される。566は断面台形を呈する深鉢の底部と思われる。

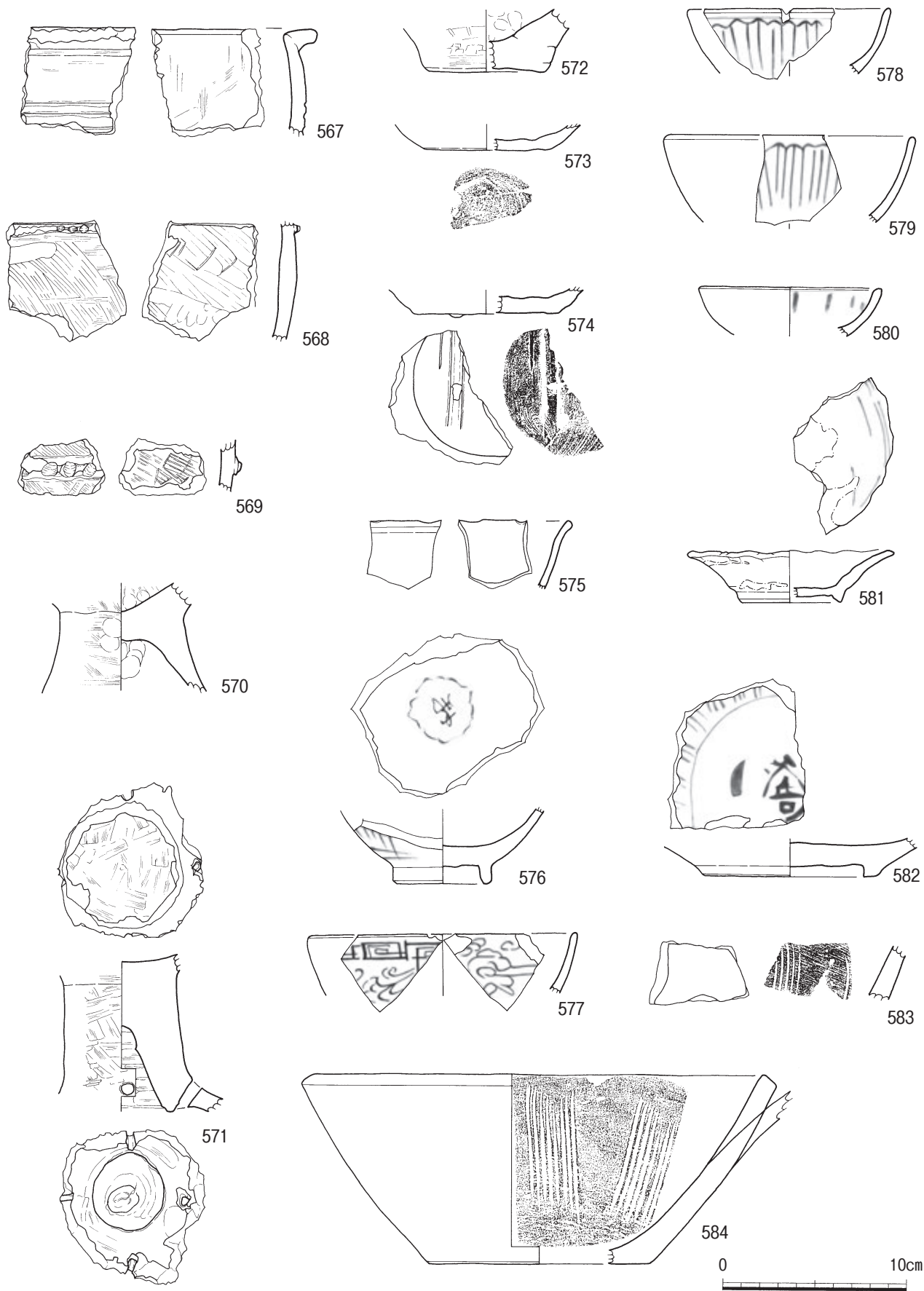
567、568は弥生時代に属する遺物と思われる。567は口縁端部に台形状の突帯が廻る刻みの有無は欠損のため不明である。胴部はわずかに膨らみ垂下し、最大径部に三条の沈線が廻る。568は胴部に細い突帯が廻り、ヘラ状工具で刻みが施される。胴部内・外面ともに斜位の工具痕が残される。569～572は古墳時代の遺物と思われる一群である。569は甕の胴部片で絡状突帯が廻る。突帯には棒状工具で刻みが施される。570は甕脚部片で脚部内面は指頭による接合痕が著しい。571は高坏脚部片である。脚部端部は急激にラップ状に開く。ラップ状に開く屈曲部に径5mm程度の透かしが施され、確認できるもので3カ所、本来なら4カ所に透かしがあるものと思われる。572は甕の底部である。573～593は中世の遺物と思われる一群である。573、574は土師器の坏底部片で底面に糸切り痕が残る574は半乾きの状態で、すのこ状の台に乗せたと思われるスタンプが底面に残る。575～578は龍泉窯系の青磁碗である。575は口縁のみの資料である。口縁部が外反し、口縁下位に細沈線が廻る。576は体部中位から口縁部を欠くが体部外面に蓮弁文、見込みに草花文様の印文を加えている。577は口縁部外面に雷文帯を有しその下位及び内面には唐草文が描かれる。578、579は細い線描きの蓮弁文碗の口縁から胴部片である。578は蓮弁の上位に沈線が一条廻る。580は皿口縁部片で口縁が直口し、内面に棒状工具で放射状の模様を描く。581は稜花皿で釉のかかりが悪く、見込みには印文もあるのであろうが確認できない。582は碁筈底となる盤である。見込み中央には吉の字の印文を有する。583、584は瓦質の播り鉢である。584は口縁部が平坦で片口の播り鉢である、使用による摩滅が激しく、底部内面付近の播り目は消えてしまっている。585は焙烙の取っ手部である。本体内面、取っ手部はナデにより丁寧に調整されている。取っ手部には長方形の穴が開けられており木製の柄を取り付けていた可能性も伺える。586は瘤状の脚が付く香炉で胴部は上に向かってすばまる。脚はおそらく3カ所にあるものと推測される。復元底径11.8cmである。587は糸切り底の底部を有する坏に高さ1cm程の突起状の脚が付く花鉢と思われる。復元口径10.8cm、復元底径8cm、器高2.7cmである。588は鉢形土器の底部と思われる。胴部底部付近に連続した縦位の沈線が施されている。589は蓋である。内面には櫛状工具による細かな調整痕が残る。蓋端部にススが付着している。590、591は瓦質の羽釜の口縁部から肩部の破片である。

外面には花文がスタンプされる。592は瓦質土器で小壺もしくは徳利状になると思われる底部である。底面には櫛状工具による方向の定まらない調整が施される。593は滑石製石鍋の口縁部片である。口縁部外面にススが付着している。

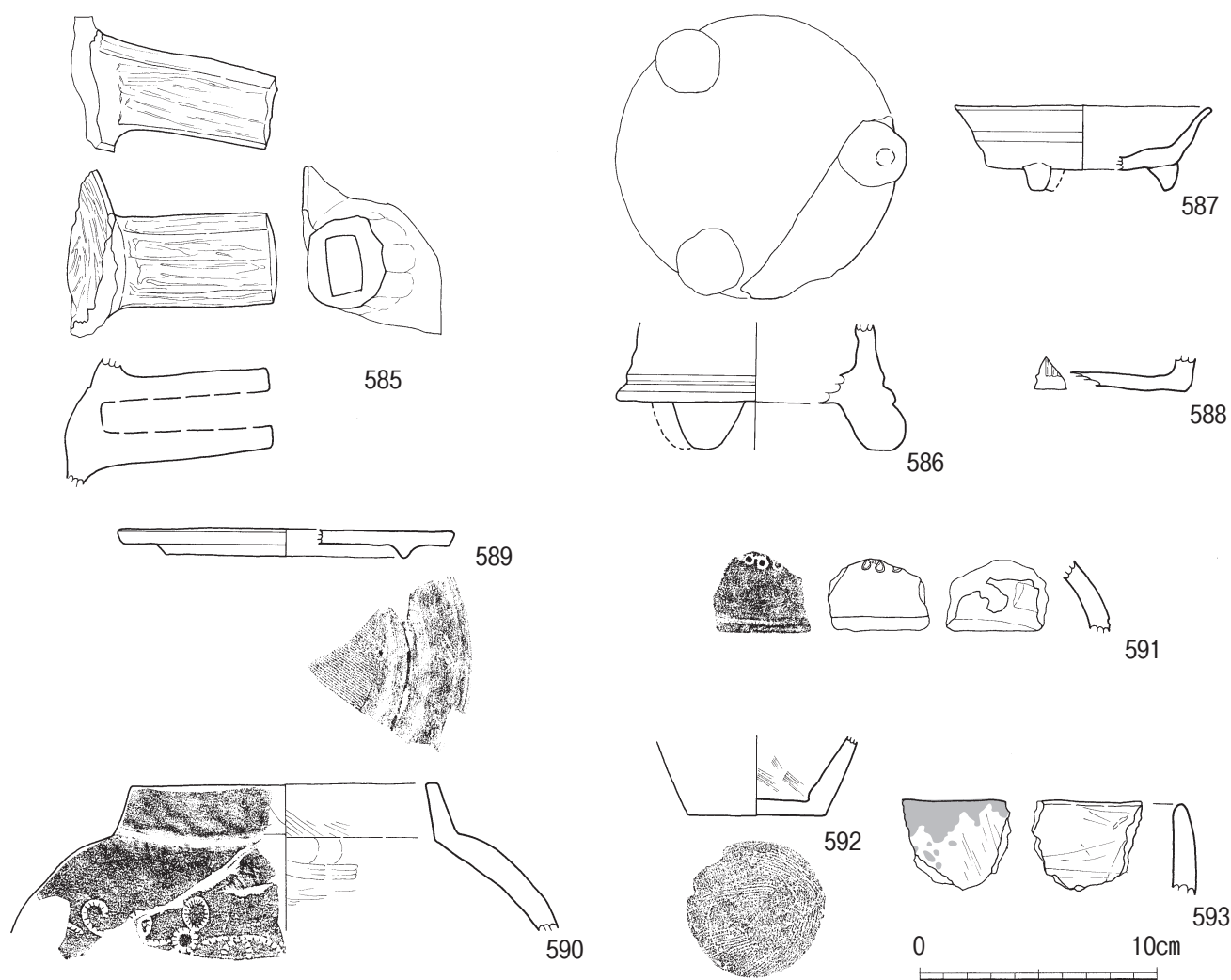
594～616は青花と近世以降の遺物の一群である。594は端反りの皿の口縁部片である。595は丸く内湾する胴部から斜めに鑊がつくいわゆる「鑊皿」の口縁部片である。596, 597は漳州窯系の青花皿である。596は全面施釉後、畳付の釉が面取り気味に掻き取られ、砂粒が付着



第64図 その他の遺物 (1)



第65図 その他の遺物 (2)

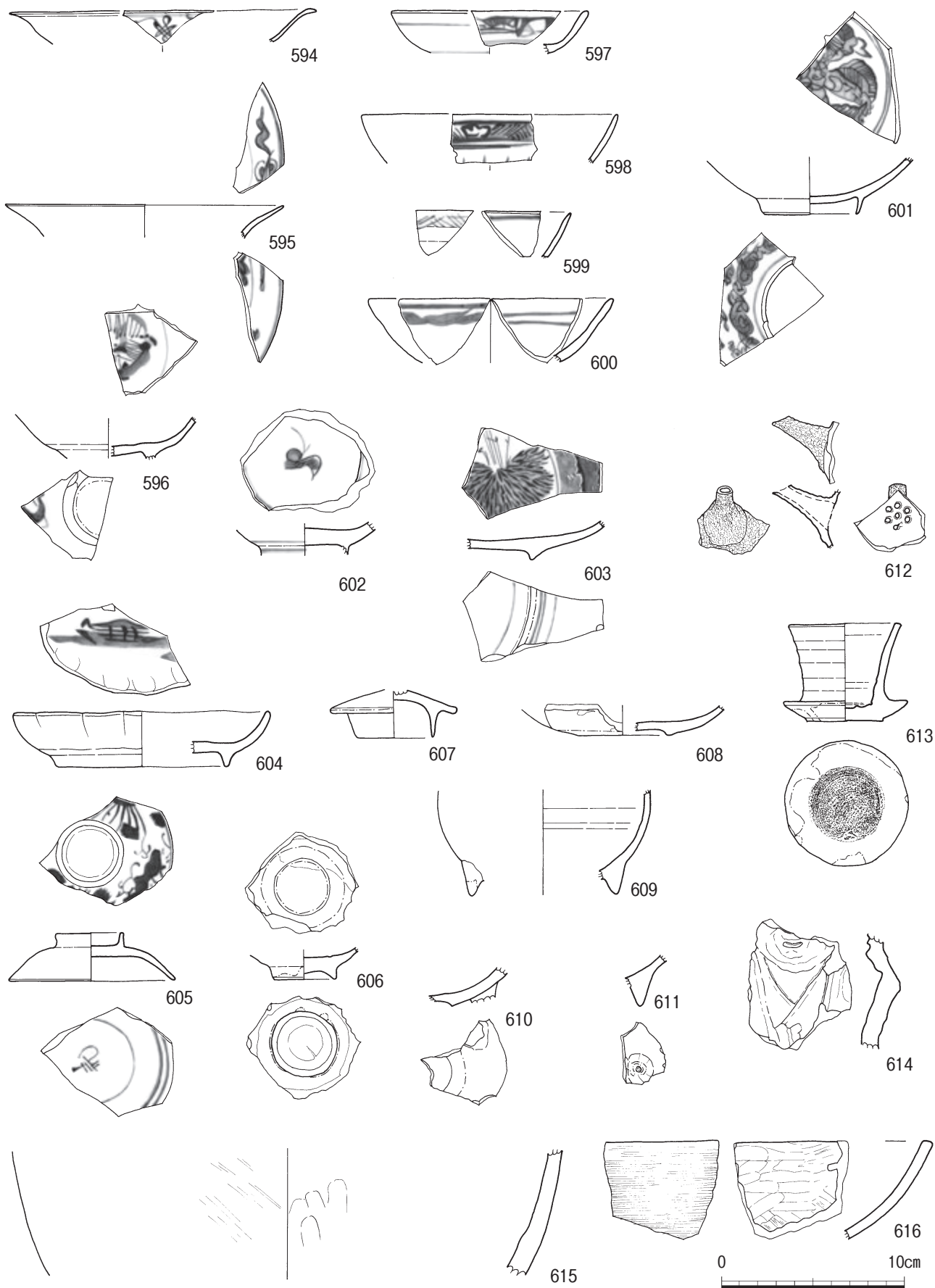


第66図 その他の遺物 (3)

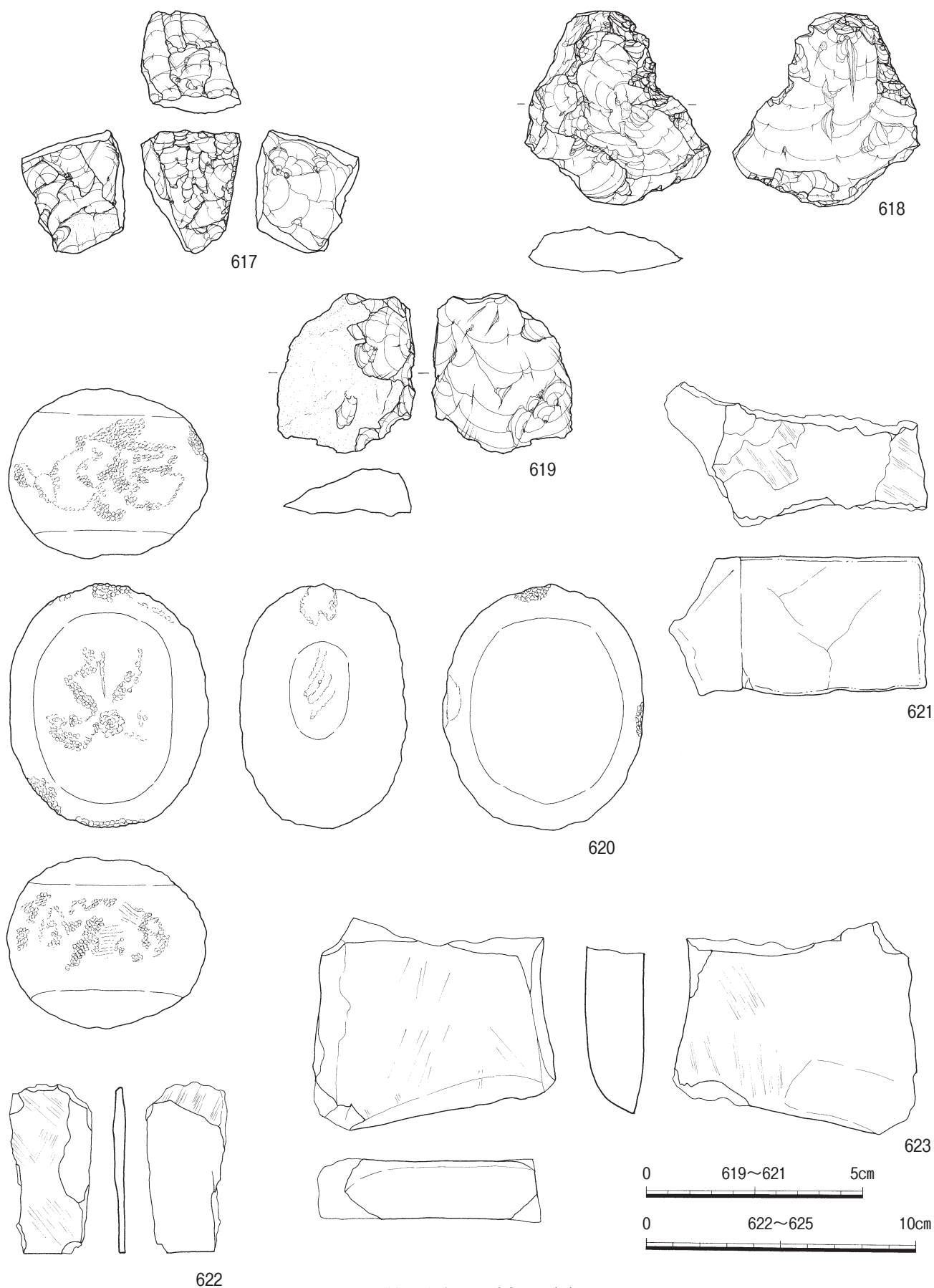
している。598～601は青花碗である。598, 599は口縁部外面に襷文帯が描かれる。601は広く開いた胴をもち、見込み内面が高台内に凹む器形のいわゆる「蓮子碗（レンツー碗）」である。602～604は肥前系の染付皿である。604は稜花皿である。605は染付の蓋である。606は龍門司系の碗である。畳付と高台内面以外は施釉され見込みを輪状に釉剥ぎしている。607は苗代川系の土瓶の蓋でつまみ部は欠損する。施釉は上面のみ行われる。608～611は土瓶の底部片である。609～611は三角錐状の足がつくもので、足先端まで釉がかかる。608, 610は底面付近は無釉で底面中央は緩やかに凹んでいる。612は龍門司系の急須注ぎ口片で、鯨肌釉である。613は薩摩焼龍門司系の灯明皿受け台である。外底面に糸切り痕が残る。614は土製人形の一部である。着物着付けが左前になっており、男性像であろう。615は琉球壺屋窯産の陶器と思われるが、胴部片のため器種は不明である。616は不明な土器で外面に横位の刷毛目が、内面は丁寧なナデ調

整がみられる。口縁部の傾きから鉢形を呈すると思われる。

617～654は時代不明の遺物の一群である。617は黒曜石マイクロコアである。打面調整を繰り返しながら連続的にマイクロブレードを作出しており、一部にその痕跡も残っている。618, 619は黒曜石フレイクである。619は外皮が残存しており、初期段階ではぎ取られた素材である。620は花崗岩製の磨石で磨面とともに側面には敲打の跡も残る。621～624は砥石である。621は砂岩製で本来まだ大きなものであると思われる。一面のみ擦痕がみられる。622は頁岩製で携帯用と考えられる。623は砂岩製で割れ面、側面以外はほぼ全体を使用している。624は砂岩製で側面の細い溝状の研ぎ跡が特徴である。625, 626は軽石製品である。625は半円形で扁平な形状をしており直線部中央には四角い切り欠きが施される。またその両側には鋸刃状の切り込みが入っている。用途は不明である。626は扁平な楕円形を呈するものと思わ



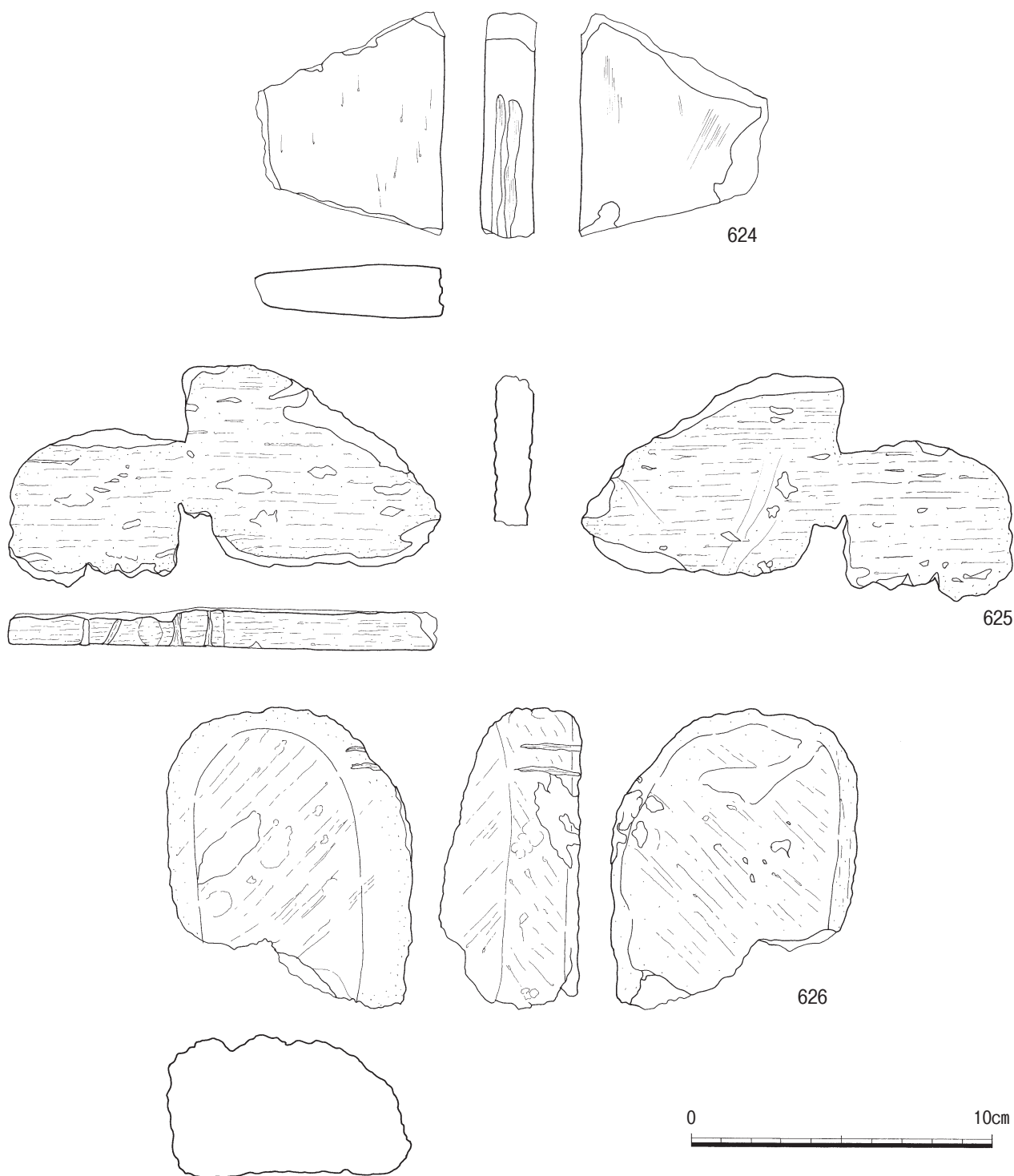
第67図 その他の遺物 (4)



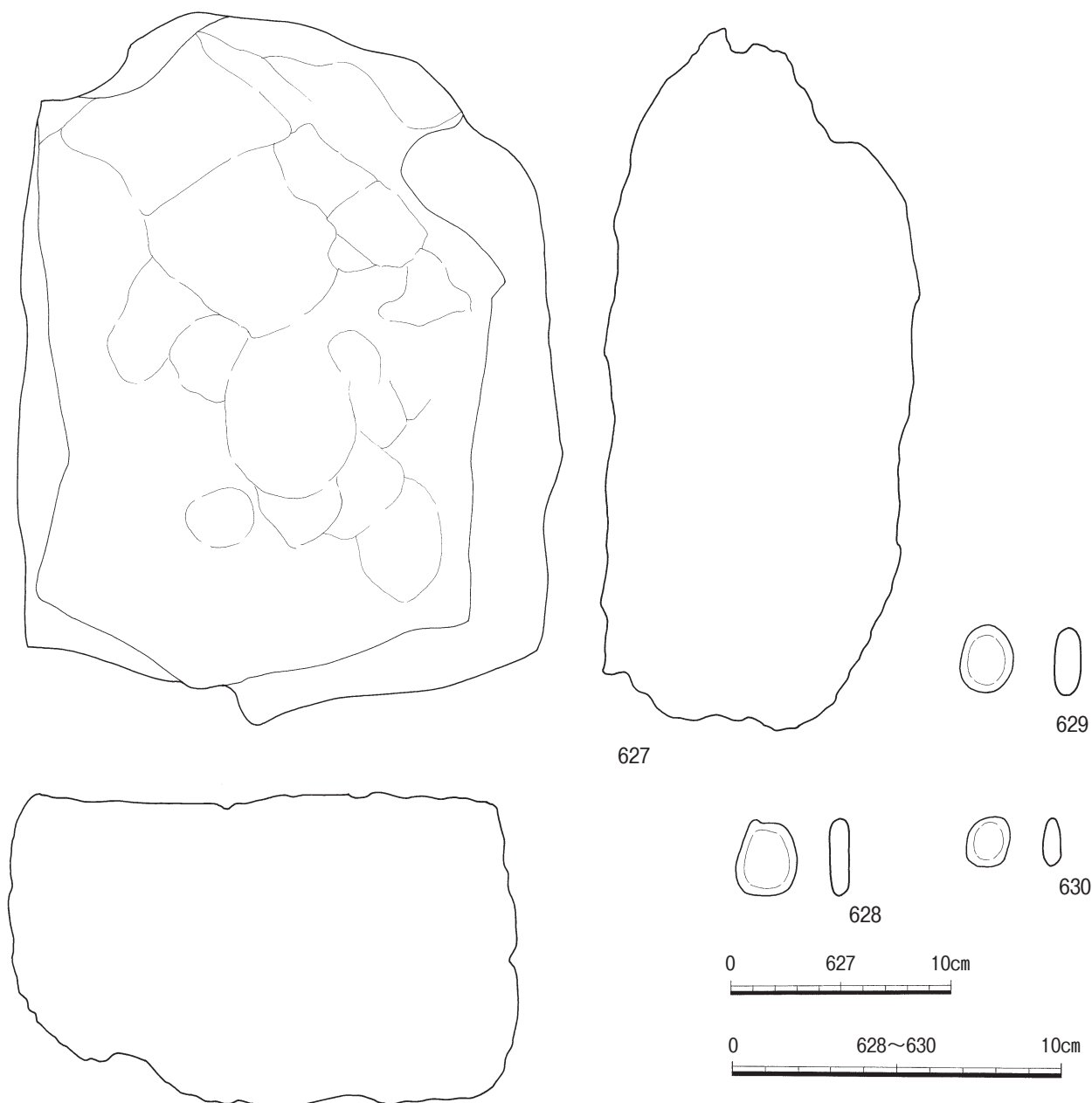
第68図 石製品 (1)

れる。側面,裏面にわずかに焼けた粘土が付着している。627は凝灰岩製の金床石と思われる。全体的に赤変しており表面は敲打により欠損,凹んだ部分が多数みられる。628～630は基石の可能性が考えられる石製品で全面磨かれている。628, 630は黒色頁岩で光沢を帯びた黒色を呈する。629は砂岩製で白味を帯びる。631は土師質の埴塙である。復元口径10cmで,内面は赤色化,一部ガラス

質化しているところもある。またわずかに緑錆も付着する。632, 633は轆の羽口片である。632は口径約1.5cm。633は口径約2cmである。634は凝灰岩をブロック状に整形したもので被熱により赤変している部分もみられる。また一部に粘土が付着しており同様の石材を積み重ねて接合していた可能性も伺える。このようなことから製鉄にかかる炉壁等の使用が考えられる。635～638は埴



第69図 石製品 (2)



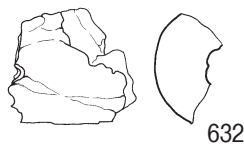
第70図 石製品 (3)

形滓である。大振りな635, 小ぶりな637など炉床の大小を反映しているものと思われる。639は洪武通宝である。640は雁股鋏で長さ7cmである。641, 642は薄い板状を呈し径2mm程度の穿孔が施される。643~649は刀子と思われる一群である。643は大型の刃部を有し, 基部から切っ先まで17.5cmある。644は刃部途中で欠損している。645, 646は切っ先を欠損しており基部と刃部の大きさがあまり変わらない。647は刃部で折れ曲がって上面観が「く」の字状を呈する。648は基部を曲線的に仕上げ, そこに穿孔が行われている。649は刃部が完全に折れ曲がっている。650は鉄鍋片で取っ手部から本体の一

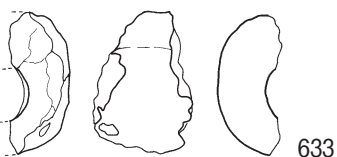
部と思われる。651は円盤状を呈する鉄製の紡錘車と思われる。652は薄手の板状で形作られ, 中央に突起をもつ, 調度品等の飾り金具と思われる。653は径2.2cmほどのリング状を呈する製品である。654は板状で平面形がひょうたん形を呈し1カ所に円形の穴がある。横断面がややカーブを描く。655, 656は角釘である。断面形は方形を呈する先端は欠損する。



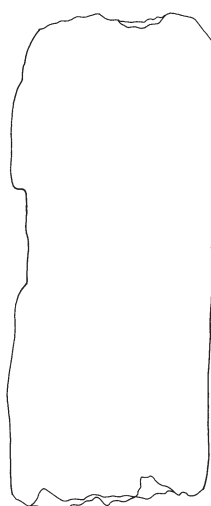
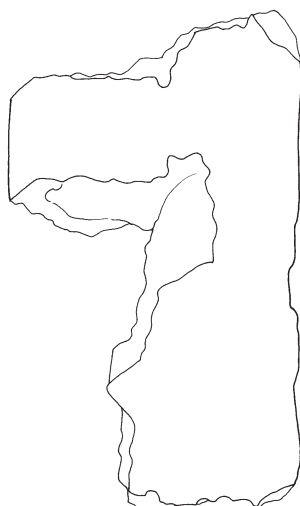
631



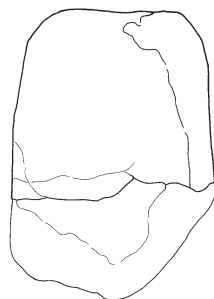
632



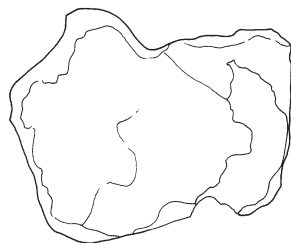
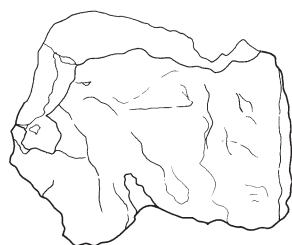
633



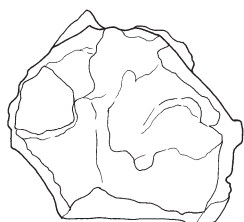
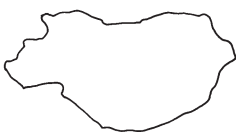
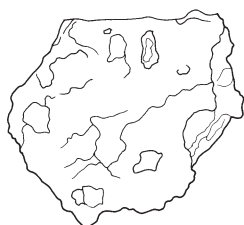
634



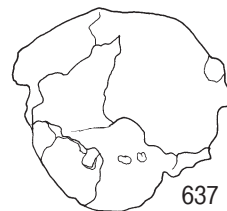
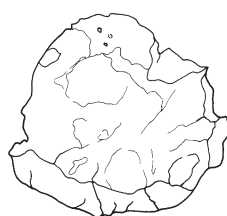
0 631~634 10cm



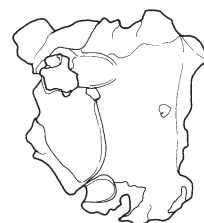
635



636



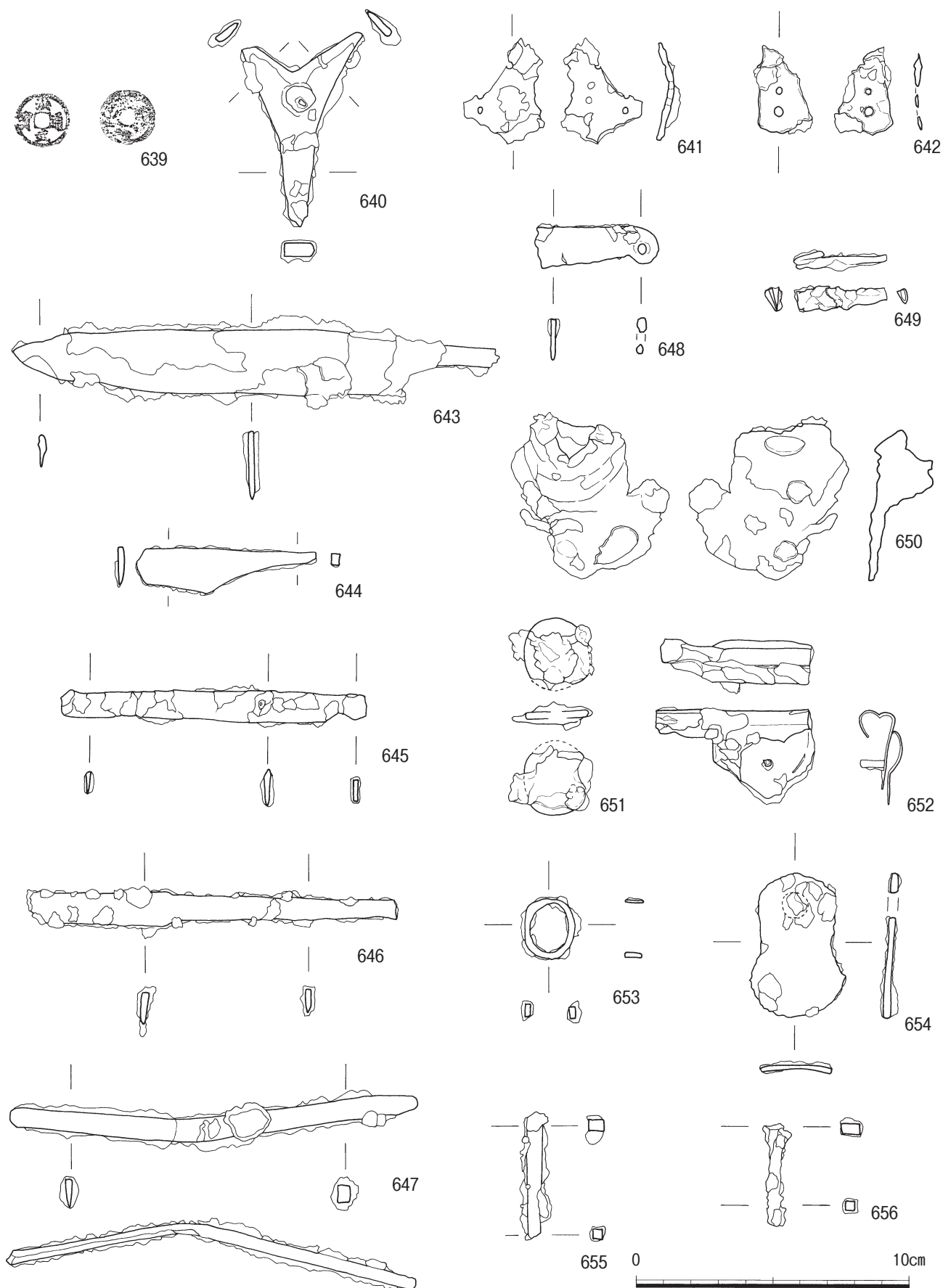
637



638

0 10cm

第71図 製鉄関連遺物



第72図 その他の遺物（鉄製品）

第9表 古代出土遺物観察表(1)

押図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第44図	192	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(12.6	7	4.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面付近ケズリ痕、底部外面回転ヘラ切り後ナデ
	193	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(12.2	7	4.2	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ
	194	Ⅲ	b	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(12.2	7	4.2	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	堅緻	底部外面付近ケズリ後横ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ
	195	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(12.4	7	4.4	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 7/6	精緻	良好	底部内面はナデ
	196	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(13	7	4.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	ロクロによる成形、外面底部付近にケズリ
	197	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(12.4	6.4	3.7	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ
	198	Ⅲ	b	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(13.0	(7.0	4.6	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	見込み静止ナデ、ヘラ切り後ナデ、横ナデ
	199	Ⅲ	b	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(12.6	6.8	(3.6	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	良好	底部付近はケズリ後横ナデ
	200	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(13.2	6.8	4.5	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻	良好	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、外面底部付近ヘラナデ
	201	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	12.3	6	4.2-4.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	白色粒を多く含む	良好	底部外面はヘラ切り後ナデ、若干ゆがみがあり
	202	Ⅲ	-	坏	口縁部～胴部	土師器	坏Ⅰ	(13.2	7.6	4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面はヘラ切り後ナデ
	203	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(14.2	6	4.2	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	底部外面ヘラ起こし
	204	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(15	7	4.7	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	底部外面付近はケズリ
	205	Ⅲ	-	坏?	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	(13	7	3.7	横ナデ(ロクロ)	横ナデ(一部にケズリ痕)	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	内赤?見込み静止ナデ
	206	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅰ	(11.4	8	(2.0	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	良好	底部内面は静止ナデ、底部外面ヘラ起こし
	207	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅰ	-	7.4	(2.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	良好	スス付着
	208	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅰ	-	8	(2.8	回転ナデ	回転ナデ、底部外面近くはヘラナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ
	209	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅰ	-	7.8	(2.2	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ
	210	Ⅲ	b	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅰ	-	9.4	(4.3	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	見込み工具ナデ?、底部外面ヘラ切り後ナデ
	211	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅰ	-	7	4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	212	Ⅲ	b	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅰ	-	5.8	(4.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ
	213	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅰ	-	6	(3.0	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	少々粗い、小石混り	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ、底部外面付近ヘラケズリ後ナデ、底部内面指頭圧痕
	214	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅰ	-	7.6	(2.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	215	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅰ	-	6.2	(4	横ナデ	回転横ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	底部外面付近ケズリ痕残る
	216	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅰ	-	6	(2.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ
第45図	217	Ⅲ	-	坏	完形品	土師器	坏Ⅱ	12.8	6.5	4.8	口縁部近く横ナデ	横ナデ	赤褐色、内外面底部はにぶい黄橙色	2.5YR 4/6、10YR 7/4	精緻	良好	内面は器表面の摩滅が激しい(凹凸が見られる)、底部外面はヘラ切り後ナデによる調整、底部外面付近はケズリが一部残る
	218	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(12	5.4	5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ
	219	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	11.1	5.2	8.0-5.6	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	底部外面はヘラ切り後ナデ、ゆがみがあり
	220	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	12.1	6	5.3	回転ナデ	回転ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	底部外面はヘラ切り後ナデ、底部外面付近ヘラナデ
	221	Ⅲ	b	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	12.4	5.4	(6.0	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	内面にもみ痕
	222	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(11.7	6.2	5.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/5	精緻	良好	底部外面はヘラ切り後ナデ
	223	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(11.8	6	5.2	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻	良好	底部外面は回転ヘラ切り後ヘラナデ、底部外面付近ケズリ
	224	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	13.3	6	5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面は静止ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ
	225	Ⅲ	-	坏	完形品	土師器	坏Ⅱ	11.8	4.6	5.2	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色、他一部に灰白色	10YR 8/4、10YR 8/1	精緻	良好	底部外面はヘラ切り後ナデ、底部外面付近には一部ケズリが残る
	226	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(12.8	(5.4	5.1	横ナデ	強い横ナデ	橙色、浅黄橙色	2.5YR 6/8、10YR 8/4	精緻(赤色粒が混る)	堅緻	底部外面付近にケズリ痕、ヘラ切り時の粘土あまりをつけている底部外面ヘラ切り後ナデ
	227	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅱ	(12.3	-	4.4	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻	良好	-
	228	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.2	(3.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面はヘラ切り後ナデ、底部内面は静止ナデ
	229	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.1	(2.6	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ
	230	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅱ	-	6	(3.5	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面付近にケズリ、見込み静止ナデ、底部外面はヘラ切り後静止ナデ
	231	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.5	(2.9	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部はナデによる調整、底に棒を入れたと思われる跡
	232	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.8	3.6	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	2.5YR 5/6	粗い(小石、軽石を多く含む)	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ
	233	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	4.6	(2.3	横ナデ(ロクロ)	横ナデ(ロクロ)	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻(赤色粒がわずかに混る)	良好	底部外面付近ケズリ、底部外面ヘラ切り後ナデ
	234	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	(6.6	(2.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻(赤色粒を少し含む)	良好	底部内面は静止ナデ、底部外面はヘラ起こし後ナデ
	235	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	(6.2	(2.0	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面回転ヘラ切り後ナデ
	236	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.6	(1.7	回転ナデ	回転ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ
	237	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.4	(2.0	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ
	238	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5.8	(2.3	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻	良好	底部外面はヘラ切り後ナデ
	239	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	5	(1.7	横ナデ(ロクロ)	横ナデ(ロクロ)	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面回転ヘラ切り後ナデ
	240	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.2	(2.3	横ナデ	横ナデ	明赤褐色	5YR 5/6	精緻(砂粒、赤色粒が混る)	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面付近ケズリ後ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ
	241	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.6	(1.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面はヘラ切り後ナデ
	242	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6.8	(1.5	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	底部外面付近ケズリ、底部内面は静止ナデ
	243	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6	(1.9	回転ナデ	ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ、底部外面付近ヘラケズリ

※(書きの数字は口径、底径の復元径、器高の残在高

第10表 古代出土遺物観察表（2）

神田番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第45図	244	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6	(1.9	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面付近ケズリ、底部外面へラ切り後ナデ
	245	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	7	(1.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	246	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅱ	-	6	(1.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	内側のみ痕
第46図	247	Ⅲ	b	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅲ	(11.2	-	4.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に一部静止ナデ。底部外面は回転へラ切り後ナデ
	248	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅲ	(11	4.8	4.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面近くはへラケズリ
	249	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅲ	(11.6	4.6	4.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面は静止ナデ、底部外面は回転へラ切り後ナデ、底部外面付近にケズリ
	250	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅲ	(12	5.6	4.3	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	底部外面はへラ切り後ナデ
	251	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅲ	(11	6.4	4.7	横ナデ	回転横ナデ	橙色	7.5YR 6/8	精緻	良好	底部付近にケズリ痕わずかに残る
	252	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	6.8	(3.7	回転横ナデ	回転横ナデ	黄橙色	10YR 8/8	精緻	良好	底部外面はへラ切り後ナデ
	253	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	(7.8	(2.6	回転ナデ	ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	底部内面一部不規則なナデ
	254	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.2	(2.0	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面はへラ切り
	255	Ⅲ	b	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅲ	-	5	(2.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面静止ナデ、底部外面付近にケズリ、回転へラ切り後ナデ
	256	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.2	(3.3	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻	良好	底部外面回転へラ切り後ナデ、底部外面付近はケズリ
	257	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	6.4	(2.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 4/8	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	258	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅲ	-	4.8	(1.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻(砂粒が少し混る)	良好	内面中央は指頭圧痕、静止ナデ、器面はかなり摩滅している
	259	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	6	(2.0	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部内面はナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	260	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.6	(1.8	横ナデ(ロクロ)	横ナデ(ロクロ)	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ
	261	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	6.6	(2.6	回転ナデ	回転ナデ、底付近はへラナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	262	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	7.2	(3.1	回転ナデ	回転ナデ、底付近へラケズリ後ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	263	Ⅲ	b	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.2	(2.8	回転横ナデ	回転横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	底部外面はへラ切りへラナデ
264	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	6	(2.8	横ナデ	横ナデ	淡橙色	5YR 8/4	精緻	堅緻	底部外面へラ切り後ナデ、底部へラ切り後の粘土あまりの処理がなされていない	
265	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	4.8	(3.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に指ナデ跡、底部外面はへラ切り	
266	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	4.7	(3.4	回転ナデ	回転ナデ、底部付近へラケズリ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ	
267	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	6	(2.7	横ナデ	横ナデ	浅黄色	2.5Y 7/4	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ	
268	Ⅲ	b	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅲ	-	8	(2.7	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/2	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ	
269	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	5	(2.6	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	底部外面近くはへラケズリ、底部外面はへラ切り後ナデ	
270	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅲ	-	6.9	(2.4	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	底部内面は静止ナデ、底部外面付近はケズリ、内面全体にスス付着	
271	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	(5.8	(1.8	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	粗い(砂粒をわずかに含む)	良好	底部外面はへラ切り後ナデ	
272	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.8	(2.3	回転ナデ	回転ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ	
273	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.8	(1.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	底部内面静止ナデ、底部外面へラ切り後ナデ	
274	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	4.8	(2.6	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻	良好	底部外面へラナデ、底部内面ナデ、底部外面へラ切り後ナデ	
275	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	6	(2.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-	
276	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	4.8	(1.8	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ	
277	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	5	(1.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ	
278	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	(5.6	(1.3	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面回転へラ切り後ナデ	
279	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.6	(2.0	横ナデ(へラ)	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	見込み静止ナデ、外面底部付近ケズリが残る、外面一部にスス付着	
280	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.2	(1.9	回転ナデ	回転ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	底部内面は指頭圧痕、染料の塗付か?	
281	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	(6.0	(1.4	横ナデ	横ナデ	黄橙色	7.5YR 7/8	精緻	良好	-	
282	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅲ	-	5.2	(2.0	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面へラ起こし後ナデ、全体的にススの付着	
283	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅲ	-	6.4	(1.2	ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	底部外面へラ切り	
第48図	284	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅳ	(12.8	5.6	5.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面はへラ切り後ナデ
	285	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅳ	(11.8	4.6	4.4	回転工具ナデ	回転工具ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	少々粗い(小石、石英などを含む)	良好	底部外面は回転へラ切り後ナデ、底部付近ケズリ
	286	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	坏Ⅳ	11.1	5.4	4.1-4.9	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面は回転へラ切り後ナデ、器型にゆがみがあり
	287	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅳ	-	(5.6	(2.9	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	-
	288	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅳ	-	5.2	(3.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面は回転へラ切り後ナデ
	289	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅳ	-	4.8	(2.3	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	少々粗く、小石を多く含む	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	290	Ⅲ	b	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅳ	-	6	(3.2	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部外面にへらの跡
	291	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅳ	-	4.6	(1.7	へラナデ	へラナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	外面底部付近ケズリ、底部内面中央のみ静止ナデ
	292	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅳ	-	4.6	(2.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ、底部内面付近ケズリ
	293	Ⅲ	b	坏	胴部～底部	土師器	坏Ⅳ	-	6	(1.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	294	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅳ	-	5.2	(0.9	-	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	堅緻	見込みへラ切り痕、工具痕、ナデ、底部外面へラ切り後あらいナデ
	295	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅳ	-	(7.2	(1.8	回転横ナデ	回転横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	底部内面はナデ

第11表 古代出土遺物観察表（3）

押図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第48図	296	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅳ	-	4.8	(1.9	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面はへら切り後ナデ
	297	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	坏Ⅳ	-	5.4	(1.3	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	堅緻	見込みは静止ナデ、底部外面へら切り後ナデ
	298	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	坏Ⅳ	-	7.2	(1.9	ナデ?	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	良好	高台をすり消した?、底部外面へら切り後静止ナデ
第49図	299	Ⅲ	-	椀	口縁部～底部	土師器	椀Ⅰ	(16.7	8.2	7.7	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	内面にスス付着、底部内面は静止ナデ
	300	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅰ	-	6.4	(4.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面付近布目痕わずかに残る
	301	Ⅲ	-	椀	底部～脚部	土師器	椀Ⅰ	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に布目痕
	302	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅰ	-	7.4	(3.5	静止ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻	良好	底部外面はへら切り後回転ナデ
	303	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅰ	-	8.2	(2.9	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	-
第50図	304	Ⅲ	-	椀	口縁部～底部	土師器	椀Ⅱ	(14.4	7.2	7.1	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	-
	305	Ⅲ	-	椀	胴部～底部	土師器	椀Ⅱ	-	7.2	(6.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	306	Ⅲ	b	椀	胴部～底部	土師器	椀Ⅱ	-	7.8	(4.9	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	307	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	(7.4	(3.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部内面に布目痕、中央付近はナデ、脚部分にスス付着
	308	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.6	(3.0	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面は布目痕、底部内面にスス付着
	309	Ⅲ	-	椀	胴部～脚部	土師器	椀Ⅱ	-	6.4	(3.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に布目痕
	310	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.2	(4.1	横ナデ	横ナデ、一部ケズリ痕が残る	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻(赤色粒が少し混る)	良好	-
	311	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	(10.0	8.6	(3.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	見込み静止ナデ
	312	Ⅲ	-	椀	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	8.2	(3.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	313	Ⅲ	-	椀	胴部～底部	土師器	椀Ⅱ	-	7.6	(2.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面は布目痕後ナデ
	314	Ⅲ	b	椀	脚付底部	土師器	椀Ⅱ	-	7	(2.6	回転ナデ	回転ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	底部内面は布目痕
	315	Ⅲ	-	椀	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	5.8	(3.0	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	-
	316	Ⅲ	-	椀	胴部～底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.4	(2.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に布目痕後静止ナデかすかに残る
	317	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	7.7	(3.4	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	-
	318	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	7.2	(2.8	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻(砂粒がわずかに混る)	堅緻	見込みは布目痕、中心部にナデ
	319	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	7	(3.0	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面は布目痕後静止ナデ
	320	Ⅲ	b	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.4	(2.8	横ナデ	-	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻(砂粒をわずかに含む)	堅緻	見込み布目痕後ナデ
	321	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	7	(2.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	-
	322	Ⅲ	-	椀	胴部～底部	土師器	椀Ⅱ	-	7.7	(3.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に布目痕
	323	Ⅲ	-	椀	胴部～底部	土師器	椀Ⅱ	-	7	(3.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に布目痕
	324	Ⅲ	-	椀	胴部～底部	土師器	椀Ⅱ	-	(7.2	(3.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面は布目痕後中央付近を静止ナデ
	325	Ⅲ	-	椀	底部～脚部	土師器	椀Ⅱ	-	7	(2.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に布目痕
	326	Ⅲ	-	-	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	6	-	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻(砂粒が少し混る)	良好	見込み静止ナデ
	327	Ⅲ	-	椀	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	6.2	(2.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色、底に一部橙色	10YR 8/4、 10YR 7/6	-	-	底部内面に布目痕あり
	328	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.5	(2.7	横ナデ	横ナデ	灰白色	7.5YR 8/2	精緻	良好	見込みは布目痕、中央部にナデ
	329	Ⅲ	-	椀	胴部～底部付近	土師器	椀Ⅱ	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に布目痕
	330	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	5.4	-	横ナデ(ロクロ)	横ナデ(ロクロ)	にぶい黄褐色	10YR 7/3	精緻(砂粒が混る)	良好	-
第51図	331	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	8.4	(6.3	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻	良好	見込み静止ナデ
	332	Ⅲ	b	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	(7.2	(3.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面指頭圧痕、静止ナデ
	333	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	8.6	(3.2	横ナデ	回転ヘラケズリ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	脚～底部外面ヨコナデ
	334	Ⅲ	-	椀	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	7.2	(2.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面はナデ
	335	Ⅲ	-	椀	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	8.6	(3.5	回転ナデ	回転ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	-
	336	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	7.6	(2.4	横ナデ(ロクロ)	-	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面中央の凸部はナデ
	337	Ⅲ	-	椀	脚部	土師器	椀Ⅱ	-	6.4	-	横ナデ(ロクロ)	横ナデ(ロクロ)	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻(砂粒をわずかに含む)	良好	-
	338	Ⅲ	-	椀	口縁部～底部	土師器	椀Ⅱ	(11.8	6.2	6.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面に布目痕、高台つけあまい
	339	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.2	(2.2	-	横ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻(白色粒が混る)	堅緻	刻書?、見込み静止ナデ、底部外面へら切り後ナデ
	340	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	8.1	(3.0	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	粗い	良好	外面脚部上位にケズリ痕一部残存
	341	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	8.2	(3.2	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	2.5YR 5/8	精緻	良好	底部内面はヨコナデ、外は朱?高台内朱?
	342	Ⅲ	b	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	5.8	(2.5	-	横ナデ	明黄褐色	10YR 6/6	精緻	堅緻	見込み布目痕後ナデ
	343	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.2	(3.1	横ナデ(ロクロ)	横ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻(白色粒が混る)	堅緻	見込み静止ナデ、底部外面へら切り後ナデ
	344	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.6	(2.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	345	Ⅲ	b	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	6.7	(2.4	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面は布目痕、側面にわずかに回転横ナデ、底部外面は回転横ナデ
	346	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	8	(3.2	横ナデ(ロクロ)	横ナデ(ロクロ)	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻(赤色粒が目立つ)	良好	見込み布目痕、ゆがみあり、底部が凸状に張り出し、仕上げも粗い
	347	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	椀Ⅱ	-	(7.6	(2.8	摩滅が激しい不明	回転ナデ	黄褐色	10YR 8/6	粗い	良好	底部外面は工具による丁寧な回転ナデ(内へ外へのナデ)

第12表 古代出土遺物観察表 (4)

採掘番号	図録番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第51図	348	Ⅲ	b	碗	底部	土師器	碗Ⅱ	-	7	(2.1)	回転横ナデ	回転横ナデ	黄橙色	7.5YR 7/8	精緻	良好	底部内面静止ナデ
	349	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅱ	-	7	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	-
	350	Ⅲ	b	碗	底部	土師器	碗Ⅱ	-	7.5	(2.7)	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部内面にケズリ痕
	351	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅱ	-	7	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	内面は指頭圧痕
	352	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅱ	-	7	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	353	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅱ	-	8	(1.8)	-	回転ナデ	にぶい赤褐色	5YR 5/4	粗い(赤色粒、白色粒を多く含む)	良好	赤色粒、白色粒を多く含む
	354	Ⅲ	-	碗	底部付近	土師器	碗Ⅱ	-	5.4	-	横ナデ(ロクロ)	横ナデ(ロクロ)	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	堅緻	見込み布目痕後横ナデ(ロクロ)
	355	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅱ	-	5.8	-	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面は布目痕後静止ナデ
	356	Ⅲ	-	碗	脚部	土師器	碗Ⅱ	-	6.6	-	横ナデ	横ナデ(丁寧)	浅黄橙色	7.5YR 8/4	精緻	良好	見込み布目痕
	357	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅱ	-	5.2	-	横ナデ(ロクロ)	横ナデ(ロクロ)	橙色	7.5YR 6/6	精緻	良好	見込み布目痕
	358	Ⅲ	-	碗	脚部	土師器	碗Ⅱ	-	7	-	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/6	精緻	良好	内面はナデ、内面赤色顔料が付着
第52図	359	Ⅲ	-	-	底部	土師器	碗Ⅱ	-	5.8	-	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	見込み静止ナデ
	360	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅲ	-	8.2	(7.0)	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色	5YR 4/8	粗い(砂粒を多く含む)	良好	-
	361	Ⅲ	-	碗	脚部	土師器	碗Ⅲ	-	10.4	(3.5)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	見込み静止ナデ
	362	Ⅲ	b	碗	胴部～底部	土師器	碗Ⅲ	-	7.6	(3.8)	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	底部内面に布目痕
	363	Ⅲ	-	碗	胴部～底部	土師器	碗Ⅲ	-	(8.0)	(3.4)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	-
	364	Ⅲ	-	碗	口縁部～底部	土師器	碗Ⅳ	(12.2)	6.2	6	ナデ	ナデ、回転ナデ、指頭圧痕	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面へラ切り後ナデ
	365	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅳ	-	5.6	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	底部外面へラ起こし後ナデ
	366	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅳ	-	5.2	(2.6)	回転ナデ	回転ナデ、下はへラナデ	明黄褐色	10YR 7/6	少々粗め	良好	底部外面へラ切り後ナデ
第53図	367	Ⅲ	-	碗	底部	土師器	碗Ⅳ	-	5.6	(2.2)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底はへラ起こし
	368	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(15.4)	-	(3.9)	ナデ	回転横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	369	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(14.4)	-	(4.2)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	-
	370	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(15)	-	(4.2)	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	2.5YR 5/8	精緻	良好	-
	371	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(12.6)	-	(4.5)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	372	Ⅲ	-	環or碗	口縁部～胴部	土師器	-	(13.6)	-	(4.2)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	373	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(12)	-	(5.1)	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	普通	-
	374	Ⅲ	b	環or碗	口縁部	土師器	-	(12.4)	-	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	-
	375	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(13.2)	(10.0)	(4.2)	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	5YR 7/4	精緻	良好	-
	376	Ⅲ	-	環or碗	口縁部～胴部	土師器	-	(11)	-	(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻	良好	-
	377	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(11.8)	-	(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 7/6	少し粗い(小石、石英を多く含む)	良好	-
	378	Ⅲ	-	環or碗	口縁部～胴部	土師器	-	(12)	-	(4.2)	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	-
	379	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(12.4)	-	(3.4)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	380	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(14.6)	-	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	-
	381	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(15.4)	-	(4.1)	工具横ナデ	工具横ナデ	にぶい赤褐色	5YR 5/4	精緻	良好	スス付着
	382	Ⅲ	b	環or碗	口縁部	土師器	-	(14)	-	(4.9)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	外赤(一部に残存)
	383	Ⅲ	b	環or碗	口縁部	土師器	-	(16)	-	(3.8)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	384	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(14)	-	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/6	精緻	良好	側面にもみ痕
	385	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(13.8)	-	(3.5)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	内外、朱?
	386	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(13.2)	-	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻	良好	-
	387	Ⅲ	-	環or碗	口縁部～胴部	土師器	-	(13)	-	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	7.5YR 6/8	精緻	良好	-
第54図	388	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	(10)	-	(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/6	精緻	良好	-
	389	Ⅲ	-	環or碗	口縁部～胴部	土師器	-	-	-	(2.8)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	390	Ⅲ	-	環or碗	口縁部	土師器	-	-	-	(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	391	Ⅲ	b	皿	口縁部～底部	土師器	皿Ⅰ	(14)	-	2.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	底部外面回転へラ切り後ナデ
	392	Ⅲ	-	皿	口縁部～底部	土師器	皿Ⅰ	(8.4)	5.4	2.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部外面糸切り底、見込み静止ナデ
	393	Ⅲ	-	皿	口縁部～底部	土師器	皿Ⅰ	(15)	11	2.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	底部内面は静止ナデ
	394	Ⅲ	-	皿	底部	土師器	皿Ⅰ	(10)	7.2	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	7.5YR 6/8	精緻	良好	底部内面にナデ痕あり、底部外面はへラ切り後へラナデ
	395	Ⅲ	-	皿	口縁部～底部	土師器	皿Ⅰ	12.2	4.8	3.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	スス付着、灯明?底部外面はへラ切り後ナデ
	396	Ⅲ	-	皿	口縁部～底部	土師器	皿Ⅱ	-	5.8	3.4	回転ナデ	回転ナデ	黒褐色	7.5YR 3/1	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面付近回転へラケズリ
	397	Ⅲ	-	黄台付皿	口縁部～底部付近	土師器	皿Ⅱ	(12.5)	(6.0)	(3.7)	横ナデ	横ナデ、一部にケズリ痕が残る	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面回転へラ切り後ナデ、内面外面に帯状にスス付着
	398	Ⅲ	-	皿	胴部～底部	土師器	皿Ⅱ	-	7	(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	脚貼り付けラインが外面に明瞭に残る
	399	Ⅲ	-	皿	底部	土師器	皿Ⅱ	-	5.8	(2.4)	回転ナデ	ケズリ後回転ナデ	赤褐色	2.5YR 5/8	精緻	良好	-

第13表 古代出土遺物観察表 (5)

標図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第54図	400	Ⅲ	-	Ⅲ	胴部～底部	土師器	ⅢⅡ	-	7.2	2.0	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	2.5YR 5/8	精緻	良好	内面中央は静止ナデ
	401	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	ⅢⅡ	-	6.4	2.3	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色、内面に一部黒色	2.5YR 5/8	精緻	良好	-
	402	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	ⅢⅡ	-	6.2	1.8	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 7/6	精緻	良好	底部外面回転ヘラ切り後ナデ、底部内面静止ナデ
第55図	403	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	6.9	3.4	回転横ナデ、ミガキ	回転横ナデ	浅黄褐色	10YR 8/3	精緻	良好	内黒
	404	Ⅲ	-	Ⅲ	胴部～底部	土師器	黒色土師	-	6.4	4.2	ミガキ	ナデは回転ナデ、上部は横ナデ(一部ケズリが残る)	黄褐色	10YR 8/6	精緻	良好	内黒、底部外面回転ナデ
	405	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	8.4	4.6	ミガキ(斜方向が見られる)	回転横ナデ	黄褐色	10YR 8/6	精緻	良好	内黒土師器、底部外面回転ナデ
	406	Ⅲ	-	Ⅲ	脚部	土師器	黒色土師	-	8.7	3.0	ミガキ	横ナデ	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	堅緻	内黒
	407	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	7.1	2.9	ミガキ	回転横ナデ	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	内黒
	408	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	8.4	2.4	ミガキ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻	堅緻	内黒
	409	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	7.8	2.0	見込みナデのち?ミガキ(放射状)	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 6/4	精緻	堅緻	内黒
	410	Ⅲ	-	Ⅲ	脚部	土師器	黒色土師	-	8.0	6.2	ミガキ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻	良好	-
	411	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	6.6	3.1	ミガキ	回転ナデ	浅黄褐色、底面一部黒色	10YR 8/4	精緻	良好	内黒、底部外面回転ナデ
	412	Ⅲ	-	Ⅲ	胴部～脚部	土師器	黒色土師	-	7.6	2.2	ミガキ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 6/3	精緻	良好	内黒、底部外面付近脚貼り付け時の粘土痕
	413	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	7.2	10.8	ミガキ	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 6/4	精緻	良好	内黒、底部外面ヘラ切り後ナデ
	414	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	7.8	2.7	ケズリ(回転)後ミガキ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻(赤色粒をわずかに含む)	良好	内黒、脚部の貼り付け甘い、底部外面ヘラ切り後ナデ
	415	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	7.1	2.5	ミガキ	横ナデ(ナデ面の剥落が多い)	浅黄褐色	10YR 8/3	精緻	良好	見込み部中央が窪み、器壁が非常に薄くなる
	416	Ⅲ	-	Ⅲ	脚部	土師器	黒色土師	-	6.4	2.0	放射状のミガキ、横ナデによる調整(ナデ)	横ナデ、脚部付近は横位のミガキ、下部は縦位のミガキ	赤褐色	2.5YR 4/8	精緻	良好	内黒、外面一部にスス付着
	417	Ⅲ	-	Ⅲ	脚部	土師器	黒色土師	-	6	1.7	ミガキ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻	堅緻	内黒
	418	Ⅲ	-	Ⅲ	胴部～底部	土師器	黒色土師	-	6.6	2.6	ミガキ	ハケ目+ミガキ?	にぶい黄褐色	10YR 6/3	精緻	堅緻	内黒、外赤?
	419	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	5.5	1.2	ミガキ	?	にぶい黄褐色	10YR 7/3	精緻(細砂粒わずかに混る)	良好	内黒、底部外面ヘラ切り後ナデ
	420	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	黒色土師	-	4	2.2	ミガキと思われる痕が多く見られる	回転ナデ、下位にケズリ残る	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	底部外面ヘラ切り後ナデ
	421	Ⅲ	-	Ⅲ or Ⅲ	口縁部	土師器	黒色土師	13.6	-	3.8	口縁部付近は横位のミガキ、下部は縦位のミガキ	回転横ナデ	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	内黒
	422	Ⅲ	-	Ⅲ or Ⅲ	口縁部～胴部	土師器	黒色土師	12.8	-	3.4	ミガキ	回転横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	内黒
	423	Ⅲ	-	Ⅲ or Ⅲ	口縁部	土師器	黒色土師	11	-	4.6	横ナデ後ミガキ	粗い横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 7/3	精緻	良好	内黒
	424	Ⅲ	-	Ⅲ	口縁部～胴部	土師器	黒色土師	17.6	-	2.3	ミガキ	ケズリ後ミガキ	にぶい黄褐色	10YR 6/3	精緻	良好	内黒
	425	Ⅲ	-	Ⅲ	口縁部～胴部	土師器	黒色土師	13.6	-	5.9	ミガキ	ケズリ?後横ナデ	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	内黒、外面器表面に剥落が多い
	426	Ⅲ	-	Ⅲ	口縁部～胴部	土師器	黒色土師	21	-	8.9	斜位から横位のミガキ	横ナデ、一部帯状にケズリ痕が残る	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻	良好	外面にスス付着
第56図	427	Ⅲ	-	Ⅲ	口縁部～底部	土師器	赤色土師	12.7	7.8	6	回転ナデ後ミガキ	回転ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	-
	428	Ⅲ	b	Ⅲ	底部	土師器	赤色土師	-	7	3.4	ミガキ	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 6/4	精緻(白色粒をわずかに含む)	堅緻	-
	429	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	赤色土師	-	6.5	2.8	ヘラによるミガキ	回転ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻(小石、石英を若干含む)	良好	-
	430	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	赤色土師	-	7.2	4.4	ミガキ	ヘラナデ+一部ミガキが残る	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	脚部貼付け部付近から底部外面回転ナデ
	431	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	赤色土師	-	6.2	1.3	ヘラミガキ	回転ナデ	浅黄褐色、明赤褐色	10YR 8/3、2.5YR 5/6	粗い(小石の混入が見られる)	良好	内赤、底部外面ヘラ切り後ナデ
	432	Ⅲ	b	Ⅲ	脚部	土師器	赤色土師	-	8.0	2.1	ナデ後ミガキ	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 6/4	精緻	良好	内赤(剥落が著しい)、底部外面ヘラ切り後ナデ
	433	Ⅲ	-	Ⅲ	底部付近	土師器	赤色土師	-	-	3.1	回転ヘラナデ後ミガキ	回転ヘラナデ後ミガキ	橙色(朱塗り)	2.5YR 6/8	精緻	良好	朱塗り、底部外面は回転ナデ
	434	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	赤色土師	-	-	-	ミガキ	側面ミガキ	橙色	2.5YR 7/6	精緻	良好	底部外面は回転ナデ
	435	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	赤色土師	-	8.8	1.7	ナデ後ミガキ	回転ナデ	黄褐色	10YR 8/6	精緻	良好	内赤
	436	Ⅲ	-	Ⅲ	口縁部～底部	土師器	赤色土師	16	6.6	4.6	回転ナデ	回転ナデ	赤色、素地は浅黄褐色	10R 5/8、10YR 8/4	精緻	良好	両赤
	437	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	赤色土師	-	5.9	1.2	ミガキ(放射状)、剥落が激しい	ミガキ?	明赤褐色	2.5YR 5/8	精緻	良好	両赤
	438	Ⅲ	-	Ⅲ	底部	土師器	赤色土師	-	6	1.8	放射状のミガキ	ミガキ方向不明	朱(明赤褐色)	2.5YR 5/8	精緻	良好	両赤
	439	Ⅲ	b	Ⅲ	口縁部	土師器	赤色土師	18.6	-	3.8	ミガキ	ヘラナデ	赤色	10R 5/8	精緻	良好	両赤
	440	Ⅲ	b	Ⅲ	口縁部～胴部	土師器	赤色土師	17.6	-	3.8	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	2.5YR 5/8	精緻	良好	-
第57図	441	Ⅲ	-	Ⅲ	口縁部～底部	土師器	黒色土師	12.3	6.4	4.7	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻	良好	墨書、底部外面はヘラ切り後ナデ
	442	Ⅲ	-	Ⅲ	口縁部～底部	土師器	黒色土師	12.9	6.7	4.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書「木」
	443	Ⅲ	-	Ⅲ or Ⅲ	口縁部	土師器	黒色土師	14	-	3.9	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書
	444	Ⅲ	-	Ⅲ or Ⅲ	口縁部～胴部	土師器	黒色土師	-	-	3.2	回転ナデ	回転ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	墨書
	445	Ⅲ	-	Ⅲ	口縁部	土師器	黒色土師	-	-	3.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書
	446	Ⅲ	-	Ⅲ or Ⅲ	口縁部	土師器	黒色土師	-	-	2.6	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 7/6	精緻	良好	胴部外面に墨書「木」?
	447	Ⅲ	b	Ⅲ or Ⅲ	口縁部	土師器	黒色土師	-	-	2.6	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	墨書「木」?
	448	Ⅲ	-	Ⅲ or Ⅲ	口縁部	土師器	黒色土師	-	-	2.9	回転ナデ	回転ナデ	橙色	2.5YR 6/8	精緻	良好	墨書
	449	Ⅲ	-	Ⅲ or Ⅲ	口縁部	土師器	黒色土師	-	-	2.6	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻	堅緻	墨書
	450	Ⅲ	b	Ⅲ or Ⅲ	口縁部	土師器	黒色土師	-	-	3.0	横ナデ	横ナデ	浅黄褐色	10YR 8/3	精緻	良好	墨書「木」か「不」?
	451	Ⅲ	-	Ⅲ	底部～胴部	土師器	黒色土師	-	-	3.5	横ナデ+ナデ	横ナデ、底部付近ケズリ後横ナデ	橙色	5YR 6/6	精緻、白色粒がわずかに残る	良好	胴部外面に墨書、逆位に「木」?底面ヘラ調整(ヘラ切り、ヘラケズリであるか不明)

第14表 古代出土遺物観察表（6）

採図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第57図	452	Ⅲ	b	坏	胴部～底部	土師器	墨書土師	-	5	(3.2)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	堅緻	墨書、見込みは静止ナデ
	453	Ⅲ	-	椀	口縁部～底部	土師器	墨書土師	(12.4)	-	(4.5)	回転ヘラナデ	回転ヘラナデ	明赤褐色	2.5YR 5/8	精緻	良好	墨書「吉主」
	454	Ⅲ	-	坏or椀	口縁部～胴部	土師器	墨書土師	(13)	-	(3.6)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	堅緻	墨書「吉」?
	455	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	墨書土師	-	(7.2)	(3.1)	ミガキ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	内黒、墨書「吉主」
	456	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	墨書土師	-	8	(3.0)	ヘラによるミガキ	回転ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	墨書
	457	Ⅲ	-	坏or椀	底部付近	土師器	墨書土師	-	(5.5)	(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	7.5YR 8/6	精緻	良好	墨書、底部内面はナデ
	458	Ⅲ	-	坏or椀	胴部	土師器	墨書土師	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	墨書
	459	表	-	坏or椀	胴部	土師器	墨書土師	-	-	-	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	下位はケズリ
	460	Ⅲ	-	皿	底部	土師器	墨書土師	-	-	(1.2)	指ナデ	指ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書「吉主」
	461	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(1.1)	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 7/4	精緻	良好	墨書
	462	Ⅲ	-	坏or椀	胴部	土師器	墨書土師	-	-	-	ミガキ	ナデ	にぶい橙色	7.5YR 7/4	精緻	良好	墨書、内赤
第58図	463	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(3.6)	横ナデ	横ナデ(工具?)	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻(赤色粒子を含む)	良好	墨書「酒杯」
	464	Ⅲ	-	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(3.0)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	墨書
	465	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(2.1)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書「吉」? 「幸」?
	466	Ⅲ	b	坏or椀	胴部	土師器	墨書土師	-	-	-	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書「毛部」
	467	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	-	横ナデ	横ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻(細砂粒をわずかに含む)	良好	墨書、「不」か「木」か?
	468	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	土師器	墨書土師	(11.8)	-	4.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書
	469	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	(12.4)	-	(3.4)	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	墨書「不」?
	470	表	-	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	(12.2)	-	(5.1)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	墨書
	471	表	-	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	(10)	-	(2.4)	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	5YR 6/3	精緻	良好	墨書?
	472	Ⅲ	-	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	(13.6)	-	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書
	473	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	墨書土師	-	6	(2.7)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 7/8	精緻	良好	墨書、底面はヘラ切り?、外面底部付近はヘラナデ、割れ目あり
	474	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	墨書土師	-	7.2	(1.3)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書
	475	Ⅲ	-	坏	底部	土師器	墨書土師	-	5.8	(1.0)	-	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 6/3	精緻	良好	墨書、底部外面ヘラ切り後ナデ、底部内面見込み静止ナデ
	476	Ⅲ	-	坏or椀	胴部	土師器	墨書土師	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	明赤褐色	2.5YR 5/6	精緻(白色粒が若干混る)	良好	墨書
	477	Ⅲ	-	椀	脚部	土師器	墨書土師	-	7.2	(3.0)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	墨書
	478	Ⅲ	b	椀	脚部～胴部	土師器	墨書土師	-	6.2	(2.2)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 6/3	精緻	良好	墨書
	479	Ⅲ	b	坏or椀	胴部～底部付近	土師器	墨書土師	-	-	-	横ナデ?	横ナデ	灰白色	10YR 8/2	精緻	良好	墨書、底部外面付近ケズリ後横ナデ
	480	Ⅲ	-	坏or椀	胴部	土師器	墨書土師	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書「小」
	481	Ⅲ	-	椀	胴部	土師器	墨書土師	-	-	-	ミガキ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	良好	墨書、内黒
	482	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(1.8)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 6/3	精緻	良好	墨書
	483	Ⅲ	b	坏or椀	胴部	土師器	墨書土師	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	黄橙色	10YR 8/6	精緻	良好	墨書
	484	Ⅲ	-	坏or椀	口縁部～胴部	土師器	墨書土師	-	-	(2.2)	回転ナデ	回転ナデ	橙色	5YR 6/8	精緻	良好	墨書
	485	Ⅲ	-	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(2.7)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	-
	486	Ⅲ	-	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(2.5)	不明	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	墨書
	487	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(2.9)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	墨書
	488	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(2.0)	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	墨書
	489	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(3.3)	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色	7.5YR 7/4	精緻(細砂粒をわずかに含む)	良好	墨書
	490	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(2.2)	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書
	491	Ⅲ	-	坏or椀	口縁部～胴部	土師器	墨書土師	-	-	(2.5)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	墨書
	492	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/4	精緻	良好	墨書
	493	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(2.0)	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	墨書「吉」か「主」?
	494	Ⅲ	-	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	-	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	底部付近ケズリ痕
	495	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部～胴部	土師器	墨書土師	-	-	(3.0)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/3	精緻	良好	墨書
	496	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(1.4)	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	良好	墨書
	497	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(1.7)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻	良好	墨書
	498	Ⅲ	b	坏or椀	口縁部	土師器	墨書土師	-	-	(1.7)	横ナデ	横ナデ	灰黄褐色	10YR 6/2	精緻	良好	墨書
	499	Ⅲ	-	鉢	口縁部～胴部	土師器	墨書土師	-	-	(6.5)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	10YR 8/3	精緻	良好	墨書
第59図	500	Ⅲ	-	椀	脚部	土師器	刻書	-	8.6	(4.1)	体部は横位ミガキ	回転横ナデ	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	刻書(底外)、内黒(内側)、底部外面は回転横ナデ、見込みは多方向のミガキ
	501	Ⅲ	-	椀	底部	土師器	ヘラ書き	-	5.5	(1.8)	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色	7.5YR 7/8	精緻	良好	刻書
	502	Ⅲ	b	坏or椀	底部	土師器	ヘラ書き	-	-	-	ナデ	ナデ	褐色	10YR 4/6	精緻	良好	刻書
	503	Ⅲ	-	坏or椀	底部	土師器	ヘラ書き	-	-	-	ナデ	ナデ	橙色	7.5YR 7/6	精緻	良好	刻書「主」

第15表 古代出土遺物観察表（7）

標図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考
		L1	L2								内面	外面	名称	記号			
第59図	504	Ⅲ	-	皿	底部	土師器	ヘラ書き	-	8	(1.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	10YR 8/3	少々粗い	良好	刻書、底部外面はヘラ切り後ナデ
第60図	505	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅰ	(20.2	-	(3.9	工具ナデ、ケズリ	工具ナデ	橙色	5YR 6/6	砂粒を多く含む	良好	-
	506	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅰ	(19.4	-	(5.3	工具ナデ	上部にハケ目、 工具ナデ	橙色	5YR 6/6	砂粒を多く含む	良好	内面胴部はケズリ後工具ナデ
	507	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅱ	34	-	(8.6	横ナデ、体部・ 斜位のケズリ	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	φ1mm程の小礫 が混る	堅緻	-
	508	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅱ	(30.6	-	15.1	ケズリ、工具ナデ	ハケ目、工具ナデ	橙色	7.5YR 7/6	砂粒が目立つ	良好	-
	509	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅱ	(30	-	(7.4	ケズリ、ナデ	ナデ、ハケ目	灰褐色	7.5YR 4/2	砂粒を含む、石 英が目立つ	良好	-
	510	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅱ	(32.4	-	(7.6	工具ナデ、ケ ズリ後ナデ	ハケ目後工具 ナデ、工具ナデ	にぶい褐色	7.5YR 5/4	砂粒、小礫が混 る	良好	-
	511	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅱ	(28	-	(4.4	工具ナデ、ケズリ	工具ナデ	にぶい赤褐色	5YR 5/4	細砂粒がわず かに混る	良好	-
第61図	512	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅱ	(25.8	-	(4.4	工具ナデ、ケズリ	工具ナデ、指ナデ	にぶい橙色	7.5YR 6/4	砂粒、白色粒が 混る	良好	-
	513	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅱ	(29.7	-	(5.4	工具ナデ後指 ナデ、ケズリ	工具ナデ、指ナデ	明赤褐色	5YR 5/6	砂粒を含む	良好	-
	514	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅱ	(32	-	(5.2	工具ナデ、ケズリ	工具ナデ	橙色	5YR 6/6	砂粒を含む	良好	-
	515	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅱ	(32	-	(4.9	ケズリ、工具ナデ	ハケメ、工具ナ デ、指ナデ	明赤褐色	5YR 5/6	砂粒、小礫を含 む	良好	-
	516	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅲ	(26	-	(6.2	口縁部横ナデ 後内面ケズリ	工具ナデ	にぶい黄褐色	10YR 6/3	砂粒、小礫φ2 mm程度が混る	良好	-
	517	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅲ	(13	-	(4.3	横ナデ後ケズ リ、指ナデあり	工具ナデ(横方向)	橙色	5YR 7/6	砂粒が少し混 る	良好	-
	518	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅲ	(29.4	-	(12.7	ケズリ、工具 ナデ、指ナデ	工具ナデ、指ナデ	明赤褐色	5YR 5/6	砂粒を多く含 む	良好	-
	519	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	甕Ⅲ	-	-	(7.3	ナデ、胴はケズリ	ハケナデ後 工具ナデ、指ナデ	にぶい黄褐色	10YR 6/4	φ1mm程の小礫 を含む	良好	スス付着
	520	Ⅲ	-	甕	口縁部	土師器	-	-	-	(6.0	ケズリ	ナデ	暗褐色	10YR 3/3	砂粒がかなり 混る	良好	内面口縁部はハケ後ナデ
	521	Ⅲ	-	坏	口縁部～底部	須恵器	-	(14.4	(11.2	3.1	回転ナデ	回転ナデ、底部 付近にケズリ	黒色	7.5YR 2/1	石英粒が多量 に混入する	堅緻	底部外面へラ切り後回転ナデ
第62図	522	Ⅲ	b	坏	底部	須恵器	-	(14.6	9	(1.9	横ナデ	横ナデ	灰色	7.5Y 6/1	精緻(白色粒が 混る)	堅緻	底部外面へラ切り後丁寧なナデ
	523	Ⅲ	-	埴	底部	須恵器	-	-	7	(1.5	-	横ナデ	灰色	7.5Y 5/1	精緻(白色粒が 多く混る)	堅緻	見込み静止ナデ
	524	-	-	坏or皿	底部	須恵器	-	-	3.8	1.6	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色	2.5Y 7/2	精緻	堅緻	底部外面糸切り
	525	Ⅲ	-	坏or埴	口縁部～胴部	須恵器	-	(14	(7.7	(5.0	横ナデ	横ナデ	灰色	5Y 6/1	精緻(白色粒が 多く混る)	良好	-
	526	Ⅲ	-	坏or埴	口縁部	須恵器	-	(11.6	-	(3.0	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色	10YR 6/2	精緻	堅緻	須恵器?
	527	Ⅲ	-	皿	口縁部～底部	須恵器	-	15.6	10.4	1.8	横ナデ	横ナデ	灰色	5Y 6/1	精緻(白色粒が 混る)	堅緻	見込みは丁寧なナデ、底面へラ切り後丁寧なナデ
	528	Ⅲ	-	蓋	-	須恵器	-	(15.2	-	(3.1	横ナデ	横ナデ	灰色	5Y 6/1	精緻	堅緻	-
	529	Ⅲ	-	壺	口縁部	須恵器	-	(40	-	(7.2	ハケナデ	格子タタキ、横 ナデ、ナデ	灰褐色	10YR 5/1	精緻(石英混る)	堅緻	-
	530	Ⅲ	-	甕	口縁部	須恵器	-	(18.8	-	(6.1	横ナデ	横ナデ	黄灰色	2.5Y 5/2	精緻	堅緻	自然釉、内面：肩位下 同心円タタキ、外面：肩部 格子 タタキ
	531	Ⅲ	-	甕	頸部	須恵器	-	頭径 16.2	-	-	横ナデ	横ナデ	黄灰色	2.5Y 4/1	精緻	堅緻	自然釉、内面：肩部 同心円タタキ、外面：肩部 格子 タタキ
	532	Ⅲ	-	壺	底部	須恵器	-	-	12	(8.8	指頭圧痕、強 い横ナデ	底部付近ケズ リ後ナデ	灰白色	10YR 7/1	精緻	良好	外面底部付近ケズリ後ナデ
	533	Ⅲ	-	壺	胴部～底部	須恵器	-	-	16.8	(7.8	強く指頭押し ながら横ナデ	格子?タタキ後 ナデ	灰色	5Y 6/1	精緻	堅緻	-
	534	Ⅲ	-	鉢	口縁部～胴部	土師器	-	(19.9	-	(7.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	-
	535	Ⅲ	-	小壺	口縁部	土師器	-	(12.2	-	(4.2	横ナデ	横ナデ	灰白色	2.5Y 8/2	精緻	良好	-
	536	Ⅲ	-	-	底部	土師器	-	-	8	(1.8	-	-	-	-	-	-	-
	537	Ⅲ	b	耳皿	底部	土師器	-	-	7.2	(2.3	ナデ	横ナデ	浅黄褐色	7.5YR 8/6	精緻	普通	底部外面へラ切り後ナデ
	538	Ⅲ	b	蓋	-	土師器	-	-	-	-	上面：回転ナデ	-	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻	良好	回転ナデ、中心近くはナデ
	539	Ⅲ	-	焼塩壺	胴部	土師器	-	-	-	-	布目痕	ナデ、指頭圧痕	橙色	5YR 6/6	精緻(わずかに 小礫が混る)	良好	布目痕
	540	Ⅲ	b	焼塩壺	胴部	土師器	-	-	-	-	布目痕	指頭圧痕	明赤褐色	2.5YR 5/8	精緻	良好	布目痕
	541	-	-	紡錘車	-	土製品	-	穿孔 (0.9	厚さ (0.7	-	-	-	浅黄褐色	10YR 8/3	精緻	良好	土師坏、底部の再利用?
	542	-	-	紡錘車	-	土製品	-	穿孔 (0.8	厚さ (0.8	-	-	-	浅黄褐色	7.5YR 8/4	精緻(赤色粒を 若干含む)	良好	土師器底を再利用
	543	表	-	紡錘車	-	土製品	-	穿孔 (0.8	厚さ (1.3	-	ナデ	-	にぶい黄褐色	10YR 7/4	精緻	良好	指頭圧痕
第63図	544	Ⅲ	-	外耳	-	-	-	-	-	-	上面、下面、側 面、指ナデ?	-	橙色	7.5YR 7/6	砂粒をわずかに 含む	良好	-
	545	Ⅲ	-	甕	把手	-	-	(42.0	(38.3	(12.0 以上	斜位のケズリ	ハケ?後丁寧な ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻であるが、小 礫が多く混る	良好	把手部はナデ、指頭圧痕
	546	Ⅲ	-	甕	把手	-	-	-	-	-	斜位のケズリ	ハケ後ナデ	橙色	5YR 6/6	砂粒が混る	堅緻	把手部はナデ、指頭圧痕
	547	Ⅲ	-	甕	把手	-	-	-	-	-	斜位ケズリ	ナデ	橙色	7.5YR 6/6	砂粒を含む、φ1mm 程の小礫が混る	良好	把手部はナデ、指頭圧痕
	548	Ⅲ	-	鉢	下胴部～底部	-	-	(19.1	-	-	ケズリ後ナ デ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	堅緻	-
	549	Ⅲ	-	鉢	口縁部	-	-	(33	-	(12.8	工具ナデ、ケ ズリ、指ナデ	工具ナデ、指ナデ、 ケズリ、指頭圧痕	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻(砂粒が混る、赤色 粒も混る)	良好	-
	550	Ⅲ	-	壺	底部	-	-	-	13	(4.5	工具ナデ	ケズリ後ナデ	橙色	7.5YR 7/6	砂粒を多く含む、 白色粒が目立つ	良好	-
	551	Ⅲ	-	壺	底部	-	-	-	9	(3.4	ハケ目	工具ナデ、ミガ キ、指頭圧痕	黄褐色	10YR 5/6	砂粒を含む、石 英が目立つ	良好	-

第16表 その他出土遺物観察表

押図番号	掲載番号	出土層		器種	部位	大分類	小分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		胎土	焼成	備考	
		L1	L2								内面	外面	名称	記号				
第64図	552	表	-	深鉢	胴部	縄文	-	-	-	-	ナデ	山形押型文あり	にぶい黄橙色	10YR 5/4	砂粒を含む、石英、長石	良好	押型文or手向山	
	553	Ⅲ	-	深鉢	胴部	縄文	-	-	-	-	ナデ	押型文	にぶい黄橙色	10YR 7/3	石英、長石	良好	手向山、屈曲部に突帯	
	554	表	-	深鉢	胴部	縄文	-	-	-	-	ナデ	貝殻条痕	にぶい黄橙色	10YR 7/3	石英	良好	前半式土器、模あり、刺突文(横周功)、貝殻条痕による刺突文、貝殻条痕による条痕	
	555	表	-	深鉢	胴部	縄文	-	-	-	-	ナデ	模あり、刺突文	にぶい橙色	7.5YR 6/4	砂粒を含む、石英	良好	前半式土器	
	556	表	-	深鉢	口縁部	縄文	-	-	-	-	工具ナデ	貝殻条痕	黒褐色	10YR 3/1	石英	良好	前半式土器、口唇部に刻み、外面に貝殻条痕による横位の刺突文、横位の刺突文	
	557	Ⅲ	-	深鉢	口縁部	縄文	-	-	-	-	-	-	にぶい橙色	7.5YR 7/4	石英、長石	良好	岩本タイプ、口縁部に刻み、外面貝殻による刺突文	
	558	Ⅲ	-	深鉢	口縁部	縄文	-	(20.8)	-	(7.8)	工具ナデ、指ナデ	貝殻条痕	にぶい橙色	7.5YR 6/4	砂粒を含む、石英	良好	石坂、口唇部に刻み目、貝殻刺突文、補修孔あり	
	559	Ⅳ	-	深鉢	口縁部～胴部	縄文	-	(31.8)	-	(6.5)	貝殻条痕後ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	砂粒を含む、石英、長石	良好	貝殻条痕、口唇部に棒状工具で刻み目	
	560	表	-	深鉢	口縁部～胴部	縄文	-	(34.8)	-	(8.6)	口縁部：ケズリ後ナデ、胴部：ナデ、口縁部：ナデ	口縁部：ケズリ後ナデ、胴部：ナデ、口縁部：ケズリ後ナデ	黒色	10YR 2/1	石英	良好	黒川	
	561	Ⅲ	-	深鉢	口縁部	縄文	-	-	-	(5.4)	丁寧な工具ナデ	工具ナデ	黒褐色	7.5YR 3/1	石英、白色粒	良好	黒川	
	562	Ⅲ	-	深鉢	口縁部～底部	縄文	-	-	-	(5.6)	ナデ	ケズリ	黒褐色	10YR 3/1	砂粒を含む、石英、長石	良好	黒川	
	563	Ⅲ	-	鉢	口縁部	縄文	-	-	-	-	ミガキ	口縁部ナデ(丁寧)、下位ケズリ	黒色	5Y 2/1	少し以下の小粒が少し混入、石英	良好	黒川	
	564	Ⅲ	-	浅鉢	口縁部	縄文	-	-	-	-	ナデ、上位はミガキ	ミガキ	黒褐色	5YR 2/1	石英	良好	黒川、口縁部に沈線が1条	
	565	Ⅲ	-	浅鉢	胴部	縄文	-	-	-	-	ミガキ	ナデ+組織痕	にぶい赤褐色	5YR 5/4	石英、白色粒を含む	良好	-	
	566	Ⅲ	-	深鉢	底部	縄文	-	-	11	(3.7)	ナデ	ナデ	橙色	5YR 6/6	小粒、砂粒が目立つ	良好	後期?	
第65図	567	Ⅲ	-	壺	口縁部	弥生	-	-	-	(5.8)	工具ナデ、指ナデ	工具ナデ	にぶい赤褐色	2.5YR 4/4	砂粒を含む	良好	入来式土器(弥生中期前半)、沈線文(3条)	
	568	Ⅲ	-	壺	胴部	弥生	-	-	-	-	工具ナデ、指ナデ	ハケメ、工具ナデ、指ナデ	にぶい褐色	7.5YR 6/4	精緻	良好	刻み目突帯文	
	569	Ⅲ	-	壺	胴部	弥生	-	-	-	-	ナデ	ハケメ	にぶい褐色	7.5YR 5/4	白色粒をわずかに含む	良好	弥生?刻み目突帯文	
	570	Ⅲ	-	壺	脚部	古墳	-	-	(9.0)	-	指ナデ、指頭圧痕	ナデ、指ナデ	橙色	7.5YR 6/6	石英、長石	良好	成川?	
	571	Ⅲ	-	高坏	脚部	古墳	-	-	(9.0)	-	胴内面：指ナデ	胴外面：工具ナデ	明赤褐色	2.5YR 5/6	太粒の砂粒が混入	堅緻	脚のすそ部分に4個穴あり	
	572	Ⅲ	-	壺	底部	弥生	-	-	7.2	(3.4)	ケズリ、指ナデ	ケズリ後ナデ?、ナデ	灰褐色	7.5YR 4/2	砂粒を含む、赤色粒が目立つ	良好	弥生	
	573	Ⅲ	b	坏	底部	土師器	-	-	7.2	(1.4)	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙色	10YR 7/4	精緻	良好	見込み静止ナデ、底部外面回転糸切り	
	574	Ⅲ	-	坏	胴部～底部	土師器	-	-	(8.0)	(1.5)	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	7.5YR 5/2	精緻	良好	底部内面は静止ナデ、底部外面は回転糸切り底、底部にケタの歯状に凸部あり(切り離し後の置き台か何かの痕跡か?)	
	585	Ⅲ	-	焙烙	取手	瓦器	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙色	10YR 6/3	精緻	堅緻	ヘラケズリの後ナデ、その後ミガキ	
	586	Ⅲ	-	花鉢	底部	土師器	-	-	11.8	(5.3)	横ナデ	横ナデ	橙色	7.5YR 6/6	精緻	良好	底径から三脚と推定した、底部外面ナデ	
第66図	587	Ⅲ	-	香炉	口縁部～底部	土師器	-	(10.9)	8.2	3.6	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色、一部に橙色	7.5YR 8/8、2.5YR 6/8	精緻	良好	-	
	588	表	-	鉢	底部	-	-	-	-	(1.4)	ナデ	ナデ	-	-	精緻	良好	-	
	589	Ⅲ	-	蓋	-	土師器	-	-	14.2	(1.1)	上面ナデ	横ナデ	灰黄褐色	10YR 6/2	精緻	良好	底面ハケナデ、スス付着	
	591	表	-	茶釜	肩部	-	-	-	-	-	ナデ	-	黄灰色	2.5Y 5/1	精緻	良好	スタンプ文、沈線(横位)	
	592	Ⅲ	-	小壺	胴部～底部	瓦質	-	-	5.8	(3.1)	工具ナデ、指頭圧痕	工具ナデ(縦方向)後ナデ	褐灰色	10YR 6/1	精緻	良好	徳利状	
	593	Ⅲ	-	石鍋	口縁部	-	-	-	-	(3.8)	-	外面：黒色	10YR 1.7/1	-	-	-	-	口縁部外面付近にスス付着
	614	Ⅲ	-	人形	-	-	-	-	-	(6.8)	-	-	灰白色	2.5Y 7/1	精緻	良好	-	
第67図	616	Ⅲ	-	鉢	口縁部	-	-	-	-	-	工具ナデ、指ナデ	ハケメ	黒褐色	10YR 3/1	精緻	堅緻	-	
	631	Ⅲ	-	るつぽ	口縁部	土師器	-	(10.4)	-	(4.1)	-	指頭圧痕	浅黄褐色	10YR 8/4	精緻	良好	ガラス質化している	
第71図	632	Ⅲ	-	羽口	-	-	-	外径(5.5)	-	-	-	指頭圧痕	にぶい黄褐色	10YR 6/4	精緻	良好	ヤケ(熱変)、口径推定約2cm	
	633	Ⅲ	-	羽口	先端付近	-	-	外径推定(5.0)	-	-	-	-	灰白色	10YR 8/1	精緻で砂粒がわずかに混入	良好	熔融し、表面は赤変し、ややガラス質化している	

第17表 その他(陶磁器)観察表(1)

押図番号	掲載番号	出土層		種別	分類	器種	部位	胎土の色調	色調記号	釉薬	釉薬記号	施釉	法量 (cm)			産地	時期	備考	
		L1	L2										口径	底径	器高				
第65図	575	Ⅲ	-	磁器	青磁	坏	口縁部	灰白色	7.5Y 7/1	透明釉(オリブ灰色)	10Y 6/2	全体	-	-	(3.7)	中国・龍泉窯	-	上田分類D類	
	576	Ⅲ	b	磁器 碗類一見類	青磁	碗	胴部～底部	灰白色	7.5Y 7/2	青磁釉	10Y 6/3	全体	-	4.6	4.1	中国・龍泉窯	-	-	
	577	-	-	磁器	青磁	碗	口縁部	灰白色	7.5Y 7/1	透明釉(オリブ灰色)	10Y 6/2	全体	(14.4	-	(3.3)	中国・龍泉窯	-	上田分類C類、雷文	
	578	Ⅲ	b	磁器	青磁	碗?	口縁部～胴部	灰白色	7.5Y 8/1	透明釉(オリブ灰色)	10Y 6/2	全体	5.5	-	(3.5)	中国・龍泉窯	-	上田分類b4	
	579	Ⅲ	-	磁器	青磁	碗	口縁部～胴部	黄褐色	10YR 8/6	透明釉(明黄褐色)	10YR 7/6	全体	(13.8	-	(4.8)	中国・龍泉窯	-	上田分類b類	
	580	Ⅲ	-	磁器	青磁	小皿	口縁部～胴部	灰白色	10Y 7/1	透明釉(オリブ灰色)	10Y 6/2	全体	(10.0	-	(2.6)	中国・龍泉窯	-	上田分類3類5A	
	581	Ⅲ	-	磁器	-	棗花皿	底部	灰白色	7.5Y 7/1	透明釉(オリブ灰色)	10Y 5/2	底部、胴部所々に釉がからなかった部分が見られる		(11.2	(5.4	2.8	中国・龍泉窯	150後半	-
	582	Ⅲ	-	磁器	青磁	盤	胴部～底部	灰白色	7.5Y 7/1	透明釉(オリブ灰色)	10Y 6/2	底部中央に釉割きが見られる		-	(9.6	(2.1	中国・龍泉窯	-	-
	583	Ⅲ	-	瓦器	擂鉢	擂鉢	胴部	黄褐色	10YR 8/6	-	-	-	-	-	(2.4	-	中世	-	
	584	Ⅲ	-	瓦器	擂鉢	擂鉢	口縁部～胴部	明黄褐色	10YR 7/6	-	-	-	(12.2	-	(10.2	-	不明	注口あり	
第66図	590	Ⅲ	-	瓦質土器	-	羽釜	口縁部～胴部	灰白色	7.5Y 7/1	-	-	-	(13.0	-	(6.1	-	-	-	
第67図	594	Ⅲ	-	磁器	青花	皿	口縁部～胴部	灰白色	7.5Y 7/1	透明釉(灰白色)	10Y 7/1	全体	(16.8	-	(1.8	中国・龍泉窯	150後半?～160にかけて	-	
	595	Ⅲ	-	磁器	染付	皿	口縁部	灰白色	2.5Y 8/1	透明釉	-	全体	(15.2	-	(1.8	中国・景德鎮	-	小野分類F類	
	596	-	-	磁器	-	-	底部	灰白色	10YR 7/1	透明釉(灰白色)	10Y 7/1	畳付以外		-	(5.0	(2.1	中国・淳化窯	160末～170初頭	-
	597	Ⅲ	-	磁器	青花	皿	口縁部～胴部	灰白色	10Y 8/1	透明釉(灰白色)	7.5Y 7/1	全体	(10.8	-	(2.3	中国	180?	-	
	598	Ⅲ	-	磁器	青花	碗	口縁部～胴部	灰白色	7.5Y 7/1	透明釉(灰白色)	10Y 7/1	全体	(14.0	-	(2.7	中国・龍泉窯	150後半～160?	-	
	599	Ⅲ	-	磁器	青花	-	口縁部	灰白色	7.5YR 8/1	透明釉(灰白色)	10Y 7/1	全体	-	-	(2.5	中国	?	-	
	600	Ⅲ	-	磁器	青花	碗	口縁部～胴部	灰白色	2.5Y 8/1	透明釉(灰白色)	10YR 7/1	全体	(13.3	-	(3.5	中国・景德鎮	150後半～160	-	

第18表 その他（陶磁器）観察表（2）

挿図番号	掲載番号	出土層		種別	分類	器種	部位	胎土の色	色調記号	釉薬	釉薬記号	施釉	法量 (cm)			産地	時期	備考
		L1	L2										口径	底径	器高			
第67図	601	Ⅲ	－	磁器	青花	碗	胴部～底部	灰白色	7.5Y 8/1	透明釉(灰白色)	7.5Y 8/1	畳付以外	－	(5.4	(2.9	中国・龍泉窯	15C後半～16C	－
	602	Ⅲ	－	磁器	染付	皿	胴部	灰白色	10Y 8/1	透明釉(灰白色)	10YR 7/1	全体	－	(4.7	(1.4	肥前	18C	－
	603	Ⅲ	－	磁器	染付	皿	底部	灰白色	7.5Y 8/1	透明釉(灰白色)	10YR 7/1	畳付以外	－	－	(1.9	肥前	18C	－
	604	Ⅲ	－	磁器	染付	桜花皿	口縁部～底部	灰白色	2.5Y 8/1	透明釉(灰白色)	7.5Y 7/1	全体(外底面?無施釉)	(14.0	(9.2	3	肥前系	19C	山水紋
	605	Ⅲ	－	磁器	染付	小皿	口縁部～底部	灰白色	2.5Y 8/1	透明釉	－	畳付以外	(9.2	3.6	(2.6	平佐?在地?	－	－
	606	Ⅲ	－	陶器	龍門司	碗	底部	にふい赤褐色	2.5YR 4/4	鉄釉?(暗褐色)	7.5YR 3/3	畳付以外	－	3.4	(1.5	龍門司	18C後半	見込み輪状に釉剥ぎ
	607	Ⅲ	－	陶器	－	土瓶の蓋	つまみ欠損	赤色	10R 4/8	透明釉(オリーブ黒色)	7.5Y 3/2	上部のみ	4.3	6.9	(2.6	苗代川	－	－
	608	Ⅲ	－	陶器	－	－	胴部～底部	灰色	10Y 6/1	鉄釉(にふい赤褐色)	2.5YR 4/3	底部以外	－	(4.8	(1.4	豎野	－	－
	609	Ⅲ	－	陶器	－	土瓶	底部～脚部	黄橙色	10YR 8/6	極暗赤褐色	7.5R 2/2	脚の先端以外	－	(脚の位置 8.0	(5.6	豎野	－	－
	610	Ⅲ	－	陶器	－	土瓶	底部	浅黄橙色	10YR 8/3	鉄釉(黒褐色)	7.5YR 3/1	底部以外	－	－	(1.8	豎野	－	脚にも施釉されている
	611	Ⅲ	－	陶器	－	土瓶	脚部	浅黄橙色	10YR 8/3	鉄釉(内面は暗赤褐色、外面は黒褐色)	2.5YR 3/4 10YR 2/2	全体	－	－	(2.5	豎野?	－	－
	612	Ⅲ	－	龍門司	急須注口	－	－	灰色	7.5Y 4/1	透明釉(灰オリーブ色)	7.5Y 6/2	外面全体	－	－	－	龍門司	幕末以降	サメ肌
	613	表	－	陶器	灯明具 灯明具受け台	完形品	－	にふい赤褐色	2.5YR 5/4	鉄釉(暗褐色)	7.5YR 3/4	口唇部、底以外	6.2	4.2	5.3	－	－	－
	615	Ⅲ	－	陶器	琉球 壺or甕?	胴部	－	赤褐色	2.5YR 4/8	－	－	－	－	－	－	琉球	18C?	内面：指頭圧痕、横ナデ、 外面：ヘラナデ痕あり

第19表 その他（石製品）観察表

挿図番号	掲載番号	出土層		石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
		L1	L2							
第68図	617	－	－	黒曜石	－	(2.8	(2.3	2.1	14.5	－
	618	Ⅲ	－	黒曜石	－	(4.4	(4.2	1	19	－
	619	－	－	黒曜石	－	(3.7	(3.1	1	12.6	－
	620	Ⅲ	－	花コウ岩	すり石	9	7.3	6.1	595	－
	621	Ⅲ	－	安山岩	－	8.8	4.4	5.1	395	周囲に2mm程の被熱がある
	622	Ⅲ	－	チャート	砥石	6.2	3	0.4	70.5	－
	623	Ⅲ	－	砂岩	砥石	(7.8	(8.2	2.2	250.3	－
第69図	624	表	－	砂岩	砥石	(7.3	(6.2	1.8	110.2	－
	625	Ⅲ	－	軽石	－	6.5	14.1	1.5	60	－
	626	－	－	軽石	－	(9.9	8.1	4.7	160	粘土付着
第70図	627	－	－	凝灰岩	金床石	31	23.8	13.8	11700	打面にしたと考えられる面は赤変している
	628	Ⅲ	－	黒色頁岩	基石?	2.2	1.8	0.6	5.1	－
	629	Ⅲ	－	砂岩	基石?	2.1	1.6	0.8	4	－
	630	Ⅲ	－	黒色頁岩	基石?	1.5	1.3	0.5	1.7	－
第71図	634	Ⅲ	－	凝灰岩	－	(19.7	8.1	11.4	1900	石材はブロック状に整形され、上面には同様な石材を積み重ねていたような痕跡が確認できる

第20表 その他（鉄製品）観察表

挿図番号	掲載番号	出土層		種別	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考
		L1	L2			最大長	最大幅	最大厚		
第71図	635	Ⅲ	－	鉄製品	埴型滓	7.4	6.2	3	222	－
	636	Ⅲ	－	鉄製品	埴型滓	5.5	6.2	2.9	158.1	－
	637	Ⅲ	－	鉄製品	小型埴型滓	5.3	5.7	1.6	76.2	－
	638	Ⅲ	－	鉄製品	埴型滓	5.6	5	1.9	52.1	－
第72図	639	Ⅲ	－	古銭	－	直径 2.1	－	0.1	2	洪武通宝
	640	Ⅲ	－	鉄製品	雁股鍔	(7.1	(4.7	(1.0	26	－
	641	Ⅲ	－	鉄製品	小札?	3.9	2.9	0.9	4.7	－
	642	Ⅲ	－	鉄製品	小札?	2.9	2	0.1	2.4	－
	643	Ⅲ	－	鉄製品	短剣	17.3	3.1	1.1	54	－
	644	Ⅲ	－	鉄製品	刀子	(9.8	(2.5	(0.4	27.7	－
	645	－	－	鉄製品	刀子	(11.5	(1.2	(0.2	12.4	基部、先端を欠損する
	646	Ⅲ	－	鉄製品	刀子	13.5	(1.2	(0.3	17.1	－
	647	Ⅲ	－	鉄製品	刀子	15	1.5	0.9	30.6	－
	648	Ⅲ	－	鉄製品	刀子 柄部?	(4.5	1.5	(0.6	8.2	－
	649	Ⅲ	－	鉄製品	刀子	(5.1	(1.3	(0.9	8.1	－
	650	Ⅲ	－	鉄製品	鉄鍋?	5.5	5.4	2	75	－
	651	Ⅲ	－	鉄製品	紡錘車	3.6	3.6	(0.9	31.7	－
	652	Ⅲ	－	鉄製品	－	(5.7	(1.2	(0.1	14	－
	653	Ⅲ	－	鉄製品	リング?	2.3	2.2	0.05	4.5	－
	654	Ⅲ	－	鉄製品	－	5.3	3.5	0.7	2.4	－
	655	Ⅲ	－	鉄製品	角釘	4.7	1.1	1	8.1	－
	656	Ⅲ	－	鉄製品	釘	3.7	1	0.7	4.3	－

第4章 自然科学分析

川上城跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

川上城跡は、鹿児島県鹿児島市川上町字加栗山に所在する。測定対象試料は、方形土坑5埋土中出土土器付着炭化物（1：IAAA-120003）1点である（表1）。炭化物は、土器片の内面に薄く付着したものや、溝状にややくぼんだ部分に残るようにして付着していたものなどが採取された。

2 測定の意義

試料が出土した遺構が利用された時期を特定する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい（¹⁴Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6 測定結果

方形土坑5埋土中出土土器付着炭化物1の¹⁴C年代は

1490±30yrBP, 暦年較正年代 (1σ) は556~605cal ADの範囲で示される。

試料の炭素含有率は13%と低い値を示した。炭化物の付着は良好とは言えず、採取した試料の中に若干土と見られるものが混入し、完全には除去できない状態であったことが原因として考えられる。このため、土に由来する炭素が混入している可能性を否定できず、年代値の扱いには注意を要する。

文献
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

表 1

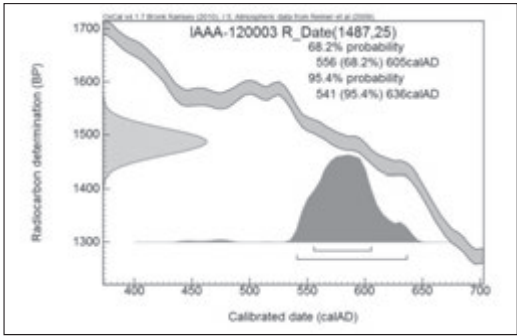
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	δ 13C (‰) (AMS)	δ 13C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-120003	1	方形土坑 5 埋土中	土器付着炭化物	AaA	-20.59 ± 0.50	1,490 ± 30	83.09 ± 0.26

[#5063]

表 2

測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-120003	1,420 ± 20	83.84 ± 0.25	1,487 ± 25	556calAD - 605calAD (68.2%)	541calAD - 636calAD (95.4%)

[参考値]



川上城跡から出土した炭化材の樹種

はじめに

本報告では、川上城跡の礫集積、方形土坑から出土した炭化材について、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

1 試料

試料は、B-9区礫集積 2 礫間、B-11区礫集積 3 礫間、A・B-11区方形土坑 4 埋土中から出土した炭化材 3 点(試料番号 2～4)である。いずれも複数片の炭化材が認められる。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の 3 断面の断面を作製し、

実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。なお、試料番号 2 には、2 種類が認められた。検出された炭化材は、針葉樹 1 分類群(マツ属複雑管束亜属)と広葉樹 3 分類群(クリ・イスノキ近似種・アワブキ属)に同定された。各分類群

の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔板は単穿孔であるが、小道管に希に階段穿孔が認められる。壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・イスノキ近似種 (cf. *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)

マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。木繊維は、ほとんどが潰れている。道管は階段穿孔を有する。放射組織は潰れており同性・異性の区別は不明。1-3細胞幅、1-20細胞高。

道管配列の特徴などから、イスノキの可能性はあるが、放射組織が潰れているなど、保存状態が悪いため、近似種とした。

・アワブキ属 (*Meliosma*) アワブキ科

散孔材で、道管は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

表1 樹種同定結果

番号	調査区	遺構	種類
2	B-9区	礫集積2 礫間	クリ
			イスノキ近似種
3	B-11区	礫集積3 礫間	アワブキ属
4	A・B-11区	方形土坑4 埋土中	マツ属複維管束亜属

4 考察

B-9区礫集積2礫間から出土した炭化材は燃料材と考えられている。クリとイスノキ近似種が認められ、少なくとも2種類の木材が混在して利用されたことが推定される。クリは、二次林などに生育する落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。イスノキ(近似種)は、暖温帯性常緑広葉樹林の構成種であり、木材は極めて重硬・緻密で、強度が高い。生育場所は異なるが、硬い材質の木

材であることが共通しており、燃料材として硬い木材を選択した可能性がある。

B-11区礫集積3礫間の炭化材も燃料材と見なされている。樹種はアワブキ属で、礫集積2出土炭化材2とは異なる木材が利用されている。アワブキ属には、落葉性の種類と常緑性の種類があるが、本地域では常緑性のヤマビワなどが一般的である。ヤマビワとすれば、比較的重硬で強度が高い部類に入り、強度の高い木材を選択していた可能性がある。

A・B-11区方形土坑4埋土中から出土した炭化材は、遺構構成材の可能性が考えられている。この炭化材は、針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は、二次林や海岸などに生育する常緑高木であり、木材は軽軟であるが、強度・保存性は比較的高い。構成材として、強度・保存性の高い木材が選択された可能性がある。

引用文献

林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

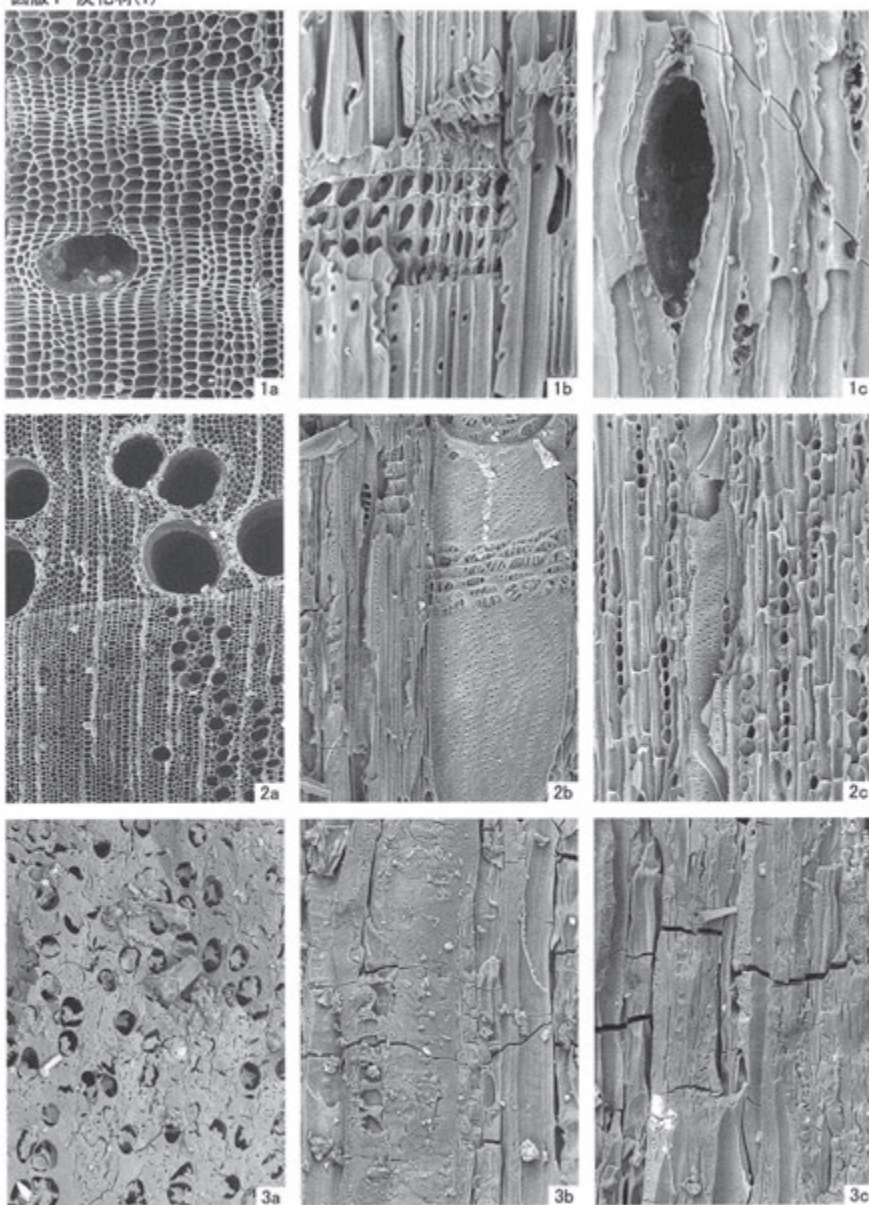
Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

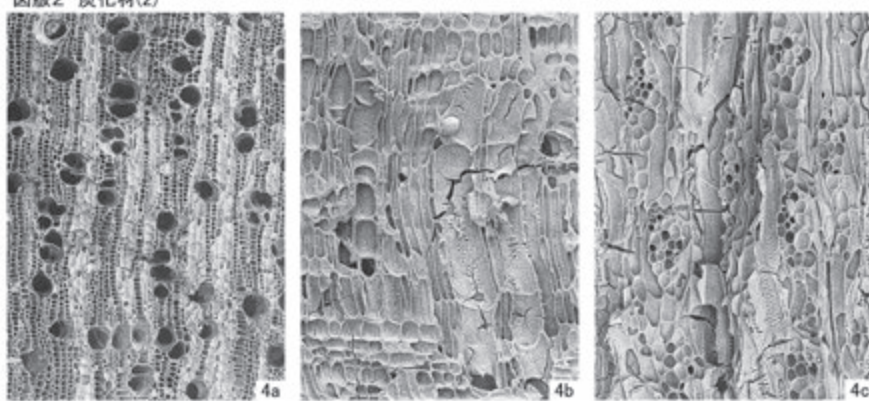
図版1 炭化材(1)



1. マツ属複維管束系属(試料番号4)
 2. クリ(試料番号2)
 3. イスノキ近似種(試料番号2)
 a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c

図版2 炭化材(2)



4. アワブキ属(試料番号3)
 a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μ m: a
 200 μ m: b, c

第5章 総括

第1節 古代の遺構

古代の調査成果として、遺構は掘立柱建物跡3棟、方形土坑9基、炉跡2基、土坑14基、礫集積3基、溝6条、畝状遺構6条、ピット多数が検出されたことが挙げられる。遺構は、Ⅳ層上面、Ⅲb層上面の2面から検出された。包含層の遺物は土師器の碗、坏、皿、甕、須恵器の碗、坏、皿、甕、壺、黒色土器、赤色土器、墨書土器、刻書・ヘラ書き土器など多様な出土をみた。総点数15000点出土し、14950点が類別でき、内656点を掲載した。

遺構はⅣ層で掘立柱建物跡3棟、方形土坑5基、土坑13基、溝状遺構、道跡が検出された。

特徴的なことをあげると、検出された掘立柱建物跡3棟がすべてⅣ層検出であったこと、その内、掘立柱建物跡1が壁立建物跡の可能性が伺えること、大型のピットで構成された掘立柱建物跡3の存在。5基の方形土坑の内、焼土を伴う方形土坑8の存在である。

掘立柱建物跡は検出数こそ少ないものの大型ピットで構成された掘立柱建物跡は、他の建物跡とは明らかに建物規模が異なり、当該地の中心をなしていた、もしくは中心をなす建物群を構成していた建物と考えられる。また当該遺跡内から多量の墨書土器、刻書土器、ヘラ書き土器が出土していることから、識字層や地元の有力者層の人物が居住していた可能性が指摘できる。

方形土坑8は土坑やや東寄りの埋土上面に焼土跡が検出された。Ⅳ層検出の焼土跡は供伴遺物からはどういう目的で使用されたのか確定できないが、推測としてⅢb層で検出される鉄滓等を伴う礫集積や、韃羽口を伴う方形土坑5へとつながるものではないかと考えられる。

Ⅲb層では方形土坑4基、炉跡2基、土坑1基、礫集積3基が検出された。

方形土坑5では口径2cm程の先端部が溶融しガラス質化した韃の羽口が出土し、方形土坑9では中央部が被熱により赤化した焼土が確認され、さらに被熱赤化した礫が集中して出土した。礫集積1・2は被熱により赤化した大型軽石で構成され、周辺に鉄滓も出土している。

礫集積3は土坑状の凹みの中に多くの鉄滓と円礫が出土した、さらに埋土中には多くの炭化物が混入していた。隣接して検出された炉跡1・2の埋土は被熱によりしまりがあり赤褐色を呈する。

Ⅲb層検出遺構の特徴は上述したように韃羽口を出土する方形土坑5、鉄滓や焼礫を出土する礫集積、炉跡の検出など、製鉄鍛冶関連と思われる遺構の多さにある。

Ⅳ層からⅢb層にかけて、居住の用を主とした土地利

用から、工房的役割を主とした土地利用への転換があったものと思われる。この後、古代末～中世と考えられるⅢa層にみられる造成（コンター部のみ記録のため未掲載、土層断面図参照）が行われ、次の新たな土地利用、すなわち中世山城川上城へと続くと思われる。今回調査の遺構は、川上城へとつながる、地方の基盤が形成されていく過程を示すものと思われる。

遺構の時期については、出土遺物の傾向からはⅣ層検出遺構とⅢb層検出遺構を明確に時期区分できず、9世紀前半台から10世紀中頃の多少幅をもった時代設定をしておきたい。

第2節 古代の遺物

今回の発掘調査は、加栗山遺跡及び川上城の本丸にあたる地点の一部である。出土遺物及び遺構は川上城が城として機能し活用されていた時代より以前の古代のものが中心であった。出土した遺物の中でも土師器の量が多い。

1 土師器について（坏、碗、皿）

今回の発掘調査でもっとも出土量の多い遺物が土師器であった。完形品もしくはそれに近い状態での出土も多かった。

坏、碗、皿のいずれもⅠ類に属するものは少ないことから、古代の比較的新しい時代のものが多い。

出土した遺物を見ても、食器として使用されたと考えられるものが多数であるが、一部にススの付着が見られたり、被熱により表面の調整痕が摩滅してしまったりしているものもあった。一部は食器以外の用途として転用された可能性がある。

また、器種が同じであっても胎土や調整方法、色、器形、法量等が全く異なる。このことは、同一の産地から短期間での流入とは考えにくく、多くの産地から長期間にわたり土師器の流入があったこと、土師器の流入に伴う交易があったことが伺える。これらについては今後の検討課題といえよう。

2 黒色土器について

今回の調査で出土した黒色土器は、碗Ⅱ類に属するものが多く（15点）出土した。それぞれ内面のミガキ調整方法に違いが見られる。大きく分類すると、i 見込み部分から外側に向かって放射状に磨くもの、ii 規則性がなく、あらゆる方向に磨くものの二つに大別できる。見込み部分が残っていないものについては、i 縦方向のミガキ（底の方から口縁部に向かう、もしくは口縁部から底に向かう）、とii 横方向のミガキの二つに大別される。

いずれも高台はハの字型に開く形状である。

坏についてはいずれもⅡ類、皿については高台を持つ皿Ⅱ類に属するものである。

以上の点から考えて、黒色土器は古代の中でも後半部分に位置付けられるものであろうと考えられる。また、多くの出土量から考えて一般の人ではなく比較的富裕層にあたる人たちが居住する場であったことを伺わせる。

3 赤色土器について

赤色土器については、出土したものは碗もしくは坏のいずれかであり、鉢などの中型遺物の出土は無かった。多くが胴部内面、もしくは口縁部付近に工具によるミガキもしくはヘラナデ調整が施されていた。また色調も濃いものから薄いものまで様々であった。

このことから土師器同様多くの生産地から長期間にわたり流入してきたこと、そして赤色土器を介した交流が行われていたことを伺わせる。

4 墨書、刻書、ヘラ書き土器について

今回の調査において特筆すべき点の一つとして墨書土器の出土数が多かった点が上げられる。特に遺構内から出土した「下田」と書かれた土師器からはこの地名が古代にはすでに使用されていたことを示すものである。また、「吉主」は、「(吉)めでたいこと」の「主(ぬし)」と解釈が可能で、自らの権力誇示のために書いた可能性がある(永山修一氏の御教示による)。また、「幸」などこれほど多くの墨書土器が出土する古代遺跡は県内でも少ない。このことは、当時、本遺跡内に識字層が生活していたことを想定させる。また「木」もしくは「不」も多く出土した。持ち主の名前の一部の可能性も考えられるが、何を意味するものか、他の遺跡における墨書土器と比較検討することが必要である。

5 土師甕について

土師甕はⅠ類からⅢ類を設定した。口縁部外反胴部が張り内面ケズリ調整が弱いものから、胴の張りが小さくなり内面ケズリにより器壁を薄く仕上げ、口縁部内面に稜線が明瞭に形成される、その後口縁部の外反度合いが小さく、器壁が厚くなるといった傾向は、9世紀前半から10世紀中頃の変化の傾向を間断なく表している。この時期継続的にこの地が利用されていたことを裏付けていると言える。

以上の点から考えて今回の調査範囲は古代においては識字層もしくは権力を持った人たちが居住する場であったことが伺える。

第3節 その他の遺物

旧石器～近世まで様々な遺物が確認されている。旧石器では細石刃核、フレークが数点出土している。また縄文になると前平式土器や石坂式土器、磨石など、後背の加栗山遺跡出土の遺物に関連してくるものと考えられる。ほかに入佐式土器、黒川式土器などの晩期の土器も出土した。また数点、弥生、古墳とおぼしき遺物も出土している。

中世の遺物は青白磁、青花、瓦質土器、石鍋等が出土しているが点数としては少数であり、やはり後背丘陵からの崩落土に混ざり込んでの出土と考えられ、中世の時期は遺跡の本体(活動の中心)は後背丘陵の川上城にあったと考えられる。

時代の特定の難しい遺物としては砥石、軽石製品、金床石、鉄製品などがあげられる。埴埴、砥石、金床石などは製鉄関連遺構の多いⅢb層の時期に該当するとの想定は可能である。

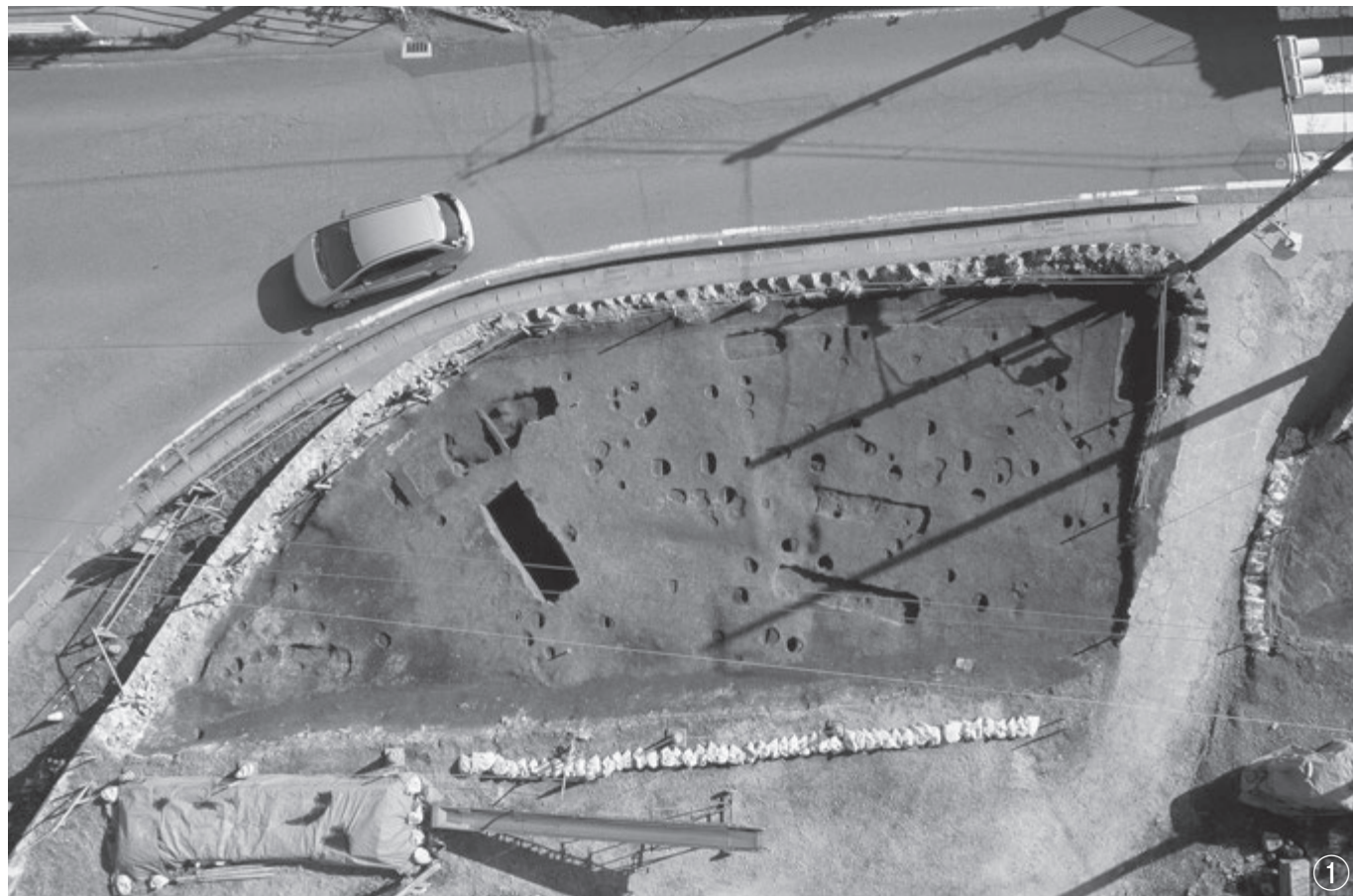
〈参考文献〉

- 鹿児島県埋蔵文化財センター 2004『九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(71)
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』

写真図版



川上城跡全景（西側から撮影）



① A・B-1～3区IV層上面遺構検出状況 ② A・B-4～6区IV層上面遺構検出状況

古代の遺構 (1)



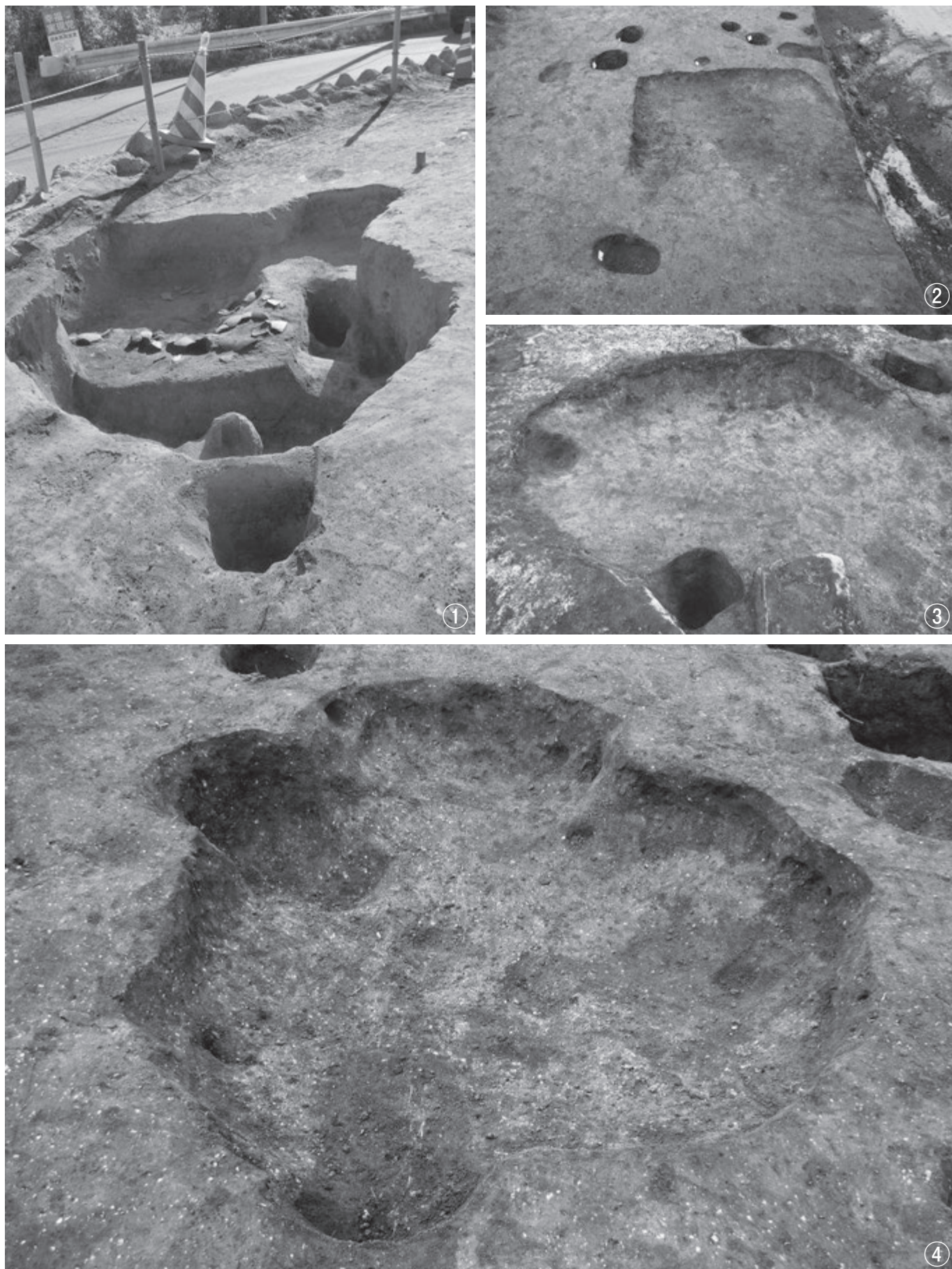
① B-12・13区IV層上面検出状況 ② A・B-9・10区Ⅲb層上面遺物出土状況
③ A・B-7・8区土層断面 ④掘立柱建物跡1検出状況

古代の調査・古代の遺構 (2)



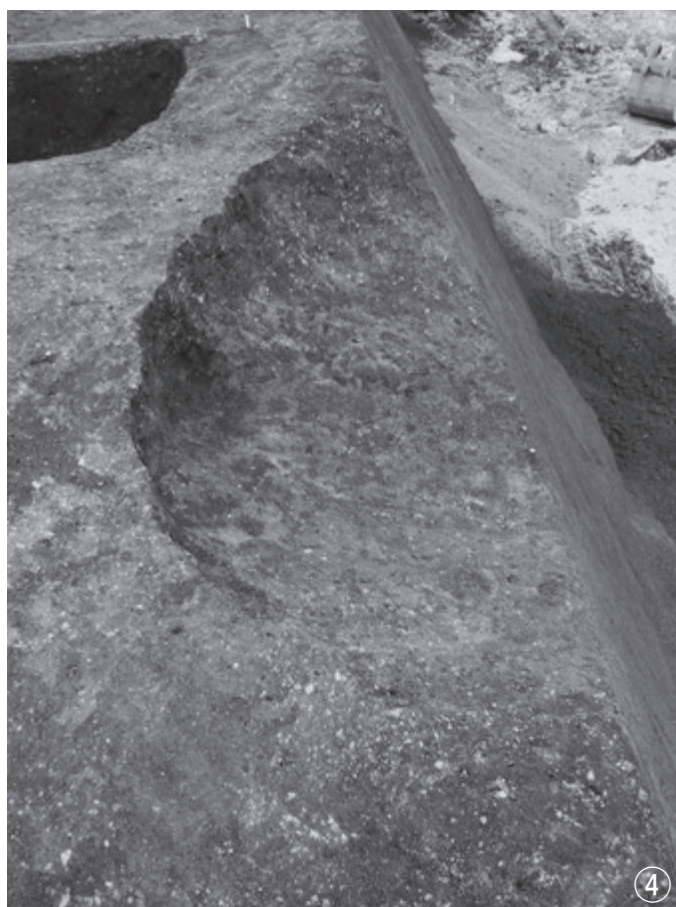
① 掘立柱建物跡 2 完掘状況 ② 掘立柱建物跡 3 完掘状況

古代の遺構 (3)



① 方形土坑 1 内須恵器甕出土状況 ② 方形土坑 2 完掘状況 ③ 方形土坑 3 完掘状況
 ④ 方形土坑 4 完掘状況

古代の遺構 (4)

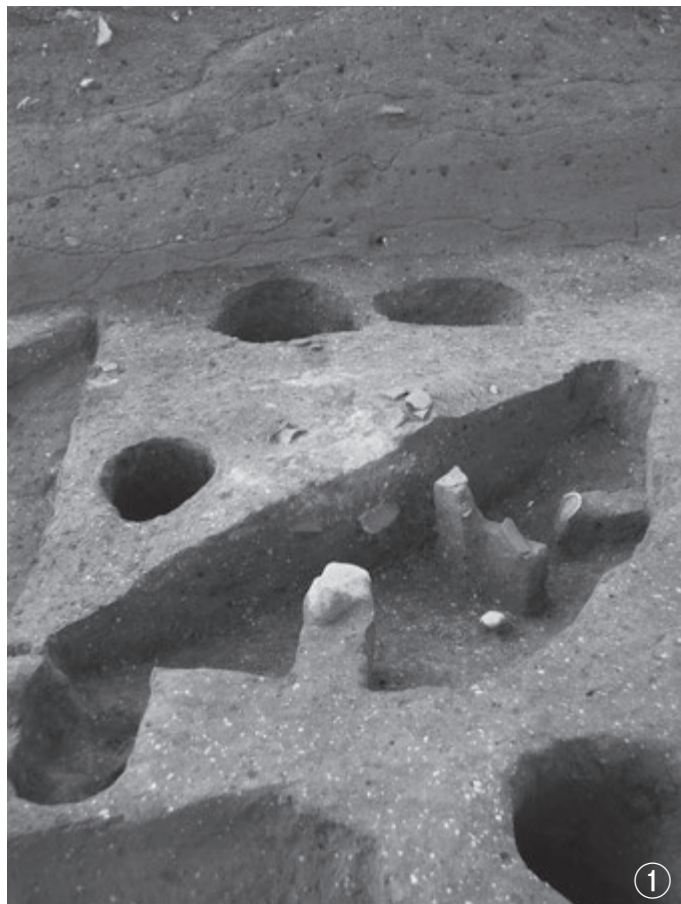


① 方形土坑 5 完掘状況
④ 方形土坑 7 完掘状況

② 方形土坑 6 完掘状況

③ 方形土坑 7 検出状況

古代の遺構 (5)

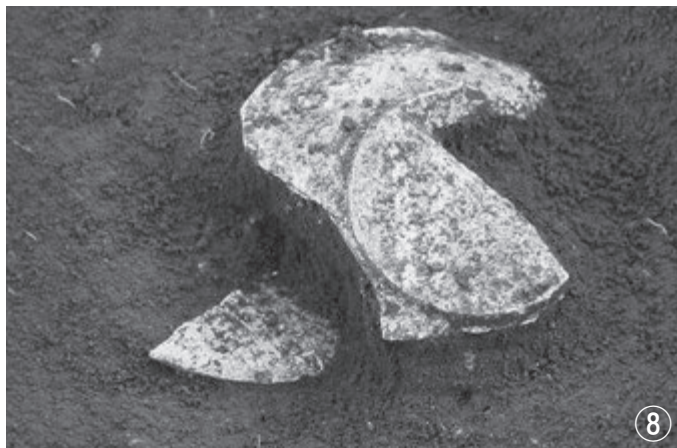
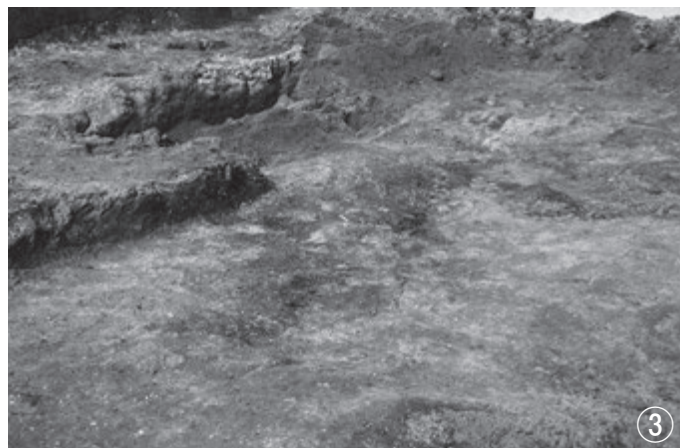


① 方形土坑8埋土断面

② 方形土坑8完掘状況

③ 方形土坑9遺物出土状況

古代の遺構 (6)



① 土坑2 遺物出土状況 ② 土坑1, 2 完掘状況 ③ 土坑3 検出状況 ④ 土坑3 完掘状況
⑤ 土坑5 検出状況 ⑥ 土坑5 完掘状況 ⑦ 土坑7 遺物検出状況 ⑧ 土坑7 緑釉陶器出土状況

古代の遺構 (7)



① 礫集積 2 検出状況 ② 礫集積 3 検出状況 ③ 炉跡 1, 2 検出状況
④ 炉跡 1 半裁状況 ⑤ 炉跡 2 半裁状況

古代の遺構 (8)



①



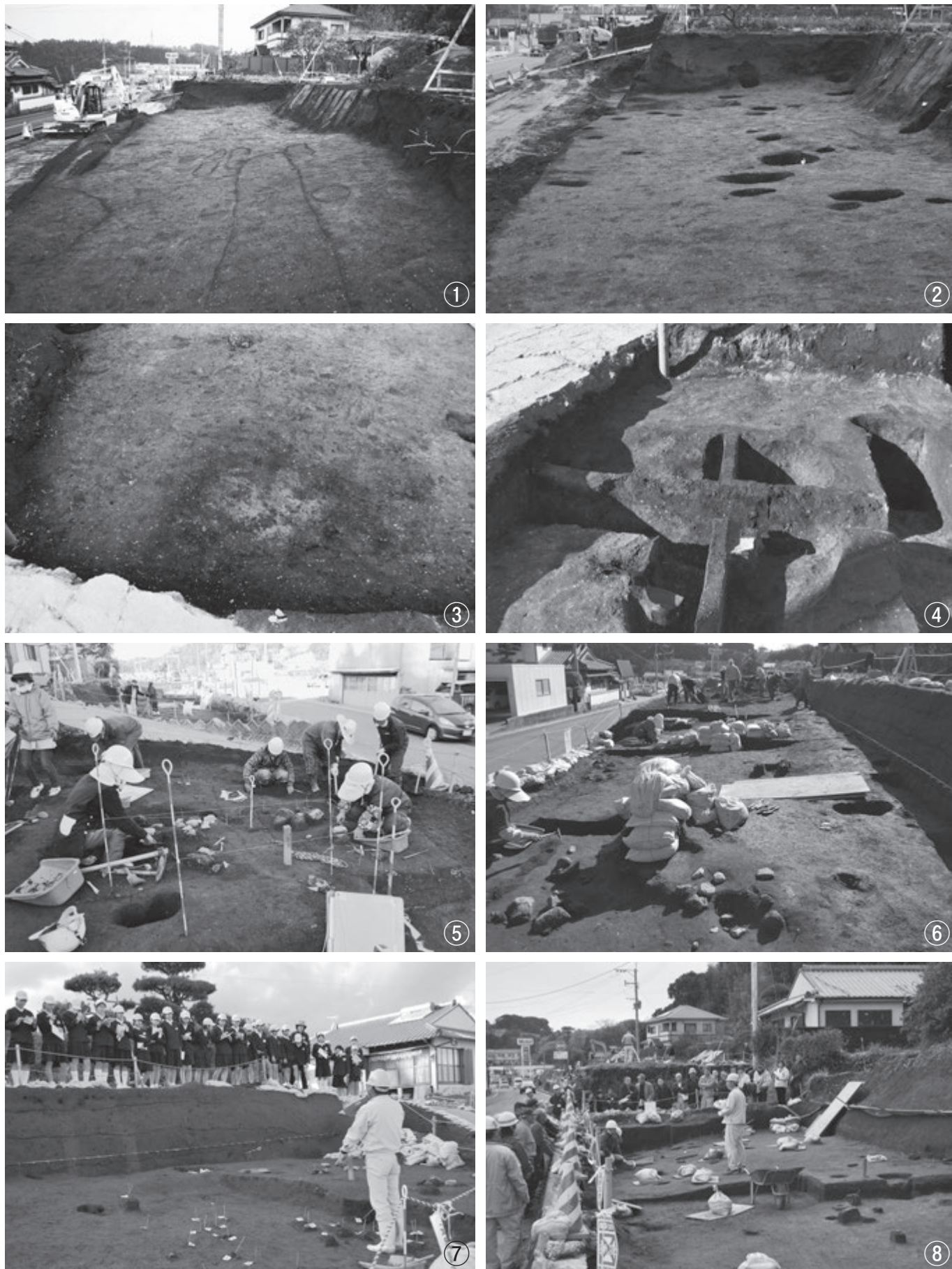
②



③

① A・B-7～9区ピット完掘状況 ② A・B-10・11区ピット完掘状況
③ B-5・6区ピット完掘状況

古代の遺構 (9)



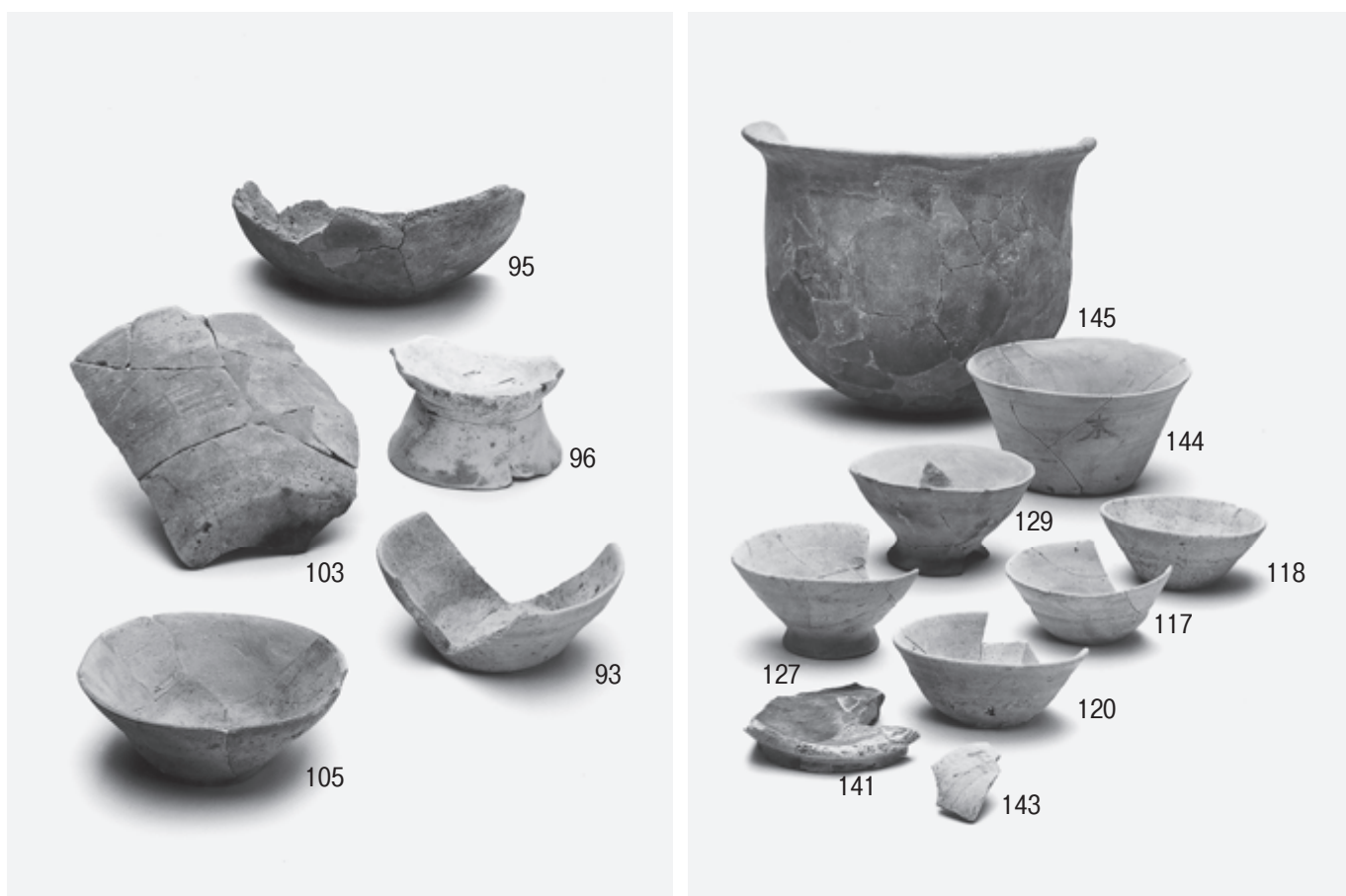
① 溝状遺構6 検出状況 ② B-10区ピット完掘状況 ③ B-3区焼土1 検出状況
④ B-3区焼土1 半裁状況 ⑤⑥ 調査風景 ⑦ 遺跡見学会（川上小学校6年生）
⑧ 遺跡見学会（川上町内会）

古代の遺構（10）・調査風景・遺跡見学会

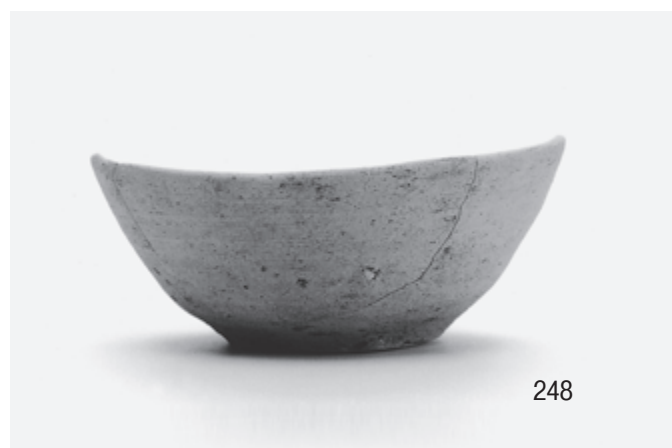
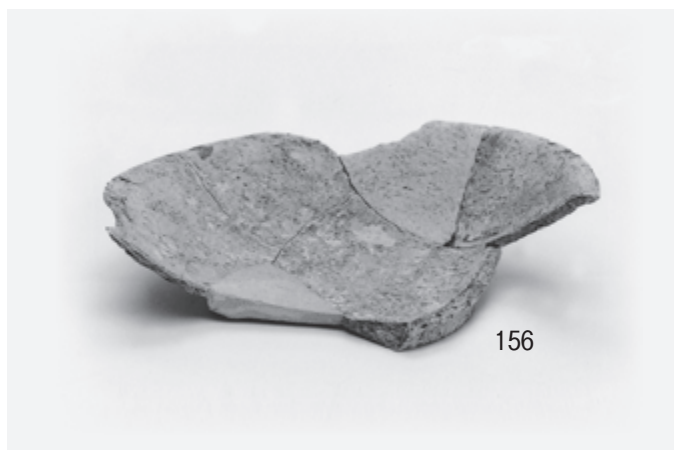


27

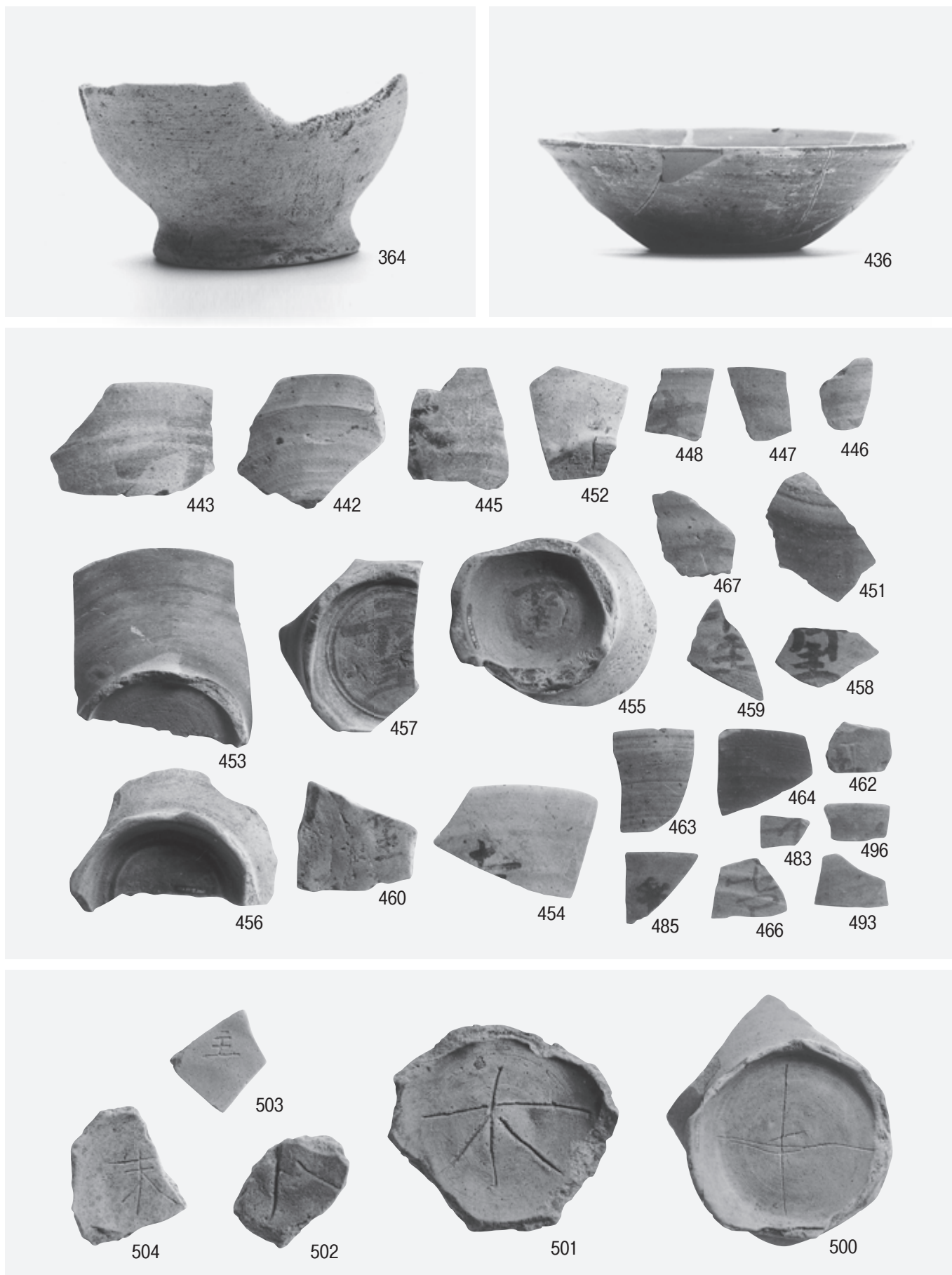
古代の遺物 (1)



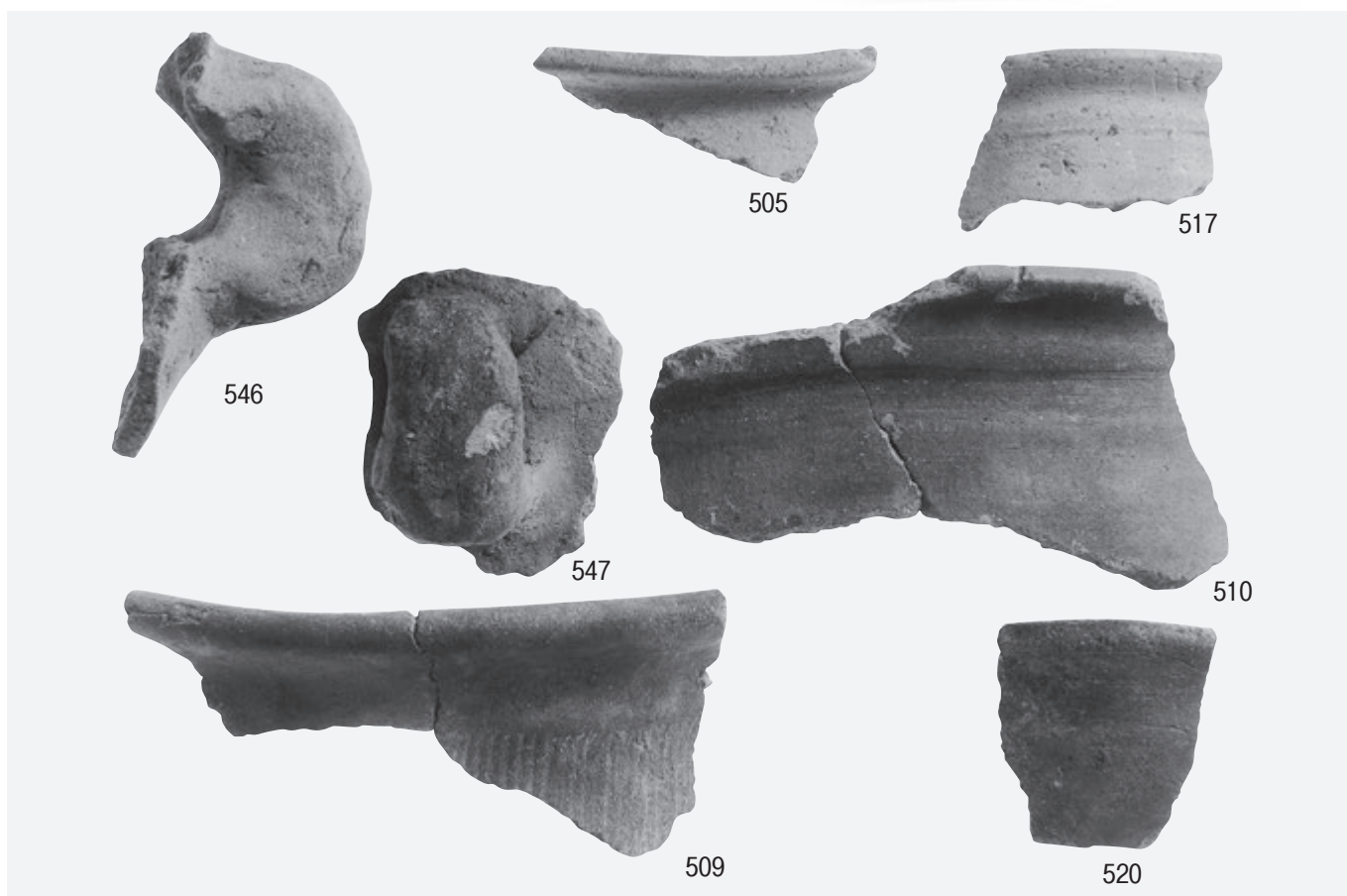
古代の遺物 (2)



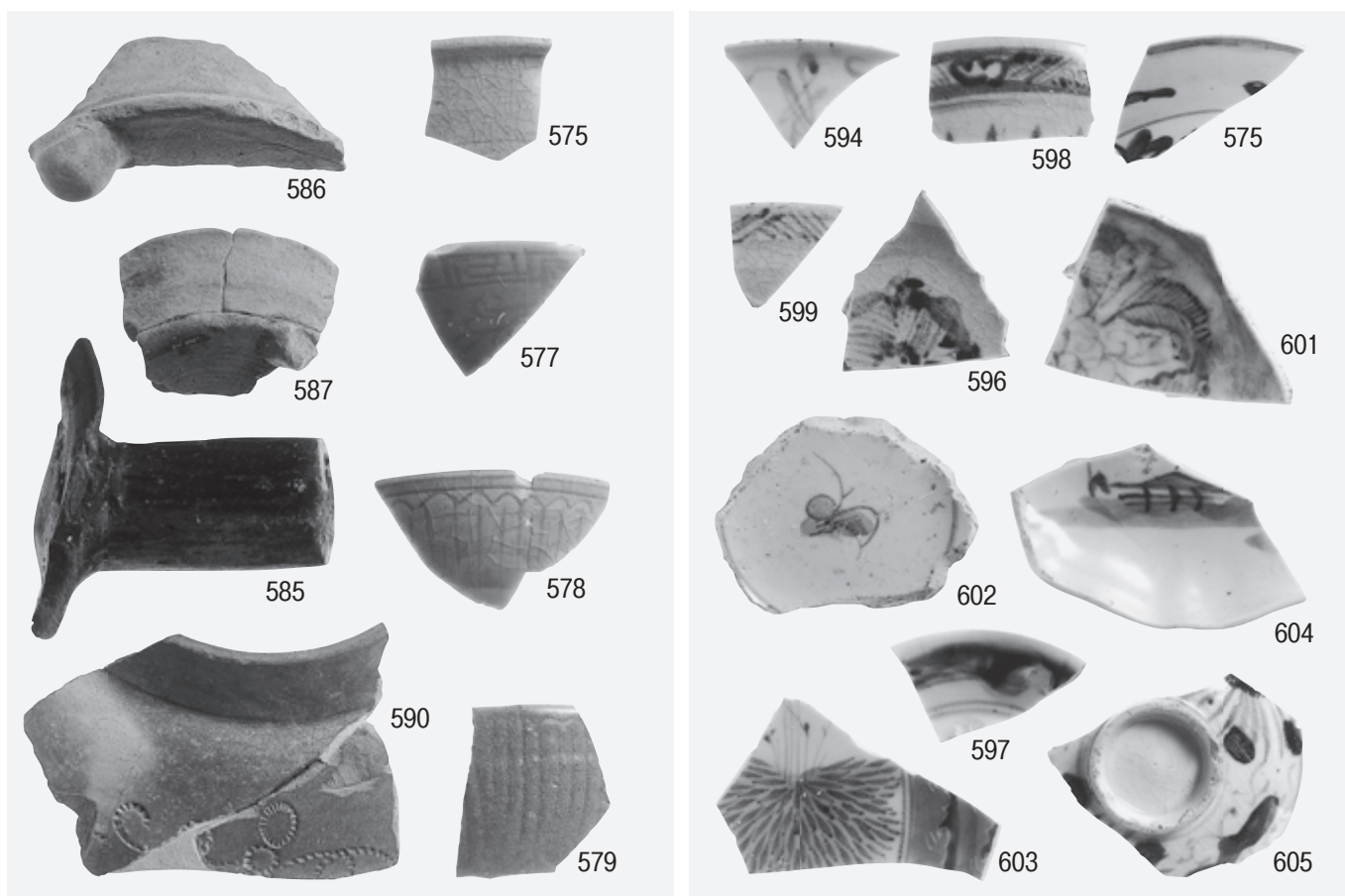
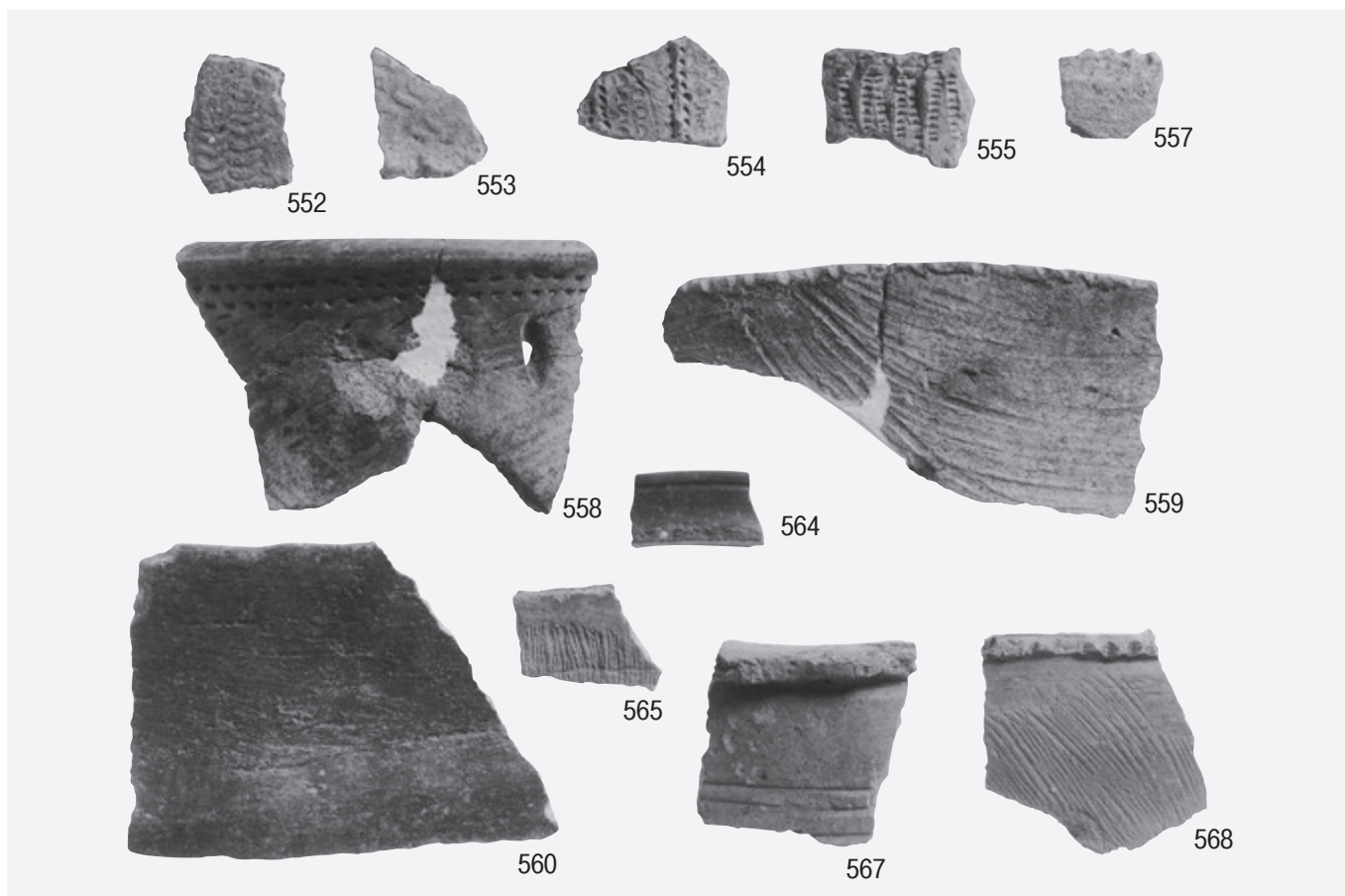
古代の遺物 (3)



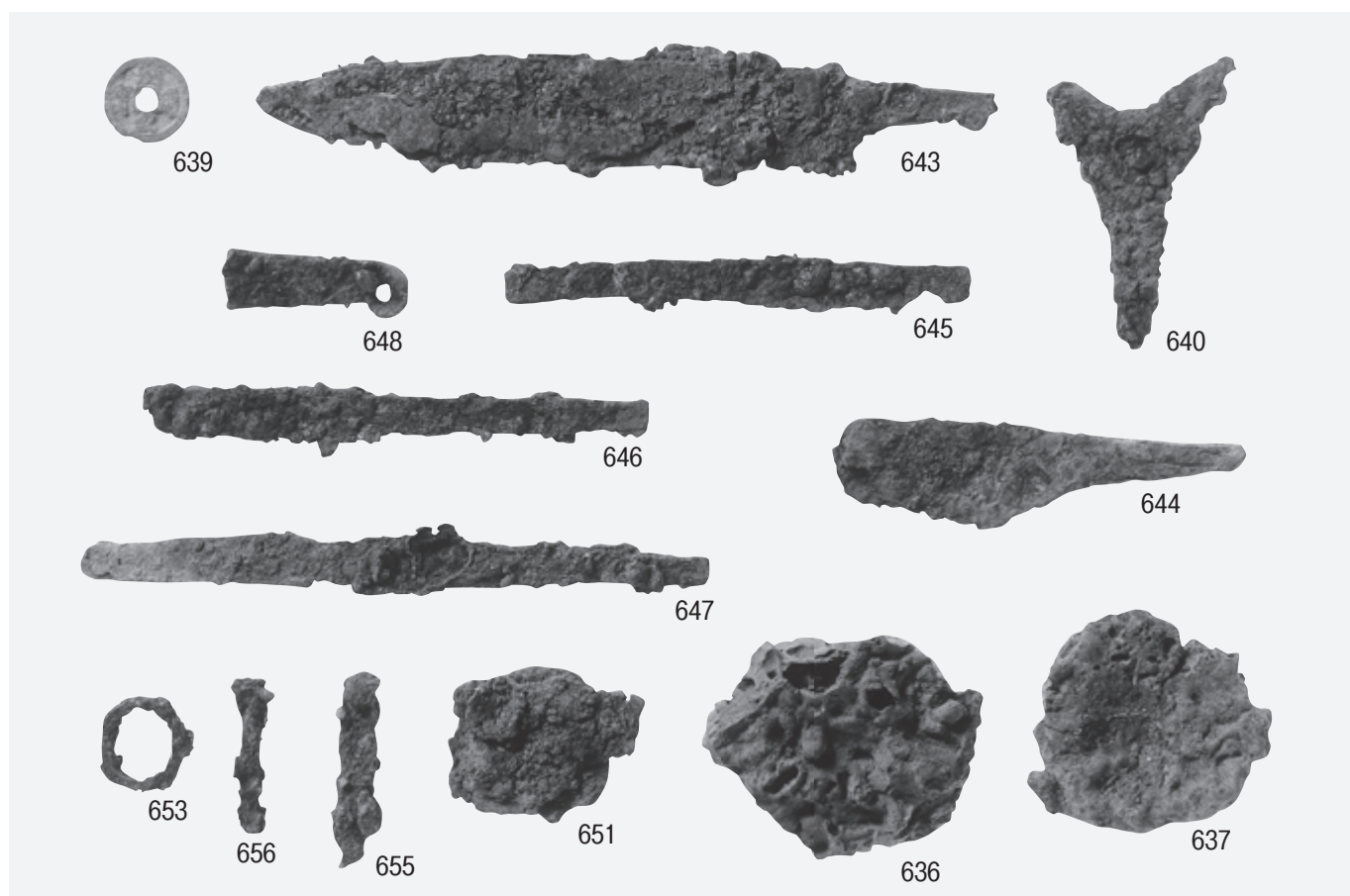
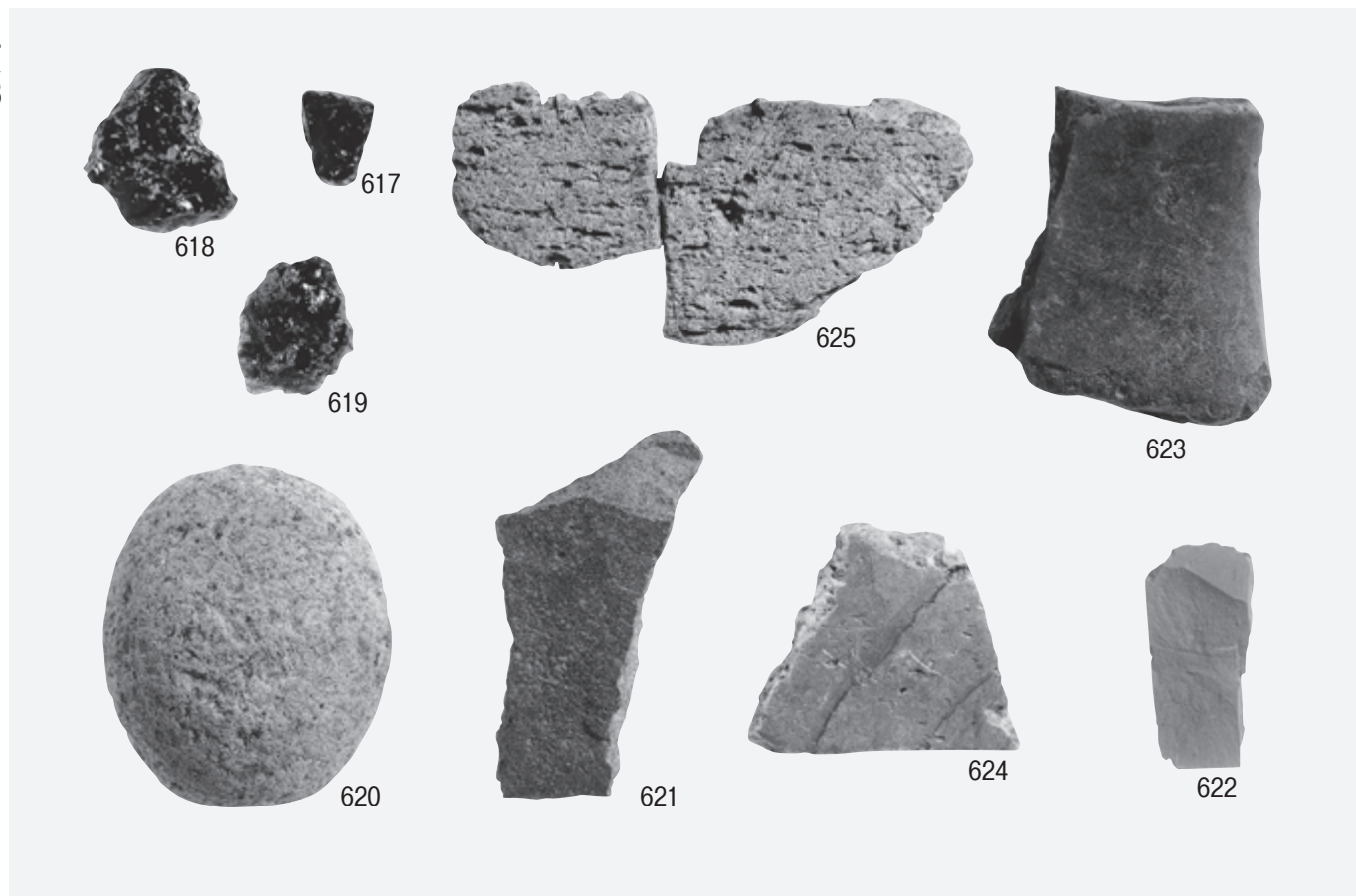
古代の遺物 (4)



古代の遺物 (5)



その他の遺物 (1)



その他の遺物 (2)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（176）
県道鹿児島蒲生線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川上城跡

発行月	平成25年2月
発 行	鹿児島県立埋蔵文化財センター 〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL (0995) 48-5811 FAX (0995) 48-5821
印刷所	日進印刷株式会社

